

小松原窯跡 長者屋敷遺跡 坂ノ上遺跡

発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第147集

坂長小
ノ松原
上屋敷
遺跡跡

発掘調査報告書



こ まつ ばら
小 松 原 窯 跡
ちよう じや や しき
長者屋敷遺跡
さか の うえ
坂 ノ 上 遺 跡

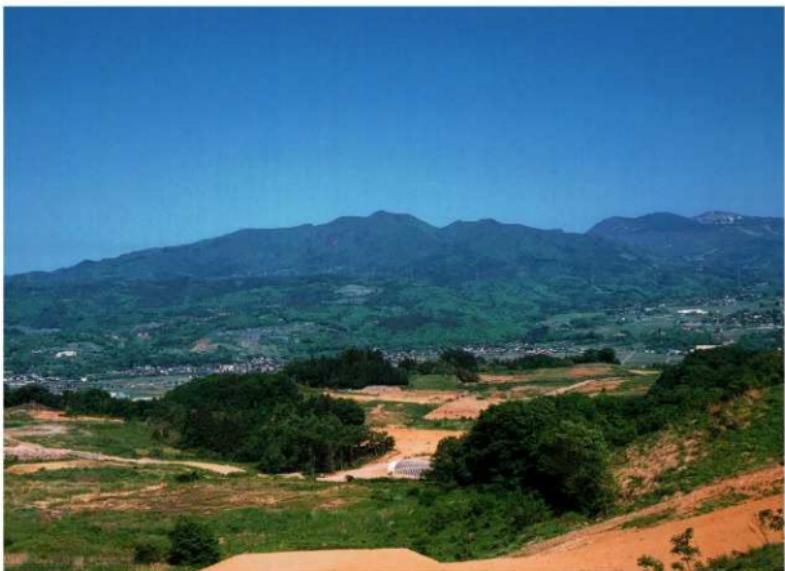
発掘調査報告書

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第147集

平成18年

財団法人 山形県埋蔵文化財センター





調査区全景(2002年6月)(↑W)



調査区全景(2006年3月)(↑W)



小松原廬跡（南から）



小松原窯跡・長者屋敷遺跡(↑ SW)



坂ノ上遺跡大形竪穴住居跡(ST21)(↑ E)



坂ノ上遺跡第2次調査区全景(↑5)

序

本書は、財団法人山形県埋蔵文化財センターが発掘調査した小松原窯跡、長者屋敷遺跡、坂ノ上遺跡の調査成果をまとめたものです。

小松原窯跡・長者屋敷遺跡は山形市南西部の松原地区に、坂ノ上遺跡は山形市黒沢地区に所在します。二つの地区は隣接し、松原地区は山形盆地の西縁をつくるなだらかな丘陵地に、黒沢地区はその丘陵地と丘陵の麓一帯に広がっています。

この度の調査は、平成11年度より地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）の山形新都市開発整備事業に伴って行ったものです。

調査では、縄文時代の遺構として竪穴住居、袋状土坑、奈良時代から平安時代にかけての窯跡、柱穴、溝跡、江戸時代の街道跡と溝跡などが検出されました。遺物としては、縄文土器、石器、土師器、須恵器、七葉の陰刻蓮弁文のある瓦、近世陶磁器などが出土しました。縄文土器は縄文時代前期から後期にわたる様々の時期のものが見られます。出土した土器の中には古墳時代のものも含まれています。

この地域一帯は、縄文時代から狩猟の場として、古代には良質の陶土を利用した窯業地として、また、近世は大名や多くの人々の往来の場として関わりのあった場所といえます。

埋蔵文化財は、祖先が長い歴史の中で創造し、育んできた貴重な国民的財産といえます。この祖先の足跡を学び、子孫へとつたえていくことが、私たちの重要な責務と考えます。その意味で、本書が文化財保護活動の啓発・普及・学術研究・教育活動などの一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査においてご協力いただいた関係各位に心から感謝申し上げます。

平成18年3月

財団法人 山形県埋蔵文化財センター

理事長 佐藤敏彦

本書は、山形新都市整備事業に係る「小松原窯跡・長者屋敷遺跡・坂ノ上遺跡」の発掘調査報告書である。既刊の年報、調査説明資料などの内容に優先し、本書をもって本報告とする。調査は地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）の委託により、財団法人山形県埋蔵文化財センターが実施した。出土遺物・調査記録は、報告書作成後、山形県教育委員会に移管する。

調査要項

遺跡名	小松原窯跡 長者屋敷遺跡 坂ノ上遺跡（第1次・第2次）
遺跡番号	71 77 平成11年度登録
所在地	山形県山形市大字松原字小松原 山形県山形市大字松原字石原坂1733- 10他 山形県山形市大字黒沢字大明神1690- 8他
調査受託者	地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）
受託期間	平成11年4月1日～平成12年3月31日（小松原窯跡） 平成13年3月37日～平成14年2月28日（長者屋敷遺跡・坂ノ上遺跡第1次） 平成14年4月1日～平成15年3月31日（坂ノ上遺跡第2次）
現地調査	平成11年4月19日～平成11年11月30日（小松原窯跡） 平成13年5月7日～平成13年10月12日（長者屋敷遺跡・坂ノ上遺跡第1次） 平成14年5月13日～平成14年6月20日（坂ノ上遺跡第2次）
調査担当者	平成11年度 調査第一課長 野尻 優 調査研究員 伊藤 邦弘（調査主任） 調査研究員 中里 秀樹 平成13年度 調査第四課長 渋谷 孝雄（調査主任） 調査研究主幹 阿部 明彦 主任調査研究員 斎藤 主税 調査研究員 渡辺 淳一 副調査研究員 大泉寿太郎 平成14年度 調査第二課長 尾形 與典

主任調査研究員 伊藤 邦弘
調査研究員 渡辺 淳一（調査主任）
調査指導 山形県教育庁文化財課（現山形県教育庁教育やまがた振興課文化財保護室）
調査協力 地域振興整備公団山形総合開発事務所
山形市教育委員会
山形県企画調整部地域振興課
山形県土木部都市計画課
山形県教育庁東南村山教育事務所（現村山教育事務所）

凡 例

- 1 本書で使用した遺構の分類記号は下記のとおりである。

S Q... 窯跡	S G... 河跡（溝跡）	S T... 穴住居跡
S K... 土坑	S X... 性格不明遺構	S P... ピット
E L... 炉跡	E U... 埋設土器	S B... 据立柱遺構
R W... 木製品	R P... 土製品	R Q... 石製品

- 2 遺構図に付す座標値は、平面直角座標系第X系により、高さは標高で表す。また、方位は座標北を表す。
3 遺構・遺物実測図の縮尺などは各図に示した。
4 写真図版は任意の縮尺で採録した。
5 土層の色調は1997年版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版基準土色帖」に従った。

目 次

I 調査の経緯	1
II 遺跡の環境と概要	6
小松原窯跡	
III 遺構と遺物	10
IV 理化学分析	116
長者屋敷遺跡	
III 検出遺構	183
IV 出土遺物	195
坂ノ上遺跡	
III 検出遺構	212
IV 出土遺物	234
報告書抄録	卷末

表

表1 小松原窯跡出土遺物観察表(1)~(14)	98	表4 石器観察表	271
表2 小松原窯跡出土瓦観察表(1)~(4)	112	表5 陶磁器観察表	275
表3 銘文土器観察表	269	表6 銭貨等観察表	280

図 版 (小松原窯跡)

第1図 地形分類図	5	第16図 2号窯出土遺物(5)無台环	29
第2図 遺跡位置図	9	第17図 2号窯出土遺物(6)無台环	30
第3図 調査区地形図	11	第18図 2号窯出土遺物(7)無台环	31
第4図 遺構配置図	12	第19図 2号窯出土遺物(8)無台环	32
第5図 S Q 1・2・3窯跡	13	第20図 2号窯出土遺物(9)無台环	33
第6図 S Q 1・2・3窯跡・側壁図	14	第21図 2号窯出土遺物(10)無台环・有台皿・壺	34
第7図 S Q 1窯跡	16	第22図 2号窯出土遺物(11)壺・甕	35
第8図 1号窯・1号窯ステバ出土遺物(1)	17	第23図 2号窯出土遺物(12)甕	36
第9図 1号窯ステバ出土遺物(2)	18	第24図 2号窯出土遺物(13)甕・鉢	37
第10図 1号窯ステバ出土遺物(3)	19	第25図 2号窯・2号窯ステバ出土遺物	38
第11図 S Q 2窯跡	21	第26図 S Q 2窯跡遺物分布図	39
第12図 2号窯出土遺物(1)蓋・有台环	25	第27図 S Q 3窯跡	41
第13図 2号窯出土遺物(2)無台环	26	第28図 3号窯出土遺物(1)蓋・有台环	43
第14図 2号窯出土遺物(3)無台环	27	第29図 3号窯出土遺物(2)無台环	44
第15図 2号窯出土遺物(4)無台环	28	第30図 3号窯出土遺物(3)無台环	45

第 31 図	3号窯出土遺物(4)無台环・甕	46	第 56 図	鍵瓦(4)	73
第 32 図	3号窯出土遺物(5)甕・鉢・壺	47	第 57 図	鍵瓦(5)	74
第 33 図	3号窯ステバ出土遺物	48	第 58 図	鍵瓦(6)	75
第 34 図	ステバ平面図・断面図	49	第 59 図	男瓦(1)	76
第 35 図	ステバ出土遺物(1)蓋・有台环	52	第 60 図	男瓦(2)	77
第 36 図	ステバ出土遺物(2)無台环	53	第 61 図	男瓦(3)	78
第 37 図	ステバ出土遺物(3)無台环	54	第 62 図	男瓦(4)	79
第 38 図	ステバ出土遺物(4)有台凹・壺	55	第 63 図	男瓦(5)	80
第 39 図	ステバ出土遺物(5)壺	56	第 64 図	男瓦(6)	81
第 40 図	ステバ出土遺物(6)壺	57	第 65 図	男瓦(7)	82
第 41 図	ステバ出土遺物(7)壺・甕	58	第 66 図	男瓦(8)	83
第 42 図	ステバ出土遺物(8)甕	59	第 67 図	男瓦(9)	84
第 43 図	ステバ出土遺物(9)甕・鉢	60	第 68 図	男瓦(10)	85
第 44 図	S X74焼壁坑	61	第 69 図	男瓦(11)	86
第 45 図	S D240	62	第 70 図	男瓦(12)	87
第 46 図	土坑(1)	63	第 71 図	男瓦(13)	88
第 47 図	土坑(2)	64	第 72 図	男瓦(14)	89
第 48 図	土坑(3)・柱穴	65	第 73 図	男瓦(15)	90
第 49 図	S G328	66	第 74 図	男瓦(16)	91
第 50 図	S G328出土遺物	67	第 75 図	女瓦(1)	92
第 51 図	風字磚(1)	68	第 76 図	女瓦(2)	93
第 52 図	風字磚(2)	69	第 77 図	女瓦(3)	94
第 53 図	鍵瓦(1)	70	第 78 図	女瓦(4)	95
第 54 図	建瓦(2)	71	第 79 図	女瓦(5)	96
第 55 図	建瓦(3)	72	第 80 図	女瓦(6)	97

写真図版(小松原窯跡)

卷頭写真1	調査区全景	写真図版12	S Q 1・2・3窯跡鳥瞰写真(西から)他
卷頭写真2	小松原窯跡	写真図版13	S Q 1・2・3窯跡空中写真
卷頭写真3	小松原窯跡・長者屋敷遺跡	写真図版14	S X74焼壁坑遺物出土状況他
写真図版1	遺跡空中写真	写真図版15	S G328河川跡完掘状況
写真図版2	遺跡遠景・遺跡近景	写真図版16	S K70・S P96・S K80・81他
写真図版3	遺跡鳥瞰写真	写真図版17	S K150・195・256他
写真図版4	A区全景	写真図版18	出土遺物R P21・24他
写真図版5	B区全景	写真図版19	S P77・136・205・245他
写真図版6	S Q 1窯跡遺物出土状況他	写真図版20	S Q 1・S Q 2ステバ出土遺物
写真図版7	S Q 1窯跡空中写真他	写真図版21	S Q 1・S Q 2ステバ(出土遺物(1))
写真図版8	S Q 2窯跡遺物出土状況他	写真図版22	S Q 2出土遺物(2)
写真図版9	S Q 2窯跡完掘状況他	写真図版23	S Q 2出土遺物(3)
写真図版10	S Q 3窯跡完掘状況(南から)他	写真図版24	S Q 2出土遺物(4)
写真図版11	S Q 3窯跡完掘状況(北から)他	写真図版25	S Q 2出土遺物(5)

写真図版26	S Q 2 出土遺物 (6)	写真図版43	錠瓦520・521・539・548
写真図版27	S Q 2 出土遺物 (7)	写真図版44	錠瓦551・554
写真図版28	S Q 2 出土遺物 (8)	写真図版45	錠瓦536・545・555・558
写真図版29	S Q 3 出土遺物 (1)	写真図版46	錠瓦
写真図版30	S Q 3 出土遺物 (2)	写真図版47	錠瓦
写真図版31	S Q 3 出土遺物 (3)	写真図版48	男瓦561・655・569・600
写真図版32	S Q 3 ステバ出土遺物	写真図版49	男瓦580・604・608・616
写真図版33	ステバ出土遺物 (1)	写真図版50	男瓦568
写真図版34	ステバ出土遺物 (2)	写真図版51	男瓦573
写真図版35	ステバ出土遺物 (3)	写真図版52	男瓦567・574・585・599・602
写真図版36	ステバ出土遺物 (4)	写真図版53	女瓦636
写真図版37	ステバ・河川跡・溝跡出土遺物	写真図版54	女瓦635・639
写真図版38	有台皿 (1)	写真図版55	女瓦640・647
写真図版39	有台皿 (2)	写真図版56	女瓦641・651
写真図版40	壺・甕	写真図版57	女瓦648・649
写真図版41	風字鏡	写真図版58	女瓦644・645・646
写真図版42	錠瓦515・527		

図 版 (長者屋敷遺跡)

第 1 図	調査区概要図	186	第 13 図	縄文土器 (4)	200
第 2 図	遺構全体図	187	第 14 図	縄文土器 (5)	201
第 3 図	遺構配置図	188	第 15 図	縄文土器 (6)	202
第 4 図	貯蔵穴土坑群	189	第 16 図	縄文土器 (7)	203
第 5 図	東調査区 S T900・S K1050	190	第 17 図	縄文土器 (8)	204
第 6 図	東調査区 S T901・S K732他	191	第 18 図	縄文土器 (9)	205
第 7 図	東調査区 S X502	192	第 19 図	縄文土器 (10)	206
第 8 図	東調査区 S X513	193	第 20 図	縄文土器 (11)	207
第 9 図	東調査区 S X514・S K721他	194	第 21 図	石器 (1)	208
第 10 図	縄文土器 (1)	197	第 22 図	石器 (2)	209
第 11 図	縄文土器 (2)	198	第 23 図	石器 (3)	210
第 12 図	縄文土器 (3)	199	第 24 図	石器 (4)	211

図 版 (坂ノ上遺跡)

第 1 図	調査区概要図	216	第 9 図	第 1 次 S K1097・S X97	225
第 2 図	第 1 次遺構全体図	217	第 10 図	第 1 次 S D1・S D2	226
第 3 図	第 1 次遺構配置図	218	第 11 図	第 2 次遺構配置図	227
第 4 図	第 1 次 S T21 (1)	219	第 12 図	第 2 次遺物分布図	228
第 5 図	第 1 次 S T21 (2)	220	第 13 図	第 2 次南端道路南北縦断面図他	229
第 6 図	第 1 次 S T21 (3)	221	第 14 図	第 2 次断面図 (1)	230
第 7 図	第 1 次 S T22	223	第 15 図	第 2 次断面図 (2)	231
第 8 図	第 1 次 S X20・S K1088・S X90	224	第 16 図	第 2 次断面図 (3)他	232

第 17 図	第 2 次断面図 (4)	233	第 33 図	第 1 次石器 (11)	254
第 18 図	第 1 次縄文土器 (1)	239	第 34 図	第 1 次石器 (12)	255
第 19 図	第 1 次縄文土器 (2)	240	第 35 図	第 1 次石器 (13)	256
第 20 図	第 1 次縄文土器 (3)	241	第 36 図	第 1 次石器 (14)	257
第 21 図	第 1 次縄文土器 (4)	242	第 37 図	第 2 次石器 (15)	258
第 22 図	第 1 次縄文土器 (5)	243	第 38 図	第 1 次陶磁器 (1)	259
第 23 図	第 1 次石器 (1)	244	第 39 図	第 1 次陶磁器 (2)	260
第 24 図	第 1 次石器 (2)	245	第 40 図	第 2 次陶磁器 (3)	261
第 25 図	第 1 次石器 (3)	246	第 41 図	第 2 次陶磁器 (4)	262
第 26 図	第 1 次石器 (4)	247	第 42 図	第 2 次陶磁器 (5)	263
第 27 図	第 1 次石器 (5)	248	第 43 図	第 2 次陶磁器 (6)	264
第 28 図	第 1 次石器 (6)	249	第 44 図	第 1・2 次陶磁器 (7)	265
第 29 図	第 1 次石器 (7)	250	第 45 図	第 2 次陶磁器 (8)	266
第 30 図	第 1 次石器 (8)	251	第 46 図	第 2 次陶磁器 (9)	267
第 31 図	第 1 次石器 (9)	252	第 47 図	第 2 次古銭	268
第 32 図	第 1 次石器 (10)	253			

写真図版 (長者屋敷遺跡・坂ノ上遺跡)

卷頭写真 3	坂ノ上遺跡大形窓穴住居跡 (S T21)	写真図版14	坂ノ上遺跡空撮
卷頭写真 4	坂ノ上遺跡第2次調査区全景	写真図版15	坂ノ上遺跡第2次調査・埋設電話線・埋設
写真図版 1	長者屋敷遺跡西調査区・S K 2015・S K 2001・S K 2030	木橋 R W 2・敷石面調査	
写真図版 2	長者屋敷遺跡東調査区・S T 901・S K 732・S T 900・S P 1061	写真図版16	調査区北側よりの山形市街・坂ノ上二軒茶
写真図版 3	S T 900・R P 150・S X 502・S X 513・S K 725・S K 731	屋跡付近	
写真図版 4	S P 1054・S P 1055・S P 1056・S P 1057 ・S P 1059・S X 513他	写真図版17	市道コンクリート舗装下の様子・現存する
写真図版 5	S X 514・S K 1050	二軒茶屋跡の井戸	
写真図版 6	長者屋敷遺跡西調査区・東調査区遠景	写真図版18	坂ノ上遺跡第2次調査区空撮
写真図版 7	坂ノ上遺跡・S T 21	写真図版19	東西柄上空より
写真図版 8	S T 21各ベルト断面・R Q 127 (挿図坂ノ 上遺跡第1次石器12~8)	写真図版20	羽州街道沿いの様子
写真図版 9	S T 21 E L 1~4	写真図版21	長者屋敷遺跡縄文土器 (1) S T 900・S T 901
写真図版10	S T 21 E L 5~7・R Q 140 (挿図坂ノ上 遺跡第1次石器2~7)	写真図版22	長者屋敷遺跡縄文土器 (2) S P 1050
写真図版11	R P 22 (挿図坂ノ上遺跡縄文土器2~13・ 14同一個体)	写真図版23	長者屋敷遺跡縄文土器 (3) S X 502
写真図版12	S T 22 (S P 7)・S K 1088・S X 20・S K 97	写真図版24	長者屋敷遺跡縄文土器 (4) S X 514
写真図版13	S D 1・S D 2	写真図版25	長者屋敷遺跡縄文土器 (5) S X 514・S X 510他
		写真図版26	長者屋敷遺跡縄文土器 (6) S X 510・S K 709・S K 710他
		写真図版27	長者屋敷遺跡縄文土器 (7) S K 2030・S K 2029
		写真図版28	長者屋敷遺跡縄文土器 (8) S K 2030・S K 2032

写真図版29	坂ノ上遺跡縄文土器（1）S T21	写真図版44	坂ノ上遺跡石器（9）捶器・石範・凹石・磨製石斧
写真図版30	坂ノ上遺跡縄文土器（2）S X20・S K 1088・S T22	写真図版45	坂ノ上遺跡石器（10）S T21出土の剥片・碎片群
写真図版31	坂ノ上遺跡縄文土器（3）S K1067他	写真図版46	長者屋敷遺跡陶磁器（1）表5
写真図版32	坂ノ上遺跡縄文土器（4）S T21	写真図版47	長者屋敷遺跡陶磁器（2）表5
写真図版33	坂ノ上遺跡縄文土器（5）S X20・ S K1097・S K1088	写真図版48	坂ノ上遺跡陶磁器（1）表5
写真図版34	長者屋敷遺跡石器（1）S T901等石鏃・ 石匙	写真図版49	坂ノ上遺跡陶磁器（2）表5
写真図版35	長者屋敷遺跡石器（2）S X514他石範・ 削器等	写真図版50	坂ノ上遺跡陶磁器（3）表5
写真図版36	坂ノ上遺跡石器（1）石鏃	写真図版51	坂ノ上遺跡陶磁器（4）表5
写真図版37	坂ノ上遺跡石器（2）石鏃	写真図版52	坂ノ上遺跡陶磁器（5）表5
写真図版38	坂ノ上遺跡石器（3）石鏃・石鋸	写真図版53	坂ノ上遺跡陶磁器（6）表5
写真図版39	坂ノ上遺跡石器（4）石範・石匙	写真図版54	坂ノ上遺跡陶磁器（7）表5
写真図版40	坂ノ上遺跡石器（5）石範・捶器	写真図版55	坂ノ上遺跡陶磁器（8）表5
写真図版41	坂ノ上遺跡石器（6）石槍・捶器・石範	写真図版56	坂ノ上遺跡陶磁器（9）表5
写真図版42	坂ノ上遺跡石器（7）石鏃・石範・捶器	写真図版57	坂ノ上遺跡陶磁器（10）表5
写真図版43	坂ノ上遺跡石器（8）捶器・加工痕のある 剥片等	写真図版58	坂ノ上遺跡陶磁器（11）表5
		写真図版59	坂ノ上遺跡陶磁器と古銭等 表6
		写真図版60	坂ノ上遺跡古銭と鉄製品 表6
		写真図版61	坂ノ上遺跡街道轍跡

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

今回の発掘調査は、地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）の山形新都市開発整備事業に伴う緊急調査である。調査対象の3つの遺跡の現地調査期間については以下の通りである。

小松原窯跡	平成11年4月19日～平成11年11月30日	小松原窯跡
長者屋敷遺跡	平成13年5月7日～平成13年10月12日	長者屋敷遺跡
坂ノ上遺跡（第1次）	平成13年5月7日～平成13年10月12日	坂ノ上遺跡
坂ノ上遺跡（第2次）	平成14年5月13日～平成14年6月20日	

小松原窯跡は、昭和40年に山形大学の柏倉亮吉教授（当時）らの手で2基の窯跡が確認され、そのうちの1基について調査内容が報告されている。本調査に先立ち、平成10年12月に山形県教育委員会によって分布調査が行われ、窯跡と遺跡の範囲が確認された。その結果、事業予定区域内に、窯跡の他に窯に関連する遺構や縄文時代の遺物が見つかった。長者屋敷遺跡は、平安時代の須恵器窯跡として、昭和53年刊行の「山形県遺跡地図」に登載されていた遺跡であり、坂ノ上遺跡は、平成8年度に同教育委員会が実施した表面踏査で「遺跡可能性地」として把握された。長者屋敷遺跡と坂ノ上遺跡は、平成10年度・11年度・12年度に試掘調査や土取りの工事立ち会いが行われ、両遺跡とも縄文時代の集落跡であること、坂ノ上遺跡の東端には江戸時代の街道跡があることが判明した。

このように事業予定区域内には、縄文時代から江戸時代までの遺構が広がっていること、坂ノ上遺跡は市道と重複しているので調査を2回に分けて行うことなど様々な協議を関係機関とを行い、財団法人山形県埋蔵文化財センターが地域振興整備公団（現独立行政法人都市再生機構）の委託を受け、記録保存のために調査を行うこととなった。

2 調査の経過

《小松原窯跡》

平成11年

4月（第1週～第2週）

19日器材搬入と事務所環境整備、作業員オリエンテーション。20日から重機による表土除去・粗掘と面整理開始、土坑・捨て場遺構確認。26日瓦や石器を検出する。箱数18。

5月（第3週～第7週）

柱穴・土坑・瓦・土師器・須恵器の確認と検出。10日以降も重機による表土除去作業と面整理、基準点測量。12日窯跡検出。表土がぬかるむことと予想以上に厚く堆積しているため重機の作業が難航、5日間程度の延長を検討する。出土箱数40。

6月（第7週～第11週）

瓦	土	土
器	師	師
須	器	器
窯		跡

1日平板測量開始、D区にサブトレーンチ設定。7日雨天のため室内で記録図面整理。A区より土坑・柱穴、C区窓跡SQ1、D区土器捨て場検出。16日雨天のため遺物洗浄作業を行う。21日C区のSQ1・SQ2の遺構精査、A区遺構断面図作成開始。

7月（第11週～第15週）

1日A区・D区雨のため遺跡が冠水し排水作業を行う。2日A区・B区土坑と柱穴の半截と完掘状況記録。5日D区捨て場遺構の掘り下げ。12日遺跡全体図面を1/100で作成。遺物箱数100箱越える。

8月（第16週～第20週）

2日A区土坑完掘、D区捨て場掘り下げ、C区SQ3土層断面図作成。10日SQ2窓跡床面検出。SQ2出土遺物のレベリング。18日A区とC区の除草作業。20日C区SQ3の遺構精査。出土した遺物の箱数154。

9月（第20週～第24週）

旧 河 道 3日旧河道に完形の須恵器坏出土。重機による表土除去作業。旧河道の遺物出土により重機使用による作業を延長し続行する。8日理化学分析で熱残留磁気測定を業務委託する。奈良の櫻原考古学研究所、元興寺文化財研究所、宮城県教育庁より来遺者。

10月（第24週～第28週）

旧河道SG328の遺構精査と記録作業。精査後に古墳時代の須恵器・土師器が出土したことにより調査計画の見直しを協議。11月まで調査を延長。14日拡張B区の遺構半截と完掘。23日発掘調査現地説明会を開催する。参加者161名。

11月（第29週～第33週）

2日トータルステーションによる遺構測量と空中写真撮影。4日よりA区・B区・C区、SG328の掘り下げと完掘状況の写真撮影を開始。29日・30日と遺物取り上げ及び器材等の搬出作業。30日調査終了。出土遺物の総箱数182。

《長者屋敷遺跡・坂ノ上遺跡（1次調査）》

平成13年

5月（第1週～第4週）

長者屋敷遺跡 7日、器材搬入、8日、鍛入れ式。重機による長者屋敷遺跡（西調査区）の表土除去開始と面整理。土抗数基の確認。18日より重機による長者屋敷遺跡（東調査区）の表土除去開始と面整理。埋設土器、石匙などの石器検出。23日、重機導入前に全員で坂ノ上遺跡の表面採集を行う。（平成12年度に坂ノ上遺跡の表土が一部除去されていたため。）面整理開始。尖頭器、大木2b・3式土器などが出土。遺構マーキング。基準点測量と杭打ち。

6月（第4週～第8週）

坂ノ上遺跡 坂ノ上遺跡の遺構包含層の掘り下げ。竹管押し引き文土器など数百点の土器片出土。並行してトータルステーションによる遺物の出土地点のパソコン取り込み。平板測量による図面作成作業。トータルステーションを用いて坂ノ上遺跡と長者屋敷遺跡の区割り作業を13日で完了。坂ノ上遺跡の東端に溝跡検出（羽州街道関連か。）筒状搔器剥片など200点ほど出土。

7月（第9週～第13週）

坂ノ上遺跡東端部の溝遺構の掘り下げ。長者屋敷遺跡西調査区の一部の面整理開始（工事車輌用道路拡幅のため。）坂ノ上遺跡中央部の遺構測量と遺物取り上げ開始（工事車輌迂回道路新設のため。）坂ノ上遺跡南端に大形竪穴式住居跡を検出するが、工事車輌迂回予定道路と一部重なることが予想されるため坂ノ上遺跡遺構をローリングタワーを設置し一回目撮影。17日より大形竪穴式住居跡などの遺構精査を開始し、5ヶ所に焼け土面（地床炉）検出と柱穴確認。

大形竪穴住居

8月（第13週～第16週）

坂ノ上遺跡大形竪穴式住居跡の床面と柱穴を精査し、図面作成。遺物はトータルステーションで位置入力後取り上げる。チップが特に多く1万点を越える。地床炉さらに2基検出し計7基の地床炉。業者による空中撮影実施する。坂ノ上遺跡の大形竪穴式住居跡の手取り平面実測などと並行し、長者屋敷遺跡西調査区の遺構マーキングとプラスコ状土抗などの遺構精査開始。

プラスコ状土杭

9月（第17週～第20週）

長者屋敷遺跡東調査区の遺構マーキングと遺構精査を開始する。住居跡の可能性のある遺構はブドウ棚のアンカー穴や風倒木により6日時点では未発見。縄文後期中葉と思われる土器の取り上げ。11日の台風による被害はほとんど無し。竪穴式住居跡（ST901）の床面精査。夜半の雨で長者屋敷遺跡東調査区の遺構精査を中断し、28日より長者屋敷遺跡西調査区の面精査を開始する。

縄文後期中葉

10月（第21週～第22週）

長者屋敷遺跡西調査区のプラスコ状土抗の精査。5日午後から現地説明会、午前中は看板設置や駐車スペースの除草作業など。9日、長者屋敷遺跡東調査区の遺構と遺物の記録作成。12日、長者屋敷遺跡全体の空中写真撮影完了。

《坂ノ上遺跡（2次調査）》

平成14年

5月（第1週～第3週）

13日、午前鍛入式、午後に器材搬入。事務所プレハブ棟内外の整備と発掘作業員へのオリエンテーション。14日より17日まで重機による表土除去作業開始。道路跡検出と埋設電話線の確認。20日より面整理を開始し、北東部に玉砂利を検出。埋設木桶を精査し、元曹通宝出土。木桶の底板良好に残存。27日、西側にも埋設木桶検出。28日、グリッド杭設定。写真撮影や土層断面記録始まる。30日、調査区南で玉砂利検出。路面状況を写真撮影。

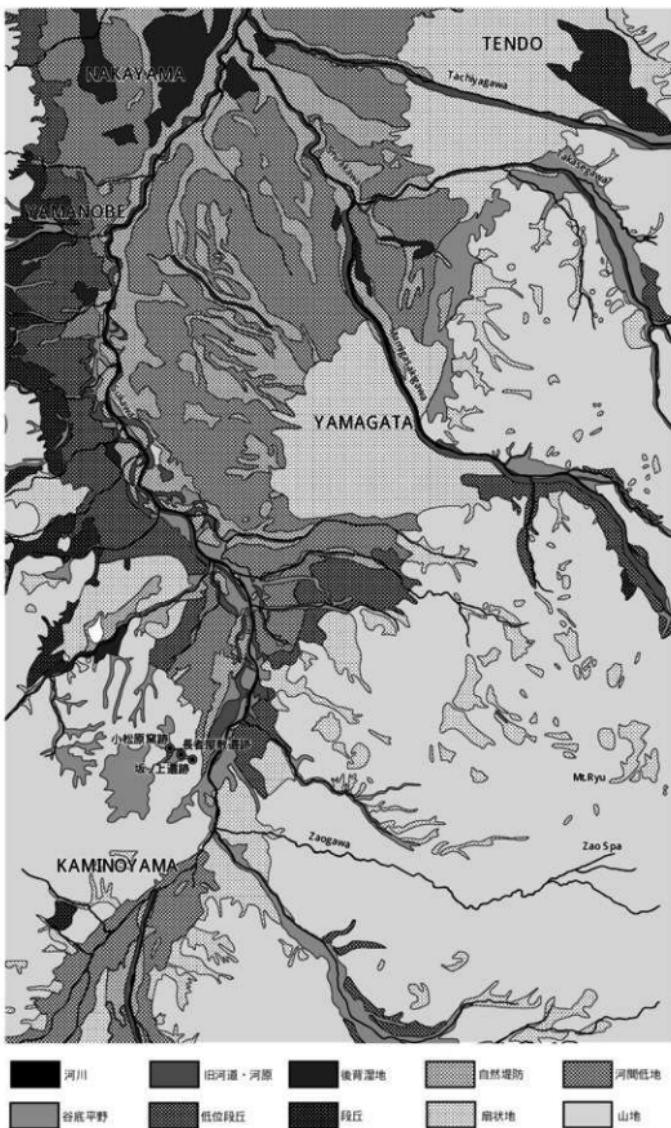
道路跡検出

6月（第1週～第3週）

3日、面整理と中央部にセクションベルトを設定し、その東西を掘り下げる。4日、地山直上の玉砂利は径5～10センチ大で、その上層に更に小さな玉砂利を確認。5日、南部の玉砂利は一部に攪乱はあるものの80%以上良好に遺存。セクションベルトの取り外す。（北から3本目はC断面、4本目はD断面）。6日、東側側溝の掘り下げを南部から開始。西側埋設木桶の遺構半截と土層断面。7日、西側埋設木桶遺構を掘り下げ、底部近くに竹のたがを

埋設木桶

確認。10日、東側側溝の掘り下げ。中央南北土層断面図と東西土層断面図作成。西側埋設木桶の写真撮影。11日、面整理し中央部から北部の玉砂利の確認。西側埋設木桶の遺構半截状況の写真撮影。12日、中央部に玉砂利確認。東側と西側の側溝の掘り下げ。西側の埋設木桶遺構の土層断面図と同側面図作成。13日、1 / 100で遺構平板測量、1 / 20で西側埋設木桶遺構侧面図。14日、面整理し中央部玉砂利確認。東側側溝遺構の掘り下げて精査。中央南北セクションベルトの取り外し。東西土層断面図作成(1 / 20)。17日、東側埋設木桶遺構の掘り下げ。空中写真撮影と測量開始。18日、中央部南北セクションベルトを取り外して遺構の精査。調査区全景の写真撮影。午後より現地調査説明会開催、約60名の参加者。19日、西側埋設木桶遺構を掘り下げて精査。平板測量にて1 / 100の遺構平面図作成。土層断面図(1 / 20)、北側完掘状況と東西埋設木桶遺構掘り下げ状況の写真撮影。20日、1 / 100の平板測量遺構平面図作成と1 / 200の平板測量遺物分布図作成。21日、調査区全域をブルーシートで覆い遺跡を保護して調査終了(ブルーシート170枚、土嚢袋約500個使用)



第1図 地形分類図（山形県発行地形分類図より S = 1 : 100 000）

II 遺跡の環境と概要

1 地理的環境

小 松 原 窯 跡	小松原窯跡・長者屋敷遺跡は山形市南西部の松原地区に、坂ノ上遺跡は松原地区と隣接する黒沢地区に位置し、山形盆地の西縁をつくるなだらかな丘陵にある。標高は約190mあり、足下の不動川より北東には山形市街地を、丘陵の東の眼下には奥羽本線と須川、遠くには雄大な蔵王連峰を一望できる。蔵王山は数十万年前より噴火を繰り返し、4万年以上前の噴火では、遺跡南東の須川竜王橋付近まで火山泥流が押し寄せ、須川を堰き止めたことがわかっている。蔵王の噴火は、平安時代からでも20数回起き、噴火によって運ばれた安山岩質の巨岩が調査区周辺の地表に露出している。
良 質 な 陶 土	しかし、この一帯は、近年まで良質な陶土が採掘された場所であり、丘陵の平坦部や窪地の湿地帯は水田に、水はけのよい丘陵上や傾斜地はぶどうなどの果樹栽培に利用されてきた。不動川の周囲は深い沢を形成し、クリ、クルミ、コナラ、アベマキなど堅果類の高木、ツノハシバミなど実のなる低木、ワラビ、ゼンマイ、キノコ、アケビ、ギボウシなど山菜が豊富である。
堅 果 類 類	鳥 の 飛 来
鳥 の 飛 来	低地の湿地には池もあり、カモやサギなどの鳥が飛来する。

2 歴史的環境

窯 跡	上山市に続くこの丘陵上には、平成10年度に調査されたオサヤズ窯跡をはじめ、久保手窯跡、熊野堂窯跡など8地点で窯跡が確認されている。良質な粘土、燃料や水の確保が容易なこと、運搬に利用できる須川が近くを流れていることなど、窯業に適した場所ともいえる。
羽 州 街 道	丘陵の東には、陸奥国桑折から分かれ、上山、山形、秋田、青森の油川へと続く江戸時代の脇往還である羽州街道が通っていた。江戸時代後期に活躍した皆川義川の筆による羽州街道の絵には、今回発掘調査した坂ノ上遺跡の北にあった「坂上二軒茶屋(三八茶屋・八兵工茶屋)」とその茶屋までの山道が描かれている。

3 概要

《小松原窯跡》

山形市大字松原字小松原地区にある小松原窯跡は、遺跡のそばを流れる不動川から北西に広がる丘陵地帯にある。遺跡の南からほぼ北に不動川が流れ、その不動川が大きく西に向きを変える付近に窯跡がある。窯跡を含む遺跡の調査範囲は約10,000m²となる。

今回の調査で見つかった遺構は、約300基にのぼり、その種類は3基の窯跡、土坑、溝跡、河川跡などである。

窯跡は、斜面を掘り窪め、天井を架けた半地下式と呼ばれる登窯である。3基の窯の内2基 登窯は、煙を出す上方部分の煙道部が削平されていたため全長は不明だが、遺存のよい窯跡S Q 3は、長さ約6.5m・幅が約1.5m前後を測る。焼成部には製品を並べるための段は見られない。出土した遺物には、焼台に使用された土器の破片がある。燃焼部は比較的平らで、燃焼効率をあげる目的か土器片や焼け土を埋め込んでいる。焚口は石を組んでおり、S Q 3の焚口は2ヶ所であることから、当初長かった窯を約2m縮めて使ったことが推定される。窯の下には、焼き須恵器瓦捐じの土器や瓦を搔き出した捨て場の灰原が広がる。長さ約25m・幅約10mの範囲に炭に混じり数多くの破片が検出された。

他の遺構では、穴の底や壁が赤く焼けているものが4基を確認したが、大きさ、形、焼け方などが様々で何の目的に使われたかは不明です。

遺物の量は約180箱で、大半が須恵器や瓦です。須恵器では、蓋、坏、高台付坏、壺、甕、鉢などの食器や貯蔵用の器で、比較的大きい甕や壺は少量です。風字硯も出土した。瓦は男瓦、風字硯女瓦、錐瓦で、男瓦は玉縁となっている。女瓦は角張った形状で、しかも、表裏に布目痕より錐瓦柄巻ではなく一枚づくりと考えられる。出土した錐瓦は七葉の蓮弁文で、蓮弁が陰刻表現されているのが特徴である。

《長者屋敷遺跡》

長者屋敷遺跡の範囲は、市道小松原上ノ山線を挟んで東西約190m・南北100mと考えられるが、遺跡の南東部には湿地が広がり、保水しきれない雨水は遺跡の北をほぼ東西に流れる不動川に濁流となって流れ下るため、周囲の土地を長年にわたり浸食してきた。また、遺跡の南西部は果樹栽培などにより削平されている。以上のことにより、調査対象となったのは約11,000m²の範囲である。調査を市道の西側と東側に分けて行い、それぞれ西調査区、東調査区とした。

西調査区の検出遺構は、袋状形態のものを含む大小の土坑やピットと性格不明のものである。遺構の分布は西調査区中央に集中している。中央部より西は、不動川に向かって傾斜が徐々に増すこと、また、直径1メートル前後の安山岩が点在し、しかも、地中深く食い込んでいることなどにより遺構が見あたらなかった。中央部より東にかけての緩斜面では、西側のような巨袋状土坑岩が殆どないにも関わらず遺構は検出されなかった。袋状形態の土坑群には炭化物が散見され貯蔵穴や廃棄穴と考えられる。

出土した遺物は、縄文土器、石鏃・削器・石匙などの石器や剥片などで、合わせて21箱である。遺物の9割以上が土坑やピットより出土している。

東調査区の検出遺構は、竪穴住居跡2棟と性格不明の遺構、土坑などである。遺構の分布は北側に集中している。S T901竪穴住居跡は、床面からの遺物、覆土からの遺物、土坑やピットからの遺物がややまとまって出土している。周辺のS X性格不明遺構の遺物とも共通する遺物が出土している。調査区内のその他の遺構や包含層取り上げ遺物とも相關することから所属時期を絞り込めるのではないか。出土した遺物は、縄文土器が12箱、石器が5箱である。

《坂ノ上遺跡》

坂ノ上遺跡の範囲は、東西約120m・南北約80mと考えられるが、遺跡の南西部と西の端は

低湿地に向かって急激に落ち込むため、調査対象となったのは第一次調査と第二次調査の合わせて約7 400m²である。

第一次調査での遺構は、調査区の北東から南西にかけて幅約40mの間に集中している。第二次調査では、第一次調査の東端部に沿って長さ約100m・幅約10mにわたり調査を進めた。検出遺構としては、竪穴住居跡2棟、性格不明の遺構、土坑、街道跡などである。特に竪穴住居跡S T 21は、これまで県内で検出された住居跡の中でも大形のもので地床炉7基を有する。街道跡で遺存状況のよいところには、丸みのある拳大以下の川原石が密に一層敷き詰められている。幅はほぼ3.6m、約2間である。

街 道 跡 出土した遺物は第一次調査と第二次調査合わせて、縄文土器が10箱、石器が15箱、陶磁器12箱である。遺物としては2万点を越える数である。遺跡の包含層から取り上げた遺物も多いが、特定の遺構から出土する土器・石器も多く所属時期が特定できるものと考える。



- 1 小松原墓跡（縄文・古墳・平安）
 2 備者屋敷遺跡（縄文・平安）
 3 坡ノ上遺跡（縄文・近世）
 4 久保手原跡（奈良・平安）
 5 オサヤヌ塚跡（奈良・平安）
 6 秋葉山跡（平安）
 7 天神山古墳（古墳）
 8 無野堂墓跡（奈良・平安）
 9 百々山遺跡（縄文・平安）
 10 谷地前遺跡（縄文）
 11 長谷寺塚跡（室町）
 12 石田遺跡（縄文・平安）
 13 高崎遺跡（奈良・平安）
 14 谷柏古群跡（古墳）
 15 沢田遺跡（奈良・平安）
 16 谷柏遺跡（古墳・奈良）
 17 山形元氣數遺跡（古墳・平安）
 18 片谷地遺跡（奈良・平安）
 19 横手遺跡（縄文・古墳・室町）
- (財)山形県埋蔵文化財センター

第2図 遺跡位置図 (1:25,000) 国土地理院発行2万5千分の1地形図「山形南部」を使用

III 遺構と遺物（小松原窯跡）

1 遺構の分布

小松原窯跡の調査面積は、 $10,000\text{m}^2$ である。当初予定していた調査範囲より北東側にも遺構、遺物の分布が見られたことから、調査範囲を拡張しそれに伴い調査期間も延長した。

遺構は南東部分に窯跡3基とステバがあり、ステバが広がる低地を挟んだ対面には、土坑・ピット群がある。土坑は古代に所属するものであるが、縄文時代に所属すると考えられるピット群も認められる。調査区北半でも土坑やピット群が見られ、窯跡に伴う工房や工人の住居、粘土探掘坑等も考慮して調査を行ったが確認には至らなかった。東部には調査前から地形的に捉えられていた旧河川が蛇行する。この旧河川からは、古代の土器に混じって古墳時代の土器も出土したことから、同期の遺構の存在も推定されたが、明瞭なものは確認できなかった。

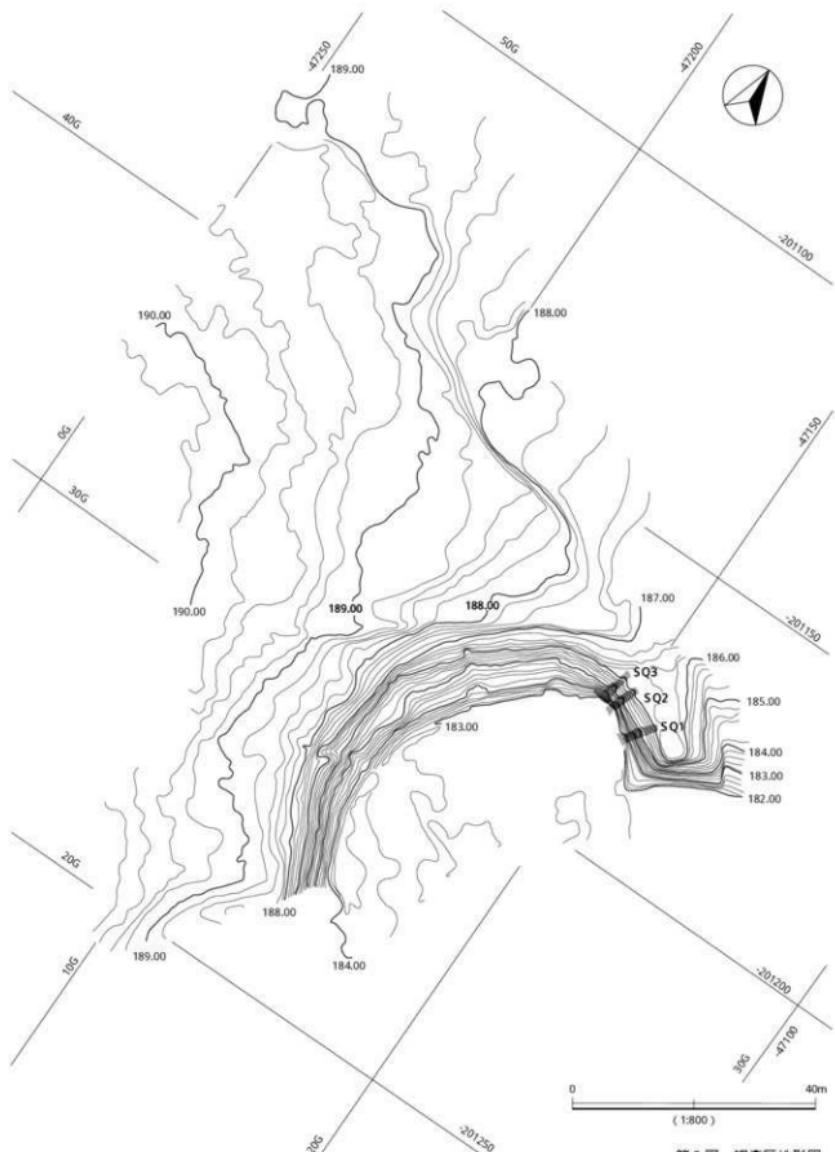
遺構検出面 遺構は散漫な印象であり、量的にも少ない。現況は水田として利用されていたことから、人工的な地形変更が行われていることが推測される。遺構検出面までの深さは、所によって20cmに満たない状況であり、耕作土直下で遺構を確認できる地点も少なくない。遺構検出面は、黄褐色のシルト質で粘性が強く、乾燥状態では著しく硬化する。旧河川の近くからは良質な白色粘土を産出する。

2 窯跡と出土遺物

柏倉亮吉氏の
発掘調査

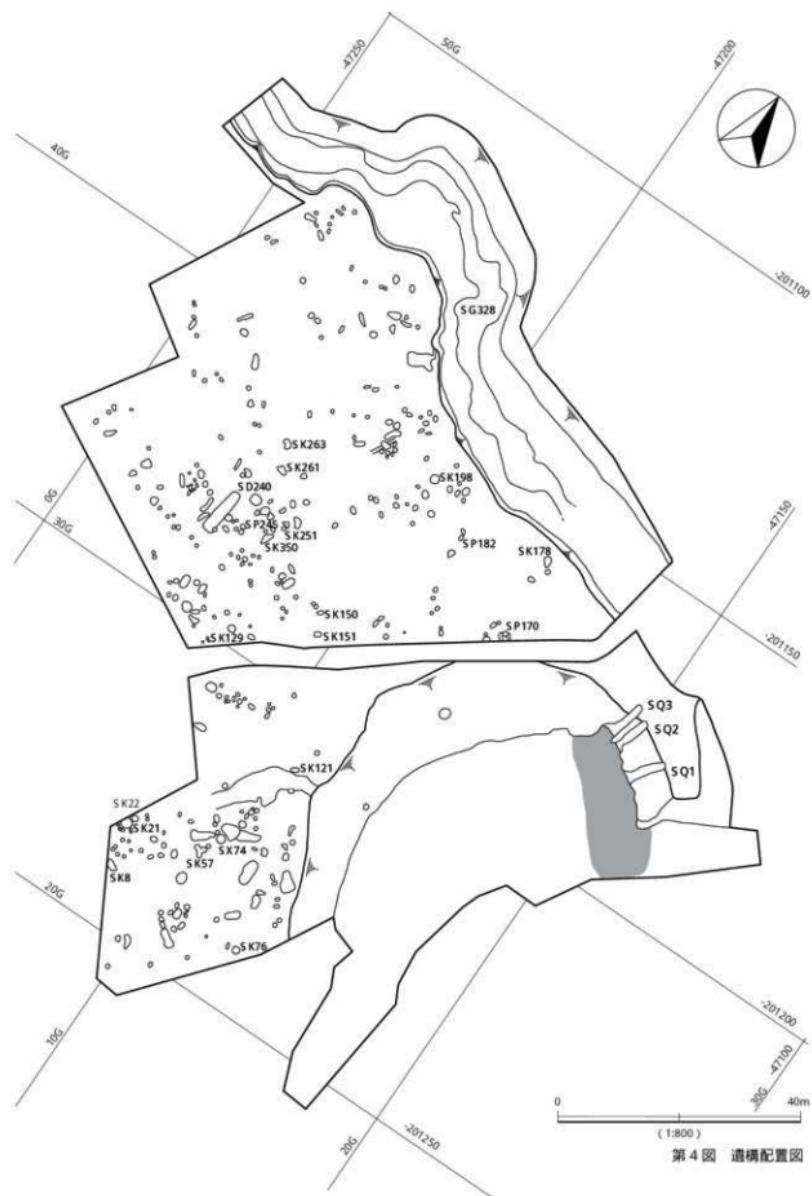
窯跡は3基検出され、いずれも半円形に湾曲した斜面の東端に位置し、西の斜面を利用して構築されている。南側（斜面向かって右側）から1号窯（S Q 1）、2号窯（S Q 2）、3号窯（S Q 3）と呼称する。なお、この中の1号窯については、昭和40年に柏倉亮吉氏が発掘調査を行っており、耕作時に発見された2号窯の確認と遺物の採集も行われている。その内容については『上山市久保手窯跡発掘調査報告書』（昭和59年上山市教育委員会発行）の中で報告されている。その後、窯跡北東部の掘削などによる地形変更が見られ、当時は遺構の残存状況が異なる。また、この報告の中B地点と呼称されている所からは、斜面から瓦をはじめ多量の遺物が出土したが、窯跡は発見されなかった。しかし、壁や底が被熱した土坑が見受けられたことなどから、土器・瓦などの生産に關った施設があったことは十分に考えられる。本調査ではB地点について、南ステバと呼称して遺物の取り上げ等を行っている。

以下、各窯跡毎に遺構と遺物について詳述する。なお、各部位の名称、窯体計測における名称、計測方法、構造分類等は、窯跡研究会の須恵器窯構造資料集に基づき、機能別に焚口前面の窯体外作業スペースとして使われる「前部」、窯体入り口の「焚口部」、燃料を燃焼させる「燃焼部」、製品焼成スペースである「焼成部」、焰や煙を排出する「排煙部」を用いることにする。

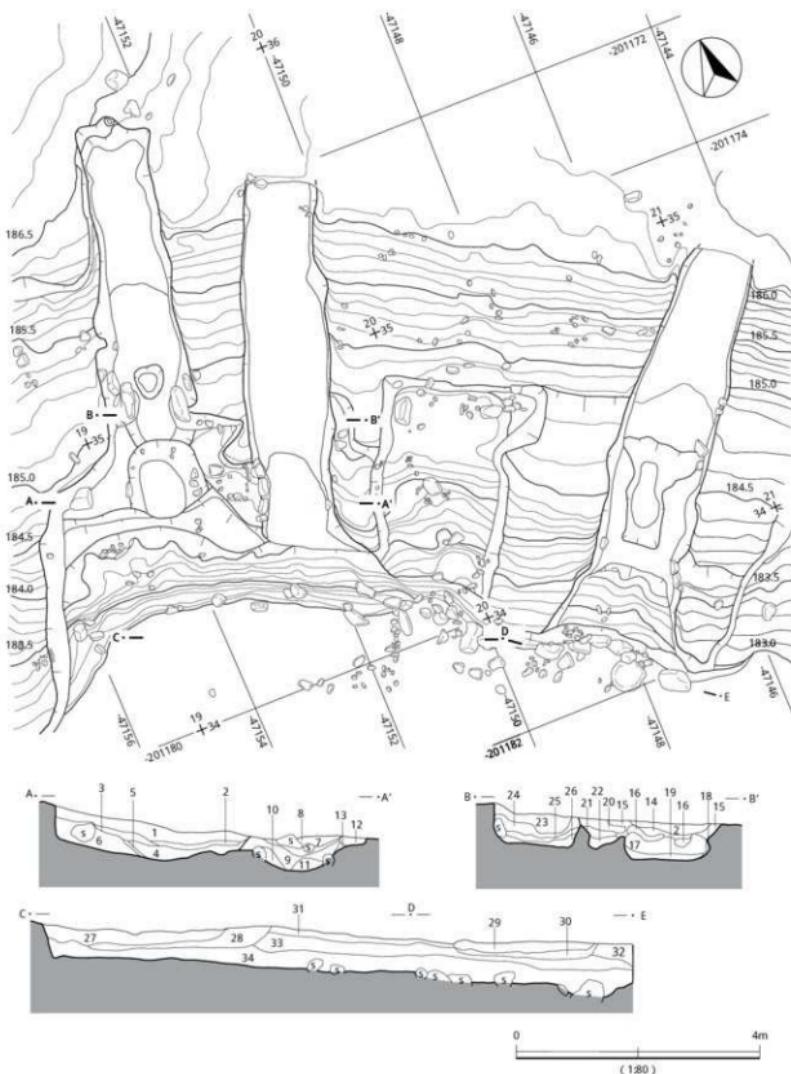


第3図 調査区地形図

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

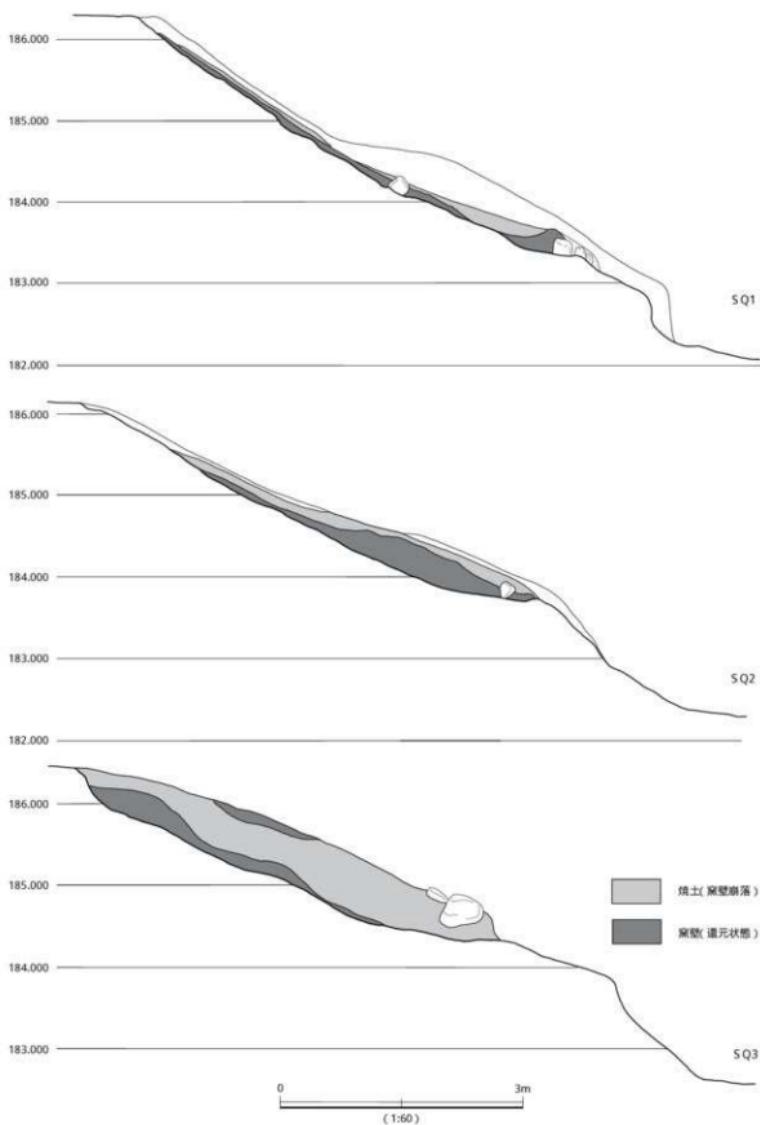


第4図 遺構配置図



第5図 SQ 1・2・3窯跡

III 遺構と遺物（小松原窯跡）



第6図 S Q 1・2・3窯跡・側壁図

1号窯跡（S Q 1）

20・21・34グリッドに位置する。北東から南西へ傾斜する斜面にあり、等高線に直行する。標高は183.5～187mの地点である。窯の構造は、地面を掘り窪め天井を架けた半地下式無階無段登窯である。構築材の確認はできなかったが、窯体下半を溝状に掘り込み、地山を側壁としている点などから、窯跡研究会の分類による天井架構構造（B類構造）2類の半地下天井架構式に該当すると考えられる。窯背部から排煙口付近にかけて削平を受けているため、全形は不明である。

窯体水平長は残長で550cm、窯体実長は残長で650cm、燃焼部長は130cmである。最大幅は140cm、焚口幅は130cm、焼成境幅は120cmを測る。窯体内最大高は残存高で40cmである。燃焼部の床面積は1.63m²、焼成部床傾斜は34°～22°、燃焼部床傾斜は焚口から焼成部口へ上昇するため+10°である。

1号窯跡の規模

窯体内施設では、舟底状ピットが見られる。舟底状ピットは長楕円形に掘り窪められており、舟底状ピット中には焼土や土器片が充填されているが、壁や底には被熱した痕跡が認められない。焚口・燃焼部構造は、燃焼う類に該当するもので、燃焼部から焚口にかけての壁に、4個の礎が埋め込まれた状態で検出された。燃焼部と閉塞部の強化を目的としたものと考えられる。側壁は殆ど崩落しており、床面も荒れることから修復回数は不明である。

前述した様に1号窯について発掘調査が行われているため、窯体内からの遺物の出土は極端に少ない。先の報告では、須恵器と瓦が出土し、瓦は二次焼成を受けていることから焼台等の窯道具と判断されている。須恵器は、蓋と無台坏のみである。今回の調査においては、前庭部付近から無台坏と甕の口縁部から頸部にかけての資料が出土している。無台坏は全てヘラ切りによるもので、器厚が均一で直線的に立ち上がるものと、体部中央がわずかに薄くなり口縁部が幾分外反するものとが認められる。甕は頸部が外反し、口唇部が短く直立するものである。頸部外面には、浅く粗雑な波状文が描かれる。

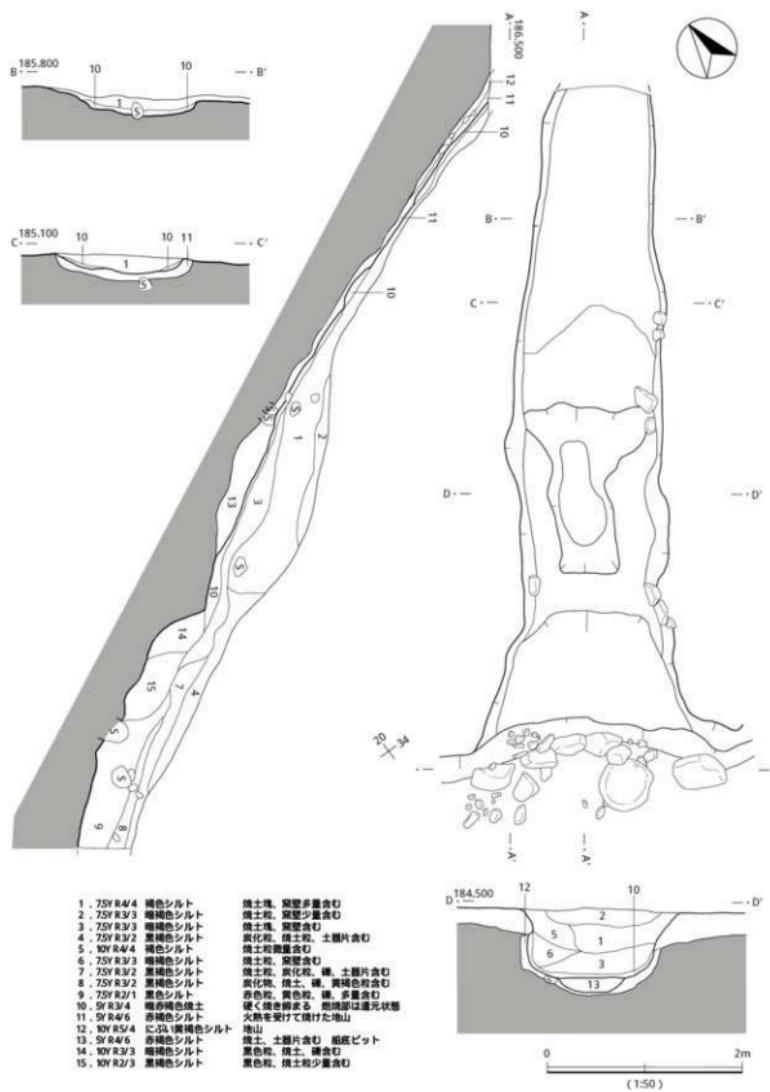
窯体内出土遺物

ステバからは、蓋、有台坏、有台皿、甕、小型壺、鉢等の器種も少量認められる。蓋は天井部が丸味を持つものと、扁平になるものとに分けられる。口縁部は、断面が三角形のものと丸味を持つものが見られるが、造作はいずれも単調である。有台坏は、無台坏に比して小振りで身が深く、体部は内湾する。口縁部が特徴的に小さく屈曲するものと、体部から直線的に口縁部に至るものとが認められる。資料数が少なく、1号窯で焼成されたものとは考えにくい。有台皿は破片資料の2点のみで、有台坏同様、他からの流れ込みと考えられる。壺には、小型壺の他に肩部から体部にかけて丸味を持つ長頸壺が見られる。鉢は、外面の体部上位にカキメ状の細かいロクロナデ、中位に縱方向のケズリ調整、下部から底部にかけては横方向のナデ調整が施されるが、平行タタキの痕跡も留める。内面はハケメ状のヘラナデが認められる。口縁部は多くの字状に屈曲し、口唇部をわずかに上方に引き出した単調な造りのものと、口唇部を外側につまみ出し、凹面を造るものが見られる。

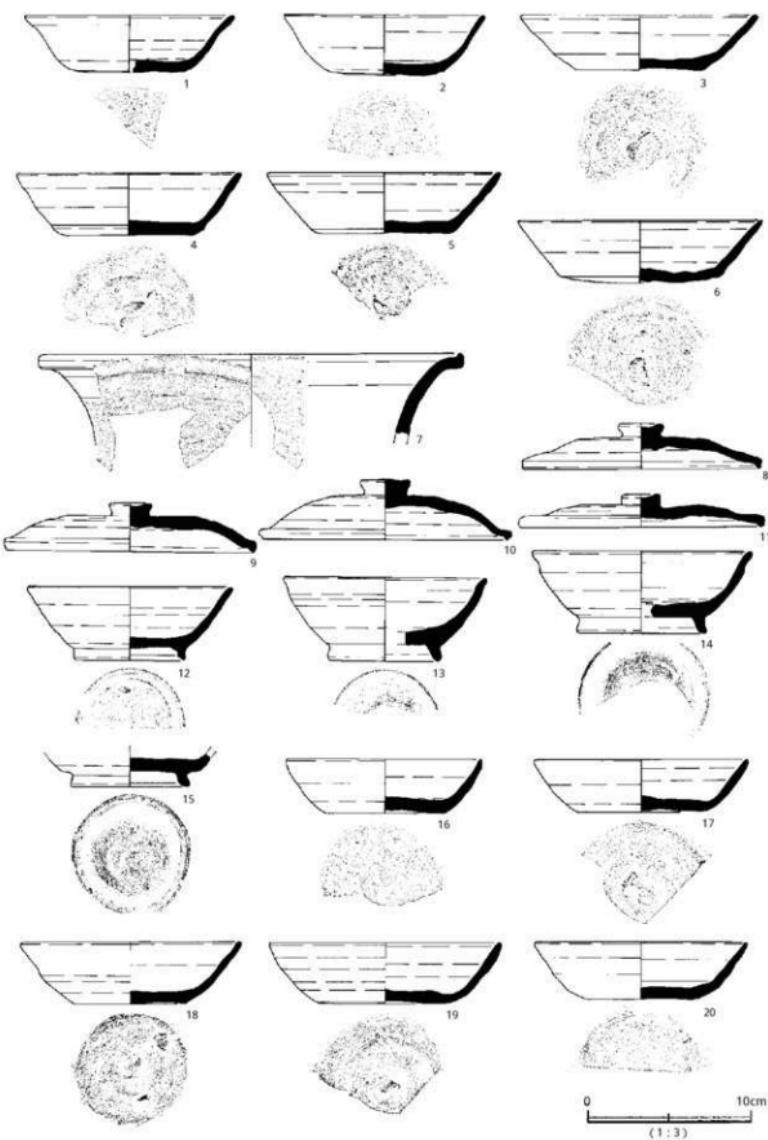
ステバの遺物

瓦は、窯体内から（512）とステバから（513）各1点出土している。2点とも鋳瓦で、512は瓦当面の一部、513は瓦当面が剥離したもので、男瓦との接合部が残る。

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

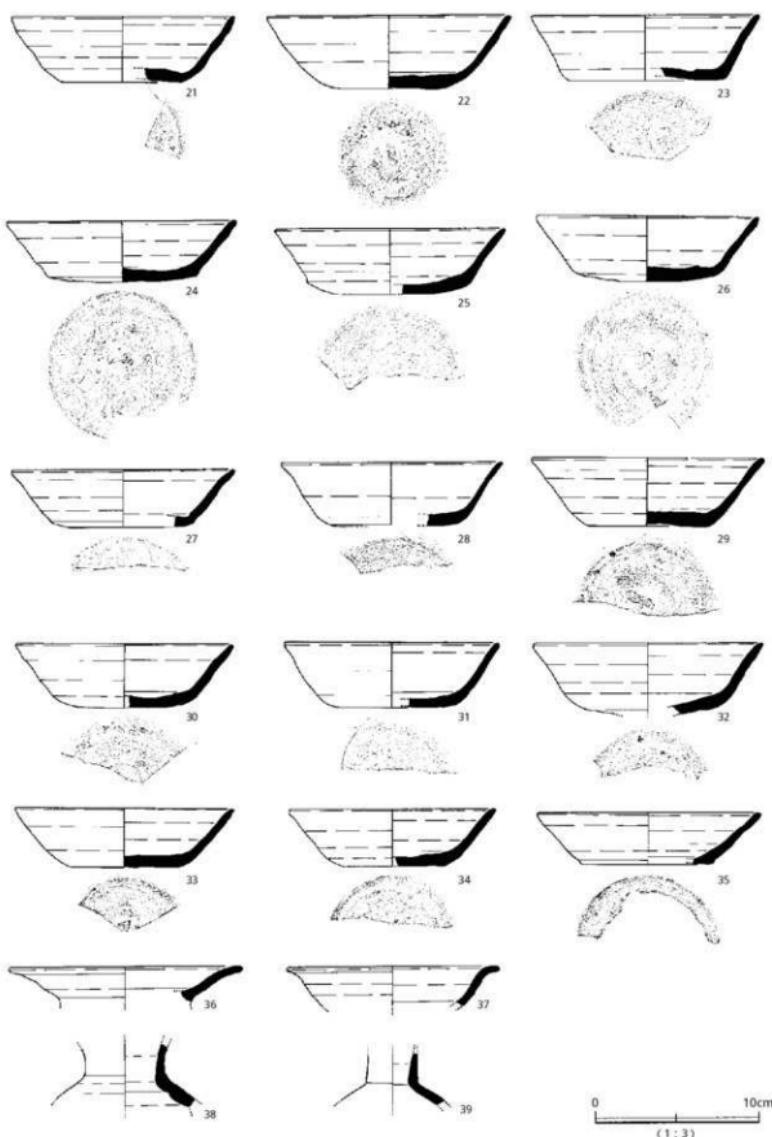


第7図 SQ 1窯跡

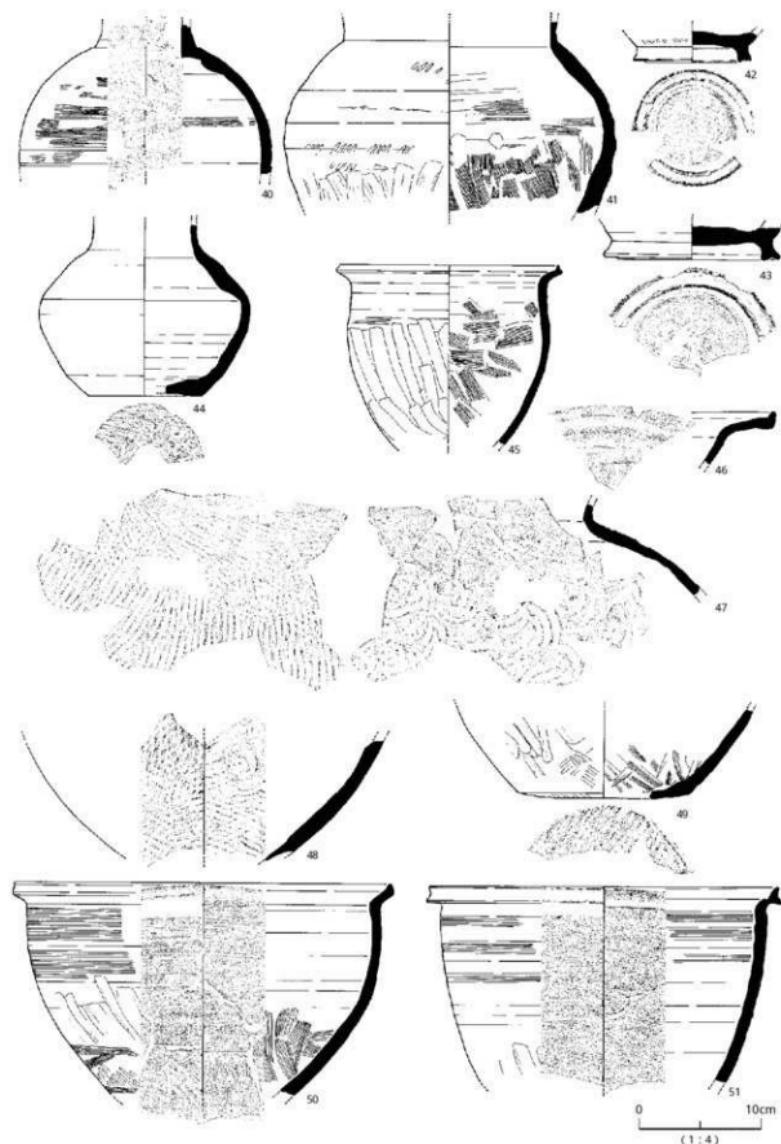


第8図 1号窯・1号窯ステバ出土遺物（1）

III 遺構と遺物(小松原窯跡)



第9図 1号窯ステバ出土遺物(2)



第10図 1号窯ステバ出土遺物（3）

2号窯跡（S Q 2）

19-35・36グリッドに位置する。1号窯跡から西へ約5m離れる。斜面は北東から南西へ傾斜するが、1号窯跡がある地点よりもやや南北方向への傾斜に変わる。そのため窯の主軸方向も1号窯跡の方向とは異なる。標高は1号窯跡とほぼ同じ184~187mの地点である。窯の構造は、半地下式無階無段登窯である。1号窯と同様に構築材の確認はできなかったが、窯体下半を溝状に掘り込み、地山を側壁としているなどの共通点から、天井架構構造（B類構造）2類の半地下天井架構式に該当すると考えられる。2号窯跡も窯背部から排煙口付近にかけて削平を受けているため、全形は不明である。規模、形状とも1号窯跡と概ね同程度であるが、2号窯の燃焼部がわずかに絞り込まれている。

2号窯の規模

窯体水平長は残長で580cm、窯体実長は残長で640cm、燃焼部長は130cmである。最大幅は130cm、焚口幅は110cm、焼成境幅は100cmを測る。窯体内最大高は残存高で50cmである。燃焼部の床面積は1.37m²、焼成部床傾斜は31°~24°、燃焼部床傾斜は焚口から焼成部口へ上昇するため+7°である。

焚口・燃焼部構造

窯体内施設に特徴的なものは見られない。焚口・燃焼部構造は、板状の比較的大きめの磚が焚口から燃焼部にかけて埋め込まれてあり、燃焼用a類に該当するものと考えられる。特に左壁については良好な状態で残存する。側壁は燃焼部から焼成部の下方にかけて、還元状態の壁が良く残る。断割りを行い側壁及び床面の状態を観察した結果、各所で1枚の壁しか確認できず、修復回数は明確ではない。

窯体内からは多数の土器、瓦が出土している。覆土の2層中には、多量の坏類を含むのに対し、その下の3層は天井部や側壁が崩落したもので、遺物をほとんど含まない。窯底直上の6層には窯壁と共に土器類、瓦類を多く含む。窯底の遺物は瓦類を主として、特に焼成部中央付近に集中して見られる。これらのことから、2号窯は瓦陶兼業窯であり、操業を終えた後に窯地を3号窯のステバとして利用したものと推測される。

窯体内出土遺物

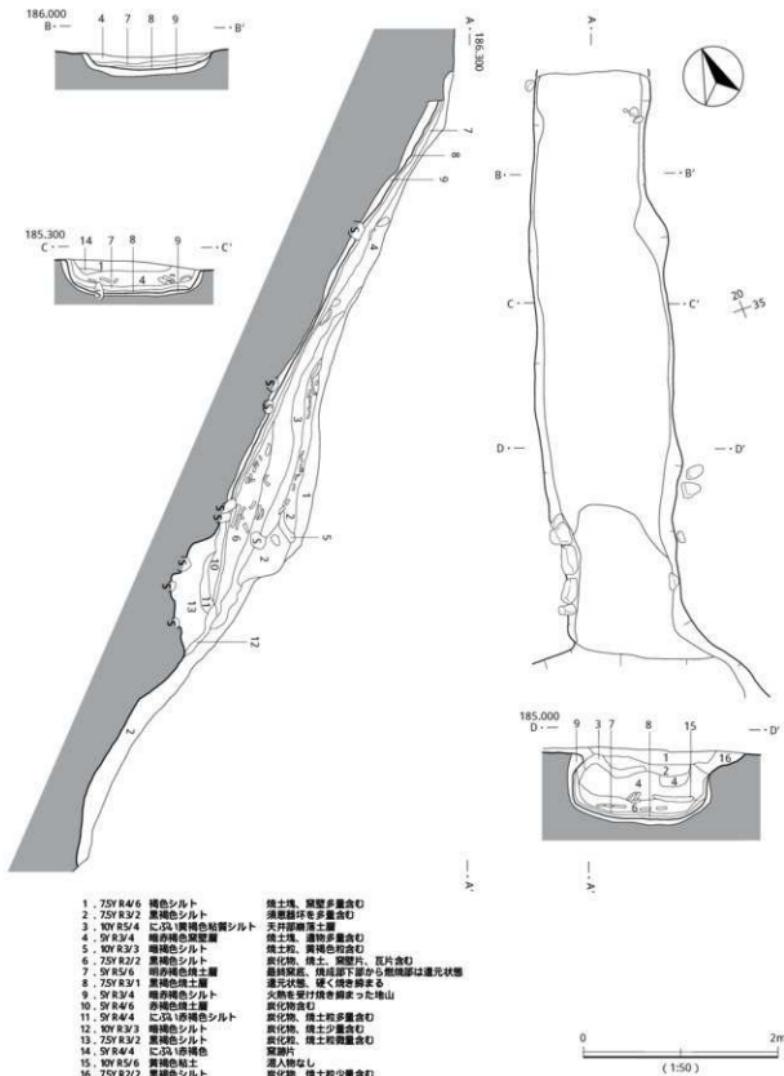
2号窯跡から出土した遺物は、土器類が蓋、有台坏、無台坏、有台皿、壺、甕、長胴甕、鉢、風字現など、瓦類が錐瓦、男瓦、女瓦などで量、器種とも豊富である。52-243までが所謂窯体内からの出土遺物であるが、有台坏と無台坏は、先に述べたように2層からの出土が多くを占める。したがって図版中では2号窯出土遺物として取り扱っているが、3号窯で焼成されたものを多く含むことを確認しておく。

蓋

蓋は口径が150mm前後の大型のものと、130mm前後の小型のものが見られるが、セットとなる有台坏は、口径120~130mm前後的小振りのものが殆どであり、大型の蓋とセットになる有台坏は85の1点しか確認できない。大型の蓋は、比較的天井部が高く盛り上がるが、小型の蓋は扁平な造りが多く見られる。口縁部は概して単調で、63・66・69は特に端部の処理が曖昧な印象を与える。天井部外面には、回転ヘラケズリ調整が認められる。つまみは中心部がわずかに盛り上がるボタン状を呈するものに集約される。

有台坏

有台坏は、体部が小さく内湾するタイプと直線的に立ち上がるタイプが見られるが、後者にはさらに、高台貼り付け部から直線的に口縁部まで至るものと、小さく屈曲する腰部を持ちそこから直線的に立ち上がるものが見られる。口縁部は73のように端部を特徴的に外反させるものも見られるが、量的には少数である。体部の器厚は、ほぼ均一である。高台部は端部に丸味



第11図 S Q 2 窯跡

を持ち、ハの字状に聞くものが大半を占めるが、74・75のように端部に角を有し平坦面を持つものや、84のように平坦面が内傾するものも若干認められる。底部切離しは、ヘラ切りによるものが主体となるが、73・84のように回転糸切りを用いているものが極めて少量だが認められる。

無台坏 無台坏の底部切離しは、全てヘラ切りによるものである。切り離し後は、ナデ調整が施されるが、丁寧な調整ではなく、むしろ切り離しの痕跡を明瞭に留めるものが多い。口径は135mm～145mm代のものが最も多く、120mm代、150mm代のものが少量認められる。底径は、70mm前後を測るものが主体を占め、80mm代のものが次ぐ。器高は35mm～40mmの中にほぼ納まる。体部は直線的に緩い角度で大きく聞くものが大半を占める。弱く外反するものには109・115・171・177・187・207等が見られ、155・156・186・204・210等は僅かに内湾する。口縁部も直線的なものが圧倒的であるが、小さく外反するものも若干認められる。底部は92・93・117・124等のように体部との境を明瞭に持つもの、94・96・114・135等のようにめりはりがなく不明瞭に立ち上がるもののや、151・155・157等のように丸底風になるものが見られる。体部の器厚に関しては、多くのものがほぼ均一な状態であるが、底部に関しては111・113・134・146のように肥厚するものも少なくない。胎土には細砂を含むものが多く、粗砂を含むものも一定量見受けられる。焼成は概ね良好であるが、褐色あるいは赤褐色を呈するものも多く見られる。4層以下から出土したものには2次火熱を受けたものも見られる。特に6層出土のものは顯著であり、焼台として無台坏を利用したことがうかがえる。

有台皿 225・226は有台皿である。225は直線的に大きく開いた体部から、僅かに角度を変えて口縁部が外反する。高台は短くハの字状に聞き、端部は丸味を持つ。胎土には細砂を含み、焼成は良好である。226はやや内湾気味の体部から大きく屈曲し、斜め下方に長く引き出された口縁部を持つ。高台は低く、ハの字状に大きく聞く。底部切離しは、ヘラ切りによる。胎土には細砂を混入するが、焼成は良好である。

壺類 227～230は壺類である。227・228は体部外面下半に縱方向のケズリ調整が施されるが、タタキの痕跡を僅かに留める。体部中位から上へはロクロナデ、カキメ状のナデ調整が行われる。内面は、底部付近にハケメ状のヘラナデが主に縱方向に入れられる。上半はロクロナデである。底部にはタタキ目が見られるが、227はナデ調整が施され、タタキ目は不明瞭である。229は小型の短頸壺である。最大径はやや上方にあり、そこから底部に向かって収縮する。頸部は直立するが、端部は外反し鋭角的な尖った形状である。体部外面は中位から縱方向のケズリ調整が入れられる。内面はカキメ状の細かいロクロナデである。胎土は緻密で焼成も良好であり、灰被りや自然釉が付着する。230は肩部より上方を欠く小型の壺である。形状からは、長頸壺になるものと推測される。底部は回転糸切り後、無調整である。高台は内側に小さな稜を持ち短く直立する。体部は内外面ともロクロナデ調整が施される。胎土には細砂を含み焼成は、良好である。内外面とも自然釉が付着し黒色に発色する。

甕 231は緩く外反する甕の頸部から口縁部にかけての資料である。タイプの異なる、精緻とは言い難い櫛描波状文が2段に描かれる。2次火熱を受けており、焼台として使われたものと考えられる。232も頸部に波状文が描かれているが、細く浅い粗雑なものである。234は平底の小型甕である。最大径を体部や上方に持ち、頸部は小さく外反する。口縁部は斜め上方に引き

出される。体部はタタキ成型後、外面にはケズリ調整、内面にはヘラナデの調整が施される。235・236は丸底の中型甕である。体部のほぼ中央に最大径を持つ。頸部は強く外反し、大きく開く。口縁部は斜め下方に小さく引き出される。237も体部のほぼ中央に最大径を有するものと推測される。破片によっては2次火熱を受けているものも見られ。焼台として使われたと考えられる。238は肩が大きく張る中型甕である。239は比較的太い波状文が頸部上方に描かれた大型甕の頸部である。口縁部は下方に掲み出され中窪みの端面を作り出している。

240～242は長胴甕である。平底で、体部中央よりやや上位に最大径を有する。頸部は屈曲し、長 脇 横 瓢 短めに外反する。タタキ成型後、外面下半に縱方向のケズリ、上半にロクロナデが施され、内面にはヘラナデ調整が行われる。胎土には粗砂を多く含む。焼成が還元状態である以外は、器形、調整、胎土の何れも土師器の長胴甕の特徴を示す。

243～246は鉢である。全形を知りえるのは246のみであるが、全て平底になるものと考えられる。体部は僅かに内湾し最大径をやや上方に置くが、この位置から頸部まではほぼ直立に近い角度で立ち上がる。頸部は屈曲して短く外反する。口縁部は243・244のように端部に面を有するものと、245・246のように丸味を持つものが見られる。調整は外面下半にケズリ、上半にロクロナデが施される。焼成は良好であるが、赤味を帯びた発色を呈する破片が多く、2次火熱を受けている可能性が高い。

鉢

風字硯は窯体内から494・495の2点、ステバから496・507の2点が出土している。494・495はそれぞれ右半、左半を欠き、なあかつ裏面も剥離している。残存部からは方形に近い形だったことが推測される。また、507などの円錐形の脚部も出土していることから、裏面には同様な脚部を有していたことが考えられる。さらに、硯面の中央付近には剥離をうかがわせる色の変化が認められ、504などの破片も見られることから、縱方向の突堤を持つ二面硯の可能性も考えられる。硯面は丁寧に磨かれ、側面は細かいケズリとミガキによる調整がなされる。496は右側面と考えられる。507はケズリにより造られた円錐形の脚部である。表面は剥離するが、右側のものと考えられる。

247～258は2号窯ステバから出土した遺物である。247～249の蓋は、窯体内出土の蓋と同様に、天井部が扁平なるものと、丸味を帯びるもののが見られる。250は230と同形の壺である。高台の造りにシャープさを欠くが底部は回転糸切り離しで、内外面とも自然釉が付着する。251～254は器厚が幾分厚く、体部が僅かに外反する無台壺である。255～258是有台皿である。推定される口径は138mm～160mmまでばらつきがある。底部が残存するのは255の1点のみであるが、身の深さにも違いがあると推測される。法量のはらつき同様に形状にもバリエーションが豊富である。直線的に開いてそのまま横に口縁部が引き出される255、体部上位で抉りが入ったように外反し、横に引き出される256、内湾する体部から強く屈曲し、斜め下方に口縁部を掲み出した257、大きく深い身から、外側へ折り返した口縁部を持つ258などが見られる。

ステバ出土遺物

瓦は錆瓦、男瓦、女瓦の各種が出土している。錆瓦は、窯体内出土が514・515・516・520・521・522・527・539・547・548・550の11点、ステバ出土が517の1点である。514～516・520～522・547・548・550は何れも瓦当面が剥離したものである。広端部には瓦当面を接合した痕跡が認められる。514～516・547・548・550の凸面は、繩タタキ後、横方向のナデ調整が行われ、タタキの痕跡が不明瞭になるが、広端部に接合された粘土には、細かい繩タタキによる調

整が明瞭に認められる。一方520・521の凸面広端部には、条線状タタキの調整が認められる。527・539は瓦当面の上部が男瓦に接合した状態で出土した数少ない例である。瓦当面接合の際の補強として凹面凸面にそれぞれ粘土を貼り付けた様子がうかがえる。2点とも凸面は細かい繩タタキによる。

2号窯出土男瓦 窯体内出土の男瓦で図化したものは39点である。広端部のみの資料もあるが、全て玉縁式と考えられる。玉縁には565・568・600のようにケズリにより明瞭な段を作り出したもの他に、579・589・602・607のようにわずかな段しか持たないものも多く見られる。

広端部幅は160～170mmのものが大半を占めるが、140mm前後の狭いものも認められる。狭端部幅は100～120mmを測るものが多く、100mm未満のものや、130mmを超えるものも見られる。全長を計測可能な完形品は2点を数えるのであり、各々345mmと350mmを測る。

側端面は凹凸両側端面を面取りしたものが多いが、1面のみ面取りされたものも若干認められる。凸面は目の細かい繩タタキ成形され、その後横方向のナデが施される。丁寧なナデ調整が行われたものでは、タタキの痕跡がほとんど磨り消された状態である。凹面は布目が明瞭に見られる。570・573・577等では布を袋状に綴じた様子がわかる。また、566・568・602・606等では布の端の状態をうかがうことができる。

焼成は概ね悪くはないが、灰白に発色し軟質な焼き上がりのものも少なくない。僅かであるが、2次火熱を受けているものも認められる。

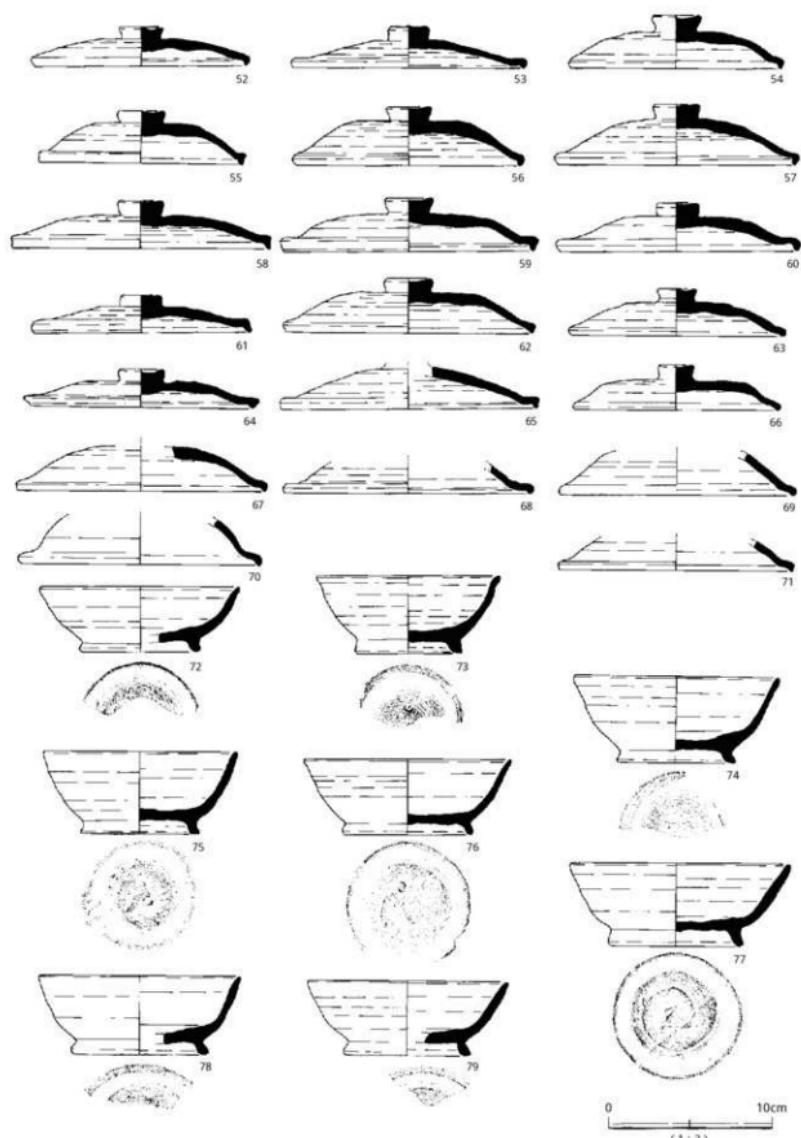
2号窯出土女瓦 女瓦は男瓦に比べ出土量が極端に少ない。2号窯からの出土量も例外なく、窯体内出土のものはほぼ全点図化しても9点にとどまる。

全長は314mm～327mm、広端幅は224mm～253mm、狭端幅は200mm～245mmである。厚さは13mm～25mmである。中央部と側端部との厚さが極端に違うものが認められる。636は側端部の厚さが12mmなのに対して、中央部が27mmと肥厚する。それ以外にも、中央部が20mm程あるものでも側端部は約半分の厚さしか持たないものも少なくない。

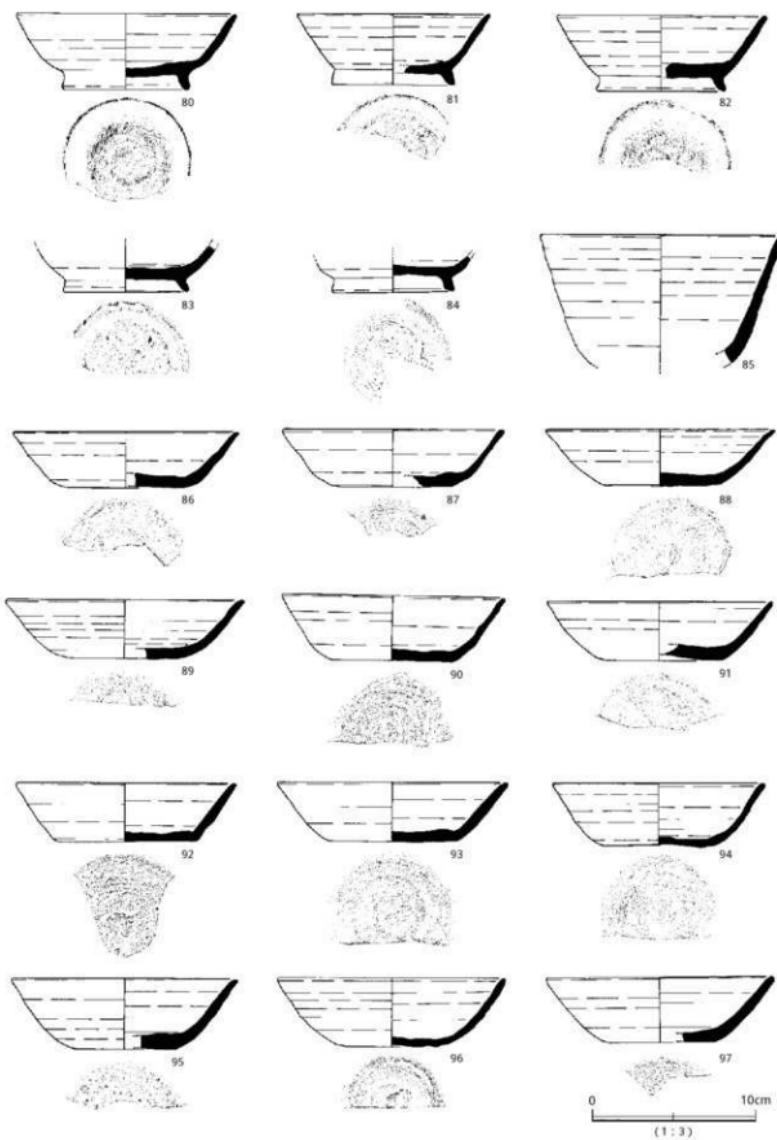
形状は特徴的で、横断面形が弧を描くものはほとんど無く、大半はU字形に近い角張った形のものである。特に凸面は、平坦な中央部から角を持って斜め上方に向いて立ち上がる印象を受ける。反面、凹面は緩やかに弧を描くものが多く、角の部分が肥厚する要因を作りだしている。

端面の調整は、凹側端面にのみ面取りが行われているものが少量認められるが多くは無調整である。636・648等は側端面が凸面側に折り返されている状態であるが、後に説明する成形台によるものと考えられる。凹面にはケズリやナデの調整が十分に施されているため、布目を確認するのが困難なものもある。凸面には比較的目的の細かい繩タタキが見られる。繩タタキは、板目状の圧痕により潰れている状態のものが多く見られ、それらは側端部分の方が顕著である。また、636・639・648の中央平坦面には、広端面と狭端面の近くに20mm×40mm程の方形の押圧痕が認められる。凸面に見られる板目状の圧痕とを考え合わせると、切り出した粘土板を繩タタキ成型後に凹型成形台を用いて、凹面の調整と端面の処理、最終的な成形を行ったものと推測される。648は凹面に繩タタキがあり、凸面に布目と板目状の圧痕が認められるもので、唯一逆転している例である。

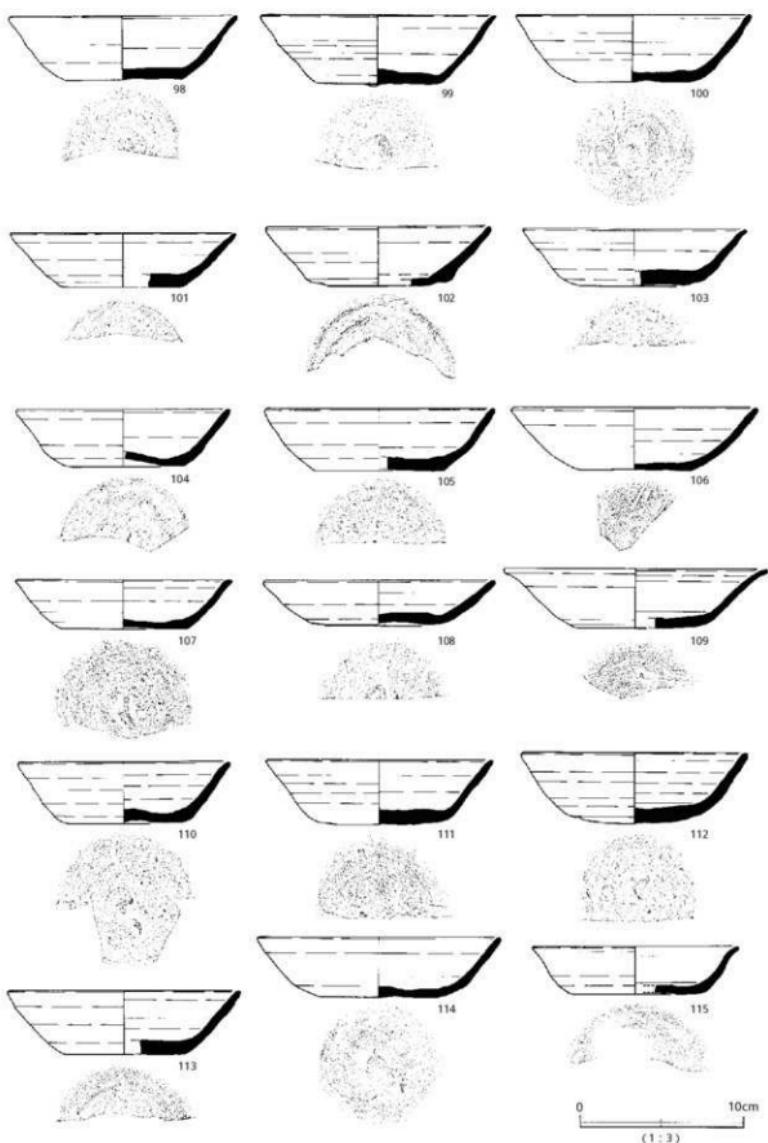
胎土には粗砂を混入するものも目立つ。焼成は、灰白色を呈し軟質なものも見られるが、概ね良好で硬質なものが多い。2次火熱を受けたものは少数である。



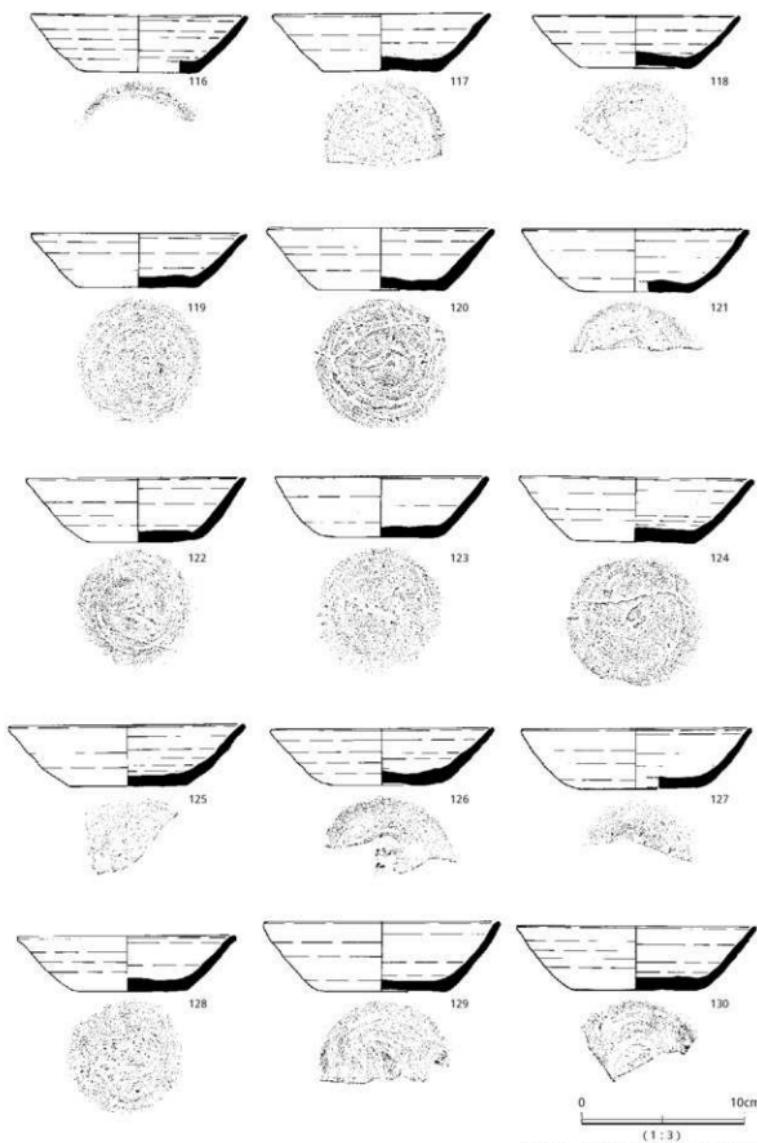
第12図 2号窯出土遺物(1)蓋・有台環



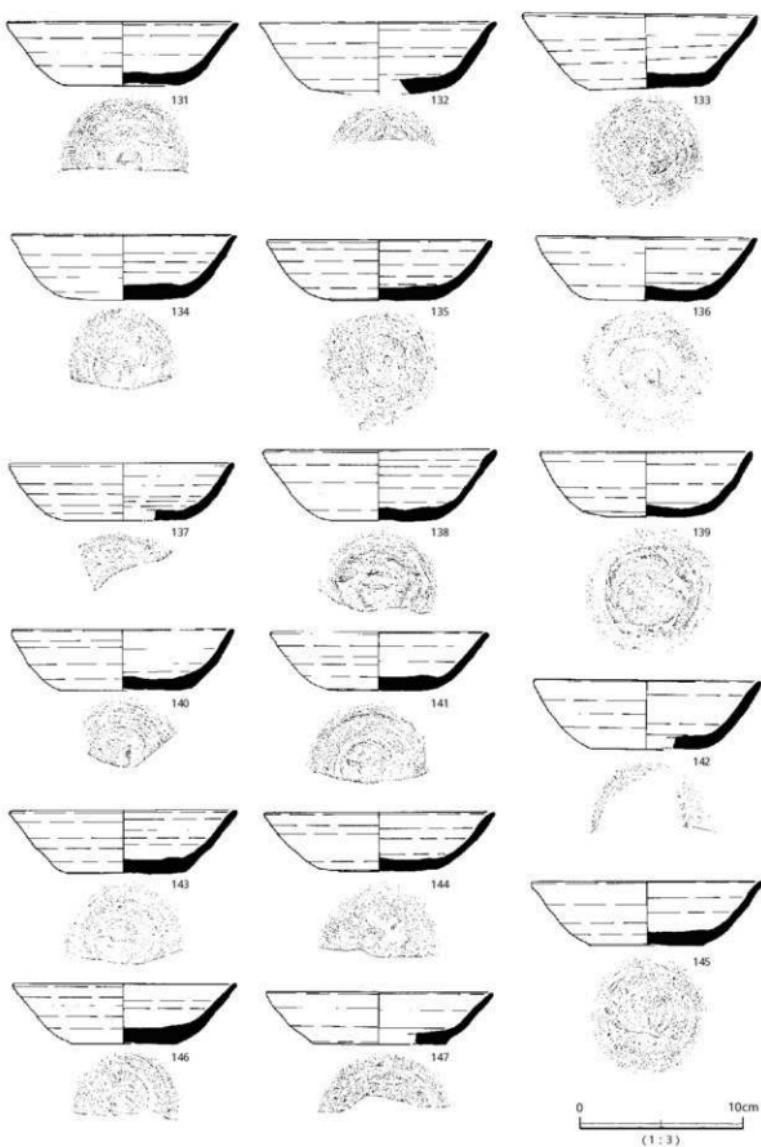
第13図 2号窯出土遺物(2)無台坏



第14図 2号窯出土遺物(3)無台盤

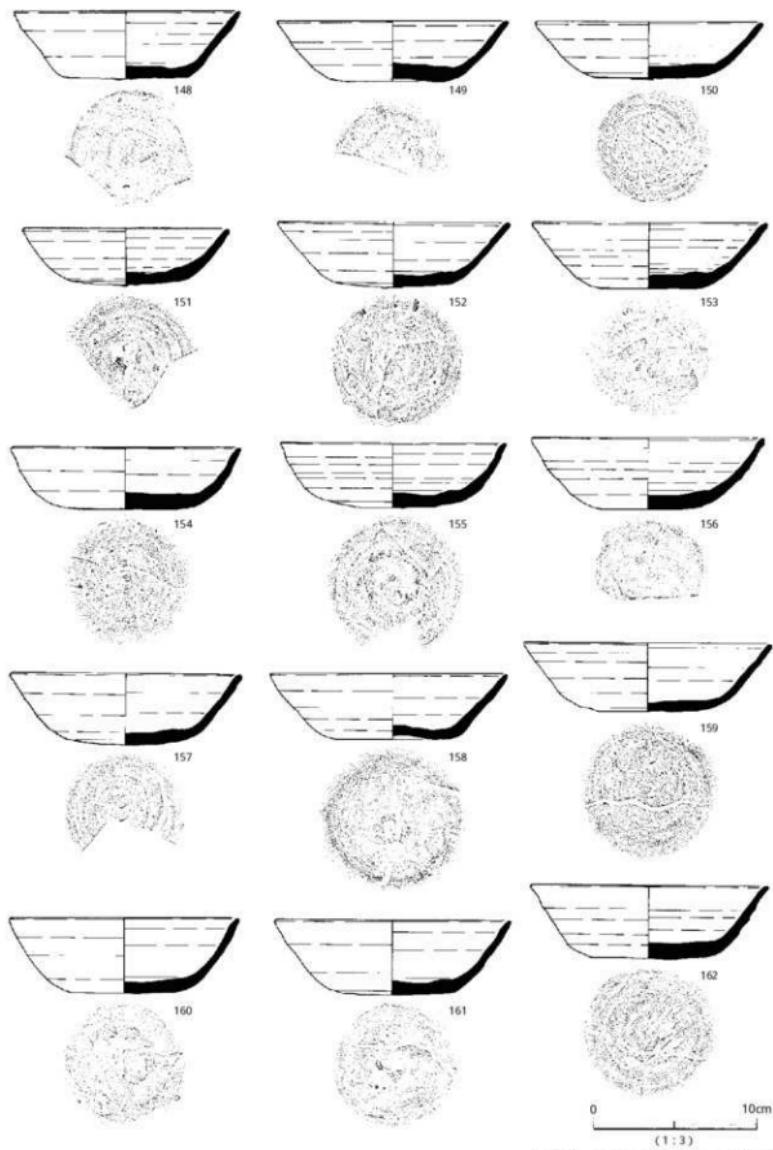


第15図 2号窯出土遺物(4)無台坏

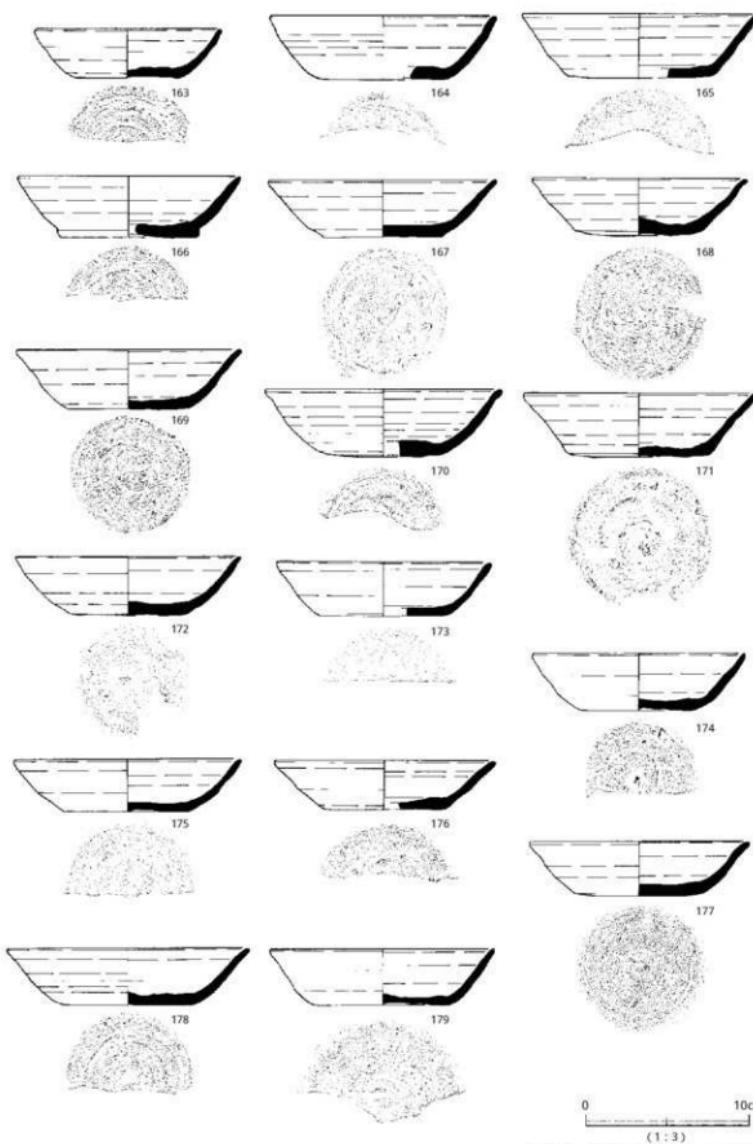


第16図 2号窯出土遺物(5)無台環

III 遺構と遺物（小松原窯跡）

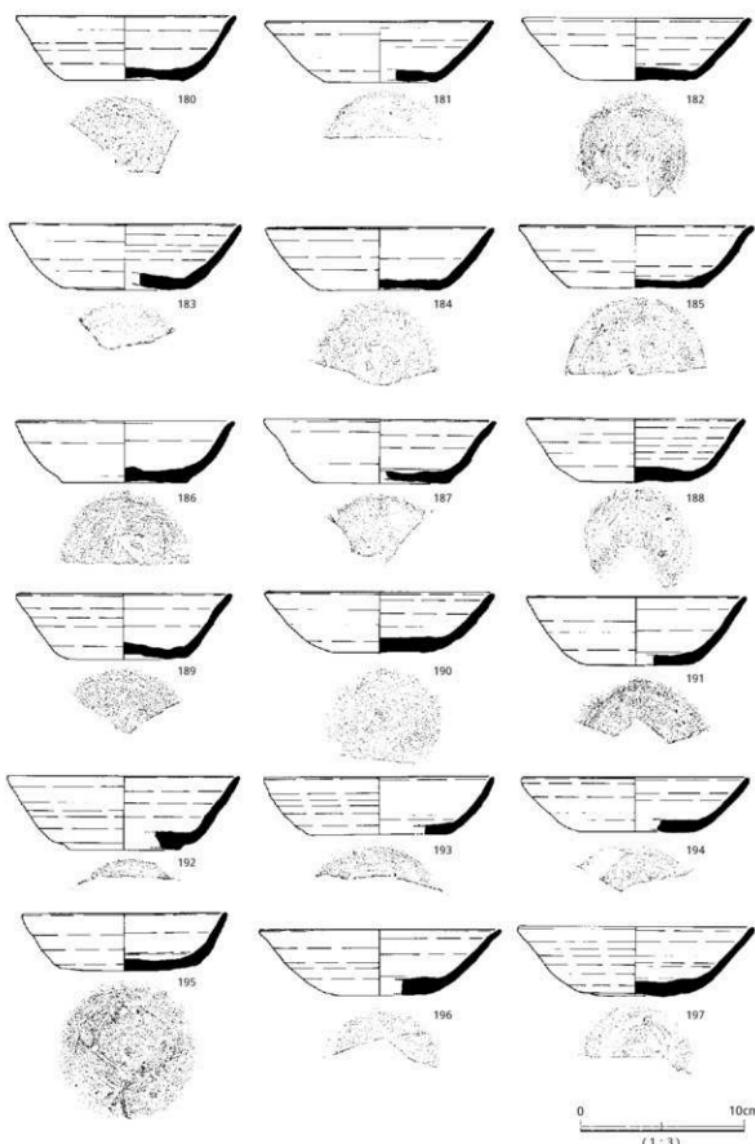


第17図 2号窯出土遺物(6)無台壠

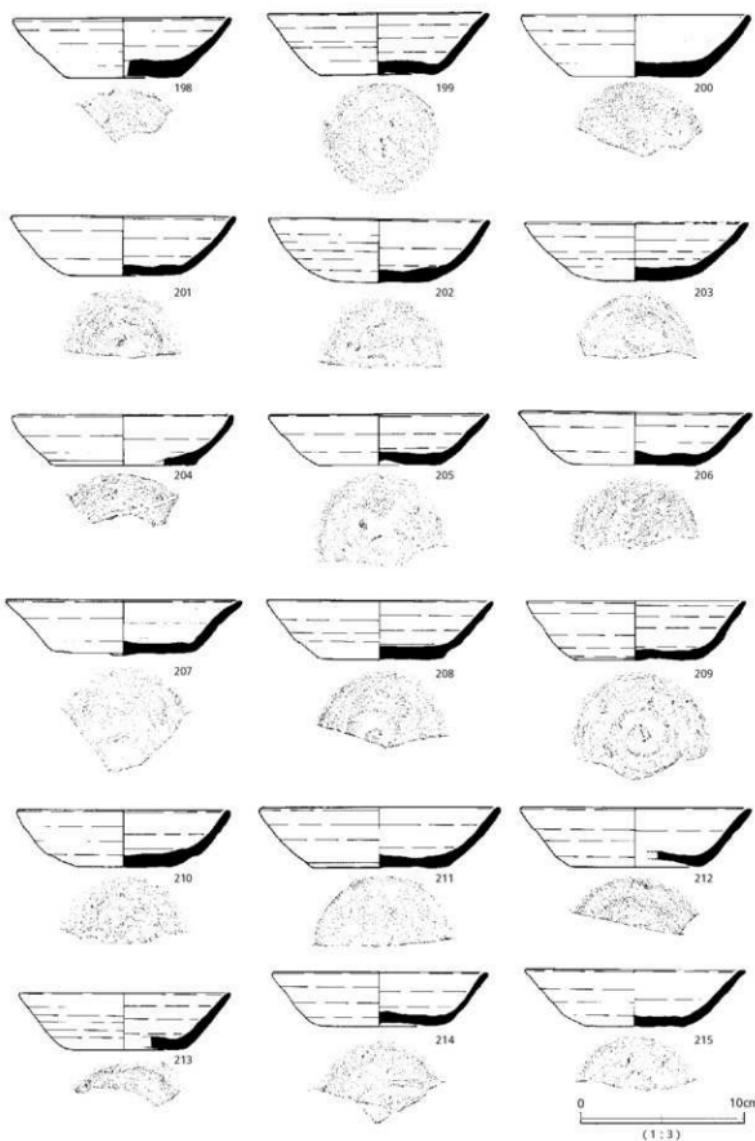


第18図 2号窯出土遺物(7)無台坏

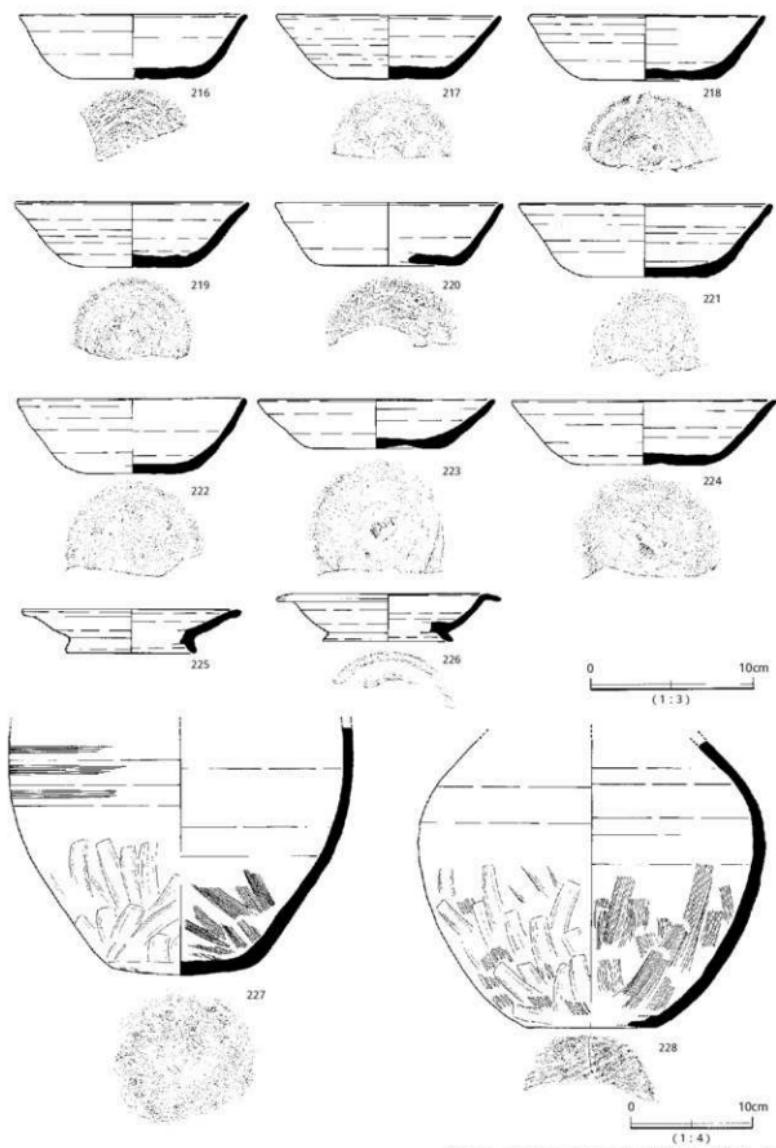
III 遺構と遺物(小松原窯跡)



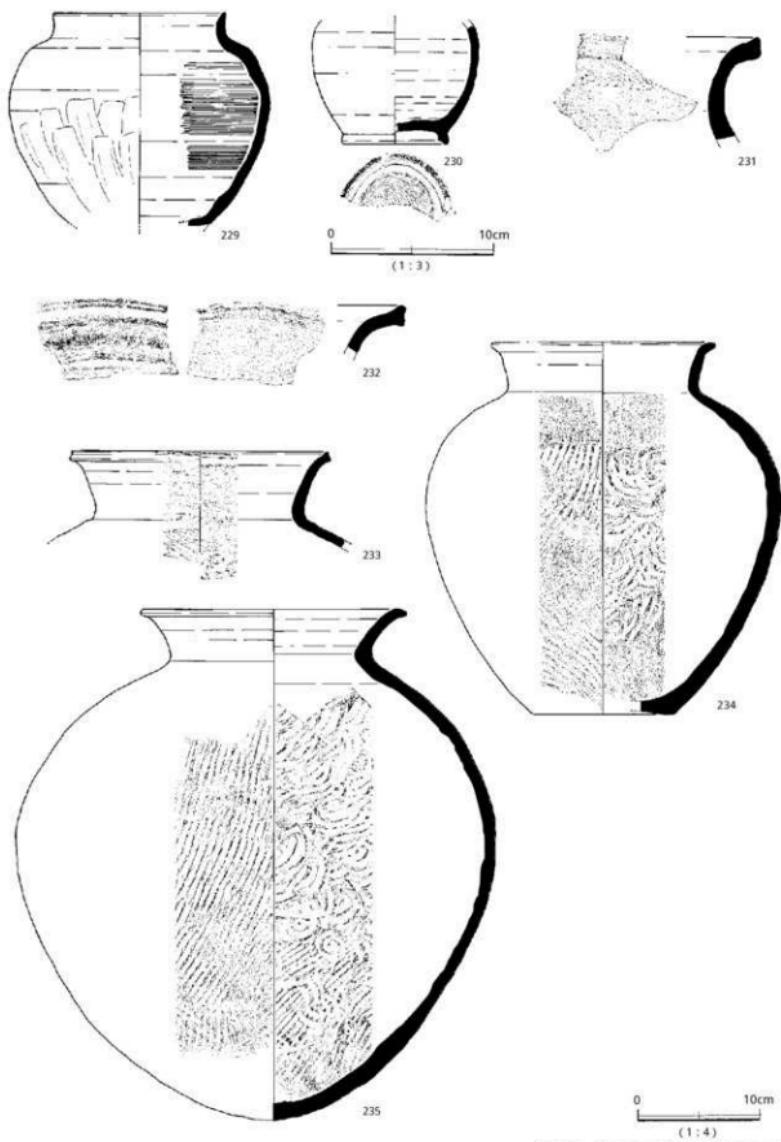
第19図 2号窯出土遺物(8)無台坏



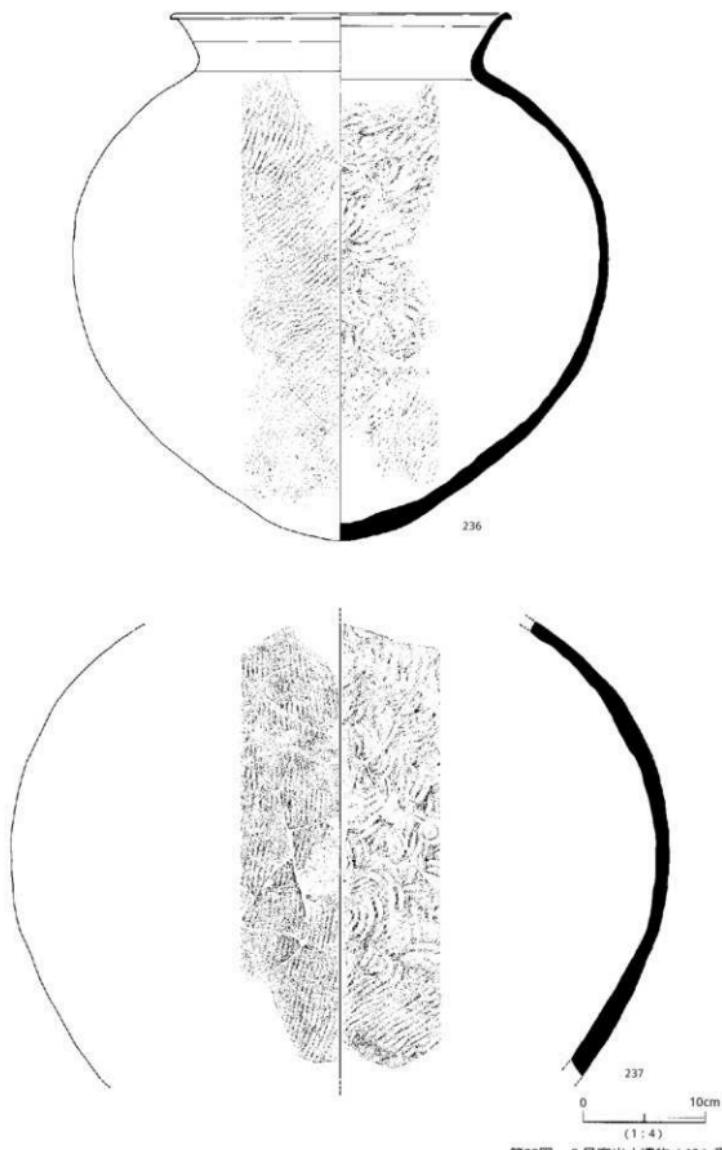
第20図 2号窯出土遺物(9)無台環



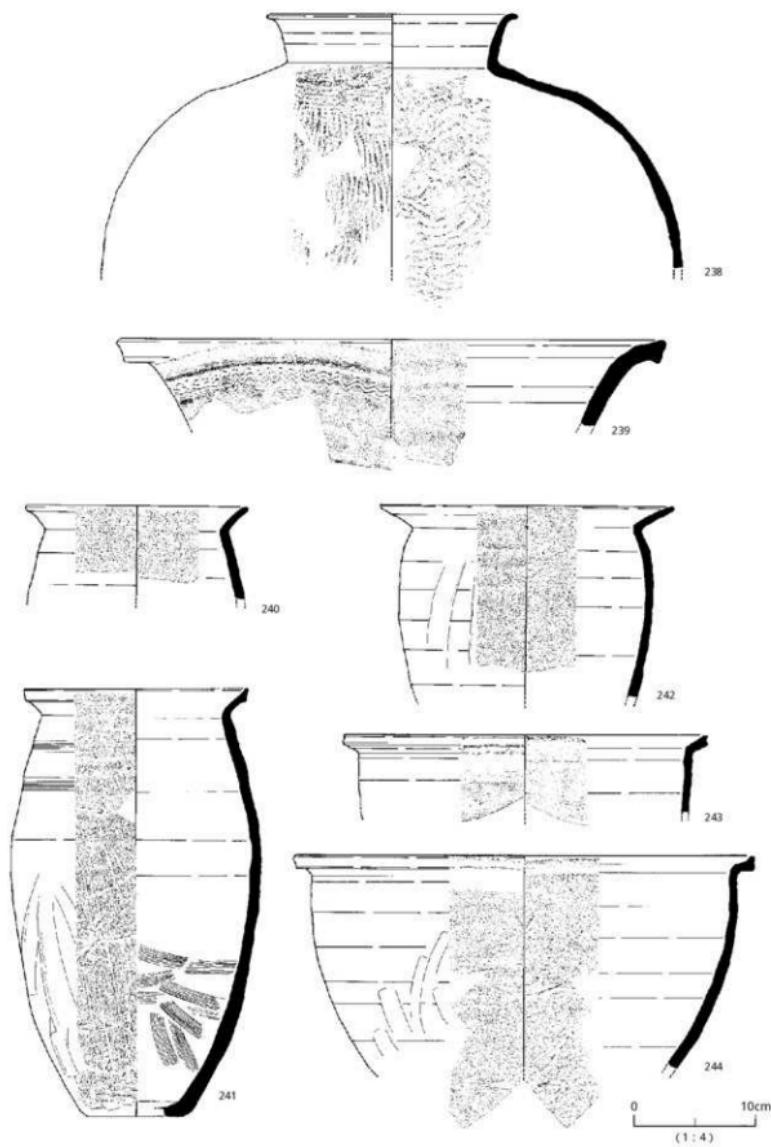
第21図 2号窯出土遺物(10)無台环・有台皿・壺



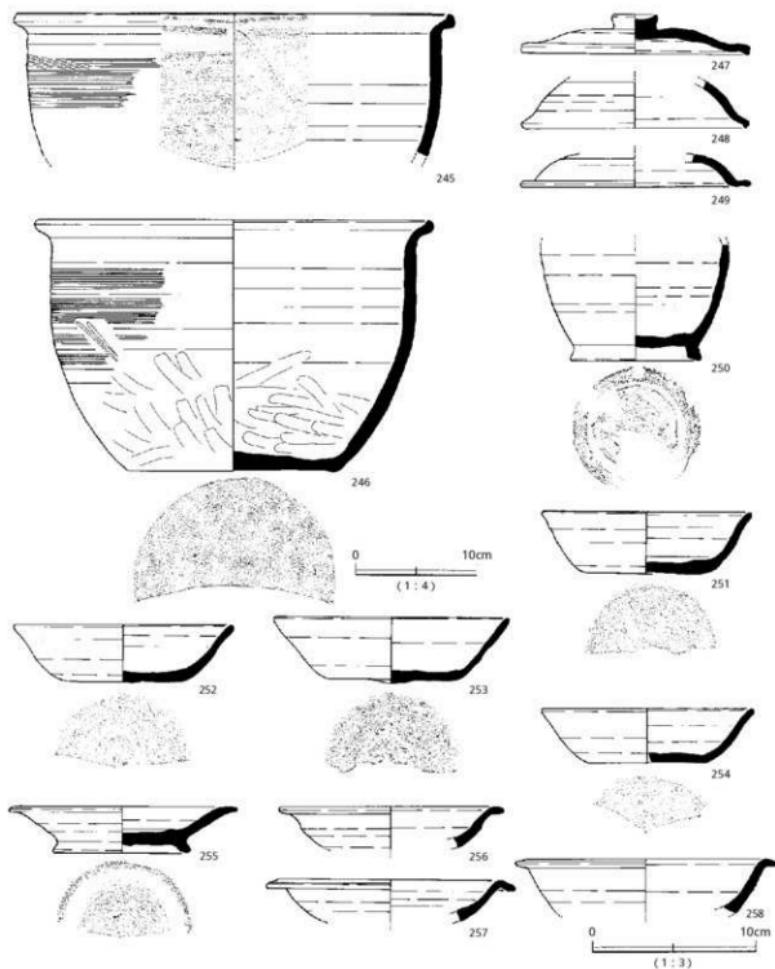
第22図 2号窯出土遺物(11) 壺・瓶



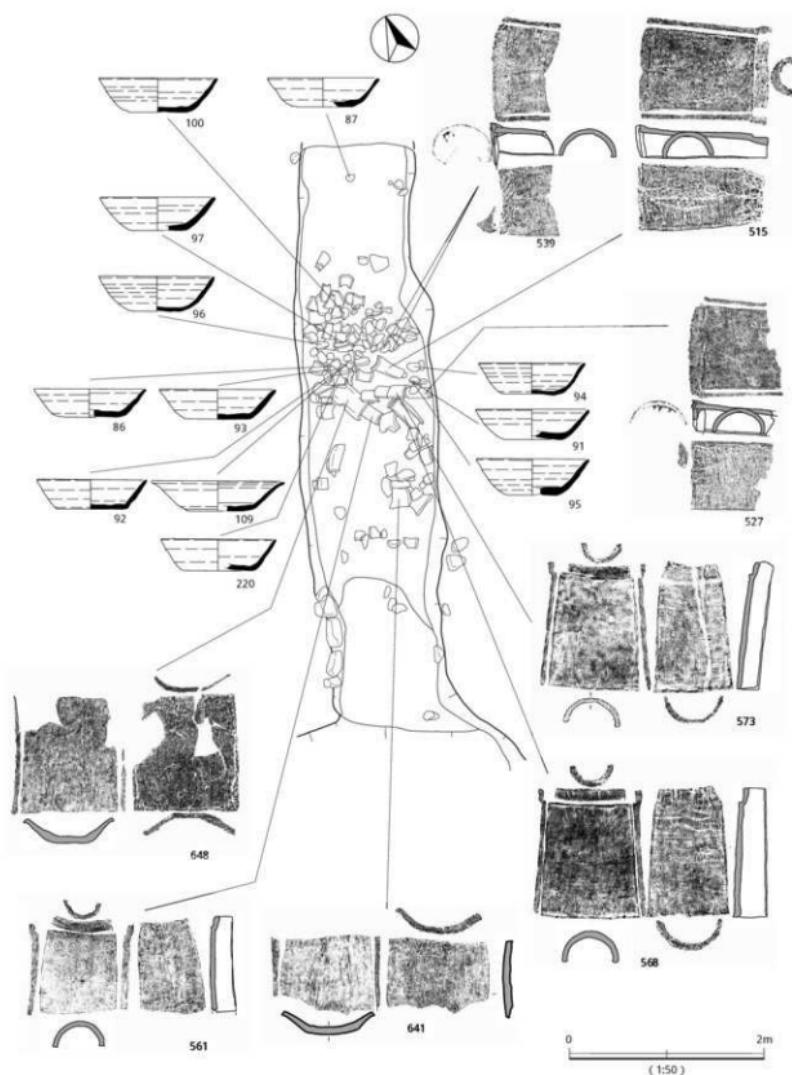
第23図 2号窯出土遺物(12) 標



第24図 2号窯出土遺物(13) 瓢・鉢



第25図 2号窯・2号窯ステバ出土遺物



第26図 SQ 2 窯跡遺物分布図

3号窯跡（S Q 3）

19-34-36グリッドに位置する。1号窯跡から約8m、2号窯跡からは約1m西へ離れた所にある。湾曲する地形にあり、北東から南西へ傾斜していた斜面は、北から南へ傾斜する斜面へと向きを変え始める地点である。そのため、窯の主軸方向も1・2号窯跡との方向とは異なり、ほぼ南北方向となる。標高は1・2号窯とほぼ同じ184~186.5mの地点を取る。

窯の構造は、半地下式無階無段登窯である。やはり構築材の検出には至らなかったが、窯体下半を溝状に掘り込み、地山を側壁としているなどから他の窯跡同様に、天井架構構造（B類構造）2類の半地下天井架構式に該当すると考えられる。3号窯跡は1・2号窯と違い、窯背部は削平を受けていたが、奥壁と考えられる部分が残存しているため、唯一全形を知り得る窯跡である。

3号窯跡の規模

窯体水平長は窯尻長で510cm、窯体実長は窯尻長で560cm、焼成部長は水平長410cm、実長460cm、燃焼部長は110cmである。最大幅は110cm、焚口幅は60cm、焼成境幅は110cm、奥壁幅は90cmを測る。窯体実効高は230cm、窯体内最大高は残存高で80cmである。窯体床面積は4.95m²、焼成部床面積は4.1m²、燃焼部の床面積は0.85m²である。焼成部床傾斜は26°~20°、燃焼部床傾斜は焚口から焼成部口へ上昇するため+9°である。

窯体内施設では、舟底状ピットが見られる。舟底状ピットは径約50cmの潰れた円形を呈する。中には焼土や土器片が充填されているが、壁や底には被熱した痕跡が認められないことなど1号窯と共通する。焚口・燃焼部構造は、他の2基同様燃焼う類に該当するものである。燃焼部から焚口にかけての壁に大小の礫が埋め込まれている。特に焚口と考えられる部分については、長さ50cm以上の大きな板状の礫が左右に立てられた状態で検出されている。側壁は殆ど崩落していたが、左側壁はずり落ちた状態で床面から見つかっている。厚さは15cm程度あり、スサの混入具合や粘土を塗り付けた様子が明瞭に見て取れた。修復回数は、床2枚、壁2枚を確認している。

前部の火熱痕

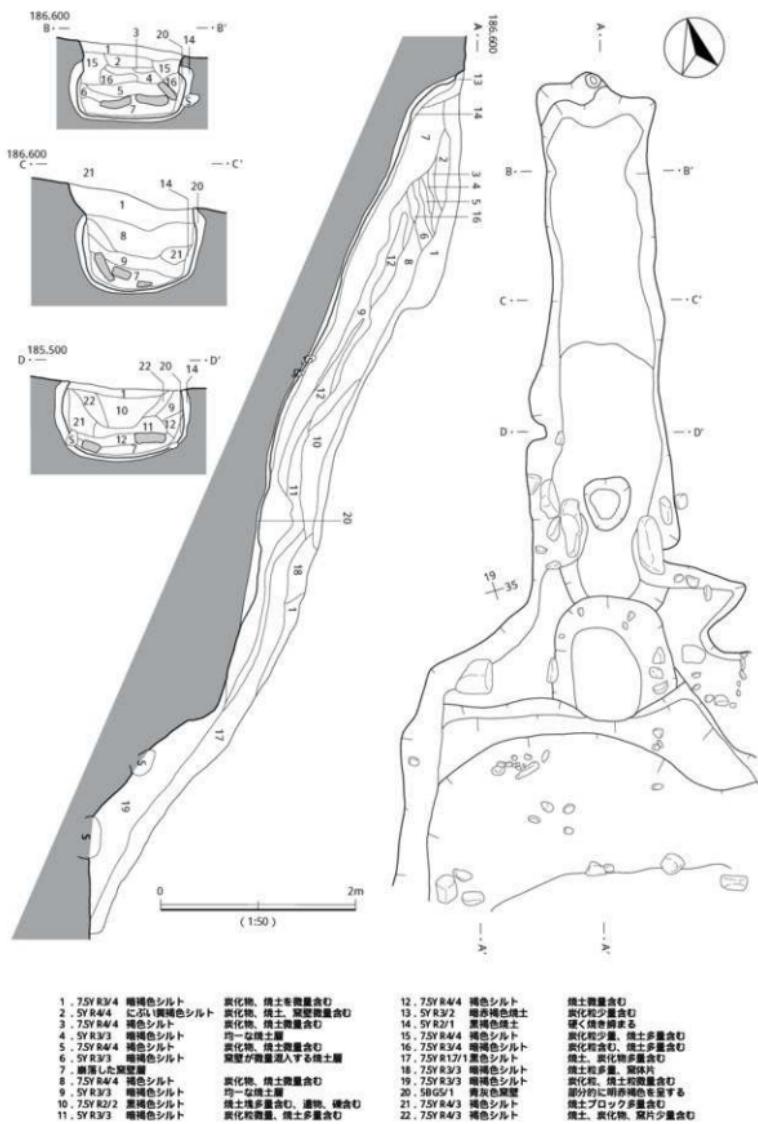
前部と考えられる場所には、長さ約1.3m、幅約1.2mの楕円形の窪みがあり、床面が火熱を受けた状態である。窪みは燃焼部幅とほぼ同規模で、床面から壁の立ち上りの形状は窯跡のそれと酷似する。また、左右両壁には火熱を受けた礫が埋め込まれた状態で検出されている。これらのことから、当初は燃焼部として作られた場所が幾度かの使用の後、最終的には前部として利用されたものと推測される。その際に焼成部の下方の一部を割いて燃焼部を作り、焚口に大きな板状の礫を組み込んだと考えられる。したがって3号窯は、最終的な規模は先に明示したとおりであるが、当初は水平長が約6.6m、実長が約7mと推定され、削平を受けている1・2号窯とほぼ同規模だった可能性が高い。

窯体内出土遺物
とステバの遺物

窯体内からは多数の土器が出土している。しかし瓦の出土は無く、1・2号窯とは様相を異にする。3号窯跡から出土した遺物は蓋、有台坏、無台坏、有台皿、甕、鉢などが出土し、同ステバからは、これらの器種以外に壺類、長胴甕、香炉火舍、風字硯などが出土している。

蓋

259~268の蓋は、天井部の盛り上がりが小さく扁平になるものが多い。口径も130mm前後の小振りなものが主体であり、140mm近いものは若干認められる程度である。口縁部は僅かに摘み出された程度で、断面が三角形あるいは小さな丸味を持つ単調な造りである。264・265の天井部には回転ヘラケズリ調整が認められるが、多くはロクロナデ調整にとまる。



第27図 S Q 3 窯跡

有台坏 有台坏は口径120mm前後、器高50mm前後を測るものが主体を占める。280は口径138mm、器高69mmの大型の有台坏である。小型のものに比べ数は圧倒的に少ないが、大小のセットと捉えられる。体部は弱く内湾するものと直線的に聞くものがあるが、数は前者の方が勝る。口縁部は270・271のように外反するものと276・277のように直線的なもの、275のように玉縁風の特徴的な口唇部を持つものがある。高台は端部の造りに差異が認められるが、全体的には短くハの字状に聞くものである。底部はヘラ切り後のナデ調整が施される。焼成は硬質であるが、暗赤灰色に発色したものが多く、十分な還元状態でないことが看取される。

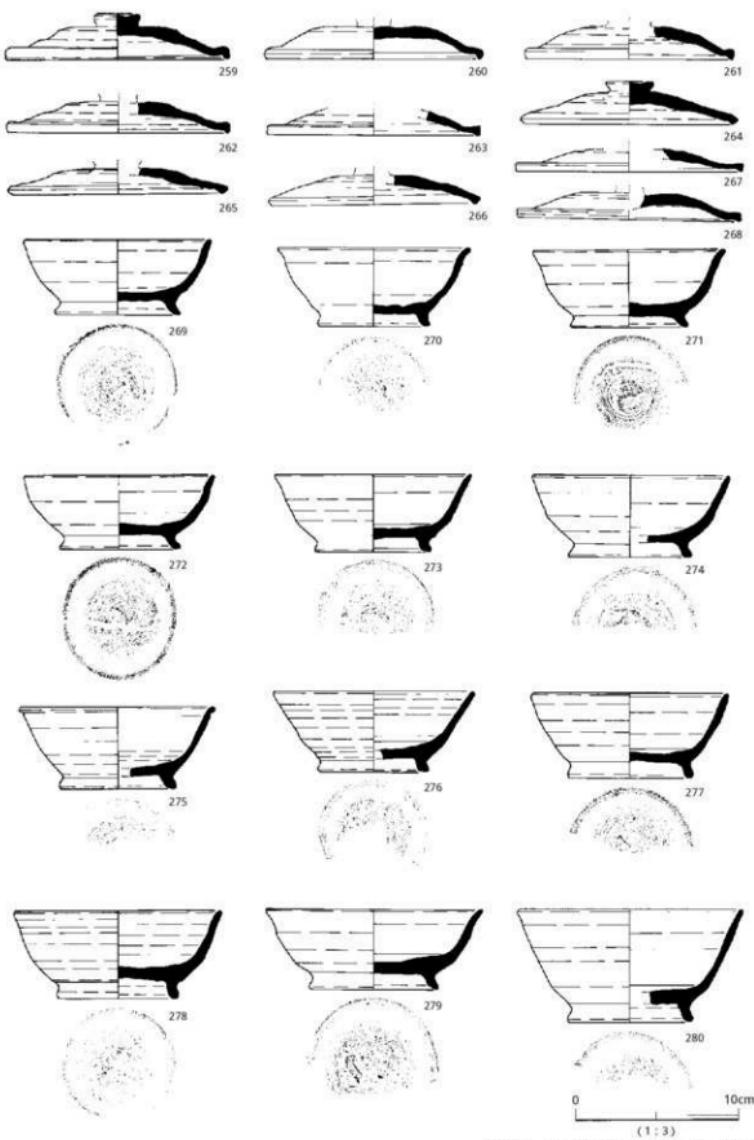
無台坏 無台坏は口径124mm～134mmのものが最も多く、次いで140mm前後のものが見られる。底径は概ね70mm未満、76mm～80mm、80mm以上に分けられる。身は浅く、器高は35mm～40mmを測るもののが主体をなす。体部は286・313のように内湾するタイプのものが少なく、直線的もしくは僅かに外反するものが多い。口縁部についても同様である。底部はヘラ切り後、ナデ調整が施され、丁寧に調整されたものは切り離しの痕跡を留めないものも認められる。焼成は幾分軟質なもののが見受けられ、灰白や褐色に近い発色からも十分な還元焰焼成には至っていないと思われる。

甕 323は舟底状ピットから出土した甕である。自然釉が付着し、体部下半は大きく歪む。頸部は無紋で大きく外反する。口縁部は端部に平坦面を持つ単純な造りである。内面のアテ痕は上半が同心円、下半が平行に変わる。324・325は短い頸部が直立気味に外反し、口縁部を小さく折った形状の甕である。2点とも焼台に転用されたもので、2次火熱を受けている。

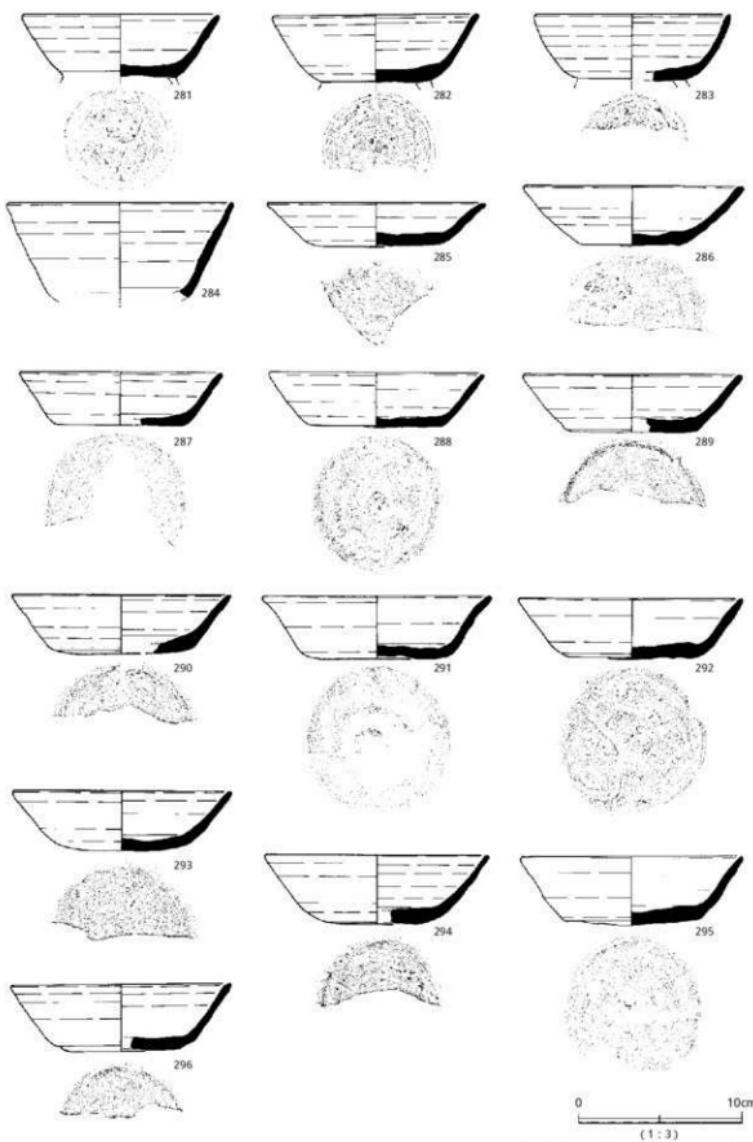
鉢 326～329の鉢は底部を欠くが、他の資料に見られるように平底になると推測される。口縁部は強く折り返され、端部は上方に小さく摘み上げた326、凸面を作り出した327、凹面を持つ328・329などのバリエーションが見られる。体部外面の調整に関しては、上半のロクロナデと下半のケズリ調整を施す点は共通するが、内面では326・327にヘラナデが認められるのに対し、328・329はロクロナデ調整のみである。326・328は明らかに2次火熱を受けており、焼台として使われたと考えられる。329はステバ出土の資料である。

壺 331は頸部から先を欠くが、広口の壺と考えられる。器壁は薄く、体部上半から肩部にかけて顯著である。体部外面は、底部近くにタキの痕跡が認められるが、縱方向のケズリ調整によってほとんど失われている。内面にはヘラナデ調整が施される。232は頸部に2条の沈線が描かれた長頸壺である。

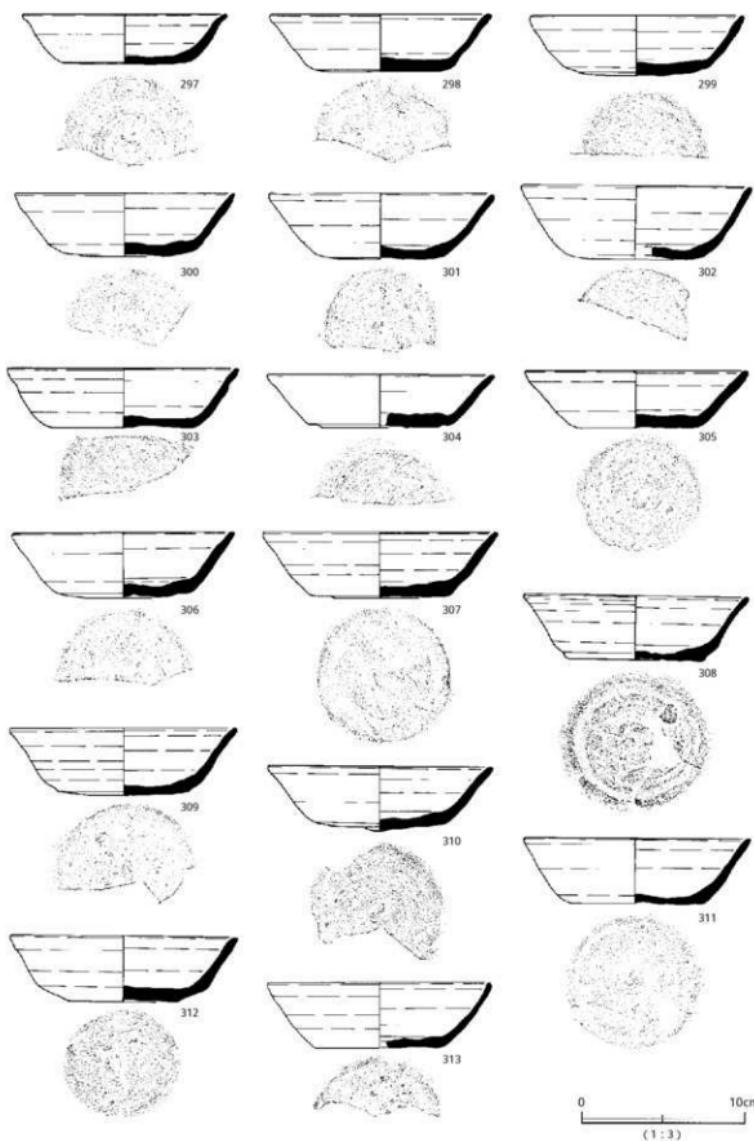
3号窯ステバ出土の遺物 ステバ出土の343・344は有台皿と類似するが、口縁部や高台の形態が有台皿と異なることから、香炉火舎として分類した。口縁部は僅かに上方へ摘み出し、端部に幅の狭い面を作り出している。343の高台は短くハの字状に聞くものであるが、端部の内側が強く引き出されたことにより特徴的なものとなっている。底部の切り離しは回転糸切りによる。344の胎土は特に緻密で、他の土器群には見られないものである。345・346は有台皿と考えられる。口縁部は屈曲し外反する。347は壺の体部と考えられる。肩部に近い部分に粘土紐を貼り付けた装飾が施されている。粘土紐はX字状に交差しているが、表現しようとした内容は不明である。外面には自然釉が付着し、碟も溶着していることなどから高温に達していたことをうかがわせる。348は小型の長頸壺である。頸部は円盤閉塞後円盤部穿孔を行い、接合したものと考えられる。内外面ともに灰被りが見られ、自然釉が付着する。



第28図 3号窯出土遺物(1)蓋・有台環

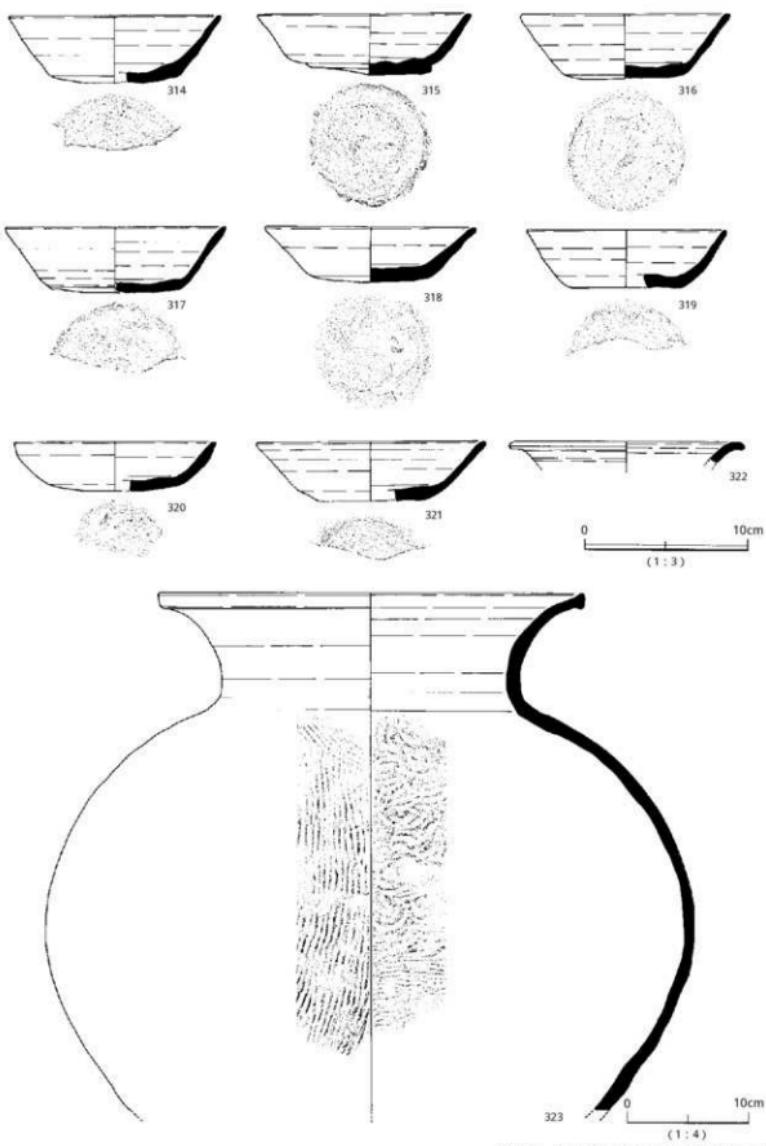


第29図 3号窯出土遺物(2)無台坏

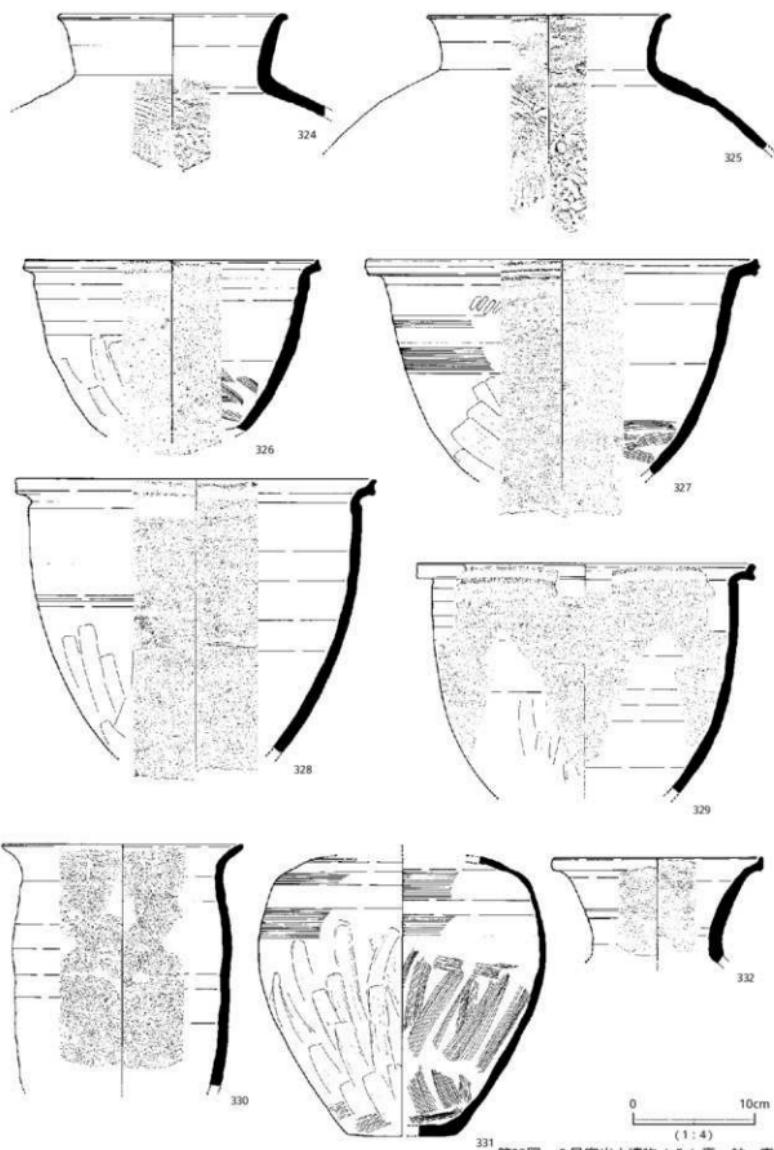


第30図 3号窯出土物(3)無台坏

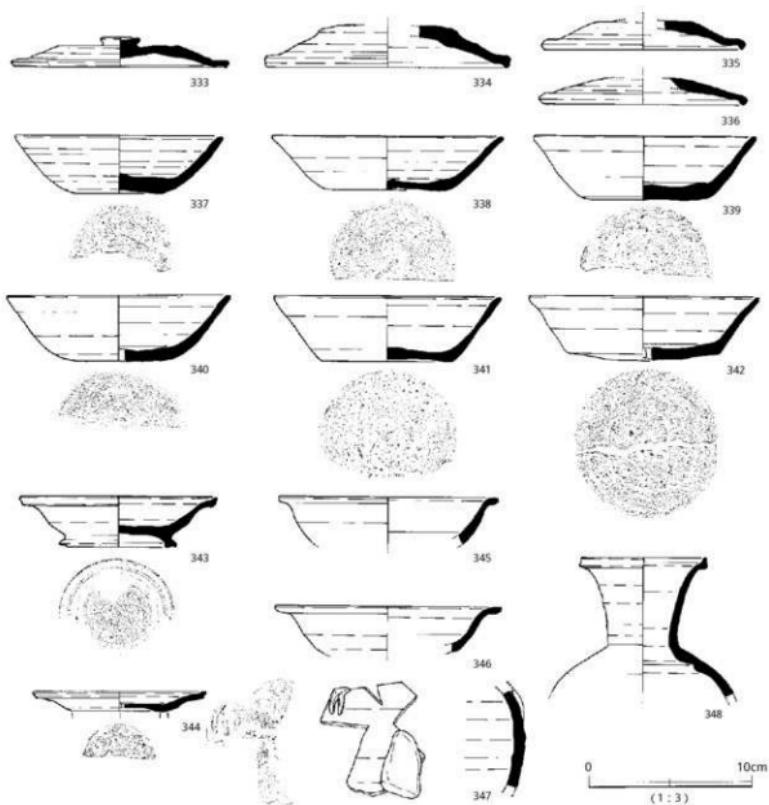
III 遺構と遺物(小松原窯跡)



第31図 3号窯出土遺物(4)無台環・櫛



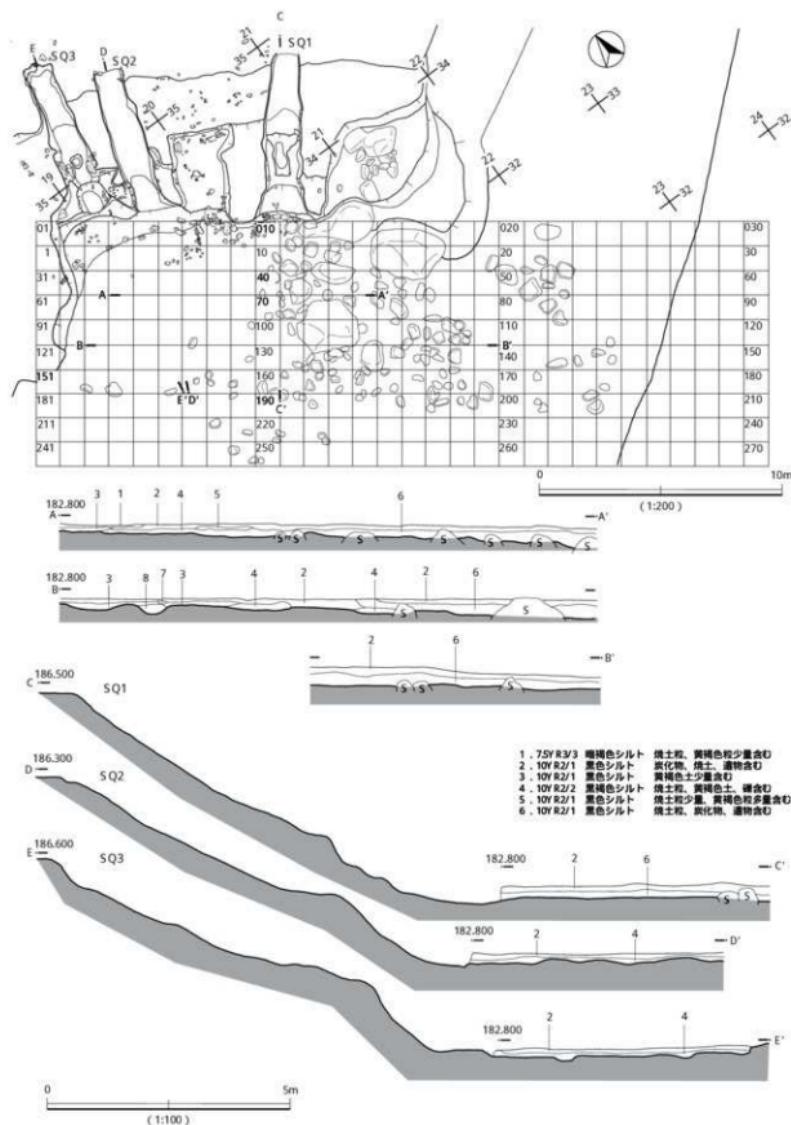
第32図 3号窯出土遺物（5）標・鉢・壺



第33図 3号窯ステバ出土遺物

3 ステバと出土遺物

ステバは東西約20m、南北約8mの広がりを持つ。遺物を包含する層は20~40cmで、浅く堆積する。傍らを流れる不動沢は、強い雨が降ると普段の清流が激流に変わり、谷部から開けたこの地区で氾濫する。本遺跡のステバも、度々起きた氾濫により侵食を受けたであろうことは十分に想像できる。ステバには、夥しい数の大小の礫が散乱し、その合間あるいは下敷きになり遺物が出土するさまからも流れの強さ、氾濫の影響力を物語る。また、遺物の分布状況も、2・3号窯の下方に位置する箇所よりも1号窯の下方から東寄りの方に多く見られることなど、ステバが抉り取られた様子がうかがえる。遺物は2層・6層の黒色シルト層に、炭化物・焼土と共に包含する。



第34図 ステバ平面図・断面図

ステバの遺物 ステバからは、349~485の土器類と風字硯、鋸瓦、男瓦、女瓦等が出土している。器種は多岐にわたるが、中でも窯体内からではあまり見られなかった小型壺や広口壺などの壺類、有台皿、風字硯、鋸瓦の瓦当面が一定量確認できたことは、器種構成を考える上で注目される。以下、窯体内から出土した遺物には見られない器種、特徴をもった遺物について概説する。

蓋 蓋は口径が125mm内外の小型のものと、140mm内外の大型ものとに大別できる。大型の蓋は天井部が丸く盛り上がるもので、扁平な小型の蓋とのセットは、2号窯出土の蓋との相間がうかがえる。量の比較でも、小型のものが凌駕することは共通する点である。356は天井部が完全に水平になる。口縁部は僅かに持ち上がり、端部が内面と水平になる形態である。

有台坏 有台坏も小型のものが量的には多く、若干ではあるが371・372のような大型のもの、あるいは373のように底部切り離しに回転糸切りを用いる例も認められる。大型の有台坏は小型のものに比べ、口径で約20mm大きく、身の深さも2倍近い160mm程である。底径は高台を残すのが少ないものの、小型の有台坏とほぼ同じ大きさと推測される。

無台坏 無台坏の多くは、口径が122mm~144mm内に納まり、特に132mmと142mm内外のものが特化する。底部切り離しはヘラ切りのみで、ナデ調整が施されるが、386・398のように丁寧な調整と399・400のように切り離しの痕跡を明瞭に留めるものもある。体部は大きく開いて立ち上り、内湾あるいは外反するが、いずれも度合いは小さい。口縁部についても直線的で、変化を見せるものは少ない。焼成は概ね良好で、硬質である。

有台皿 有台皿は体部と口縁部の形態から、大きく3タイプに分類できる。417は体部が短く、大きい角度で直線的に立ち上がるため身は浅い。口縁部は僅かに外反するものの他の皿とは一線を画す。418~427は内湾気味の体部で、身はやや深い。口縁部は屈曲し、横向方に引き出される。428~432は内湾した体部から、口縁部を強く折り曲げ、斜め下方へ引き出した特徴がある形である。この形状の有台皿は、これまでの発掘調査では出土例がない。

壺 433の広口壺は底部が回転糸切り離しによるものである。最大径を体部中央よりやや上方に持ち、なで肩の肩部から直立する頸部に至る。口縁部は端部を小さく折り曲げたものである。434は外反気味の短い頸部を持つ小型壺である。437・438は小型の長頸壺と考えられる。437は大きく外反し、口縁部は上方に小さく摘み出される。438は肥厚し丸味を持つ口縁部である。439・440は重ね焼の状態を知る好資料である。440の広口壺の肩部には無台坏が5枚重ね焼の状態で溶着している。また、口には小型壺（439）が逆位に置かれた状態で溶着している。439は高台を持つ長頸壺と考えられる。441~443も同型である。444~446は広口壺である。胴部は丸味を持って張り、中央部よりや上方に最大径を有する。口縁部は、445・446のように折り曲げて摘み出されるものも見られる。外面はタタキの痕跡を留め、下半はケズリ調整、上半はロクロナデが施される。内面は、底部付近にヘラナデ調整が認められる。447~462は長頸壺である。頸基部が太く、頸部が比較的短い447や451など、頸基部が細く、頸部が長い448・452・455等がある。両者には頸部の接着技法の他に口縁部形態にも相違が認められる。前者の頸部並びに肩部には、それぞれ2条の沈線が廻る。447・451・452・454・455・457・458・459・460の体部外面にはタタキの痕跡が認められる。

瓶 瓶には464等のように直線的に開き、口縁部付近で屈曲し外反する頸部を持つものと、466のように頸部が大きく外反するもの、469等のように口縁部まで直線的に立ち上がるものなどが

見られる。464・467・468・470の頸部には櫛描波状文が描かれる。467を除いた3点は細く浅い波状文が粗雑に描かれる。467は幾分太めの波状文であるが、同じく描き方は雑である。475・476は平底になるもので、476にはタタキによる成形痕が見られる。472～474は丸底の底部資料である。

鉢の口縁部形態は、3タイプに分けられる。479は端部に凸面を持つ、480は凹面を有し、481・482の端面は平坦である。479の体部上方には、僅かにタタキの痕跡が認められるが、他のものは丁寧なカキメ調整によりその痕跡を留めない。下半から底部にかけてはケズリ調整が施される。赤黒く発色するものが多く、焼成は概ね良好で硬質である。

483～485は還元化した土師器の長胴甕である。胎土には粗砂を多く含み、須恵器の胎土とは異なる質感である。483・484の口縁部は直角に曲げられ、端部を上方に小さく摘み上げたもので、斜めに開いて端部を下方に引き出した485の形態との違いが見られる。

風字硯には頸部が角張るものと、丸味を持つものが認められる。側縁の断面は、多くが三角形を呈し、直立する。脚部はケズリ調整による円錐状の形態と、台形になるものがある。緻密な胎土によるものも見られるが、ほとんどは細砂を含み、中には粗砂を混入するものも認められる。焼成は良好で硬質である。大半が上面と下面の剥離により破損している。

瓦当面が残存する鎧瓦は、全てステバからの出土である。瓦当文様は全て、素弁七弁蓮華文で、同范と考えられる。7枚の花弁は、通常の盛り上がるものは逆に、窪みで表現され、平面的である。花弁の窪みは、深いものと浅いものが認められる。花弁の幅は、広いものと狭いものがあり均一ではない。花弁間の隙間も一定ではなく、花弁を配置するバランスが崩れている。花弁の先端には切り込みが入れられる。中房には境界線が無く、大きい4個の蓮子が花弁と同様に窪みで表現されている。外区には花弁間に小さな三角形を基調とする、7個の浮文が認められる。瓦当面は比較的薄く、多くは瓦当裏面が剥離している。

瓦当面に残る痕跡から成形技法は大きく3種類に分けられる。529・536は瓦当面の花弁間に条線状タタキが認められるものである。536は瓦当裏面にも条線状タタキが残る。519・533・543・557は同じく花弁間に細かい繩タタキの痕跡が認められるものである。裏面が残る533は条線状タタキ、557は瓦当面と同じ繩タタキである。上記の2種類以外は、瓦当面にタタキの痕跡は認められないが、518・535・553・560の裏面には条線状のタタキが、532・534・546・549・551・552・555・556の裏面には繩タタキが見られる。

男瓦との接合は、瓦当裏面に男瓦を差し込むための溝を設け、接合した後、瓦当上部と裏面に粘土貼付けによる補強を行ったものと考えられる。瓦当上部に貼り付けられた粘土には520・521のように、条線状タタキによって整形されるものと、527・539等のように繩タタキが用いられるものが見られる。焼成は、不良で軟質なものも若干見られるが、概ね良好で硬質である。胎土には細砂が混入する。

男瓦は南ステバからも大量に出土している。南ステバの男瓦は、2号窯あるいはステバ出土のものと形態や成形について差異は認められない。ただ焼成不良で軟質なもの割合が高い。

女瓦はステバからの出土も相対的に少ない。635・645・646の3枚の女瓦は、立て組み合わせ、その中に364の有台坏を納めたような特異な状態（写真図版18上 R P21～23）で出土している。性格は不明であるが、祭祀的なものと推測される。

鉢

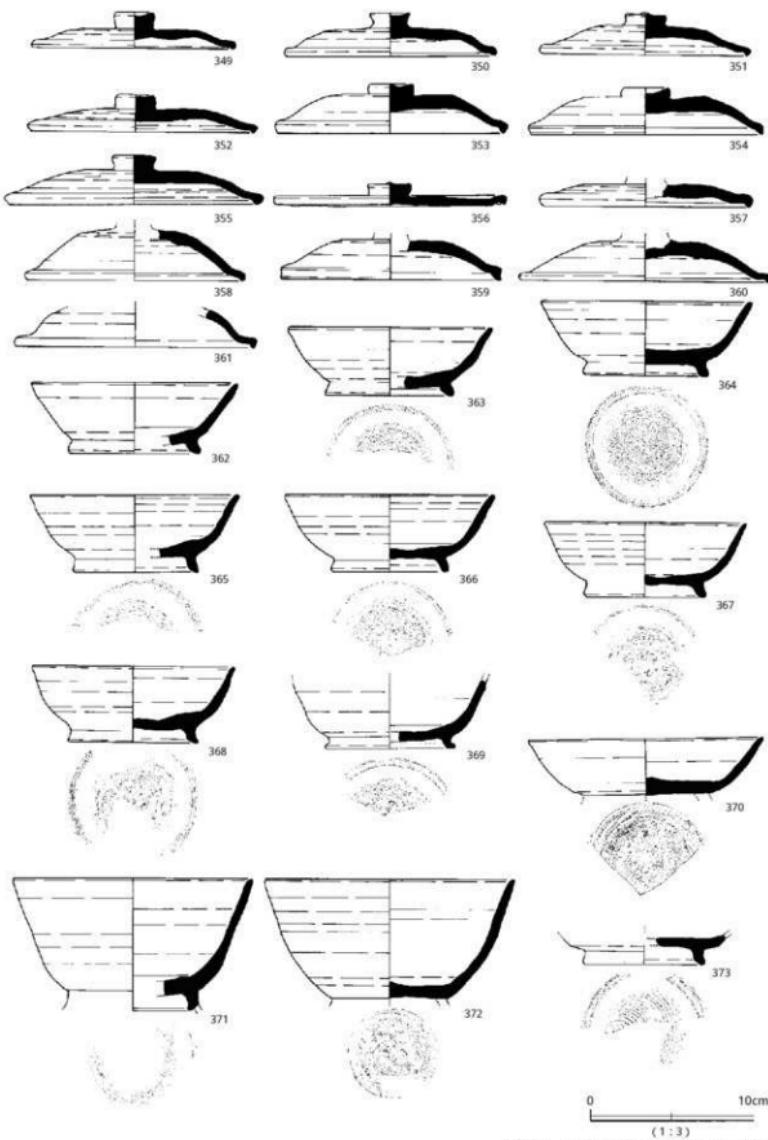
長 脇 橋

風 字 瓦

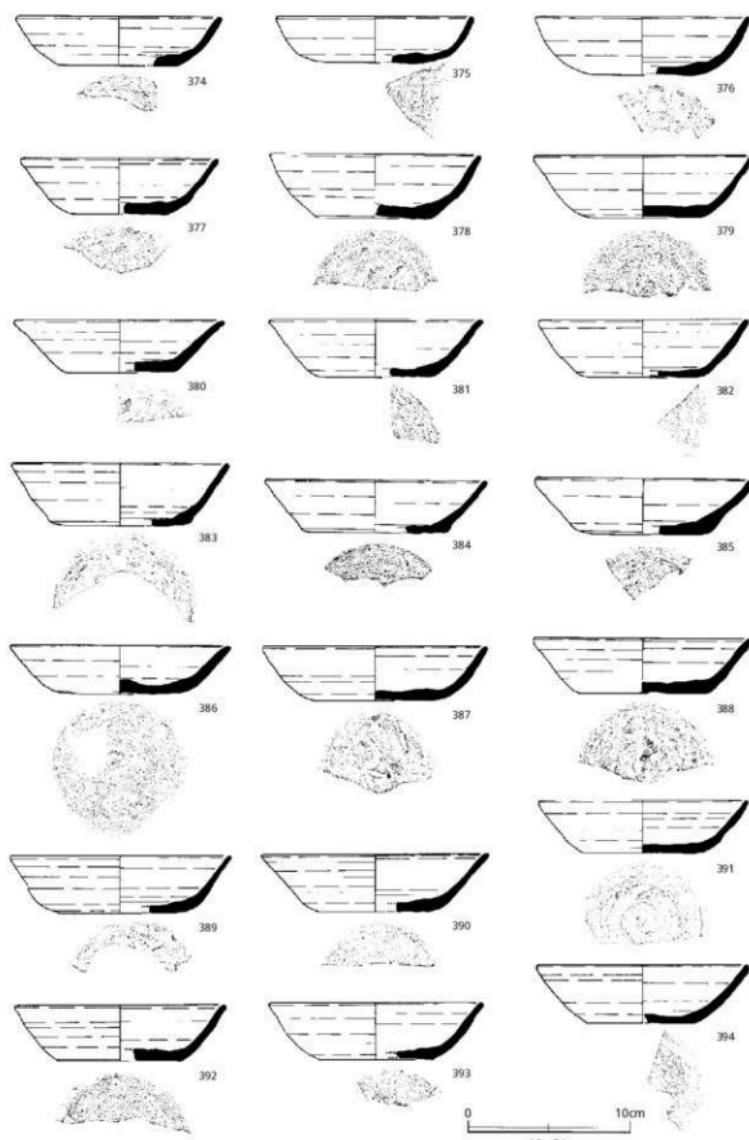
鎧 瓦

瓦

瓦

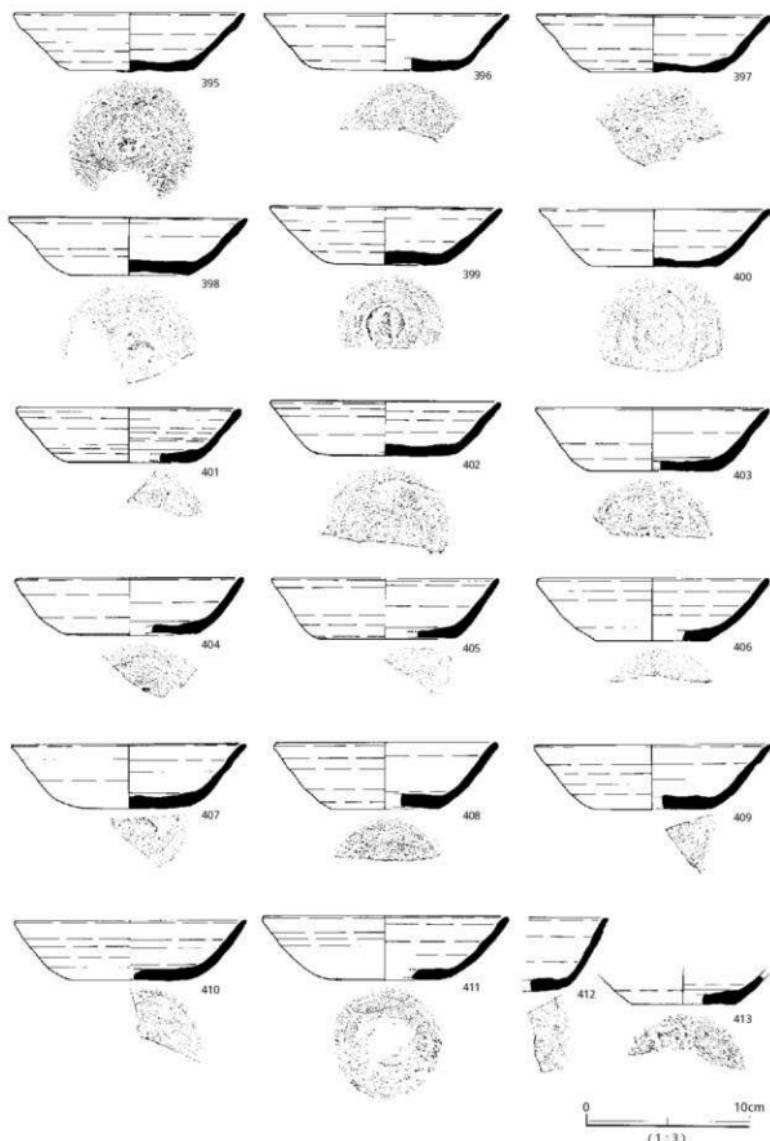


第35図 ステバ出土遺物(1)蓋・有台環

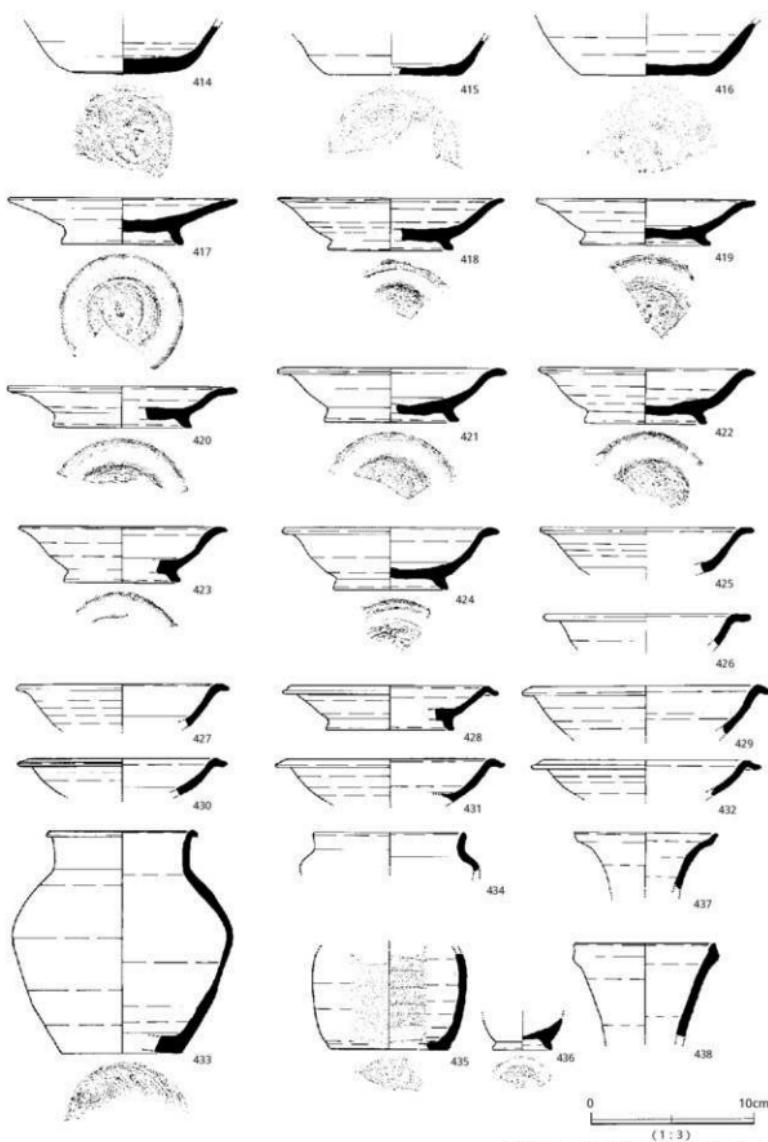


第36図 ステバ出土遺物(2)無台坏

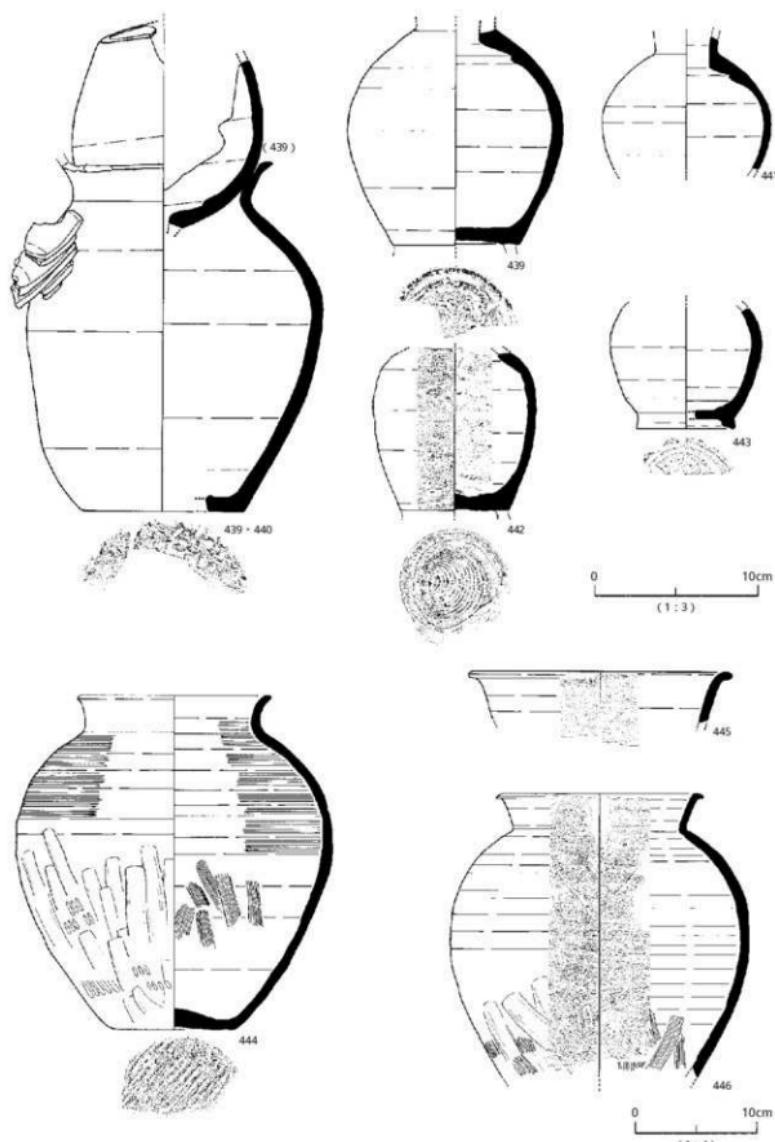
III 遺構と遺物（小松原窯跡）



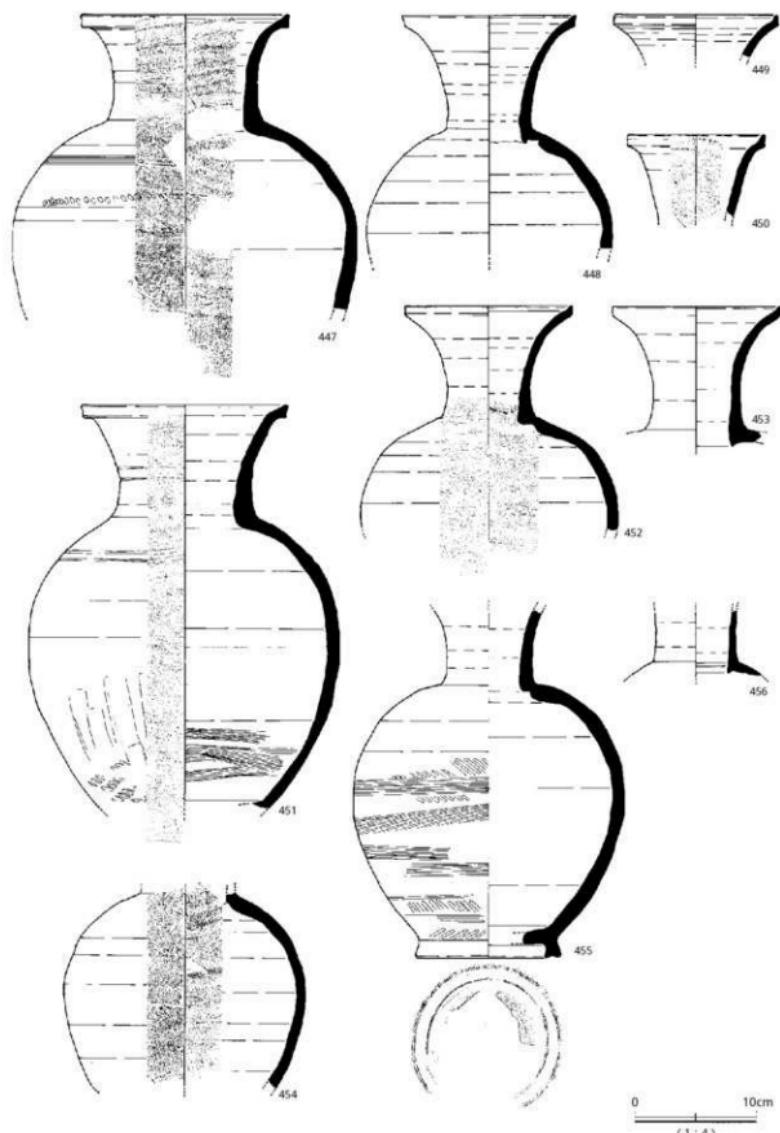
第37図 ステバ出土遺物(3)無台坏



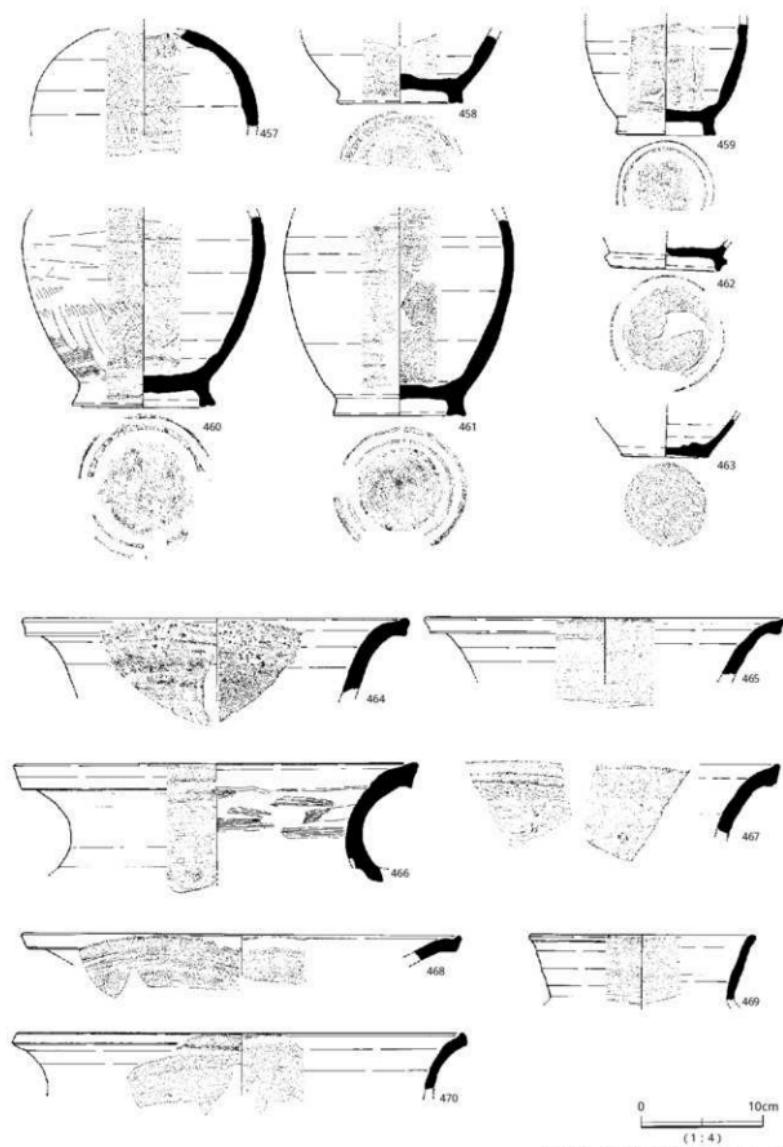
第38図 ステバ出土遺物(4)有台皿・壺



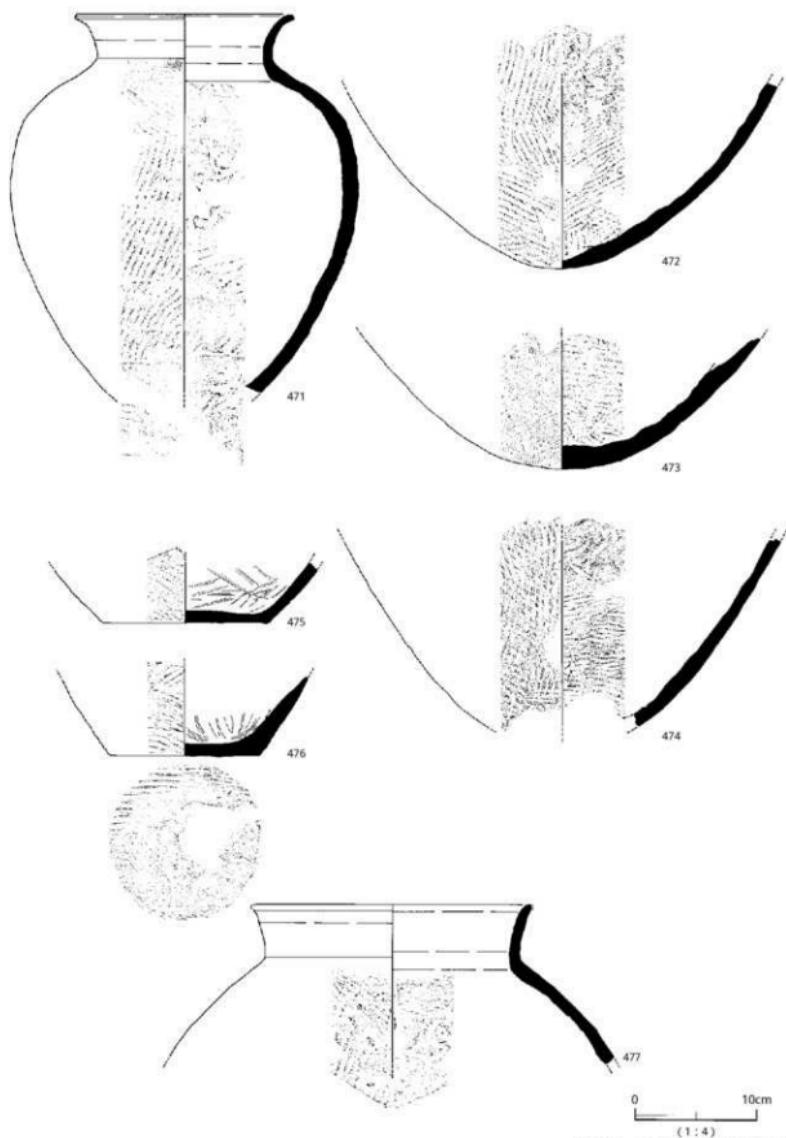
第39図 ステバ出土地(5)壺



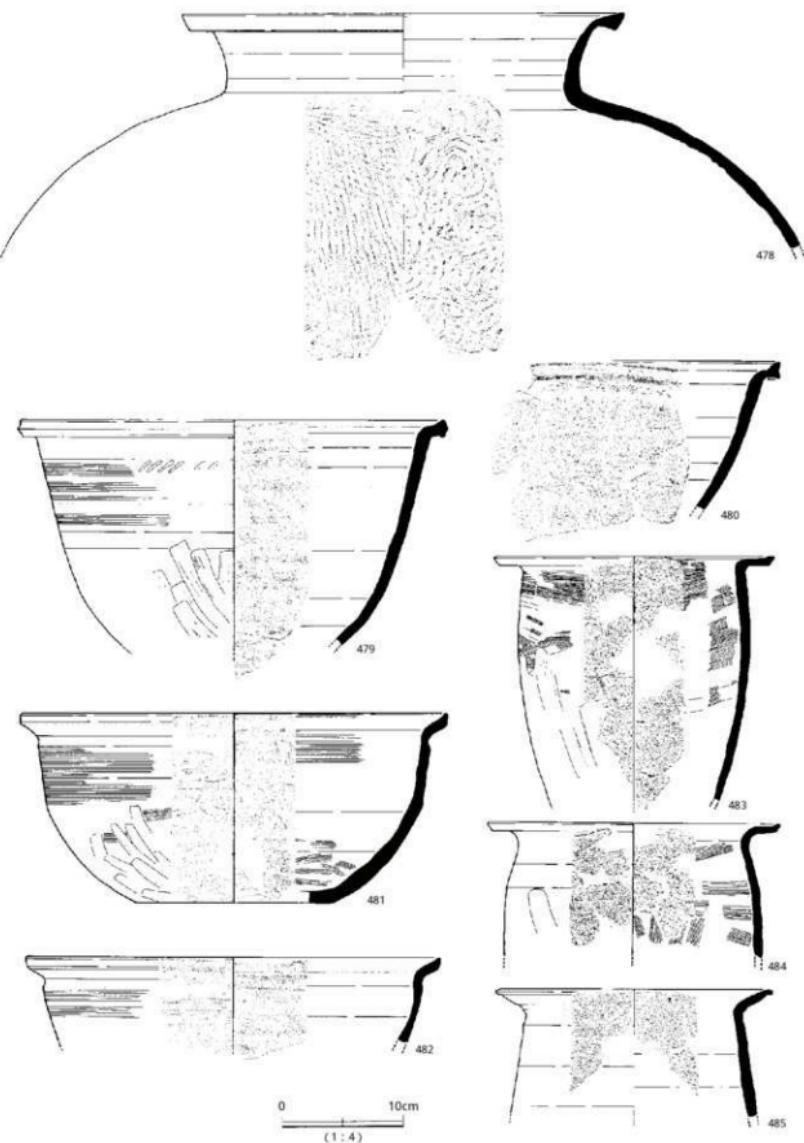
第40図 ステバ出土遺物（6）壺



第41図 ステバ出土遺物(7) 壺・瓶



第42図 ステラ出土遺物(8) 標



第43図 ステバ出土遺物(9)器・鉢

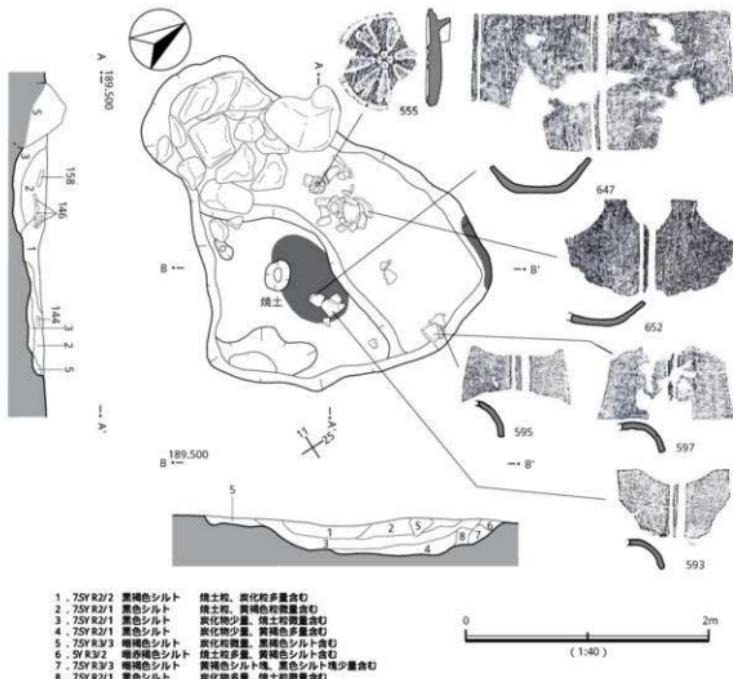
4 その他の遺構と出土遺物

S X 74焼壁坑

11-25グリッドに位置する。南ステバの上の平坦面にあり、傾斜はほとんどない。東西約3m、南北は約1m~2.5mで歪んだ台形を呈する。深さは約10cm~30cmである。西側の狭い部分には、火熱を受けた状態のものを含む大きな礫が隙間なく入っている。一段高い中央付近、北東部分の壁の一部は火熱を受けている。遺構の東側には、炭化物や土師器片等を含む黒色土が溝状に広がり斜面に至る。中からは、鎧瓦、男瓦、女瓦、須恵器壊、土師器甕等の破片が出土している。火熱を受けた場所は部分的にしか確認できなかったが、灰を焼き出したステバの状態や、山海窯跡群に類似するものが見られることなどから、土師器を焼成した遺構と推測される。出土した瓦や須恵器には、2次火熱を受けたものは認められず、流れ込みによるものと考えられる。

この遺構の北にあるS K57や南東斜面にあるS K76からも焼土や土師器片が出土しており、土師器焼成遺構の可能性が考えられる。

土師器焼成遺構



第44図 S X 74焼壁坑

SD 240

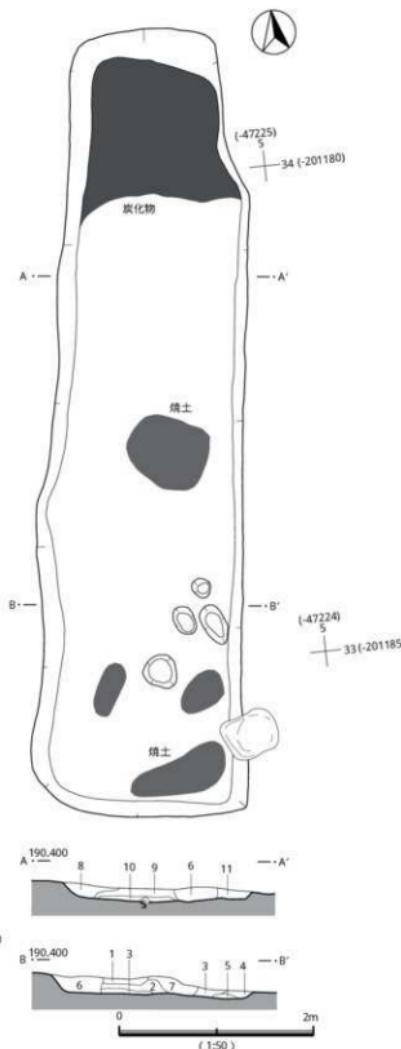
4-33・34グリッドに位置する。

南北約8m。東西約2mを測る長方形の遺構である。深さは10cm前後を測る。その形状から、当初は溝跡として登録したが、掘下げた結果、中から多量の炭化物と焼土が見つかり、床面も一部火熱を受けた状態であったことから溝跡とは異なる性格を有する遺構と判断した。

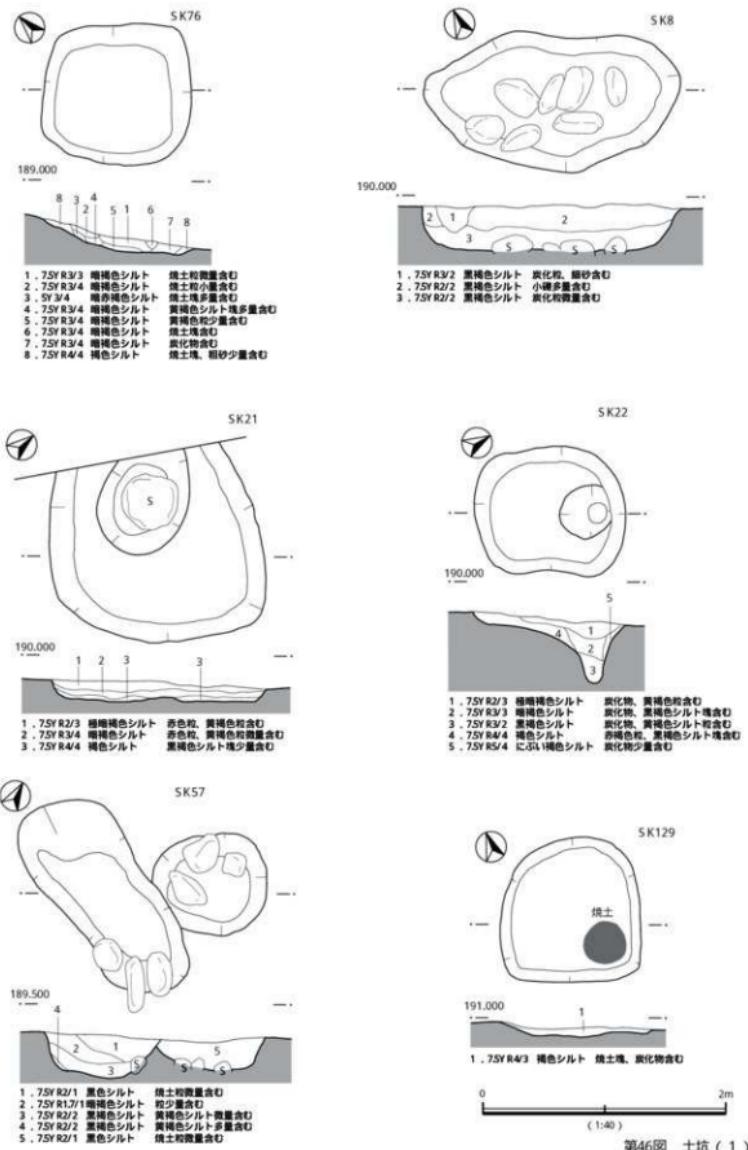
北側約1.5mの範囲には、形状をそのままに残す木炭を含む大量の炭化物が出土した。また、耕作による擾乱が著しいものの、中央付近及び南側の床面では強い火熱を受けた状態が認められた。

出土遺物は無く、時期判断は困難であるが、周辺の遺構との比較から、窯跡とほぼ同時期の遺構と推測される。遺構の性格についても判断に窮する。類似する遺構としては、山海窯跡群1次調査C調査区のSQ1がある。規模はSD 240が一回り小さいが、形態や炭化物、焼土と共に通するものが見られる。SQ1は製鉄遺構と考えられており、当遺構も製鉄に関連する遺構と考えておきたい。

- | | |
|------------------------|--------------------|
| 1. 10Y R3/2 黒褐色シルト | 燒土質、黒褐色少々含む |
| 2. 10Y R3/1 黒褐色シルト | 燒土質、炭化物、鐵鉱シルト塊少量含む |
| 3. 10Y R3/2 黑褐色シルト | 燒土質、燒土シルト塊多量含む |
| 4. 10Y R3/3 黑褐色シルト | 燒土質、炭化物微量含む |
| 5. 10Y R4/3 にぶい黒褐色シルト | 燒土質微量含む |
| 6. 搾乱(耕野) | |
| 7. 10Y R3/2 黑褐色シルト | 炭化物多量、燒土含む |
| 8. 10Y R3/2 黑褐色シルト | 炭化物少量、燒土含む |
| 9. 10Y R2/1 黑色シルト | 炭化物少量、燒土質多量含む |
| 10. 7.5Y R5/8 明褐色砂質シルト | 炭化物多量、燒土質微量含む |
| 11. 10Y R3/3 墓褐色シルト | 炭化物微量含む |

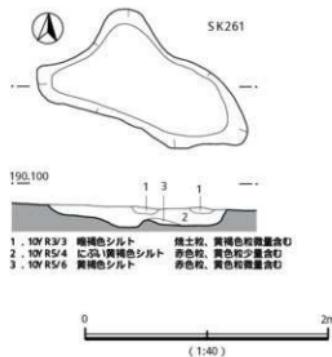
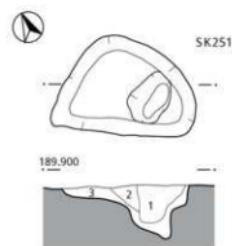
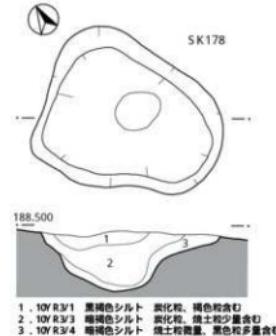
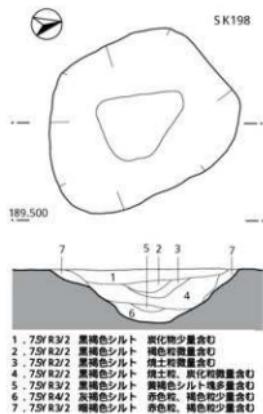
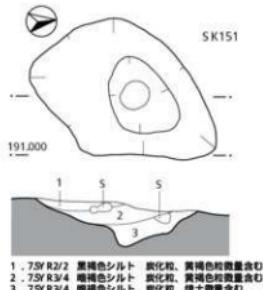
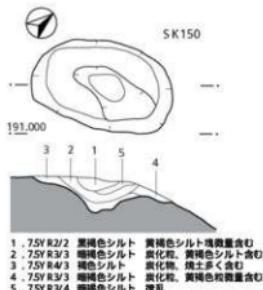


第45図 SD 240

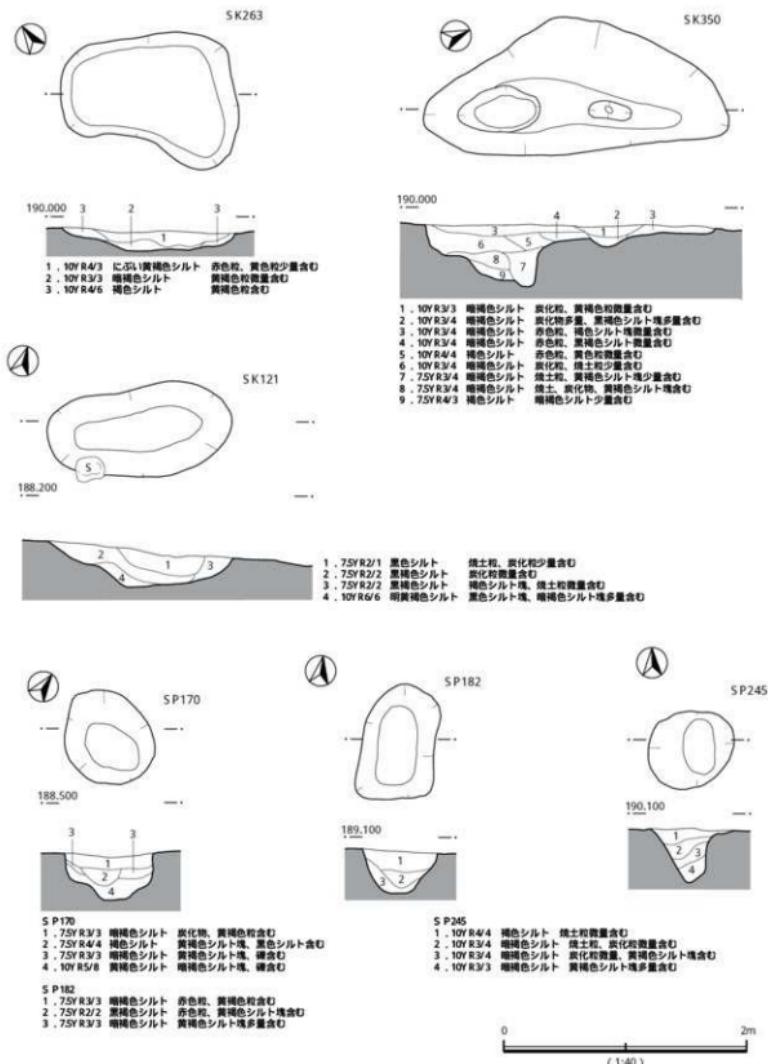


第46図 土坑（1）

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

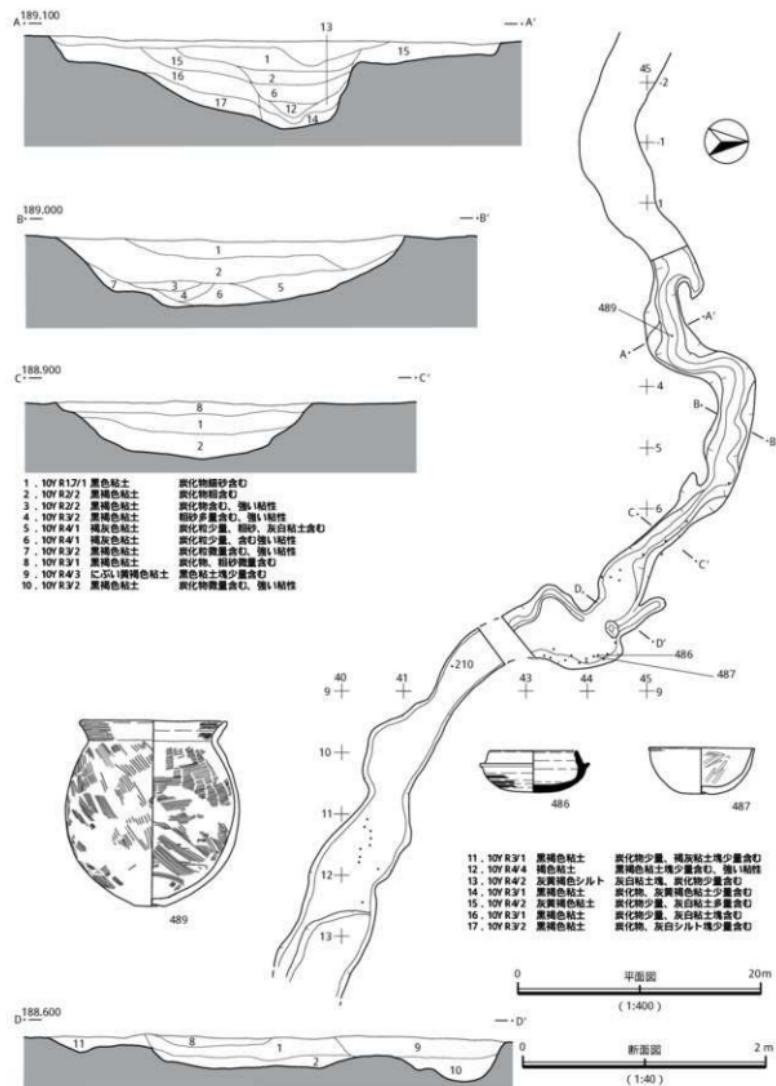


第47図 土坑(2)



第48図 土坑(3)・柱穴

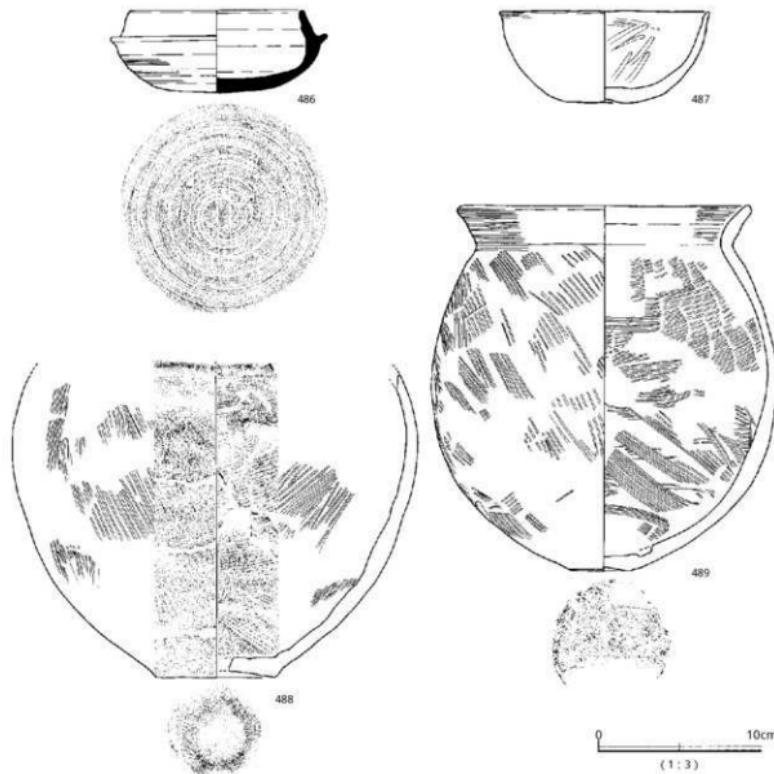
III 遺構と遺物(小松原窓跡)



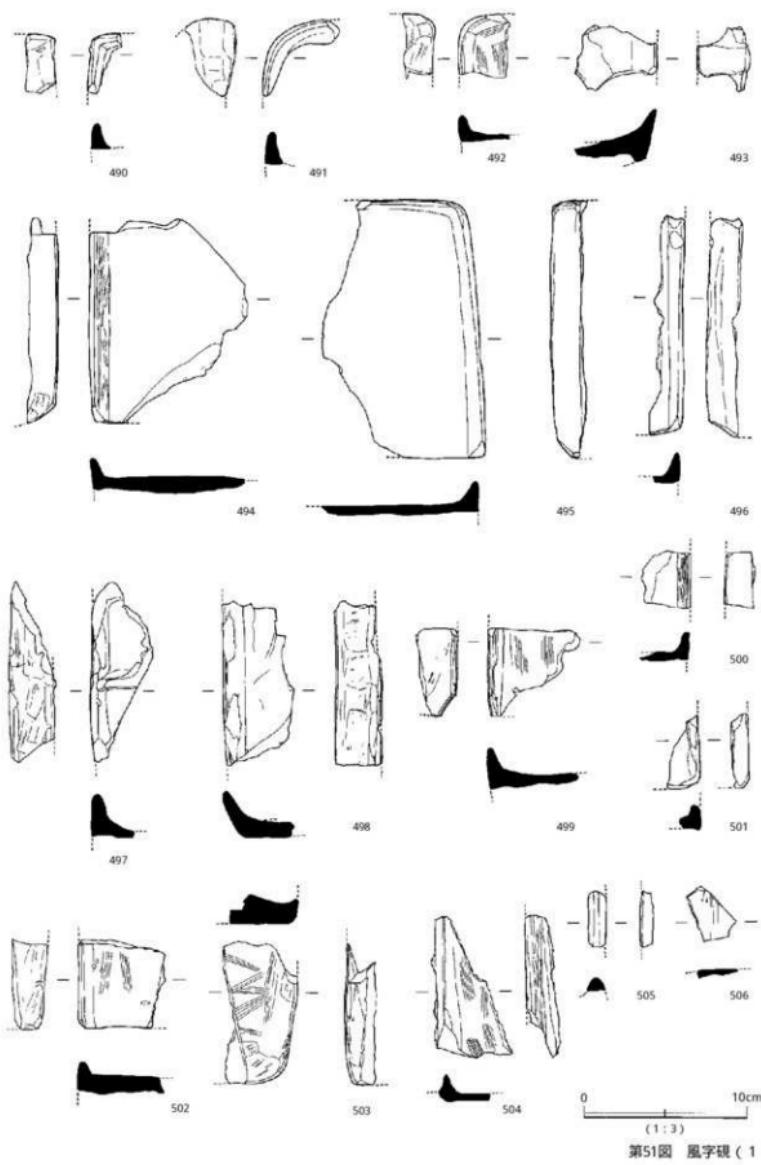
第49図 S G328

S G328

調査区北端に位置する河川跡である。蛇行しながら西から東へ流れ、不動沢へ合流していたと考えられる。川幅は2~7mあり、所々に淀みを形成している。深さは50~70cmである。この河川跡からは、窯跡と同時期の須恵器に混じて古墳時代の土器群が出土している。これらの遺物の出自を探るため河川跡の北側まで試掘を行ったが、関連する遺構を確認することはできなかった。486は須恵器坏の完形品である。口縁部は短く内傾し、端部は丸味を持つ。受部は短く上方に向く。内底にはミガキ調整が認められる。焼成は不良で軟質である。487は土師器の坏である。口縁部は小さく外反する。摩滅が著しく、僅かに内面のミガキが認められる程度である。488・489は体部中央付近に最大径を持つ広口の壺である。これらの土器群は古墳時代中期の所産と考えられる。



第50図 S G328出土遺物



第51図 風字鏡 (1)

5 調査のまとめ

本調査で検出された3基の窯跡は、出土遺物の特徴から9世紀第1四半期頃の操業と考えられる。1号窯と3号窯は須恵器窯であるが、2号窯は瓦陶兼業窯と推測される。先後関係は、1号窯と2号窯はほぼ同時期の操業で、3号窯が後続すると考えられる。

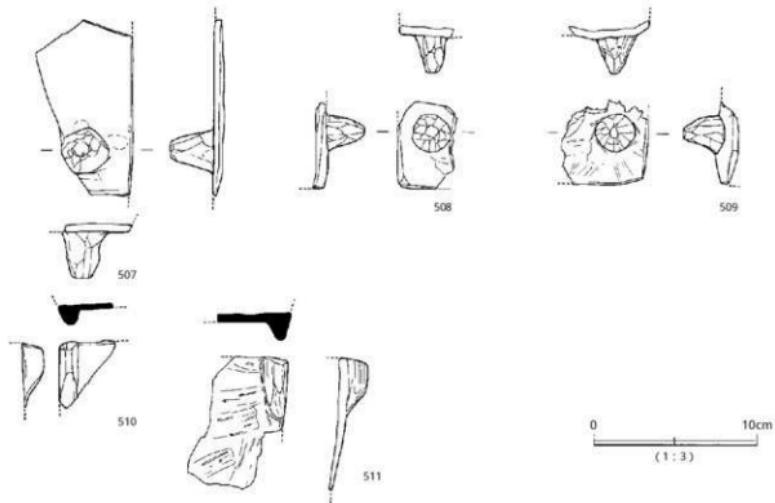
土器類の中では、特徴的なものとして有台皿が上げられる。口縁部を意図的に強く折り曲げた形状は、仏具の供養具の一つである金銅皿を彷彿させる。この器形は、現在のところ他の生産遺跡でも消費遺跡でも出土例が無い。また、仏具との関連性がうかがえる香炉火舍や小型の壺類などの生産も特徴的と言える。

瓦では、素弁七弁蓮華文鏡瓦の出土が特筆される。県内では平野山古窯跡、オサヤズ窯跡、泉森窯跡、高安窯跡などが瓦を生産した窯跡として調査されているが、同范の鏡瓦は確認されていない。生産遺跡以外でも本窯跡で焼成された瓦は出土例が無く、供給先は不明である。同じ丘陵上にあり、近接するオサヤズ窯跡においてもその供給先は判っていない。オサヤズ窯跡は8世紀末の操業と考えられ、時期差はあるものの製作技法が全く異なることから、技術の系譜も課題の一つである。また、宇瓦を焼成していないことは泉森窯跡と共通する点であり、瓦の葺き方も検討を要する問題である。そして供給先の問題であるが、本窯跡は瓦の絶対数が少ない、仏具に関連する遺物が見られる等の問題を含めて考えると、比較的近い場所に供給先である寺院跡の存在が想定され、その補修瓦と、仏具の供給に資していたと考えられるのではないかだろうか。これらの問題を検討しつつ、供給先の発見に期待するものである。

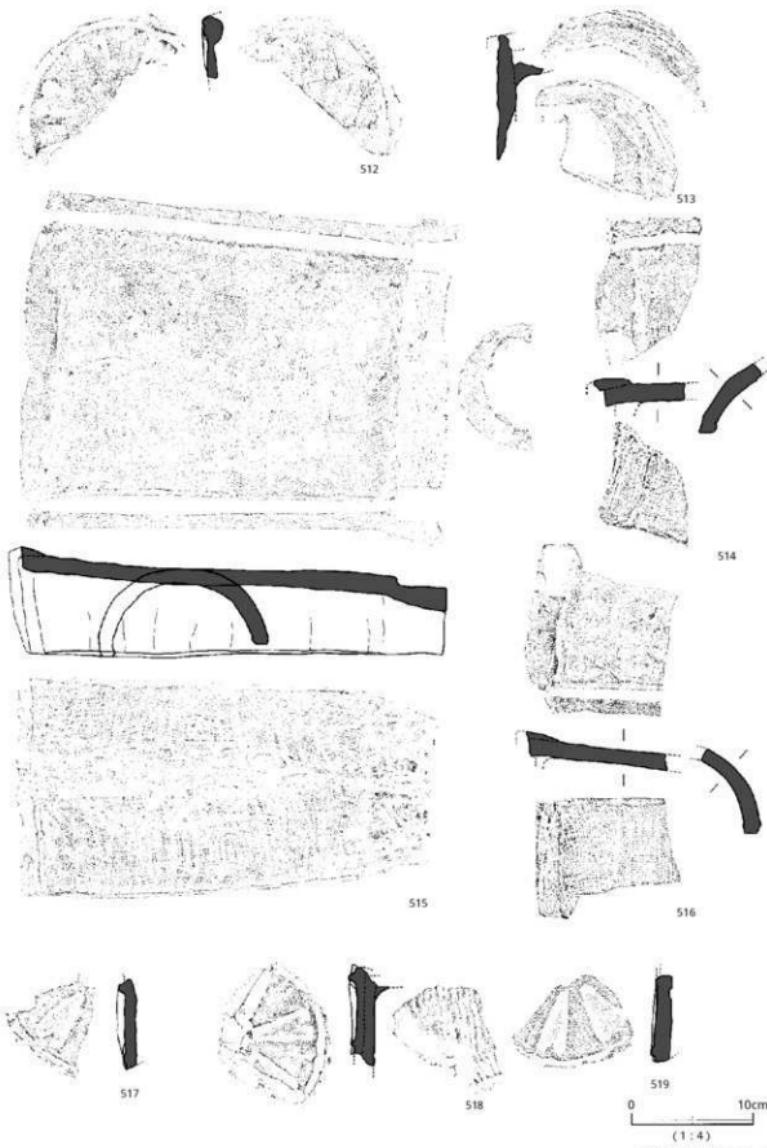
素弁七弁蓮華文

技術の系譜

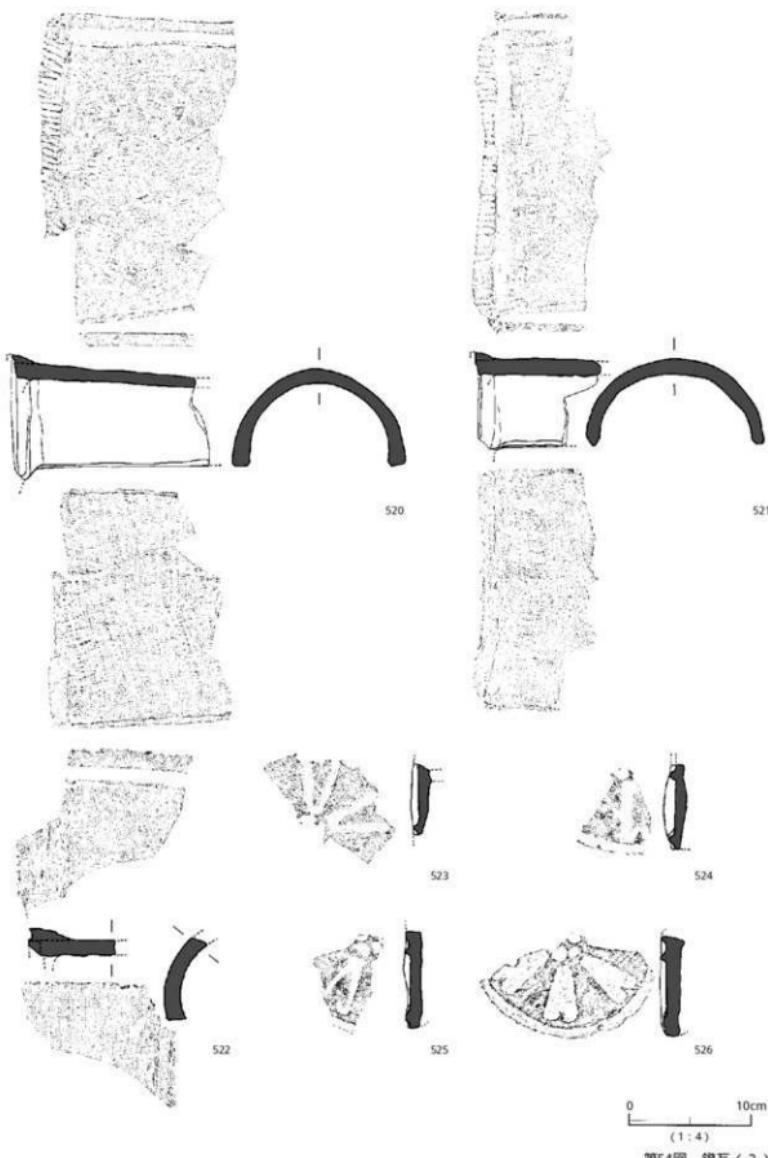
供給先の問題



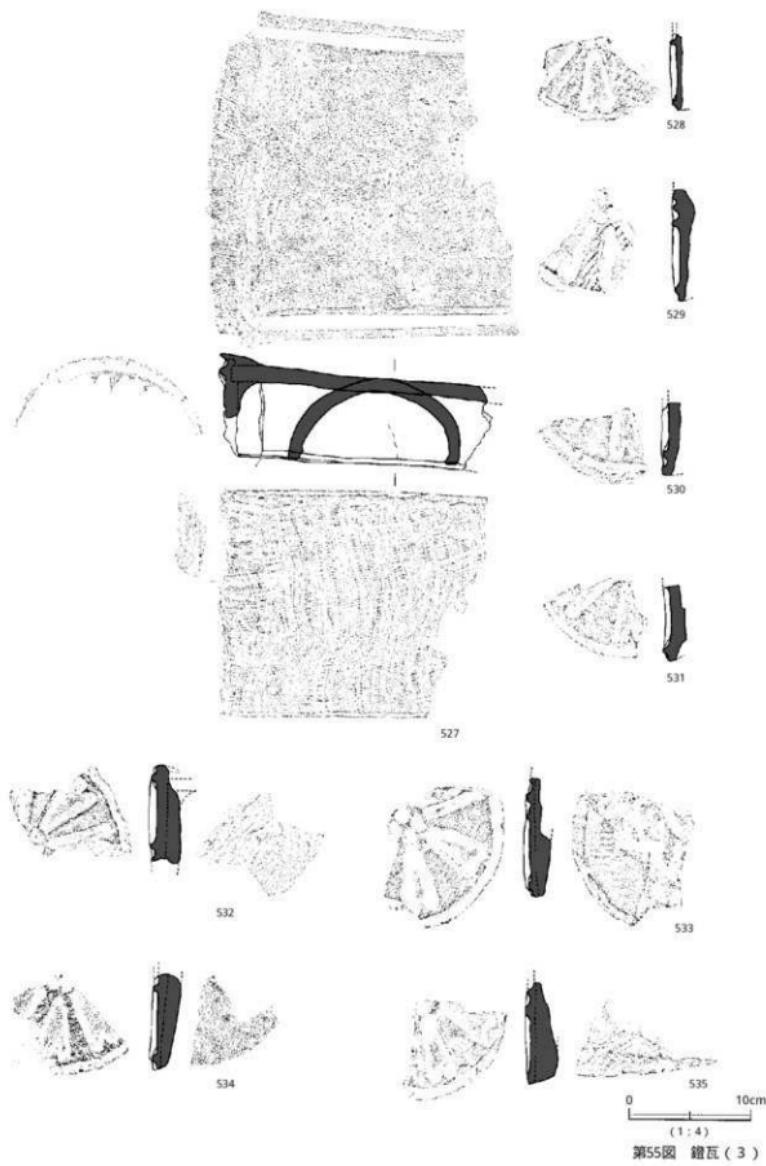
第52図 風字窯(2)



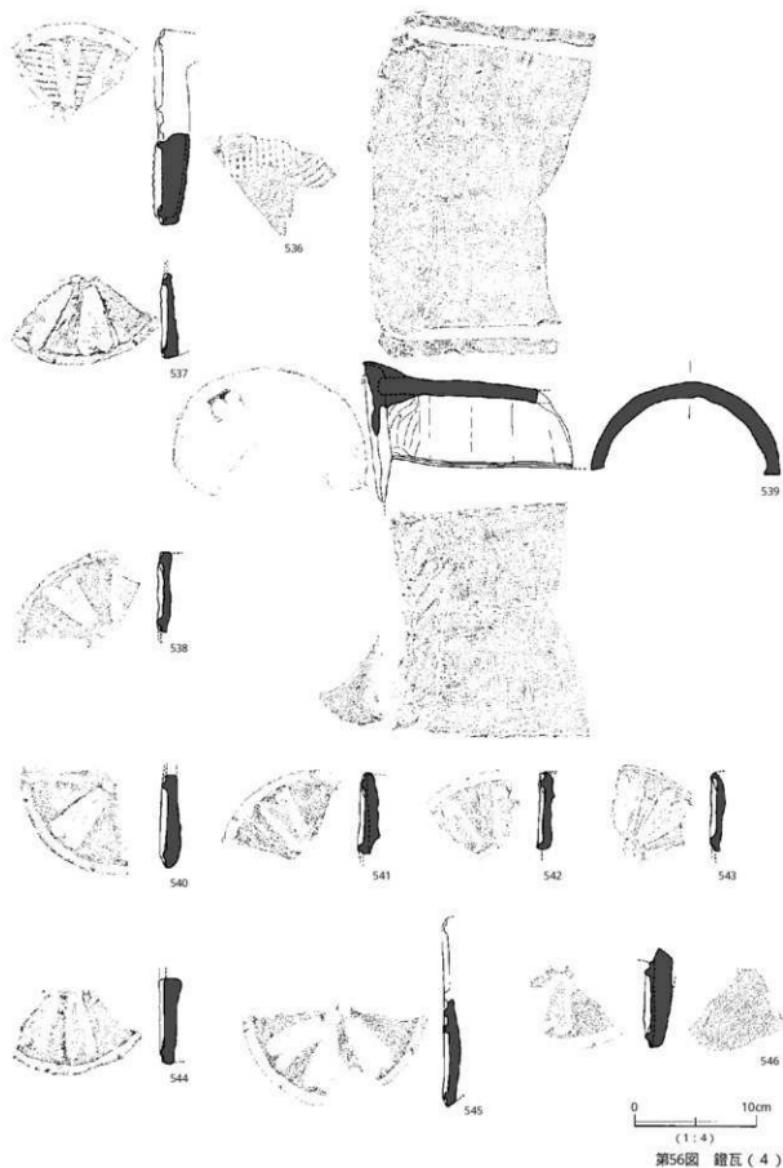
第53図 錫瓦（1）



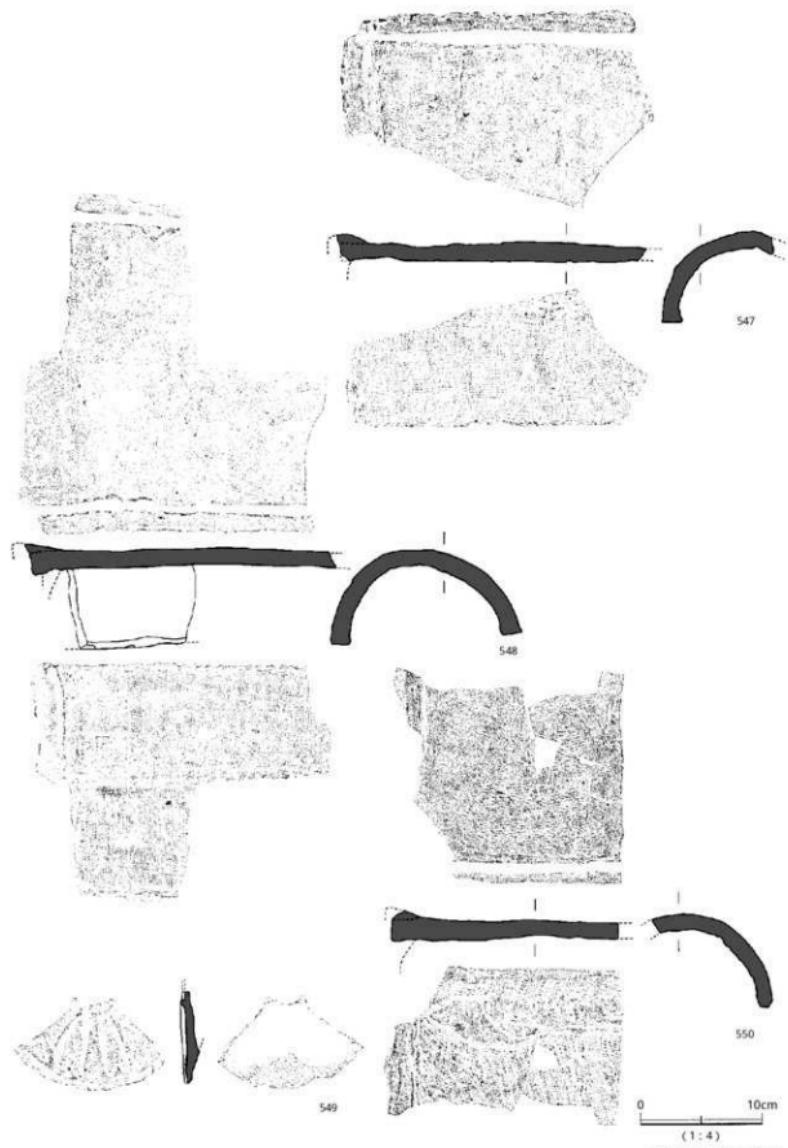
第54図 錫瓦（2）



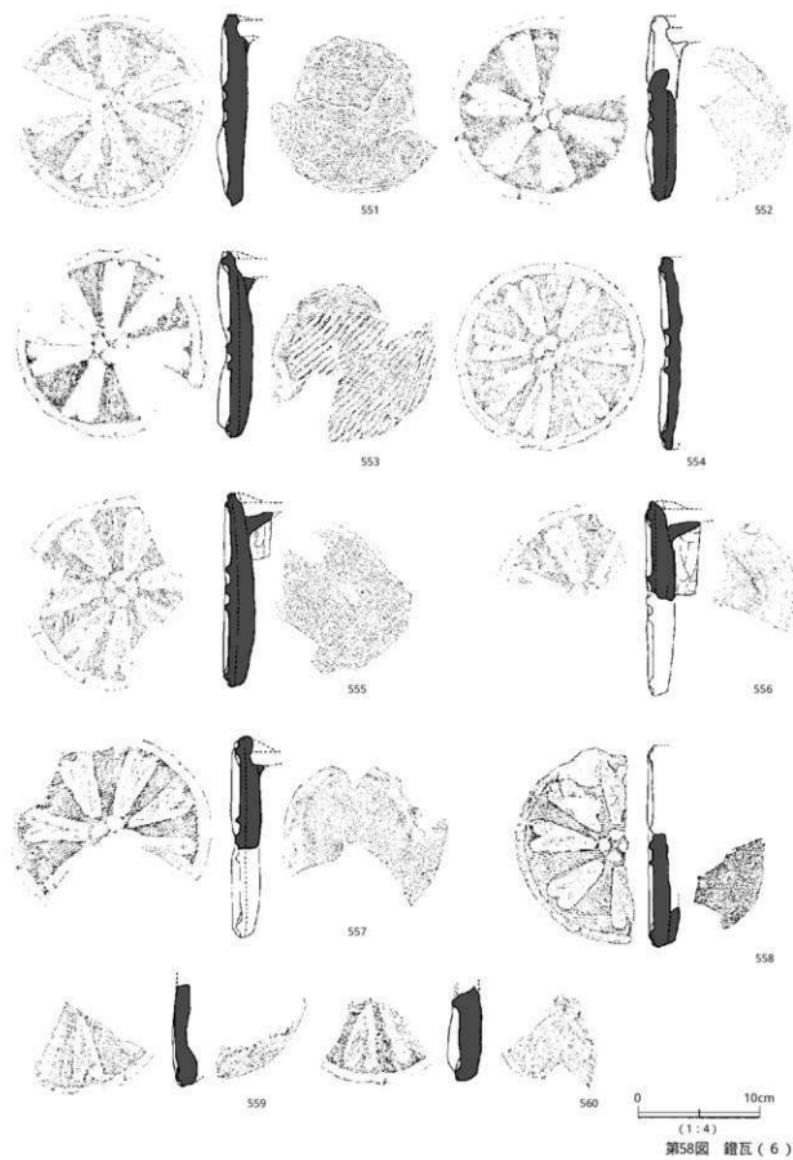
第55図 錫瓦（3）

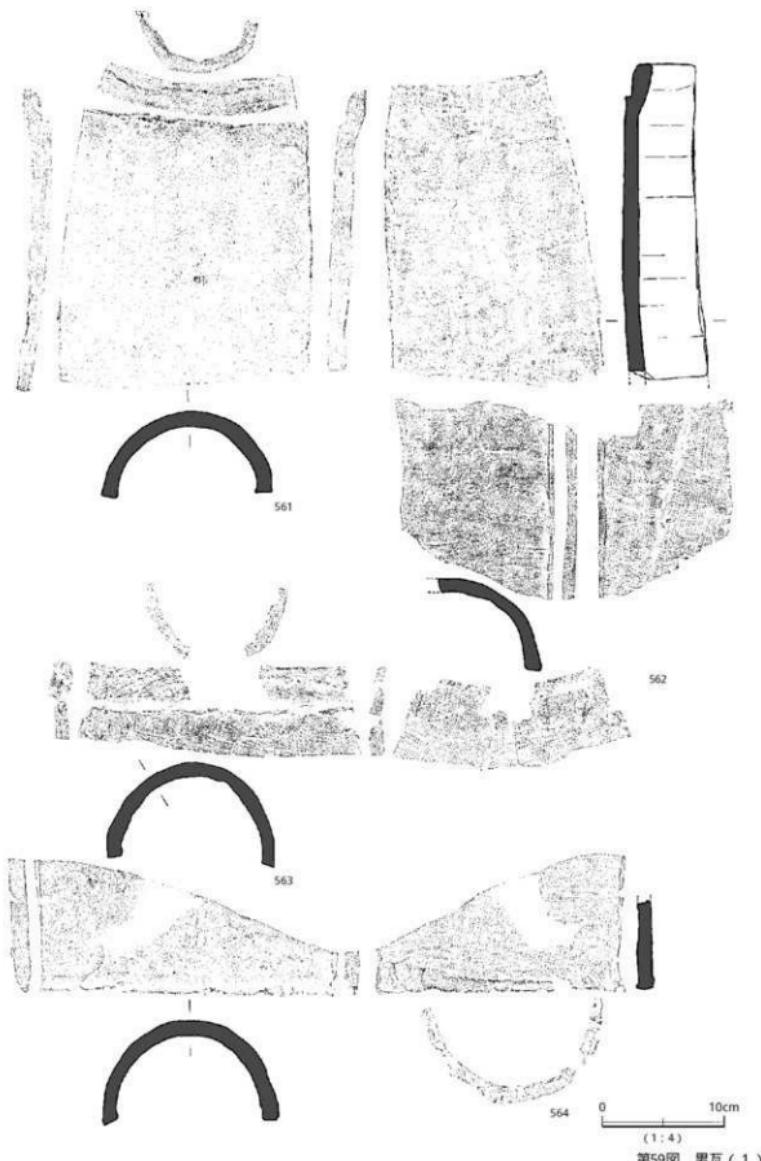


第56図 銀瓦(4)

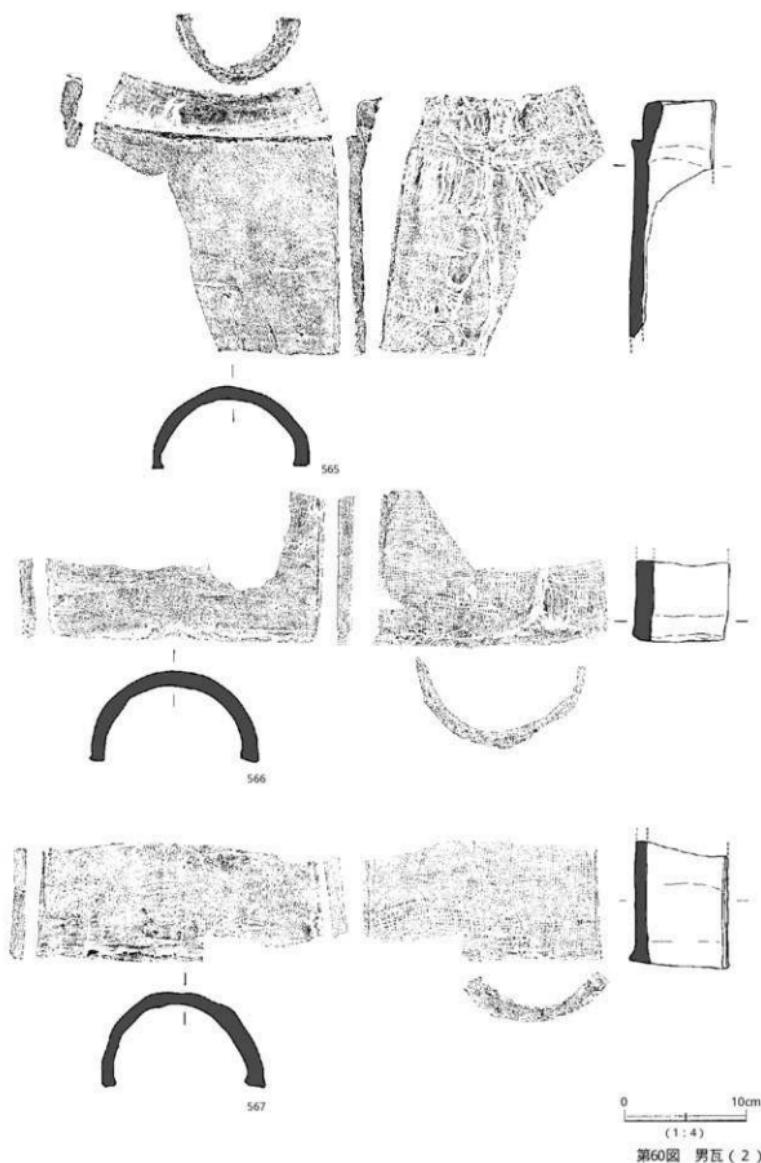


第57図 鎏瓦(5)

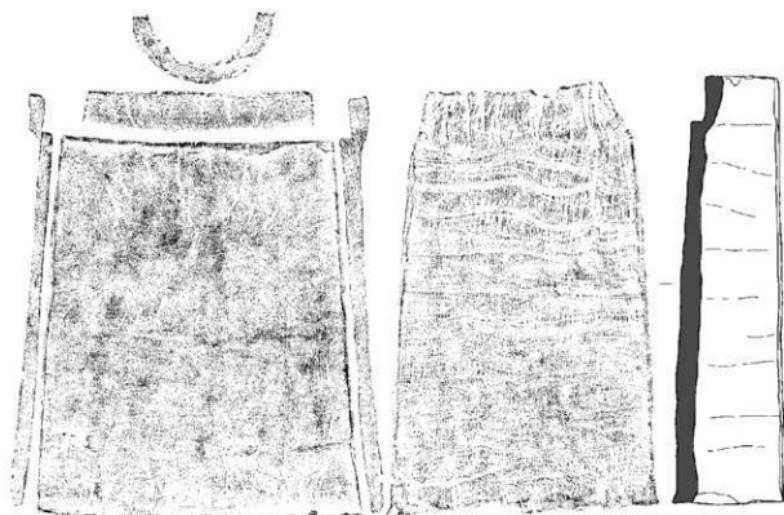




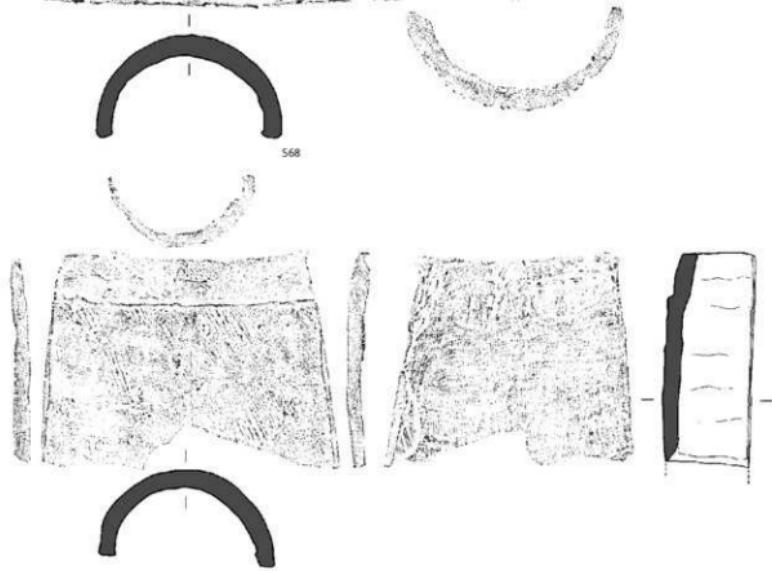
第59図 男瓦（1）



第60図 男瓦(2)



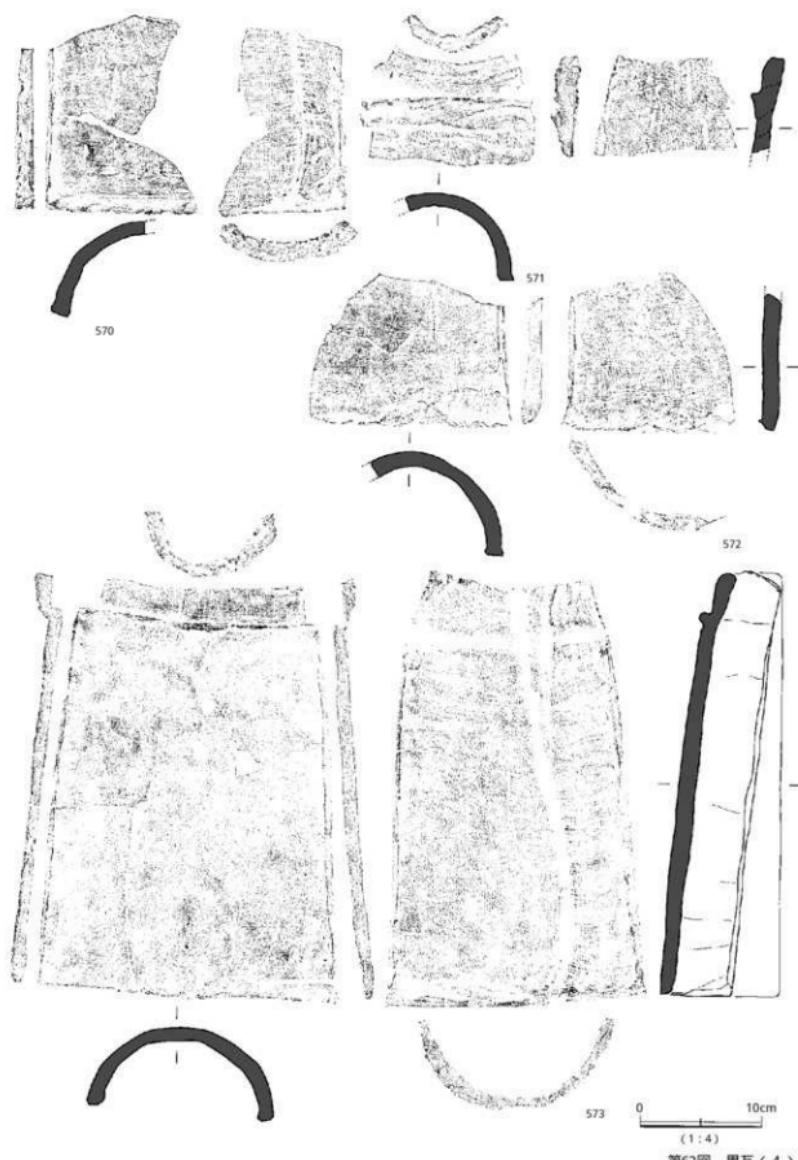
568



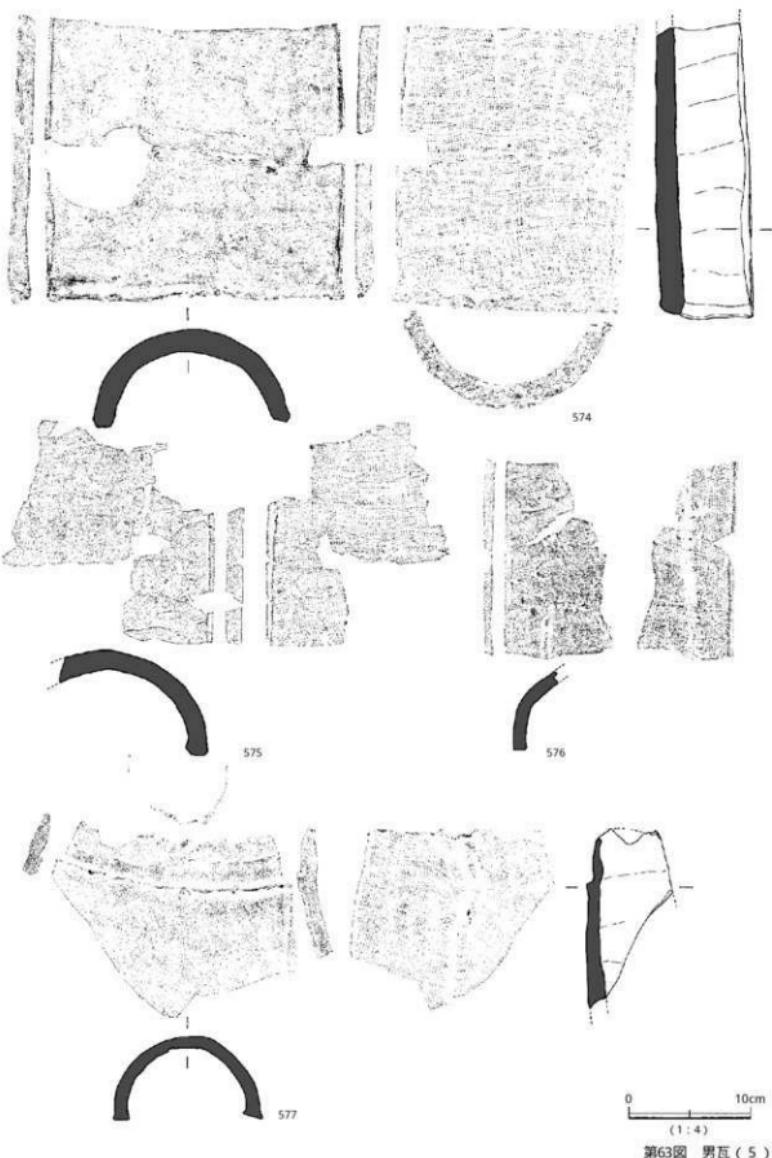
569

0 10cm
(1:4)

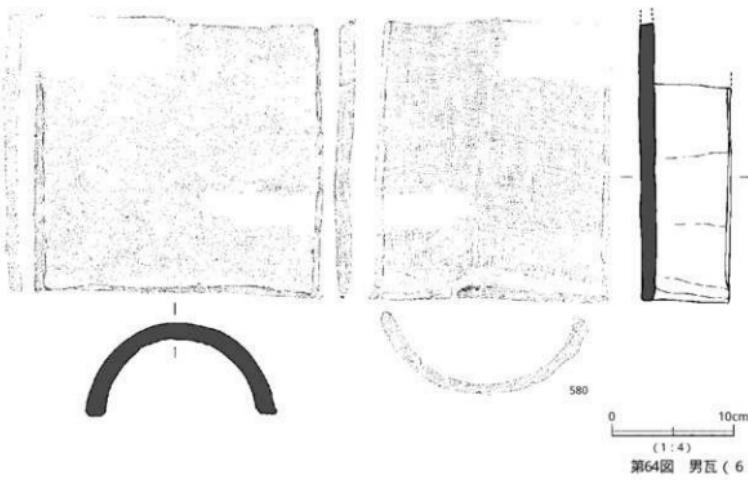
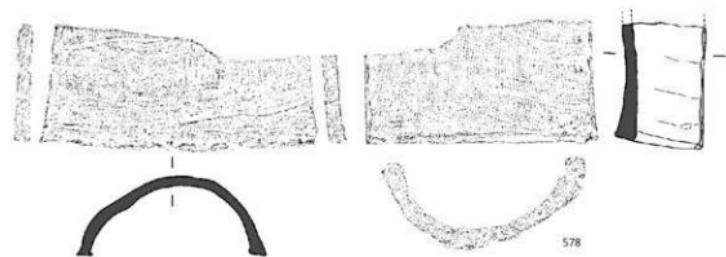
第61図 男瓦（3）



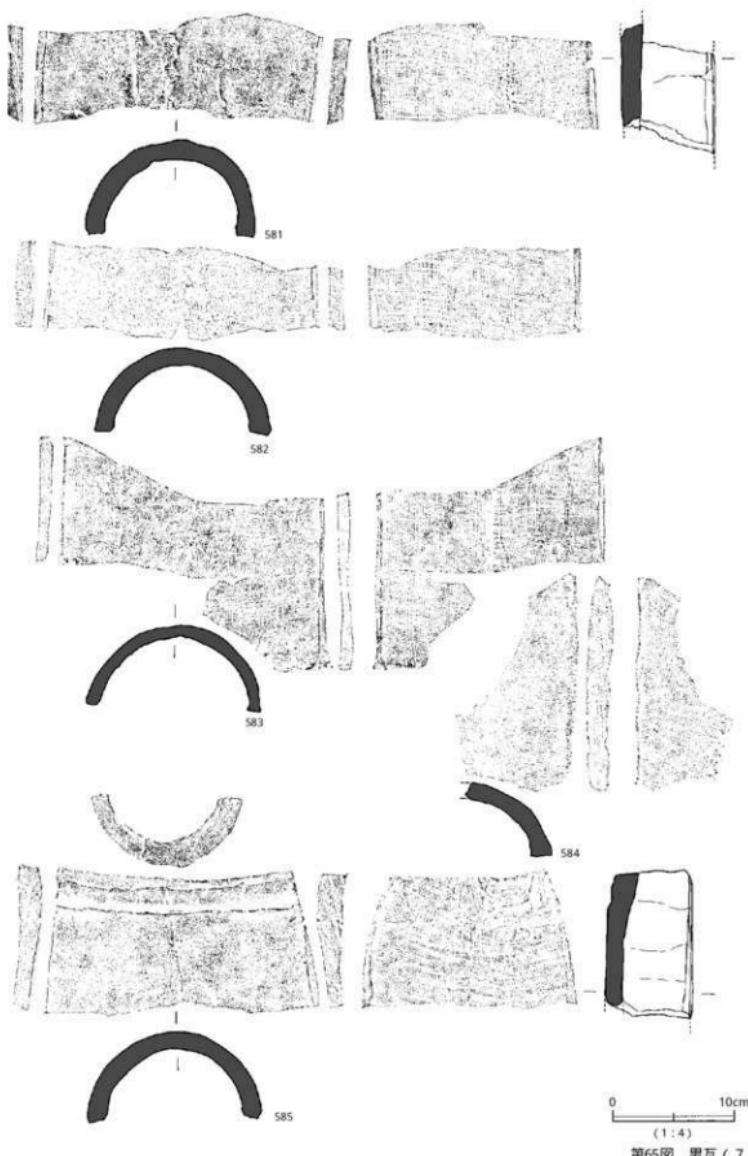
第62図 男瓦(4)



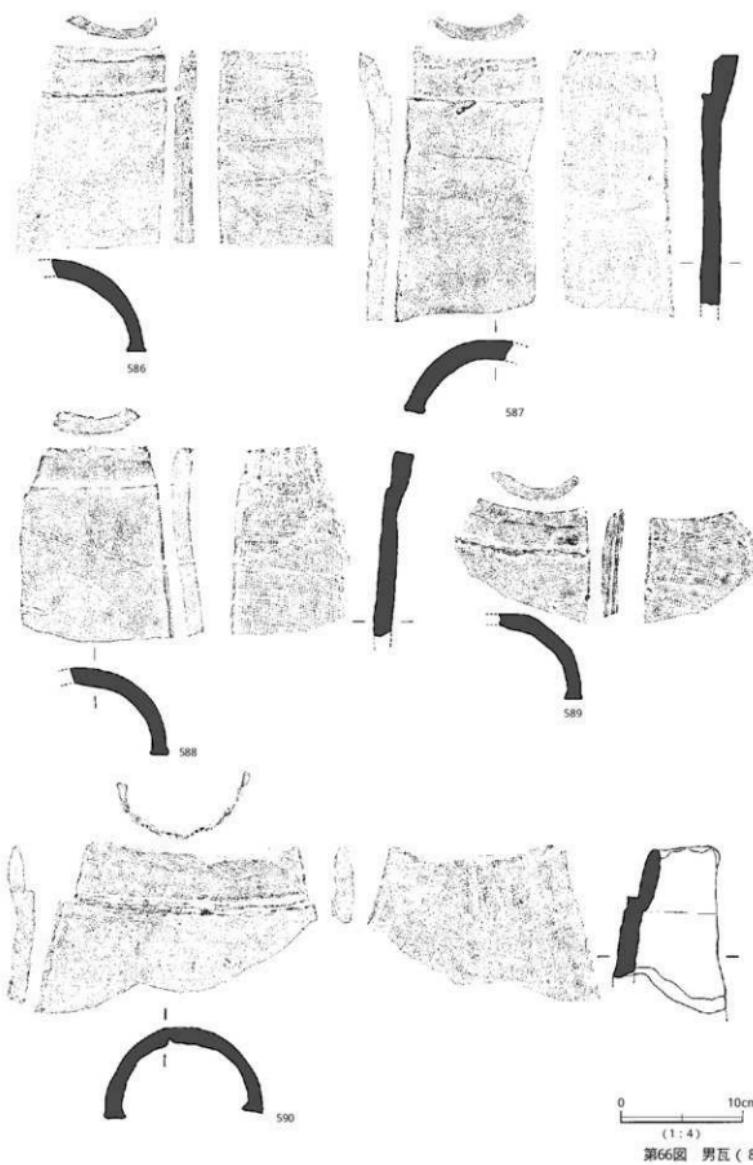
第63図 男瓦(5)



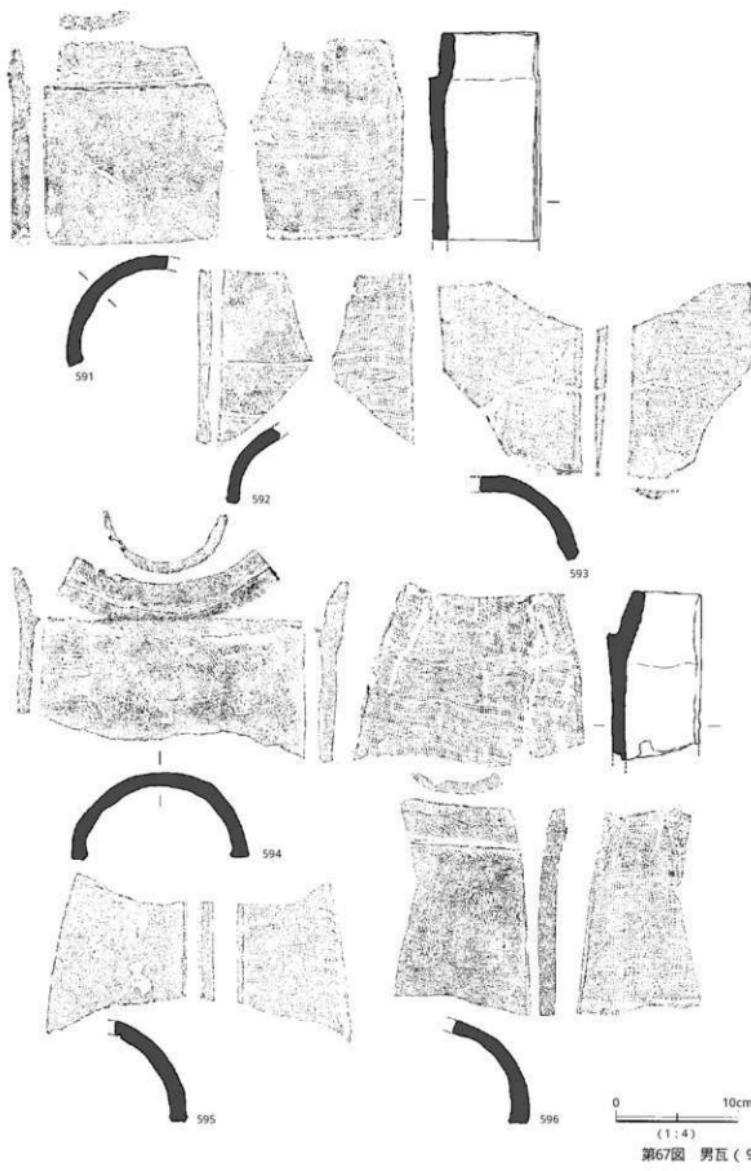
第64図 男瓦(6)



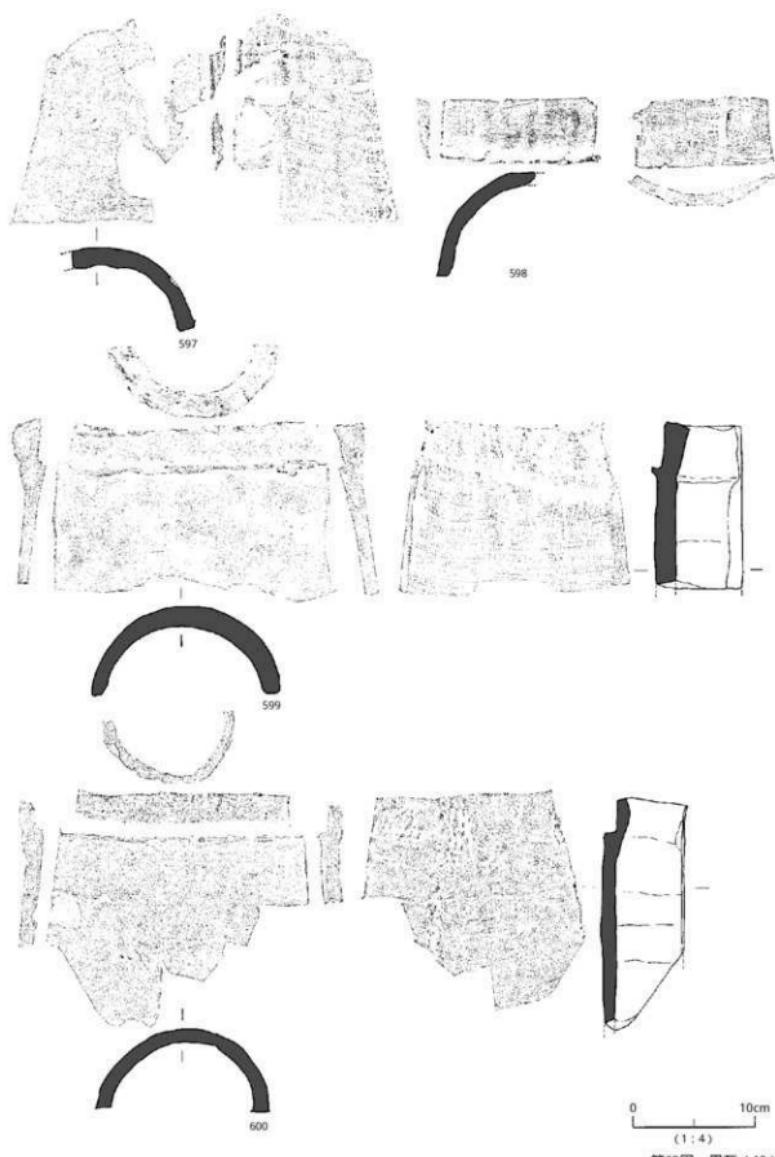
第65図 男瓦(7)



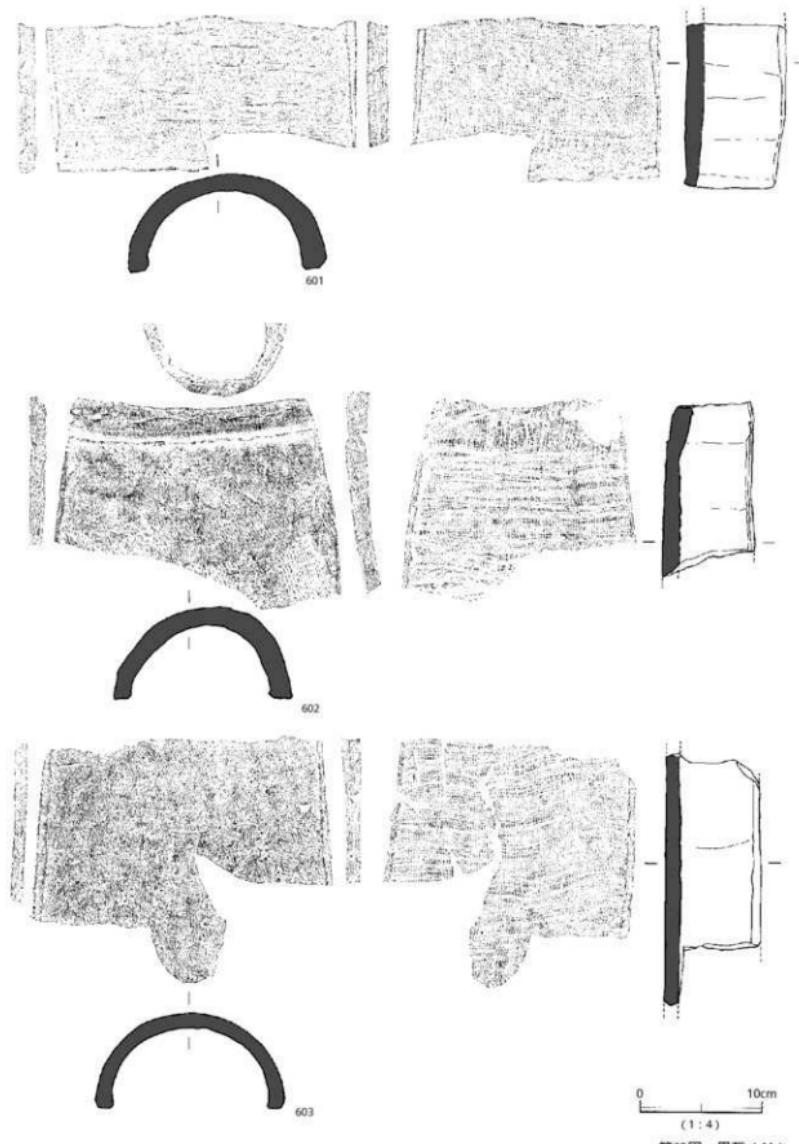
第66図 男瓦(8)



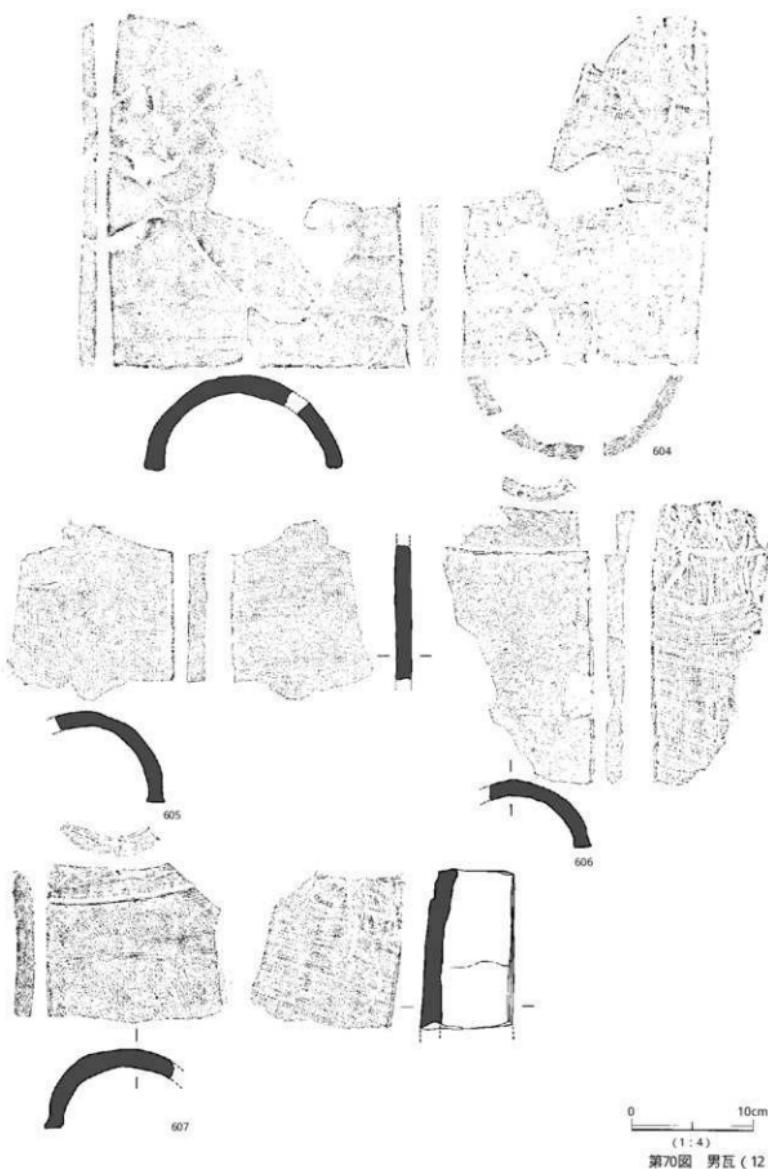
第67図 男瓦(9)



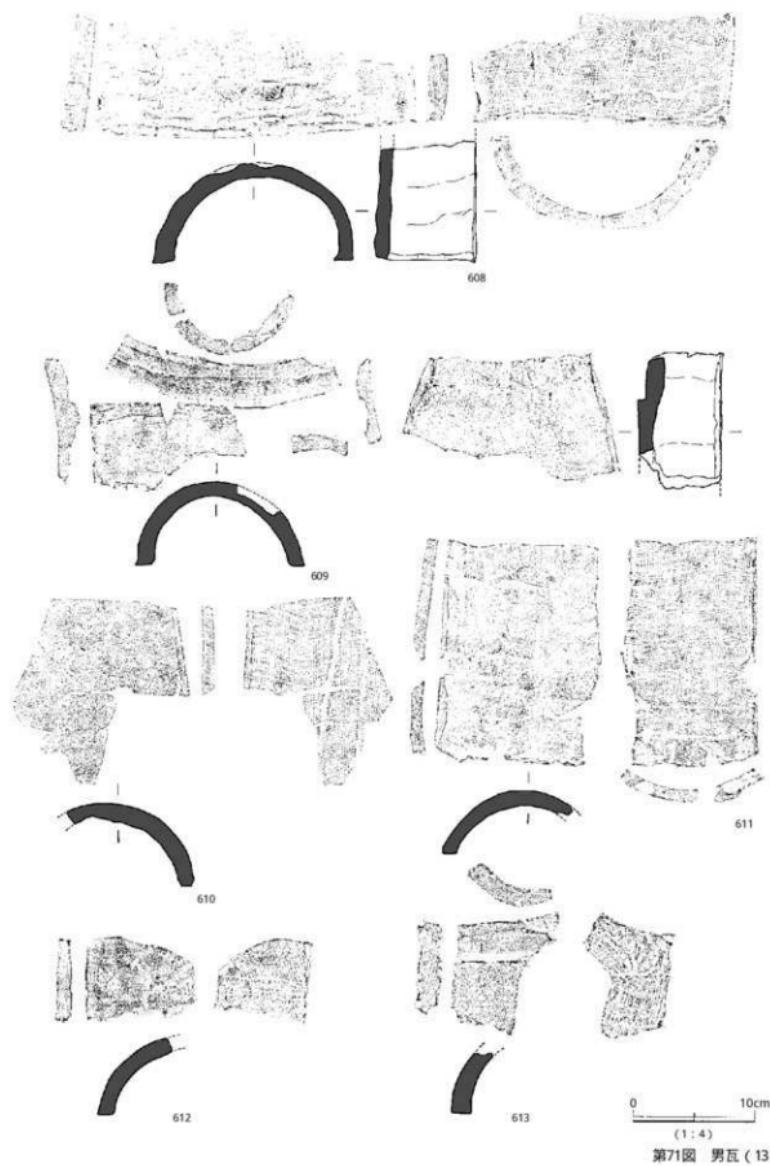
第68図 男瓦 (10)



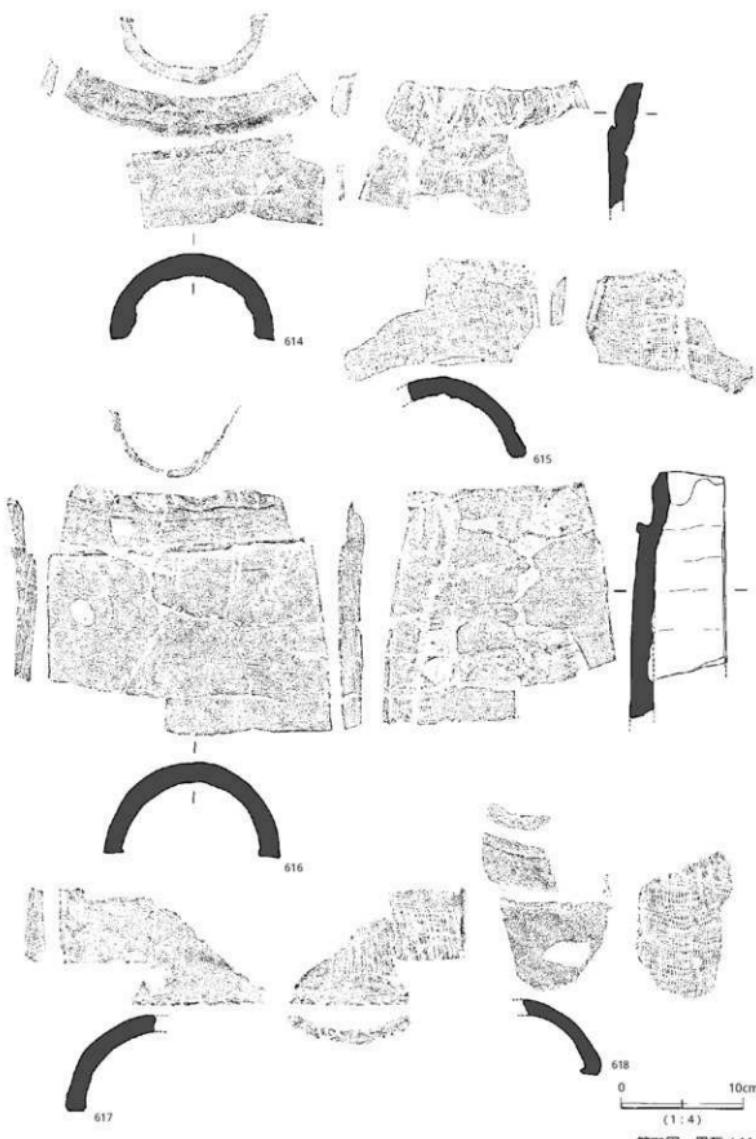
第69図 男瓦 (11)



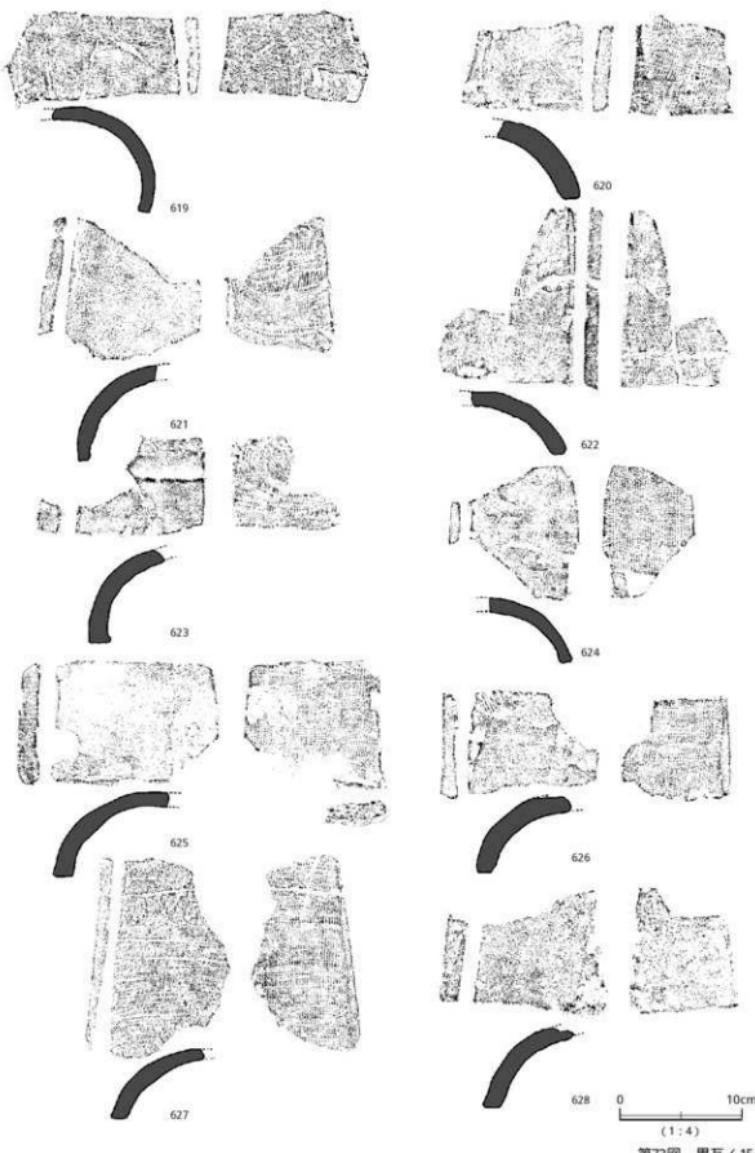
第70図 男瓦 (12)



第71図 男瓦 (13)



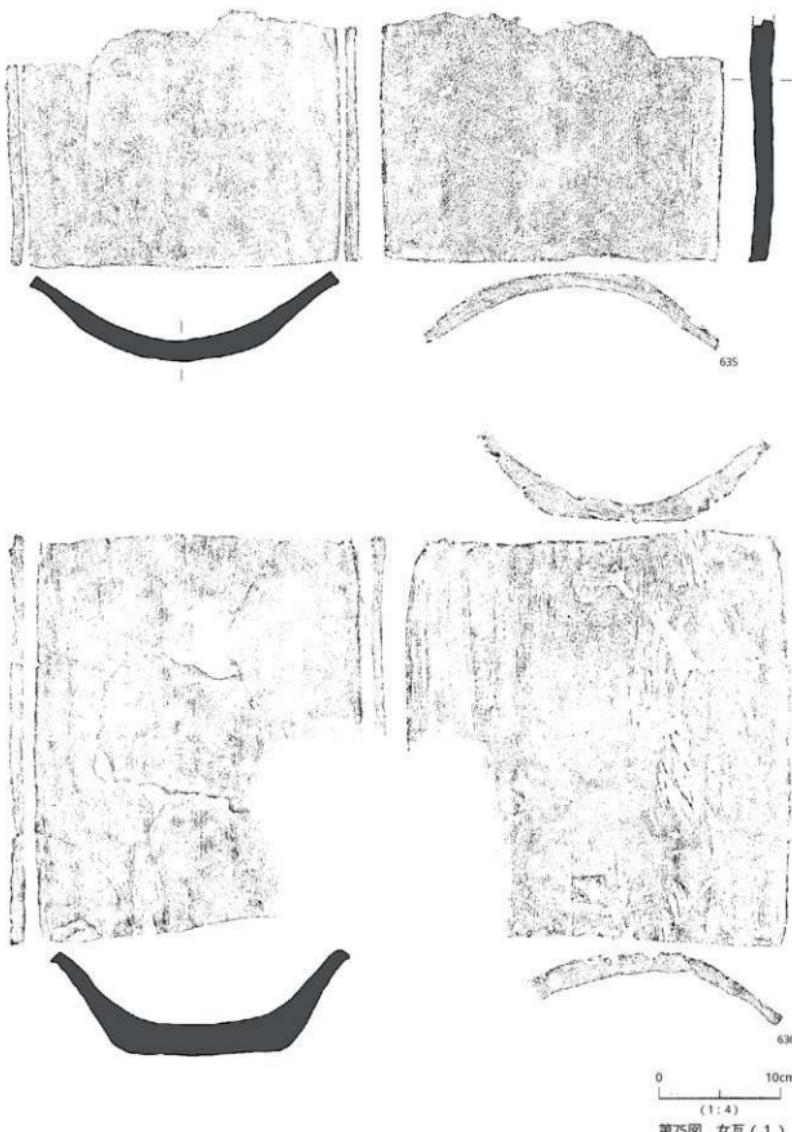
第72図 男瓦 (14)



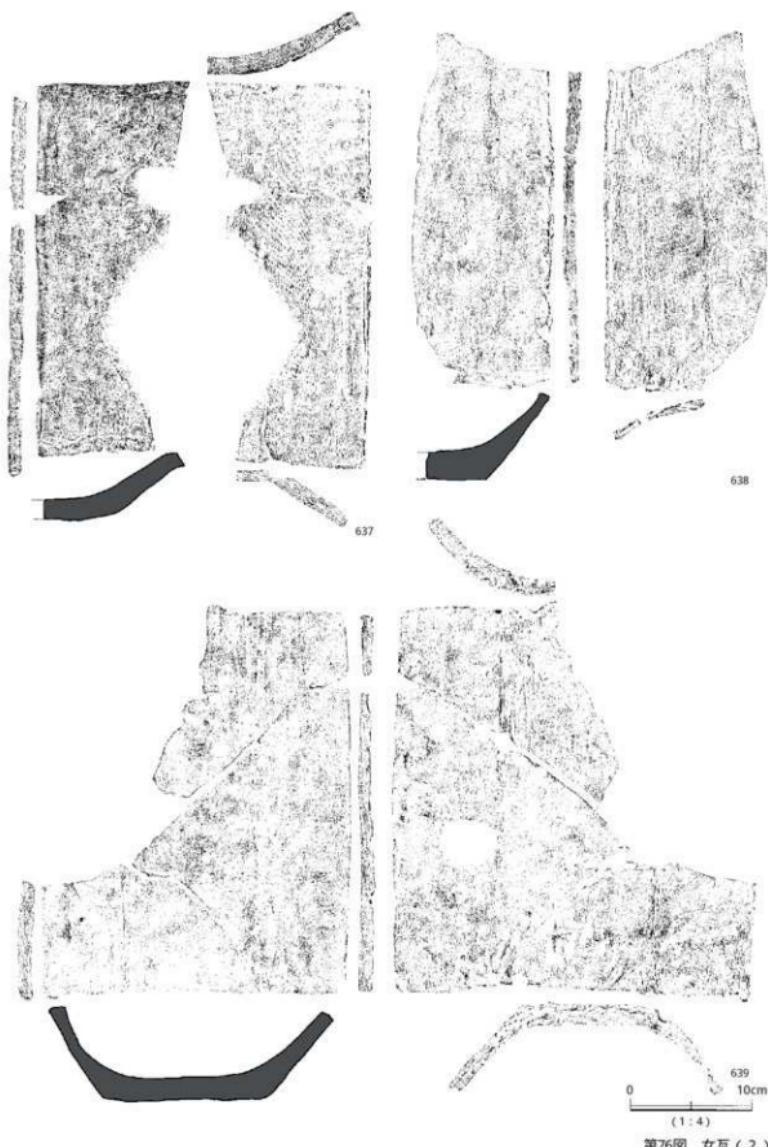
第73図 男瓦 (15)

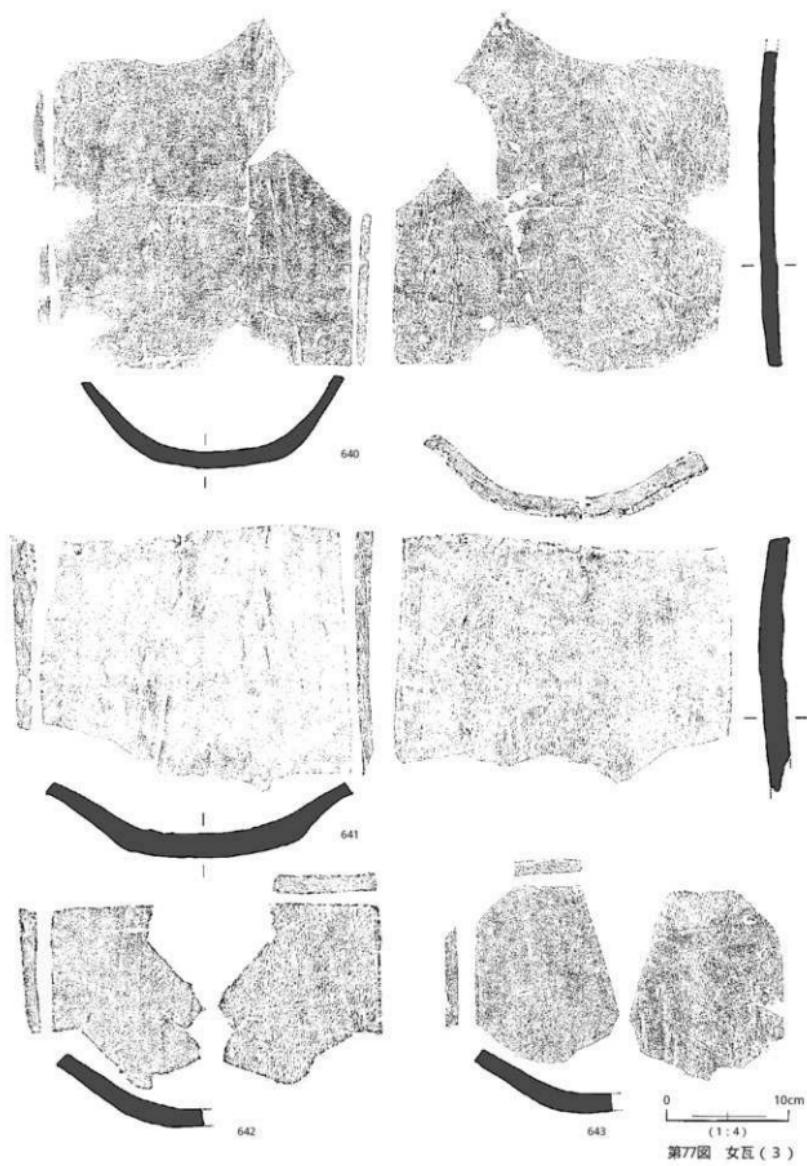


第74図 男瓦 (16)

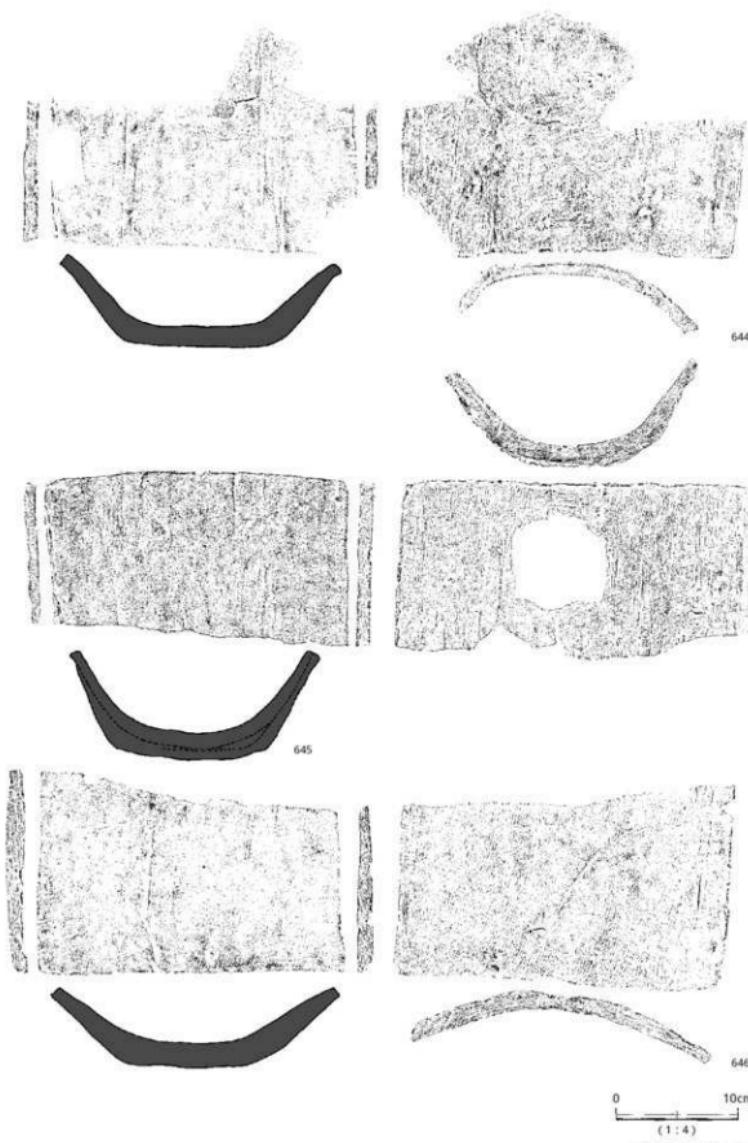


第75図 女瓦(1)

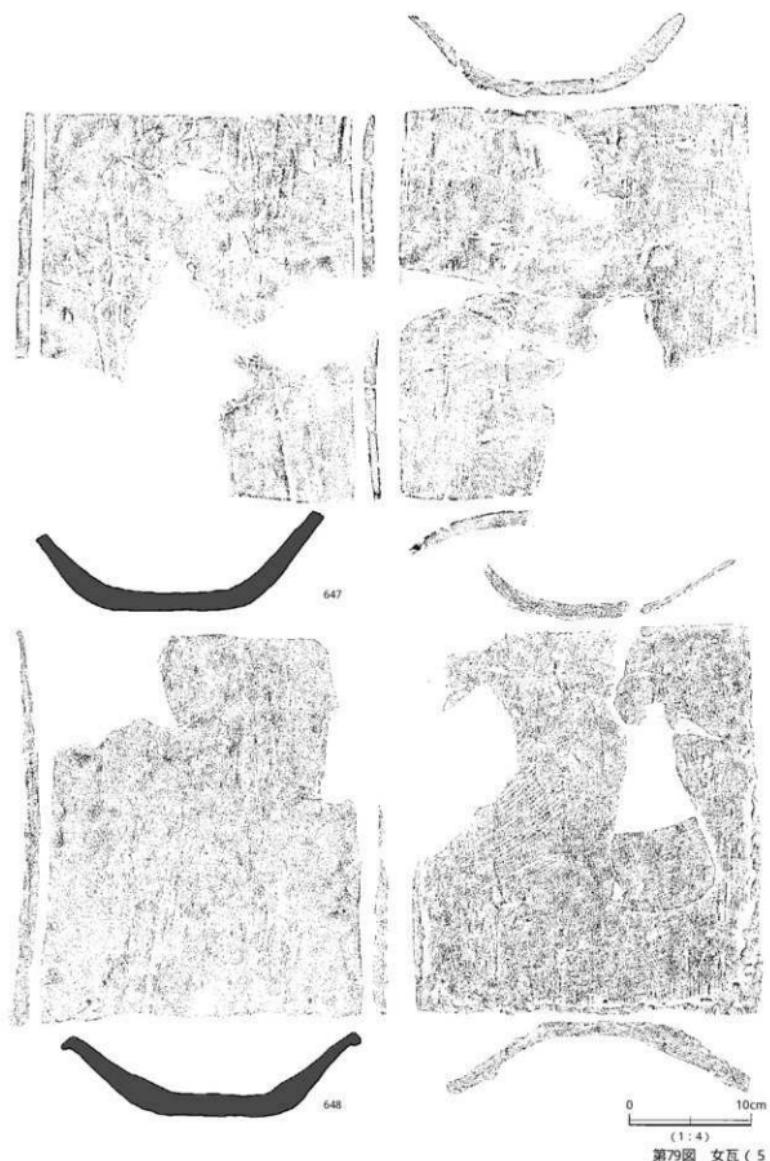




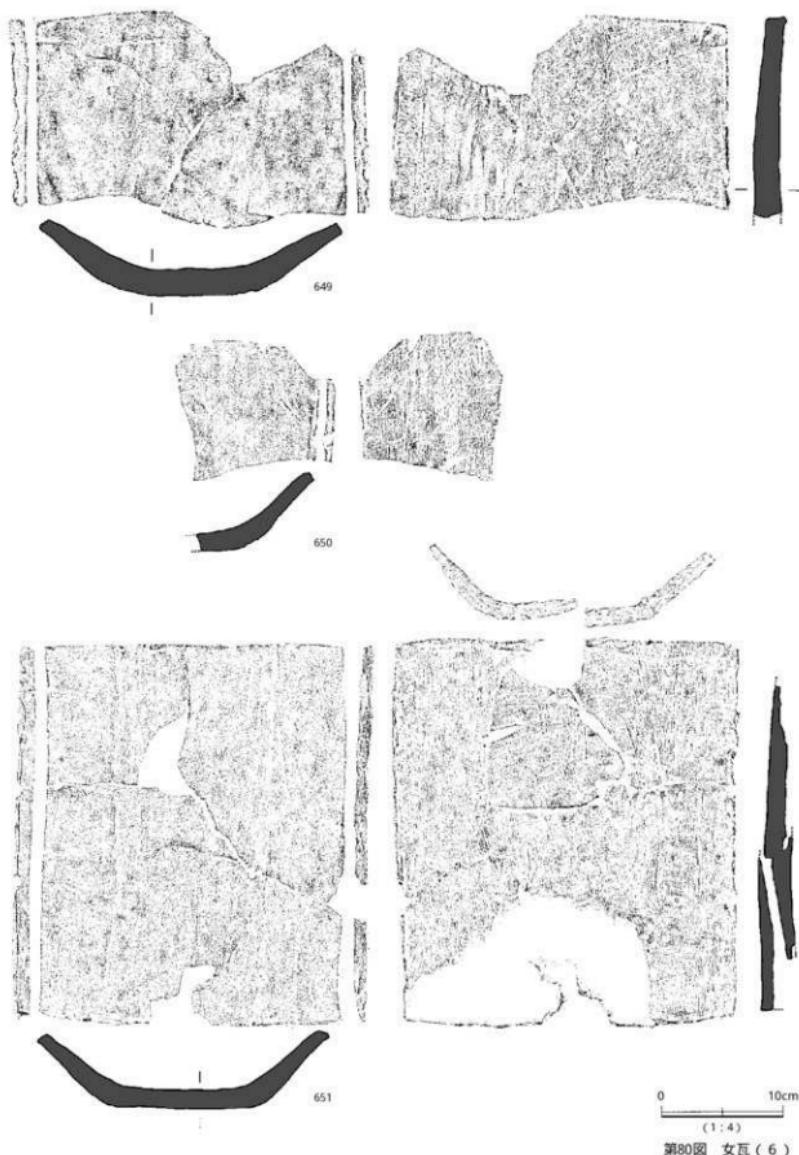
第77図 女瓦(3)



第78図 女瓦(4)



第79図 女瓦(5)



第80図 女瓦（6）

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

表1 小松原窯跡出土遺物観察表(1)

No	器形	出土 地點	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離	底部 調整	備考
1	無台坯	S Q 1	(130)	(68)	35	4	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
2	無台坯	S Q 1	124	64	37	4	粗砂	良	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
3	無台坯	S Q 1	144	78	34	4	粗砂	不良	N 7 /	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	舟底状ピット	
4	無台坯	S Q 1	(138)	82	38	5	粗砂	不良	10YR 7 / 2	に汚い 黄緑	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
5	無台坯	S Q 1	(144)	(90)	37	5	細砂	良	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
6	無台坯	S Q 1	(149)	96	38	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
7	甕	S Q 1	(348)			9	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
8	蓋	S Q 1 1ステッキ	(146)		28	4	粗砂	良好	2SYR 5 / 1	赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
9	蓋	S Q 1 1ステッキ	152		30	5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	表面ヘラアズリ	
10	蓋	S Q 1 1ステッキ	(149)		38	4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
11	蓋	S Q 1 1ステッキ	(147)		20	6	粗砂	良	7SYR 6 / 6	橙	ロクロナデ	ロクロナデ				
12	有台坯	S Q 1 1ステッキ	126	66	45	4	細砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	外面部かぶり 歪み	
13	有台坯	S Q 1 1ステッキ	125	(68)	50	5	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
14	有台坯	S Q 1 1ステッキ	(134)	(79)	50	4	細砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
15	有台坯	S Q 1 1ステッキ		(74)		5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	底部外面に工具 によるナデ痕	
16	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(122)	72	34	4	粗砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱・燒 台	
17	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(132)	(80)	32	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
18	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(135)	67	38	4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
19	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(142)	(82)	37	5	細砂	良好	2SYR 6 / 1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
20	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(130)	70	34	3	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
21	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(138)	(72)	40	5	細密	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
22	無台坯	S Q 1 1ステッキ	149	64	45	4	粗砂	良	10YR 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
23	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(140)	(94)	40	5	細砂	良	7SYR 5 / 2	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
24	無台坯	S Q 1 1ステッキ	141	91	37	5	粗砂	良	2SYR 7 / 2	灰黃	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
25	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(140)	(90)	40	4	粗砂	良	5YR 5 / 3	に汚い 赤褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
26	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(136)	(80)	40	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	内外面火祿	
27	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(137)	(88)	35	4	細砂	良好	7SYR 4 / 2	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
28	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(136)	(76)	39	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱	
29	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(142)	72	41	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
30	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(133)	(80)	39	4	細砂	良	2SYR 6 / 2	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
31	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(132)	(80)	39	4	粗砂	良	7SYR 6 / 2	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
32	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(140)	(79)	44	5	粗砂	良	10YR 6 / 2	灰黃褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
33	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(134)	(66)	37	5	細砂	良	2SYR 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
34	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(128)	(70)	35	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱	
35	無台坯	S Q 1 1ステッキ	(136)	(82)	32	4	粗砂	良好	2SYR 5 / 1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ		
36	有台皿	S Q 1 1ステッキ	(143)			5	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
37	有台皿	S Q 1 1ステッキ	(130)			4	細砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
38	小型壺	S Q 1 1ステッキ				7	細密	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ		3段作り		

小松原窯跡出土遺物観察表(2)

No.	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離 し	底部 調整	備考	
39	小型壺	SQ 1ステッパ				4	細密	良好	2.5YR 2 / 1	黒	ロクロナデ	ロクロナデ			外面部自然難		
40	長頸壺	SQ 1ステッパ				7	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			体部中央に2 条の沈線		
41	広口壺	SQ 1ステッパ				9	粗砂	良好	N 5 /	灰	ヘラナデ・ ハケメ	タタキ・ケ ズリ					
42	壺	SQ 1ステッパ		95		7	細砂	良	N 7 /	灰白	ナデ	タタキ・口 ヘラ クロナデ 切り			台部に板目压 痕		
43	壺	SQ 1ステッパ	(142)			15	細砂	良	N 5 /	灰	ナデ	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
44	広口壺	SQ 1ステッパ	(69)			6	細砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			外面部自然難 底からぶり出臺子 ノコ状压痕		
45	鉢	SQ 1ステッパ	(180)			6	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ					
46	甕	SQ 1ステッパ				6	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			柳描波状文		
47	甕	SQ 1ステッパ				8	細砂	良好	10YR 3 / 1	明赤灰	アテ	タタキ					
48	甕	SQ 1ステッパ				10	細砂	良好	N 5 /	灰	アテ						
49	甕	SQ 1ステッパ	(140)			8	粗砂	良好	N 5 /	灰	アテ	タタキ・ケ ズリ			タタ キ		
50	鉢	SQ 1ステッパ	310			10	細砂	良	7.5YR 6 / 6	橙	ロクロナデ	ロクロナデ・ ハケメ					
51	鉢	SQ 1ステッパ	(286)			9	粗砂	良	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ カキメ					
52	蓋	S Q 2 F 2 5	129			25	5	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
53	蓋	S Q 2 F 4	142			21	4	粗砂	良	2.5YR 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ				
54	蓋	S Q 2 F 2 4	(130)			33	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
55	蓋	172 V	(125)			32	4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			内面に裏側の楕 円台の貼り付	
56	蓋	S Q 2 F 2	(136)			36	5	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
57	蓋	S Q 2	144			37	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
58	蓋	S Q 2	(157)			29	5	細砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
59	蓋	S Q 2	154			33	4	粗砂	良	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
60	蓋	S Q 2	146			30	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
61	蓋	S Q 2	134			23	5	粗砂	良	2.5Y 6 / 1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
62	蓋	S Q 2 F 2 3 6	(150)			33	4	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
63	蓋	S Q 2 F 4 5	(130)			29	5	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
64	蓋	S Q 2 F 6	(137)			23	4	粗砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
65	蓋	S Q 2 F 5	156			5	細砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ					
66	蓋	S Q 2 F 5	124			27	5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
67	蓋	S Q 2 F 4	(150)			5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ					
68	蓋	S Q 2 F 5	148			4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ					
69	蓋	S Q 2 F 4	(146)			4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ					
70	蓋	S Q 2	(145)			4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ					
71	蓋	S Q 2 F 2	(142)			4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ					
72	有台坏	S Q 2 F 2	(123) (74)	40		4	細砂	良好	7.5R 2 / 1	赤黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ				
73	有台坏	S Q 2 F 2	(112) (64)	47		4	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ				
74	有台坏	S Q 2	(126) (72)	52		5	粗砂	良	5YR 5 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ				
75	有台坏	S Q 2 F 4 6	118	70	50	4	粗砂	良	5YR 4 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ				
76	有台坏	S Q 2 F 2	(126) (79)	46		3	粗砂	良	5YR 4 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ				

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

小松原窯跡出土遺物観察表(3)

No	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離	底部 調整	備考
77	有台环	S Q 2	F 2	134	82	50	5	細砂	良	N S /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	高台内に台貼り 付けの痕の痕跡
78	有台环	S Q 2		(123)	(80)	48	4	粗砂	良	2 S Y R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
79	有台环	S Q 2	F 4	(123)	(76)	45	3	粗砂	良	5 R 4 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
80	有台环	S Q 2	F 4	(134)	76	46	4	細砂	良好	N S /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	高台内に爪跡 が巡る
81	有台环	S Q 2		(118)	(76)	43	4	細砂	良	10 Y R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
82	有台环	S Q 2		(128)	(80)	46	4	細砂	良好	N S /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	外面灰かぶり
83	有台环	S Q 2			(74)		5	粗砂	良好	N S /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
84	有台环	S Q 2			(70)		4	粗砂	良好	N S /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	底部内面に重 焼き痕
85	有台环	S Q 2	F 5	(148)			5	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
86	無台环	S Q 2		(138)	(78)	35	4	細砂	良	2 S Y 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
87	無台环	S Q 2		(136)	(75)	36	3	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
88	無台环	S Q 2		(140)	72	36	4	粗砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
89	無台环	S Q 2		(146)	(66)	36	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱焼台
90	無台环	S Q 2		136	74	40	4	細砂	良好	10 Y R 6 / 1	褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱焼台
91	無台环	S Q 2		(138)	(74)	36	4	細砂	良	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
92	無台环	S Q 2		(134)	(90)	36	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
93	無台环	S Q 2		(142)	72	36	6	細砂	良	7 S Y R 6 / 3	にじみ 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
94	無台环	S Q 2		130	70	38	3	緻密	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱焼台
95	無台环	S Q 2		(138)	(64)	43	5	細砂	良	2 S Y 7 / 2	灰黃	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
96	無台环	S Q 2		(140)	60	42	4	細砂	良	2 S Y 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
97	無台环	S Q 2		(140)	(64)	40	5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
98	無台环	S Q 2		(140)	(70)	39	4	細砂	良好	7 S Y R 6 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
99	無台环	S Q 2		(145)	76	42	4	細砂	良	2 S Y 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
100	無台环	S Q 2		144	73	41	4	細砂	良	7 S Y R 5 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
101	無台环	S Q 2		(138)	(70)	33	5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
102	無台环	S Q 2		138	90	36	4	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
103	無台环	S Q 2		(136)	(64)	33	4	細砂	良好	N 5 /	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
104	無台环	S Q 2		(131)	(78)	35	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱焼台
105	無台环	S Q 2		141	80	38	4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
106	無台环	S Q 2		(152)	(68)	38	5	細砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
107	無台环	S Q 2		(133)	80	30	4	粗砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱焼台
108	無台环	S Q 2		(140)	66	27	4	細砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
109	無台环	S Q 2		(160)	(80)	36	4	細砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱
110	無台环	S Q 2	F 1	(130)	(76)	37	4	細砂	良好	7 S Y R 2 / 1	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	内外面火禪
111	無台环	S Q 2	F 1· 2	(140)	66	41	4	緻密	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
112	無台环	S Q 2	F 1	(139)	(68)	44	5	緻密	良好	10 Y R 5 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
113	無台环	S Q 2	F 1	(143)	(74)	39	4	緻密	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
114	無台环	S Q 2	F 1· 2·5	(148)	70	37	3	緻密	良好	N 5 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	

小松原窯跡出土遺物観察表(4)

No	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離 し	底部 調整	備考
115	無台環	S Q 2	F 2・ 4	(126)	(76)	29	3	粗砂	良	2.5 Y R 3 / 2	暗青褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
116	無台環	S Q 2	F 2	(134)	(72)	35	4	細砂	良	2.5 Y R 5 / 3	に赤い 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
117	無台環	S Q 2	F 2	(135)	74	35	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	外面にスサ根、 指纹
118	無台環	S Q 2	F 2	(128)	70	32	4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
119	無台環	S Q 2	F 2	(134)	77	33	4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
120	無台環	S Q 2	F 2・ 12	140	79	38	6	粗砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	焼成時に龜裂
121	無台環	S Q 2	F 2	(138)	(70)	38	4	細砂	良好	5 Y R 5 / 3	に赤い 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
122	無台環	S Q 2	F 2・ 12	134	70	40	4	細砂	不良	2.5 Y 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
123	無台環	S Q 2	F 2・ 12	131	74	36	4	粗砂	良	2.5 Y 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
124	無台環	S Q 2	F 2	144	76	39	4	細砂	良好	5 Y R 5 / 3	に赤い 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	底部草木状痕
125	無台環	S Q 2	F 2・ 5	144	66	37	4	細密	良好	5 Y R 5 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	焼成時に龜裂
126	無台環	S Q 2	F 2・ 5	(138)	78	35	4	細砂	良好	N 4 /	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
127	無台環	S Q 2	F 2	(140)	(72)	37	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱焼台
128	無台環	S Q 2	F 2	134	68	34	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
129	無台環	S Q 2	F 2	(146)	78	43	4	細砂	良好	7.5 Y R 2 / 1	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	底部草木状痕
130	無台環	S Q 2	F 2・ 5	(146)	(78)	39	4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
131	無台環	S Q 2	F 2・ 12	(142)	70	39	4	細砂	良好	2.5 Y 6 / 1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
132	無台環	S Q 2	F 2	146	(74)	43	4	細砂	良好	5 Y R 5 / 4	に赤い 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
133	無台環	S Q 2	F 2・ 5	143	70	45	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
134	無台環	S Q 2	F 2・ 12	(138)	68	40	4	細砂	良好	7.5 Y R 2 / 1	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
135	無台環	S Q 2	F 2・ 12	(138)	68	37	4	細密	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	底部内面に重 ね焼痕
136	無台環	S Q 2	F 2・ 5	134	76	39	4	細砂	良好	5 Y R 5 / 3	に赤い 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	底部に焼成時 の龜裂
137	無台環	S Q 2	F 2・ 12	138	72	35	4	細密	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
138	無台環	S Q 2	F 2	(144)	70	43	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
139	無台環	S Q 2	F 2・ 3・6	130	80	40	4	細砂	良好	5 Y R 5 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
140	無台環	S Q 2	F 2	(136)	(82)	37	4	細密	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
141	無台環	S Q 2	F 2	(134)	68	36	4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
142	無台環	S Q 2	F 2	140	(66)	42	5	粗砂	良	5 Y R 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
143	無台環	S Q 2	F 2	(140)	70	38	4	細砂	良好	7.5 Y R 4 / 1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
144	無台環	S Q 2	F 2	(142)	70	36	4	細砂	良好	7.5 Y R 5 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
145	無台環	S Q 2	F 2	(142)	70	39	4	細密	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
146	無台環	S Q 2	F 2	(138)	62	36	4	細砂	良好	10 Y R 4 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
147	無台環	S Q 2		(138)	(80)	32	4	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱焼台
148	無台環	S Q 2	F 2・ 4	(140)	80	42	4	細砂	良好	10 Y R 5 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
149	無台環	S Q 2	F 2	142	68	37	4	細砂	良好	75 Y R 5 / 4	に赤い 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
150	無台環	S Q 2	F 2・ 4	139	79	35	4	細砂	良	5 Y R 4 / 3	に赤い 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	底部に焼成時 の龜裂
151	無台環	S Q 2	F 2・ 4	(126)	(66)	35	5	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
152	無台環	S Q 2	F 2	144	72	40	4	細砂	良好	5 Y R 5 / 3	に赤い 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	底部に焼成時 の龜裂

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

小松原窯跡出土遺物観察表(5)

No	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離 し	底部 調整	備考
153	無台坏	S Q 2	F 2	144	66	40	4	細砂	良 7SYR 5 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
154	無台坏	S Q 2	F 2	140	76	38	5	細砂	良好 10YR 4 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	底部に焼成時 の亀裂	
155	無台坏	S Q 2	F 2	138	78	39	4	細砂	良好 5 YR 5 / 3	に汚い 赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
156	無台坏	S Q 2	F 2	(143)	70	45	5	細密	良好 N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
157	無台坏	S Q 2	F 2	(142)	70	45	4	細密	良好 N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
158	無台坏	S Q 2	F 2 *	4	146	76	41	4	細砂	良好 10YR 4 / 3	赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	底部に草木状 斑紋
159	無台坏	S Q 2	F 2	150	78	42	4	細砂	良好 N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	底部に焼成時 の亀裂	
160	無台坏	S Q 2	F 2	142	68	47	4	粗砂	良好 7SYR 6 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
161	無台坏	S Q 2	F 2 *	5	146	74	45	4	細砂	良好 N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
162	無台坏	S Q 2	F 2	144	76	44	4	粗砂	良好 10YR 5 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
163	無台坏	S Q 2	F 2	(116)	(64)	30	4	粗砂	良好 N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
164	無台坏	S Q 2	F 2 *	5	(138)	(80)	39	4	粗砂	良好 N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
165	無台坏	S Q 2	F 6	(144)	(88)	39	4	粗砂	良好 5B 4 / 1	暗青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
166	無台坏	S Q 2	F 2	(130)	(74)	33	4	粗砂	良好 2SYR 5 / 1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
167	無台坏	S Q 2	F 2	(140)	75	34	4	細砂	良好 5B 5 / 1	青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
168	無台坏	S Q 2	F 2	(132)	80	35	4	細砂	良好 N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
169	無台坏	S Q 2	F 2	138	72	36	4	細砂	良好 2SYR 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
170	無台坏	S Q 2	F 2 *	4	(146)	(62)	41	5	粗砂	良好 N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
171	無台坏	S Q 2	F 2	(142)	86	39	4	粗砂	良好 5 YR 4 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
172	無台坏	S Q 2	F 2 *	6	(136)	74	36	4	細砂	良好 2SYR 6 / 1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
173	無台坏	S Q 2	F 4	(132)	(78)	33	4	細砂	良 N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
174	無台坏	S Q 2	F 4	(133)	68	35	4	細砂	良好 7SYR 7 /	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
175	無台坏	S Q 2	F 4	(140)	76	32	3	粗砂	良好 N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	2次火熱焼台	
176	無台坏	S Q 2	F 4	(136)	(70)	30	4	粗砂	良好 N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
177	無台坏	S Q 2	F 4	(134)	78	34	4	粗砂	良好 5B 5 / 1	青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	2次火熱焼台	
178	無台坏	S Q 2	F 4	(148)	76	35	4	細砂	良好 5B 3 / 1	暗青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
179	無台坏	S Q 2	F 4	(138)	80	34	4	粗砂	良好 N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	2次火熱焼台	
180	無台坏	S Q 2	F 4	(136)	(70)	39	4	細砂	良好 N 4 /	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	2次火熱焼台	
181	無台坏	S Q 2	F 4 *	5	(140)	(70)	37	4	粗砂	不良 5YR 8 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
182	無台坏	S Q 2	F 4 *	6	140	64	38	4	粗砂	良好 N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	底部に焼成時 の亀裂
183	無台坏	S Q 2	F 4	(142)	(78)	40	4	細砂	不良 10YR 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
184	無台坏	S Q 2	F 4	(138)	74	38	5	細砂	良 N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
185	無台坏	S Q 2	F 4 *	6	(144)	84	38	4	粗砂	良好 N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
186	無台坏	S Q 2	F 4	(135)	78	38	4	粗砂	良好 N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
187	無台坏	S Q 2	F 4	(143)	(83)	39	4	粗砂	良好 N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
188	無台坏	S Q 2	F 4	(133)	68	40	4	細砂	良好 N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
189	無台坏	S Q 2	F 4	(132)	(80)	40	4	粗砂	良 7SYR 6 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
190	無台坏	S Q 2	F 4	(140)	70	37	5	細砂	良好 5 YR 6 / 1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		

小松原窯跡出土遺物観察表(6)

No	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離 し	底部 調整	備考
191	無台環	S Q 2	F 4	(134)	(64)	42	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	△ラ ナデ	
192	無台環	S Q 2	F 4	(142)	(68)	45	5	細密	良好	5 Y R 4 / 2	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	底部草木状 痕	
193	無台環	S Q 2	F 5	(140)	(82)	35	4	粗砂	良好	5 Y R 5 / 2	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
194	無台環	S Q 2	F 5	(138)	(68)	33	4	粗砂	良好	2 S Y R 2 / 1	赤黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
195	無台環	S Q 2	F 4	126	80	36	4	粗砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	2次火熱
196	無台環	S Q 2	F 5	(148)	(70)	40	4	粗砂	良好	5 Y R 5 / 3	に赤い 赤褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
197	無台環	S Q 2	F 5	(144)	(64)	42	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
198	無台環	S Q 2	F 5	(134)	(68)	36	4	細密	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
199	無台環	S Q 2	F 5	(136)	70	38	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	2次火熱燒台
200	無台環	S Q 2	F 5	(144)	(78)	38	6	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
201	無台環	S Q 2	F 5	(138)	70	36	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
202	無台環	S Q 2	F 5	(136)	70	39	4	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
203	無台環	S Q 2	F 5	137	70	36	4	粗砂	良好	7 S Y R 5 / 2	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
204	無台環	S Q 2	F 6 [*] 12	136	90	31	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
205	無台環	S Q 2	F 6 [*] 12	(134)	76	32	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
206	無台環	S Q 2	F 6 [*] 12	(140)	70	32	5	粗砂	良	10 Y R 6 / 1	褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
207	無台環	S Q 2	F 6	(143)	82	32	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
208	無台環	S Q 2	F 6 [*] 12	(138)	(76)	36	4	粗砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
209	無台環	S Q 2	F 6	(133)	79	36	4	粗砂	良好	5 B 2 / 1	青黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
210	無台環	S Q 2	F 6	(130)	(60)	34	5	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
211	無台環	S Q 2	F 6	(148)	(84)	37	5	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
212	無台環	S Q 2	F 6 [*] 12	(141)	(80)	36	4	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
213	無台環	S Q 2	F 6 [*] 12	(130)	(70)	35	4	粗砂	良好	5 B 2 / 1	青黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
214	無台環	S Q 2	F 6	(132)	(70)	33	3	粗砂	良	5 B 3 / 1	暗青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
215	無台環	S Q 2	F 6	(134)	(60)	35	4	粗砂	良	10 Y R 6 / 1	褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
216	無台環	S Q 2	F 6	(138)	70	40	4	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
217	無台環	S Q 2	F 6	(138)	67	39	4	細密	良好	N 7 /	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
218	無台環	S Q 2	F 6	(144)	(84)	39	5	粗砂	良好	7 S R 3 / 2	暗赤褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
219	無台環	S Q 2	F 6	(142)	70	40	4	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
220	無台環	S Q 2		(140)	(80)	38	4	粗砂	良	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
221	無台環	S Q 2	F 6	(154)	74	45	4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
222	無台環	S Q 2	F 6	(140)	80	46	4	粗砂	良	7 S Y R 5 / 2	灰褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
223	無台環	S Q 2	F 6	(145)	80	30	4	粗砂	良	5 B 3 / 1	暗青灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		2次火熱燒台
224	無台環	S Q 2	F 6	(162)	66	40	5	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
225	有台皿	S Q 2		(134)	(78)	26	4	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
226	有台皿	S Q 2		(138)	(80)	29	3	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ		
227	蓋	S Q 2			110	7	粗砂	良好	10 R 3 / 1	暗赤褐色	カキメ・ハ ケメ	ロナデ・カキ メ・ケメ	△ラ ナデ	タタ キナデ		
228	蓋	S Q 2	F 4		100	10	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナ デ・ハケメ	ロナデ・ロラ タケメ	△ラ ナデ	タタ キナデ		

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

小松原窯跡出土遺物観察表(7)

No	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切 し	底部 調整	備考
229	粗頬壺	S Q 2		104		55	細密 良好	N 6 /		灰	口クロナ デ・カキメ	口クロナ デ・ケズリ			灰かぶり自然 釉	
230	小型壺	S Q 2	F 4		(63)	5	細砂 良好	N 2 /		黒	ロクロナデ	ロクロナデ	四輪 切		内外面自然釉	
231	甕	S Q 2				12	細砂 良好	N 2 /		黒	ロクロナデ	ロクロナデ			2種の織物痕 及 文2次火熱・燒 台	
232	甕	S Q 2	F 2			10	細砂 良好	N 2 /		黒	ロクロナデ	ロクロナデ			櫛描波状文	
233	甕	S Q 2		(210)		7	粗砂 良好	N 4 /		灰	口クロナ デ・アテ	口クロナ デ・タタキ			2次火熱	
234	甕	S Q 2	F 6	(180)	(116)	303	7	細砂 良 N 6 /		灰	ロクロナデ・ ヘラナデ・アテ	ロクロナデ・ ヘラナデ・タタキ				
235	甕	S Q 2	F 1	218		416	9 粗砂 良好	10 R 3 / 1		暗赤灰	アテ	タタキ				
236	甕	S Q 2		(280)		430	7 細砂 良好	N 3 /		暗灰	アテ	タタキ			自然釉	
237	甕	S Q 2	F 4			10	粗砂 良	N 4 /		灰	アテ	タタキ			部分的2次火 熱燒台	
238	甕	S Q 2	F 5	(205)		7	細砂 良好	N 5 /		灰	口クロナ デ・アテ	口クロナ デ・タタキ			自然釉	
239	甕	S Q 2	F 4	(450)		12	粗砂 良	2 S Y 5 / 1		黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ			櫛描波状文	
240	長胴甕	S Q 2	F 4	(182)		7	粗砂 良	N 2 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ			土師器の還元 化	
241	長胴甕	S Q 2	F 4・ 4・6	(180)	80	349	8 粗砂 良	N 5 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ ヘラナデ	タタキ・カキメ		土師器の還元 化	
242	長胴甕	S Q 2	F 6	(239)		6	粗砂 良	N 4 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ	アテ・ケズリ		土師器の還元 化	
243	鉢	S Q 2	F 5	(296)		5	細砂 良好	2 S Y R 3 / 1		暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	アテ・カキメ			
244	鉢	S Q 2	F 4・ 2	(376)		7	粗砂 良好	10 R 2 / 1		赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	アテ・ケズリ		2次火熱燒台	
245	鉢	S Q 2	F 4	(350)		8	細砂 良好	2 S Y R 4 / 1		赤灰	ロクロナデ	カキメ				
246	鉢	S Q 2	F 4	(320)	(170)	202	10 細砂 良好	2 S Y R 3 / 1		暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ ユビナデ	カキメ・ケズリ	ナデ		
247	蓋	S Q 2 スルバ		(140)		24	5 粗砂 良好	5 Y R 3 / 1		黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ				
248	蓋	S Q 2 スルバ	F 4	136		4	細密 良好	N 4 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
249	蓋	S Q 2 スルバ		(138)		4	細砂 良	N 6 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ			天井部に一条 の沈線	
250	蓋	S Q 2 スルバ	F 4	(80)		5	細密 良好	N 4 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ	四輪 切		内外面自然釉	
251	無台壺	S Q 2 スルバ	F 2	(128)	80	36	5 粗砂 良好	2 S Y 2 / 1		黒	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ ナデ	ヘラ ナデ	燒成時に電 製 歪み	
252	無台壺	S Q 2 スルバ	F 2	(135)	75	35	4 細砂 良	10 Y R 6 / 2		黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ ナデ			
253	無台壺	S Q 2 スルバ		144	80	41	4 粗砂 不良	2 S Y 7 / 1		白灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ ナデ			
254	無台壺	S Q 2 スルバ	F 2	(130)	(74)	33	4 粗砂 良好	2 S Y 6 / 1		黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ ナデ			
255	有台壺	S Q 2 スルバ		(140)	(84)	28	4 粗砂 良好	7 S R 5 / 1		赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ ナデ			
256	有台壺	S Q 2 スルバ	F 2	(138)		4	粗砂 良	N 3 /		暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
257	有台壺	S Q 2 スルバ		(152)		4	細密 良好	N 2 /		黒	ロクロナデ	ロクロナデ				
258	有台壺	S Q 2 スルバ		(160)		4	細密 良好	N 6 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
259	蓋	S Q 3	F 12	134		28	5 粗砂 良	N 6 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
260	蓋	S Q 3		(130)		4	細砂 良好	N 5 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
261	蓋	S Q 3	F 4	124		4	細砂 良好	N 5 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
262	蓋	S Q 3	F 4・ 12	133		4	粗砂 良好	N 5 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
263	蓋	S Q 3	F 12	(130)		4	細砂 良好	N 5 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
264	蓋	S Q 3	F 12	126		26	5 粗砂 良	N 5 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ ナデ			
265	蓋	S Q 3	F 4	(128)		4	粗砂 良好	N 6 /		灰	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ ナデ			
266	蓋	S Q 3	F 12	126		5	粗砂 良好	5 Y R 6 / 1		褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ				

小松原窯跡出土遺物観察表(8)

No	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離 し	底部 調整	備考
267	蓋	S Q 3	F 4	(138)		5	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
268	蓋	S Q 3	F 2 *	12	(137)	5	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
269	有台坏	S Q 3	F 4 *	12	114	76	46	4	粗砂 良 10R 4 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
270	有台坏	S Q 3	F 12	(118)	(72)	48	4	粗砂 良	10R 4 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
271	有台坏	S Q 3	F 6	(117)	70	47	4	粗砂 良	10R 4 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
272	有台坏	S Q 3	F 4	116	72	45	4	粗砂 良	10R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
273	有台坏	S Q 3	F 4	120	72	47	5	粗砂 良	10R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
274	有台坏	S Q 3	F 4	(120)	(74)	50	4	粗砂 良	10R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
275	有台坏	S Q 3		(119)	(72)	50	4	粗砂 良	10R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
276	有台坏	S Q 3	F 4	(122)	66	49	3	粗砂 良	10R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
277	有台坏	S Q 3	F 12	120	76	52	4	粗砂 良	10R 3 /	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
278	有台坏	S Q 3	F 4 *	12	126	70	53	5	粗砂 良 10R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
279	有台坏	S Q 3	F 11	(132)	(80)	49	4	粗砂 良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
280	有台坏	S Q 3	F 12	(138)	(74)	69	4	粗砂 良	10R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
281	有台坏	S Q 3	F 12	120			4	粗砂 良	10R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
282	有台坏	S Q 3	F 4	(126)			3	細砂 良	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
283	有台坏	S Q 3	F 12	(120)			3	粗砂 良	10R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
284	有台坏	S Q 3	F 4	138			4	粗砂 良好	7.5YR 5 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
285	無台坏	S Q 3	F 2	(134)	(78)	27	5	粗砂 良	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
286	無台坏	S Q 3	F 3	(134)	66	37	4	粗砂 良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	2次火熱焼台		
287	無台坏	S Q 3	F 4	(124)	(78)	33	3	粗砂 良	10YR 2 / 1	黑	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	2次火熱焼台		
288	無台坏	S Q 3	F 4	(132)	80	34	4	粗砂 良	7.5YR 6 / 3	にぶい 褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
289	無台坏	S Q 3	F 4	(134)	(81)	35	5	粗砂 良	10YR 5 / 2	灰黃褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
290	無台坏	S Q 3	F 4	(134)	(80)	36	5	細砂 良	10YR 6 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
291	無台坏	S Q 3	F 4	140	86	38	5	粗砂 良	10YR 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
292	無台坏	S Q 3	F 4	(136)	84	37	5	細砂 良	10YR 6 / 2	灰黃褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	底部に焼成時の亀裂		
293	無台坏	S Q 3	F 4	(133)	(80)	37	4	粗砂 良	10YR 6 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
294	無台坏	S Q 3	F 4	(138)	(62)	42	4	細砂 良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
295	無台坏	S Q 3	F 4	136	84	42	4	粗砂 良	7.5YR 5 / 4	にぶい 褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
296	無台坏	S Q 3	F 4	(134)	(68)	41	4	粗砂 不良	10YR 6 / 2	灰黃褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
297	無台坏	S Q 3	F 6	124	80	31	4	粗砂 良好	2.5YR 3 / 1	暗赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	2次火熱焼台		
298	無台坏	S Q 3	F 6	(136)	(80)	36	4	粗砂 良	10YR 6 / 2	灰黃褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
299	無台坏	S Q 3	F 6	(130)	70	37	4	粗砂 良	7.5YR 5 / 3	にぶい 褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
300	無台坏	S Q 3	F 6	(134)	(78)	38	4	粗砂 良	5YR 5 / 4	にぶい 褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
301	無台坏	S Q 3	F 6	(139)	(70)	40	3	細砂 良	7.5YR 5 / 3	にぶい 褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
302	無台坏	S Q 3	F 6	(140)	(80)	44	4	粗砂 良	10YR 6 / 2	灰黃褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
303	無台坏	S Q 3	F 12	(142)	(86)	36	4	細砂 良	10YR 5 / 2	灰黃褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			
304	無台坏	S Q 3	F 12	(140)	(88)	32	4	粗砂 良	7.5YR 6 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ			

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

小松原窯跡出土遺物観察表(9)

No	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離	底部 調整	備考
305	無台坏	S Q 3	F 12	(136)	76	36	5	粗砂	良	5 Y 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
306	無台坏	S Q 3	F 12	(136)	82	40	5	粗砂	良	5 Y 5 R 6 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	底部に焼成時 の亀裂
307	無台坏	S Q 3	F 12	(144)	82	40	5	細砂	良	5 Y 5 R 5 / 3	にぶい 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
308	無台坏	S Q 3	F 12	(138)	84	39	3	粗砂	良	10 Y R 6 / 2	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
309	無台坏	S Q 3	F 12	(138)	80	41	5	粗砂	良	5 Y 5 R 5 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
310	無台坏	S Q 3	F 12	138	80	40	4	粗砂	良	10 Y R 6 / 2	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
311	無台坏	S Q 3	F 12	140	84	40	4	粗砂	良	5 Y 5 R 6 / 4	にぶい 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
312	無台坏	S Q 3	F 6 · 12	140	70	40	5	粗砂	良	10 Y R 6 / 2	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
313	無台坏	S Q 3	F 12	(138)	(76)	40	4	粗砂	良	10 Y R 6 / 2	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
314	無台坏	S Q 3	F 12	(128)	(78)	41	4	粗砂	良	10 Y R 6 / 2	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
315	無台坏	S Q 3	F 12	(131)	76	38	4	粗砂	良	2 S Y 5 / 1	黄灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り		
316	無台坏	S Q 3	F 12	(128)	72	40	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
317	無台坏	S Q 3	F 12	(134)	(80)	40	4	粗砂	良	10 Y R 5 / 2	灰黄褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
318	無台坏	S Q 3	F 12	130	74	34	5	粗砂	良	5 Y 5 R 5 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
319	無台坏	S Q 3	F 12	(122)	(70)	35	5	細砂	良好	5 Y 5 R 2 / 1	黑	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱焼台
320	無台坏	S Q 3	F 12	124	(70)	30	5	粗砂	良	5 Y 5 R 6 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
321	無台坏	S Q 3		(140)	(66)	36	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
322	有台皿	S Q 3	F 11	(144)			5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
323	便	S Q 3	舟底状 ピット	(345)			10	細砂	良好	N 5 /	灰	アテ	タタキ			自然釉部下半 から大きな重み
324	便	S Q 3	F 12	(188)			9	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			2次火熱焼台
325	便	S Q 3	F 2	202			8	細砂	良好	N 2 /	黑	口クロナ アテ	タタキ			2次火熱焼台
326	跡	S Q 3	F 4	(328)			12	粗砂	良好	2 S Y R 1 / 1	赤黑	ロクロナデ	ロクロナ アヘラナデ	口クロナ アヘラナデ	ケズリ	2次火熱
327	跡	S Q 3	F 4	(318)			8	粗砂	良好	2 S Y R 1 / 1	赤黑	ロクロナデ	ロクロナ アヘラナデ	口クロナ アヘラナデ	ケズリ	2次火熱焼台
328	跡	S Q 3	F 12 · 4	(296)			8	粗砂	良	10 R 1 / 1	赤黑	ロクロナデ	ロクロナ アヘラナデ	口クロナ アヘラナデ	ケズリ	2次火熱焼台
329	跡	S Q 3 スラバ		(276)			6	粗砂	良好	N 2 /	黑	ロクロナデ	ロクロナ アヘラナデ	口クロナ アヘラナデ	ケズリ	
330	長脚櫛	S Q 3 スラバ		(198)			6	粗砂	良	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナ アヘラナデ	口クロナ アヘラナデ	ケズリ	
331	広口壺	S Q 3 スラバ			88		6	緻密	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナ アヘラナデ	口クロナ アヘラナデ	ケズリ・タタキ	
332	長錐壺	S Q 3 スラバ	F 1	(168)			10	緻密	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			錐部に二条の 沈線
333	蓋	S Q 3 スラバ	F 2	128	19	5	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
334	蓋	S Q 3 スラバ		146		5	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
335	蓋	S Q 3 スラバ		(122)		5	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
336	蓋	S Q 3 スラバ		126		4	粗砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
337	無台坏	S Q 3 スラバ	F 2	(128)	50	35	4	緻密	良好	5 Y 2 / 1	黑	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	2次火熱焼台
338	無台坏	S Q 3 スラバ	F 4	(142)	74	33	4	細砂	良好	5 Y 6 / 1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
339	無台坏	S Q 3 スラバ	IV	(136)	(80)	39	4	粗砂	良	5 Y 5 R 6 / 3	にぶい 褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
340	無台坏	S Q 3 スラバ	F 2	(138)	(66)	40	5	細砂	良好	5 Y 5 / 1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	
341	無台坏	S Q 3 スラバ	F 2	(140)	(80)	40	3	粗砂	良	5 Y 5 / 1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り		2次火熱焼台
342	無台坏	S Q 3 スラバ	F 2	(140)	90	39	4	粗砂	良	5 Y 5 R 6 / 2	灰褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ 切り	ナデ	底部に焼成時 の亀裂

小松原窯跡出土遺物観察表(10)

No.	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切 り	底部 調整	備考	
343	壺	火鉢 ステッキ	F 1	120	72	31	4	細砂	良好	5 Y 6 / 1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	外面部灰かぶり	
344	壺	火鉢 ステッキ		(106)			3	細密	良	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	自然釉	
345	有台壺	ステッキ	IV	(136)			4	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
346	有台壺	ステッキ	IV	(138)			4	粗砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
347	壺	ステッキ	IV				6	細密	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ			表面に粘土被膜 による赤褐色自然釉	
348	壺	ステッキ	F 1	(76)			4	細密	良好	2 S Y R 5 / 1	赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ			内外面灰かぶり自然釉	
349	蓋	ステッキ	V	(124)			22	5	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
350	蓋	ステッキ	V	(126)			27	5	細密	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
351	蓋	ステッキ	V	(124)			27	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
352	蓋	ステッキ	V	(136)			23	6	粗砂	良	7 S Y R 6 / 6	橙	ロクロナデ	ロクロナデ			
353	蓋	ステッキ	III	(138)			30	5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			内面に有台環の 台部貼り付け
354	蓋	ステッキ	V	(140)			29	6	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
355	蓋	ステッキ	V	(150)			30	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
356	蓋	ステッキ	V	(140)			14	4	粗砂	良好	7 S Y 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
357	蓋	ステッキ	V	(126)			6	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
358	蓋	ステッキ	III	(132)			5	細密	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
359	蓋	ステッキ		(134)			5	細砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			内面灰かぶり 自然釉	
360	蓋	ステッキ	IV	(150)			4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
361	蓋	ステッキ	IV	(144)			5	細密	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
362	有台环	ステッキ		(126) (80)	44		4	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
363	有台环	ステッキ		(124) (79)	42		4	細密	良好	10 R 2 / 1	赤黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
364	有台环	ステッキ		129	76	45	4	細砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	635-645-646号の中に 入子状態で出土	
365	有台环	ステッキ	IV	(128) (76)	47		4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
366	有台环	ステッキ		(128) (72)	47		4	粗砂	良	10 R 4 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
367	有台环	ステッキ	V	(124) (74)	45		4	細密	良好	10 R 4 / 2	灰赤	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
368	有台环	ステッキ		125	80	46	5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
369	有台环	ステッキ	V		(80)		5	粗砂	良	10 R 4 / 4	赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
370	有台环	ステッキ		(144)			4	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
371	有台环	ステッキ	IV	(146)			4	細砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
372	有台环	ステッキ	V	152			5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
373	有台环	ステッキ	V		(74)		5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
374	無台环	ステッキ	V	(126) (74)	30		4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△	ナデ 外面火禪	
375	無台环	ステッキ	IV	(122) (64)	29		4	粗砂	良	2 S Y 3 / 1	唯赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
376	無台环	ステッキ	IV	(132) (74)	35		4	粗砂	良	7 S Y R 2 / 1	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
377	無台环	ステッキ	V	(122) (58)	34		3	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
378	無台环	ステッキ	III	(130) (74)	39		5	粗砂	良	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
379	無台环	ステッキ	V	(134) (74)	38		4	細砂	良	10 Y R 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		
380	無台环	ステッキ	III	(129) (70)	32		4	粗砂	良好	7 S Y 6 / 1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△	△		

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

小松原窯跡出土遺物観察表(11)

No	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離	底部 調整	備考
381	無台坯	ステバ	III	(132)	(70)	35	4	粗砂	良好	10YR 5 / 1	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
382	無台坯	ステバ	III	(128)	(77)	35	4	粗砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
383	無台坯	ステバ	III	(132)	(86)	38	4	細砂	良	10R 5 / 4	赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ		
384	無台坯	ステバ	III	(136)	(84)	32	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
385	無台坯	ステバ	IV	(132)	(80)	33	5	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
386	無台坯	ステバ	V	135	80	30	5	粗砂	良好	7.5YR 2 / 1	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	2次火熱内面 灰かぶり
387	無台坯	ステバ	III	(136)	72	33	5	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	底部草木状圧痕
388	無台坯	ステバ	III	(134)	78	33	4	細砂	良好	2.5Y 2 / 1	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	2次火熱
389	無台坯	ステバ	V	(136)	(74)	35	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
390	無台坯	ステバ	V	(140)	(68)	35	3	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
391	無台坯	ステバ	V	(128)	(70)	32	4	細砂	良	2.5Y 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
392	無台坯	ステバ	V	(130)	(76)	34	5	細砂	良	2.5Y 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
393	無台坯	ステバ	IV	(132)	(70)	35	5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
394	無台坯	ステバ	IV	(132)	(68)	35	4	細砂	良	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
395	無台坯	ステバ	IV	142	74	35	4	細砂	良好	2.5Y 2 / 1	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
396	無台坯	ステバ	V	(150)	(86)	37	4	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
397	無台坯	ステバ	V	(146)	(80)	35	4	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
398	無台坯	ステバ	V	(146)	(74)	35	5	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
399	無台坯	ステバ	III	(142)	(62)	35	4	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	2次火熱亀裂、 歪み
400	無台坯	ステバ	(140)	(78)	35	4	粗砂	良好	7.5Y 5 / 1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
401	無台坯	ステバ	V	(138)	(77)	33	5	細砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
402	無台坯	ステバ	(142)	(78)	33	5	粗砂	良	10YR 3 / 1	黒褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
403	無台坯	ステバ	(144)	(78)	39	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
404	無台坯	ステバ	V	(139)	(80)	34	4	細砂	良好	7.5R 5 / 1	赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
405	無台坯	ステバ	V	(140)	(82)	37	4	細砂	良	7.5Y 6 / 1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
406	無台坯	ステバ	III	(142)	(70)	38	5	細砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	回転 参考
407	無台坯	ステバ	IV	(144)	(76)	40	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
408	無台坯	ステバ	(138)	(68)	40	5	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ		
409	無台坯	ステバ	IV	(144)	(72)	39	4	細砂	良好	7.5Y 6 / 1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
410	無台坯	ステバ	V	(142)	(68)	36	4	細砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
411	無台坯	ステバ	V	(151)	66	39	5	粗砂	良	5 YR 4 / 2	赤褐	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
412	無台坯	ステバ	V				4	粗砂	良好	10R 2 / 1	赤黒	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
413	無台坯	ステバ	V		(64)		4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	底部ヘラ記号
414	無台坯	ステバ	IV		(64)		4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	体部外側 灰かぶり
415	無台坯	ステバ	V		(80)		4	粗砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
416	無台坯	ステバ	III		(80)		6	粗砂	不良	10YR 6 / 1	褐色	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
417	有台皿	ステバ	V	(140)	76	28	5	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	
418	有台皿	ステバ	V	(138)	(76)	32	4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ	ナデ	

小松原窯跡出土遺物観察表(12)

No	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離 し	底部 調整	備考
419	有台皿	ステバ	IV	(135)	(80)	27	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	
420	有台皿	ステバ	IV	(140)	(82)	25	4	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	
421	有台皿	ステバ		(140)	(82)	33	5	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	
422	有台皿	ステバ	V	(132)	(72)	34	5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	
423	有台皿	ステバ	IV	(126)	(70)	34	4	粗砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	
424	有台皿	ステバ	IV	(133)	(68)	37	4	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	
425	有台皿	ステバ		(130)			5	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
426	有台皿	ステバ	IV	(127)			4	細砂	良好	N 2 /	黑	ロクロナデ	ロクロナデ			
427	有台皿	ステバ	IV	(130)			4	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
428	有台皿	ステバ		(132)	(78)	27	3	緻密	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	
429	有台皿	ステバ	III	(152)			4	緻密	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
430	有台皿	ステバ	V	(128)			4	緻密	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
431	有台皿	ステバ	V	(140)			4	粗砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
432	有台皿	ステバ	V	(140)			4	細砂	良好	N 3 /	暗灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
433	広口壺	ステバ	V	(92)	(74)	135	5	細砂	良好	N 2 /	黑	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	自然釉灰かぶ り
434	小型壺	ステバ	IV	(92)			4	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
435	小型壺	ステバ		(70)			5	細砂	良	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	
436	小型壺	ステバ	III	(38)			緻密	良好	7.5R 5 / 1		赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	
437	小型壺	ステバ	V	89			4	緻密	良好	2.5Y R 4 / 1	赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
438	小型壺	ステバ	IV	(86)			5	細砂	良好	7.5Y 7 / 1	オリ一 ブ里	ロクロナデ	ロクロナデ			
439	小型壺	ステバ	V				6	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			自然釉
440	広口壺	ステバ	V	(132)	(100)	215	9	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			自然釉430と重ね 燒、肩部に环踏音
441	小型壺	ステバ	IV				4	粗砂	良好	N 2 /	黑	ロクロナデ	ロクロナデ			灰かぶり自然釉
442	小型壺	ステバ	V				4	細砂	良好	2.5Y R 4 / 1	赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	
443	小型壺	ステバ	V	60			6	細砂	良好	2.5Y R 4 / 1	赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ	△ラ ナデ	△ラ ナデ	自然釉
444	広口壺	ステバ	V	(160)	(96)	270	8	細砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	タタキ・ロク ・ヘラナデ	ロナデ・カキ ・スケズリ	タタ キ	自然釉
445	広口壺	ステバ	IV	216			7	細砂	良好	N 2 /	黑	ロクロナデ	タタキ・ロク ・カキメ	ロクロナデ		
446	広口壺	ステバ	V	(168)			9	緻密	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	タタキ・ロク ・ヘラナデ	ロチケズリ		自然釉
447	長脚壺	ステバ	V	(170)			9	細砂	良	7.5Y R 5 / 1	褐灰	ロクロナデ	タタキ・ロク ・ロナデ・カキメ			瓶部に二、三番の 沈線
448	長脚壺	ステバ	V	(144)			10	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			3段作り
449	長脚壺	ステバ	IV	(134)			5	細砂	良	7.5Y R 4 / 1	褐灰	ロクロナデ	ロクロナデ			
450	長脚壺	ステバ	III	(113)			6	細砂	良好	7.5Y 3 / 1	オリ一 ブ里	ロクロナデ	ロクロナデ			自然釉
451	長脚壺	ステバ	IV	(188)			10	細砂	良好	2.5Y R 5 / 1	赤灰	ロクロナデ	タタキ・ロ ・ヘラナデ	ロチケズリ		
452	長脚壺	ステバ	V	134			9	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	タタキ・ロ ・クロナデ	ロナデ		
453	長脚壺	ステバ	V	(138)			8	粗砂	良	2.5Y 7 / 1	灰白	ロクロナデ	ロクロナデ			
454	長脚壺	ステバ	V				8	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	タタキ・ロ ・クロナデ			
455	長脚壺	ステバ	V				11	細砂	良好	N 6 /	灰	ロクロナデ	タタキ・ロ ・クロナデ	ロナデ・カキメ		
456	長脚壺	ステバ	V				5	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

小松原窯跡出土遺物観察表(13)

No	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離 し	底部 調整	備考
457	長脚壺	スバ	IV			10	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	タタキ・ロ クロナデ				
458	長脚壺	スバ		(104)		10	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	タタキ・ロ クロナデ		ナデ		
459	長脚壺	スバ	V	80		10	細砂	良好	2.5YR 4 / 2	赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ・ヘラ タタキ・カキメ				
460	長脚壺	スバ	IV			118	9	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	タタキ・ロクロ ヘラ ナデ・ケズリ			
461	長脚壺	スバ	V			108	8	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ タタ ナデ			
462	長脚壺	スバ	V			86	6	緻密	良好	7.5YR 5 / 1	灰	ロクロナデ	ロクロナデ ヘラ ナデ (カキメ 切り 工鳥)			
463	壺	スバ	III			70	4	粗砂	良	N 6 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ	カ 回転	2次火熱焼台	
464	甕	スバ	V	314		12	粗砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナデ			櫛描波状文 2次火熱	
465	甕	スバ		(296)		8	緻密	良	2.5YR 4 / 1	赤灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
466	甕	スバ	V	(332)		15	細砂	良好	2.5YR 1.7 / 1	赤黒	ロクロナデ	ロクロナデ				
467	甕	スバ	V			10	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			櫛描波状文	
468	甕	スバ	V	(356)		9	細砂	良好	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			櫛描波状文	
469	甕	スバ	V	(180)		7	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ				
470	甕	スバ	V	(360)		6	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			櫛描波状文	
471	甕	スバ	V	180		10	粗砂	良	2.5YR 5 / 6	明赤褐	アテ・ヘラ	タタキ・ケ ズリ				
472	甕	スバ	V			10	細砂	良好	N 2 /	黒	アテ	タタキ				
473	甕	スバ	IV			14	細砂	良好	N 5 /	灰	アテ	タタキ				
474	甕	スバ	IV			10	細砂	良好	N 2 /	黒	アテ	タタキ				
475	甕	スバ	IV	(134)		8	粗砂	良好	N 5 /	灰	ヘラナデ	ケズリ		ケズ リ		
476	甕	スバ	IV	(124)		13	細砂	良好	N 4 /	灰	ヘラナデ	タタキ・ケ ズリ		タタ キ	2次火熱自然 釉	
477	甕	スバ	V	(220)		9	細砂	良好	N 4 /	灰	ロクロナ	ロクロナ デ・アテ				
478	甕	スバ	V	(360)		7	細砂	良好	2.5YR 4 / 1	赤灰	ロクロナ	ロクロナ デ・アテ				
479	鉢	スバ	V	(348)		8	細砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナ デ・カキメ				
480	鉢	スバ	V			8	粗砂	良	10R 3 / 1	暗赤灰	ロクロナデ	ロクロナ デ・カキメ				
481	鉢	スバ	V	348 (164) 154		10	細砂	良好	N 2 /	黒	ロクロナデ	ロクロナ デ・カキメ・カキメ・ケズリ		ナデ		
482	鉢	スバ	IV	(340)		5	細砂	良好	10R 1.7 / 1	赤黒	ロクロナデ	ロクロナ デ・カキメ				
483	長胴甕	スバ	V	(228)		6	粗砂	良	N 4 /	灰	ロクロナデ	ロクロナ デ・ハメ・ケズリ			土師器の蓮元 化	
484	長胴甕	スバ	IV	(238)		5	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナ	ロクロナ デ・ハケメ・ケズリ			土師器の蓮元 化	
485	長胴甕	スバ	V	(226)		7	粗砂	良	N 5 /	灰	ロクロナデ	ロクロナデ			土師器の蓮元 化	
486	坏身	S G328		106	51	4	緻密	良	N 3 /	暗灰	ロクロナ	ロクロナ デ・ミガキ		カキ メ	底部へラ記号	
487	坏	S G328		(130)	56	5	粗砂	不良	10YR 7 / 3	にぶい 黄褐	ミガキ	ヨコナデ ミガキ			2次火熱	
488	甕	S G328	V		(73)	10	粗砂	良	7.5YR 6 / 9	にぶい 褐	ハケメ	ハケメ				
489	甕	S G328		(181)	43 223	7	粗砂	良	10YR 7 / 3	にぶい 黄褐	ハケメ	ハケメ				
490	風字硯	スバ	III				細砂	良好	N 3 /	灰		ケズリ・ミ ガキ				
491	風字硯	スバ	III				細砂	良好	N 5 /	灰		ナデ				
492	風字硯	スバ					細砂	良好	N 4 /	灰		ケズリ・ミ ガキ				
493	風字硯	スバ	IV				細砂	良好	N 4 /	灰		ナデ				
494	風字硯	S Q 2	F 2				細砂	良好	N 2 /	黒		ケズリ・ミ ガキ				

小松原窯跡出土遺物観察表(14)

No.	器形	出土 地点	層位	口径	底径	器高	器厚	胎土	焼成	色調	色	内面調整	外面調整	底部 切離 し	底部 調整	備考
495	風字硯	S Q 2	F 4					細砂	良好 N 5 /	灰	ケズリ				灰かぶり	
496	風字硯	S Q 2 スチバ						細密	良好 N 5 /	灰	ケズリ					
497	風字硯	スチバ	IV					粗砂	良好 N 5 /	灰	ケズリ・ミ ガキ					
498	風字硯	スチバ	IV					細砂	良好 N 4 /	灰	ケズリ					
499	風字硯	スチバ						細砂	良好 N 5 /	灰	ケズリ・ミ ガキ・ナデ					
500	風字硯	スチバ						細砂	良好 N 5 /	灰	ケズリ・ミ ガキ・ナデ					
501	風字硯	スチバ						細砂	良好 N 4 /	灰	ナデ					
502	風字硯	X 0						細密	良好 N 5 /	灰	ケズリ・ナ デ					
503	風字硯	スチバ	IV					細砂	良好 N 5 /	灰	ケズリ・ナ デ					
504	風字硯	スチバ	V					細砂	良好 N 4 /	灰	ナデ・ミガ キ					
505	風字硯	スチバ						細砂	良好 N 4 /	灰	ナデ					
506	風字硯	スチバ						細砂	良好 N 3 /	暗灰	ケズリ					
507	風字硯	S Q 2 スチバ						粗砂	良好 2 SY 2 / 1	黒	ケズリ					
508	風字硯	スチバ	III					細密	良好 N 4 /	灰	タタキ・ケ ズリ					
509	風字硯	スチバ	III					細砂	良好 N 5 /	灰	ケズリ					
510	風字硯	X 0						細砂	良好 N 2 /	黒	ケズリ					
511	風字硯	S Q 3 スチバ						粗砂	良好 N 3 /	暗灰	ケズリ					

表2 小松原窯跡出土瓦観察表(1)

番号	種別	出土地点	全長	広端	狭端	厚さ	胎土	焼成	色調	凹面成形	凸面成形	備考
512	S Q 1						細砂	不良	2.5 Y 7 / 3	浅黄	縄タタキ	
513	S Q 1 ステバ						細砂	良	5 Y R 5 / 2	灰褐	縄タタキ・指ナデ	
514	S Q 2				14	粗砂	良好	10 R 3 / 2	暗赤褐	布目	縄タタキ・横ナデ	
515	S Q 2	(355)(158)	100	14	粗砂	良好	N 4 /		灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
516	S Q 2				11	粗砂	良好	10 R 1 7 / 1	赤黒	布目	縄タタキ・横ナデ	
517	S Q 2 ステバ						細砂	良	10 Y R 6 / 1	褐灰		
518	南ステバ						細砂	良好	10 R 4 / 3	赤褐	条線状タタキ	
519	南ステバ						細砂	良	10 Y R 6 / 4	にぶい 黄橙	瓦当面縄タタキ・ 端部ケズリ	
520	S Q 2				10	細砂	良好	10 R 4 / 1	暗赤灰	布目・ナデ	縄タタキ・横ナデ	瓦当接合部条線状 タタキ
521	S Q 2				13	細砂	良好	N 4 /	灰	布目・ナデ	縄タタキ・横ナデ	瓦当接合部条線状 タタキ
522	S Q 2				13	粗砂	良好	10 R 3 / 1	暗赤灰	布目	縄タタキ・横ナデ	瓦当接合部横ナデ
523	ステバ						細砂	良好	N 3 /	暗灰		
524	ステバ						細砂	良	N 6 /	灰		瓦当端部ケズリ
525	ステバ						細砂	良	N 6 /	灰		瓦当端部ケズリ
526	ステバ						細砂	良好	10 R 5 / 1	赤灰		瓦当端部ケズリ
527	S Q 2	(145)	13	粗砂	良	5 Y R 5 / 1	褐灰	布目		縄タタキ・横ナデ		
528	ステバ						細砂	良好	N 5 /	灰		
529	ステバ						細砂	良	10 Y R 6 / 2	灰黄褐		瓦当面条條状タタキ
530	ステバ						細砂	良	5 Y R 6 / 1	褐灰		
531	ステバ						細砂	良	10 R 4 / 3	赤褐		
532	ステバ						細砂	良	N 6 /	灰	縄タタキ	縄タタキ
533	ステバ						細砂	良好	N 4 /	灰	縄タタキ・条 縫状タタキ	瓦当面縄タタキ
534	ステバ				23	細砂	良	10 R 4 / 3	赤褐	縄タタキ		瓦当端部ケズリ
535	ステバ				25	細砂	良	10 Y R 7 / 1	灰白	条線状タタキ		
536	ステバ						細密	良好	N 5 /	灰	条線状タタキ	瓦当面条條状タタ キ・端部ケズリ
537	ステバ						細砂	不良	10 Y R 7 / 3	にぶい 黄橙		瓦当端部ケズリ
538	ステバ						細砂	良	10 R 5 / 1	赤灰	縄タタキ	
539	S Q 2	155	13	粗砂	良好	10 R 4 / 3	赤褐	布目		縄タタキ・横ナデ		
540	ステバ						細砂	不良	10 Y R 7 / 2	にぶい 黄橙		
541	ステバ						細砂	良	2.5 Y R 4 / 2	灰赤	縄タタキ	
542	ステバ						細砂	良	5 Y R 6 / 1	褐灰		
543	ステバ						細砂	良	5 Y R 3 / 1	黑褐		瓦当面縄タタキ
544	ステバ						細砂	不良	10 Y R 7 / 3	にぶい 黄橙		瓦当端部縄タタ キ・ケズリ
545	ステバ						粗砂	良	2.5 Y R 4 / 2	灰赤		瓦当端部ケズリ
546	ステバ						細砂	良	10 Y R 7 / 2	にぶい 黄橙	縄タタキ	瓦当端部ケズリ
547	S Q 2		16	粗砂	良好	10 R 4 / 2	灰赤	布目		縄タタキ・横ナデ		
548	S Q 2		16	粗砂	良好	N 4 /	灰	布目		縄タタキ・横ナデ		
549	ステバ						細砂	良	10 R 4 / 2	灰赤	縄タタキ	瓦当端部ケズリ

小松原窯跡出土瓦観察表(2)

番号	種別	出土地点	全長	広端	狭端	厚さ	胎土	焼成	色調	凹面成形	凸面成形	備考
550	S Q 2		14	粗砂	良好	N 4 /		灰	布目	縄タタキ・横ナデ		
551	ステバ			細砂	良好	10 R 2 / 1		赤黒	縄タタキ・横ナデ・ケズリ	縄タタキ	瓦当端部ケズリ	
552	縁	ステバ		細密	良好	10 Y R 4 / 2		灰赤	縄タタキ	縄タタキ		
553	ステバ			細密	良好	10 R 1.7 / 1		赤黒	条線状タタキ・ナデ	縄タタキ		
554	ステバ			細砂	良好	10 R 5 / 1		赤灰	縄タタキ			
555	S X 74			細密	良	7.5 Y R 6 / 2		灰褐	縄タタキ・ナデ		瓦当端部ケズリ	
556	X 0			細密	良	10 Y R 6 / 2		灰黄褐	縄タタキ・ナデ			
557	ステバ			細密	良	7.5 Y R 7 / 1		明褐灰	縄タタキ	縄タタキ	瓦当面縄タタキ・端部ケズリ	
558	瓦	ステバ		細砂	不良	10 Y R 7 / 3		にふい 黄褐	縄タタキ	縄タタキ	瓦当端部ケズリ	
559	ステバ			細密	良	7.5 Y R 6 / 2		灰褐			瓦当端部ケズリ	
560	ステバ			細密	良	7.5 Y R 7 / 1		明褐灰	条線状タタキ		瓦当端部ケズリ	
561	S Q 2		100	12	粗砂	良	10 R 4 / 3		赤褐	布目	縄タタキ・横ナデ	
562	S Q 2			11	細砂	良	5 Y R 6 / 1		褐灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
563	S Q 2		116	10	細砂	良	10 Y R 7 / 1		灰白	布目	縄タタキ・横ナデ	
564	S Q 2		140	12	細砂	良	7.5 Y R 6 / 2		灰褐	布目	縄タタキ・横ナデ	
565	S Q 1		128	11	粗砂	良	10 Y R 3 / 1		黒褐	布目	縄タタキ・横ナデ	
566	S Q 2		137	12	粗砂	良好	10 R 3 / 1		暗赤灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
567	S Q 2			9	粗砂	良好	N 4 /		灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
568	S Q 2	350 165 110	17	細砂	良	10 Y R 7 / 2		にふい 黄褐	布目	縄タタキ・横ナデ		
569	S Q 2		116	13	細砂	良	10 Y R 7 / 2		にふい 黄褐	布目	縄タタキ・横ナデ	
570	S Q 2			細砂	良	10 Y R 7 / 2		にふい 黄褐	布目	縄タタキ・横ナデ		
571	S Q 2			細砂	良好	N 4 /		灰	布目	縄タタキ・横ナデ		
572	S Q 2		12	細砂	良	10 Y R 7 / 1		灰白	布目	縄タタキ・横ナデ		
573	S Q 2	345 160 105	13	細砂	良	10 Y R 7 / 2		にふい 黄褐	布目	縄タタキ・横ナデ		
574	S Q 2		160	19	細砂	良	10 Y R 7 / 1		灰白	布目	縄タタキ・横ナデ	
575	S Q 2			15	粗砂	良	10 Y R 6 / 1		褐灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
576	S Q 2		10	粗砂	不良	10 Y R 8 / 1		灰白	布目	縄タタキ・横ナデ		
577	S Q 2		85	15	細砂	良好	10 R 3 / 1		暗赤灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
578	S Q 2		168	8	細砂	良好	N 4 /		灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
579	瓦	S Q 2		12	細砂	良好	N 5 /		灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
580	S Q 2		163	14	細砂	良	5 Y R 5 / 3		にふい 赤褐	布目	縄タタキ・横ナデ	
581	S Q 2			16	粗砂	良好	10 R 3 / 2		暗赤褐	布目	縄タタキ・横ナデ	
582	S Q 2			13	粗砂	良好	N 4 /		灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
583	S Q 2			10	細砂	良好	N 4 /		灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
584	S Q 2			13	粗砂	良好	10 Y R 4 / 1		褐灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
585	S Q 2		134	14	粗砂	良好	N 5 /		灰	布目	縄タタキ・横ナデ	
586	S Q 2			14	粗砂	良好	N 1.5 /		黑	布目	縄タタキ・横ナデ	2次火熱
587	S Q 2			14	粗砂	良好	10 R 4 / 3		赤褐	布目	縄タタキ・横ナデ	

III 遺構と遺物(小松原窯跡)

小松原窯跡出土瓦観察表(3)

番号	種別	出土地点	全長	広端	狭端	厚さ	胎土	焼成	色調	凹面成形	凸面成形	備考	
588	S Q 2		15	粗砂	不良	10	Y R 8 / 1		灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
589	S Q 2		12	細砂	良好	10	R 2 / 1		赤黒	布目	繩タタキ・横ナデ		
590	S Q 2		100	13	粗砂	良好	N 4 /		灰	布目	繩タタキ・横ナデ		
591	S Q 2		11	細砂	良	5	Y R 4 / 2		灰褐	布目	繩タタキ・横ナデ		
592	S X 74		10	細砂	良	2	5 Y 7 / 2		灰黄	布目	繩タタキ・横ナデ		
593	S X 74		10	細砂	不良	7	5 Y R 7 / 3	にぶい 程	布目	繩タタキ・横ナデ			
594	S Q 2		97	10	細砂	良	7	5 Y R 7 / 1	明褐色	布目	繩タタキ・横ナデ		
595	S X 74		13	粗砂	良	2	5 Y 7 / 1		灰黄	布目	繩タタキ・横ナデ		
596	S Q 2		11	粗砂	不良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
597	S X 74		13	細砂	良	2	5 Y 7 / 1		灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
598	S Q 2		11	粗砂	良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
599	S Q 2		140	17	細砂	良好	7	5 Y R 5 / 1		褐灰	布目	繩タタキ・横ナデ	
600	S Q 2		107	11	細砂	良	10	R 3 / 2	暗赤褐	布目	繩タタキ・横ナデ		
601	男		14	粗砂	良	2	5 Y 7 / 2		灰黄	布目	繩タタキ・横ナデ		
602	S Q 2		118	13	粗砂	良好	N 4 /		灰	布目	繩タタキ・横ナデ		
603	S Q 2		12	細砂	良好	2	5 Y R 3 / 1	暗赤灰	布目	繩タタキ・横ナデ			
604	ステバ		163	13	粗砂	不良	2	5 Y 7 / 2	灰黄	布目	繩タタキ・横ナデ		
605	ステバ		12	細砂	良好	N 5 /		灰	布目	繩タタキ・横ナデ			
606	ステバ		13	粗砂	良	2	5 Y R 4 / 3	にぶい 赤褐	布目	繩タタキ・横ナデ			
607	ステバ		15	細砂	良好	7	5 Y R 4 / 1	赤灰	布目	繩タタキ・横ナデ			
608	S Q 2		170	11	細砂	良	10	Y R 7 / 1	灰白	布目	繩タタキ・横ナデ 指彫痕		
609	ステバ		11	粗砂	良好	N 3 /		暗灰	布目	繩タタキ・横ナデ			
610	ステバ		14	細砂	良好	N 4 /		灰	布目	繩タタキ・横ナデ			
611	瓦		12	粗砂	良好	N 4 /		灰	布目	繩タタキ・横ナデ 細ナデ			
612	南ステバ		13	細砂	不良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
613	南ステバ		16	細砂	良	10	Y R 7 / 3	にぶい 黄橙	布目	繩タタキ・横ナデ			
614	ステバ		12	細砂	良好	N 3 /		暗灰	布目	繩タタキ・横ナデ			
615	南ステバ		15	細砂	良	5	Y R 5 / 2		灰褐	布目	繩タタキ・横ナデ		
616	ステバ		98	17	細砂	良	10	Y R 8 / 1	灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
617	南ステバ		14	細砂	良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
618	南ステバ		14	細砂	良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
619	南ステバ		11	粗砂	良	10	Y R 6 / 2		灰黄褐	布目	繩タタキ・横ナデ		
620	南ステバ		18	細砂	良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
621	南ステバ		14	細砂	良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
622	南ステバ		12	細砂	不良	7	5 Y R 7 / 3	にぶい 焦	布目	繩タタキ・横ナデ			
623	南ステバ		14	細砂	良	10	Y R 7 / 3	にぶい 黄橙	布目	繩タタキ・横ナデ			
624	南ステバ		11	細砂	良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	繩タタキ・横ナデ		
625	南ステバ		12	細砂	良	10	Y R 6 / 2		灰黄褐	布目	繩タタキ・横ナデ		

小松原窯跡出土瓦観察表(4)

番号	種別	出土地点	全長	広端	狭端	厚さ	胎土	焼成	色調	凹面成形	凸面成形	備考
626	南ステバ		16	細砂	良	10	Y R 6 / 2		にぶい 黄橙	布目	織タタキ・横ナデ	
627	南ステバ		15	細砂	良	10	Y R 7 / 2		にぶい 黄橙	布目	織タタキ・横ナデ	
628	男	南ステバ	14	細砂	不良	10	Y R 7 / 2		にぶい 黄橙	布目	織タタキ・横ナデ	
629	南ステバ		10	細砂	良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	織タタキ・横ナデ	
630	南ステバ		13	細砂	良	10	Y R 6 / 2		灰黄褐	布目	織タタキ・横ナデ	
631	ステバ		14	粗砂	良好	5	Y R 5 / 1		褐灰	布目	織タタキ・横ナデ	
632	瓦	南ステバ	13	細砂	良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	織タタキ・横ナデ	
633	ステバ		15	細砂	良	10	Y R 7 / 1		灰白	布目	織タタキ・横ナデ	
634	ステバ		14	細砂	良好	5	Y R 5 / 4		にぶい 赤橙	布目	織タタキ・横ナデ	
635	ステバ		235	16	粗砂	良好	10	Y R 4 / 1	暗赤灰	布目・ナデ・ ケズリ	織タタキ・板目痕	645・646と組み、 中に364が入る。
636	S Q 2	327	245	25	細砂	良	10	Y R 7 / 1	灰白	ケズリ・ナデ	織タタキ・ケズ リ・板目痕	
637	ステバ	320	15	細砂	良好	N 4 /			布目・ケズ リ・ナデ	織タタキ・ナデ・ 板目痕		
638	S Q 2		25	細砂	良好	5	Y R 5 / 2		灰褐	布目・ケズ リ・ナデ	織タタキ・板目痕	
639	S Q 2	321	224	18	細砂	良好	N 3 /		暗灰	ケズリ・ナデ	織タタキ・板目痕	
640	ステバ	(210)	13	細砂	良好	N 6 /			布目・ケズ リ・ナデ	織タタキ・板目痕		
641	女	S Q 2	232	19	粗砂	良好	10	R 3 / 1	暗赤褐	布目・ケズ リ・ナデ	織タタキ・ナデ・ 板目痕	
642	S Q 2		14	粗砂	良	10	Y R 8 / 2		灰白	布目・ケズ リ・ナデ	織タタキ・ナデ	
643	ステバ		15	細砂	良好	N 6 /			灰	ケズリ・ナデ	織タタキ・板目痕	
644	S Q 2	(220)	16	細砂	良好	N 5 /			布目・ケズ リ・ナデ	織タタキ・ナデ・ 板目痕		
645	瓦	ステバ	200	21	細砂	良好	N 4 /		灰	布目・ケズ リ・ナデ	織タタキ・ナデ・ 板目痕	
646	ステバ	250	20	粗砂	良好	N 4 /			灰	布目・ケズ リ・ナデ	織タタキ・ナデ・ 板目痕	
647	S X 74	319	226	14	細砂	良	10	Y R 8 / 4	浅黄橙	ケズリ・ナデ	織タタキ・板目痕	
648	S Q 2	319	253	18	粗砂	良好	N 4 /		灰	織タタキ・ケ ズリ・ナデ	布目・板目痕・ナ デ	2次火熱・凸面に モ三庄痕
649	S Q 2		23	粗砂	良好	10	R 4 / 2		灰赤	布目・ケズ リ・ナデ	織タタキ・ケズ リ・板目痕	
650	南ステバ		16	細砂	良好	10	R 4 / 1		暗赤灰	布目・ナデ	織タタキ・板目痕	
651	S Q 2	314	238	238	16	細砂	良好	N 5 /	灰	布目・ケズ リ・ナデ	織タタキ・板目痕	2次火熱

IV 理化学分析

小松原窯跡 S Q 1 ~ 3 の考古地磁気年代測定

バリノ・サーヴェイ株式会社

(1) はじめに

小松原窯跡（山形市大字松原字小松原所在）は、山形市南西部の丘陵地に立地する古代（9世紀代）の窯跡群である。今回の発掘調査では、S Q 1 ~ S Q 3 の3基の窯跡が検出されており、そのうち2基（S Q 1・3）は須恵器、1基（S Q 2）は特徴的な瓦が生産されたことが明らかになった。

今回は、3基の窯跡の年代資料を得るために、考古地磁気年代測定を行うことが要望された。そこで、当社技師1名が平成11年9月8日に現地へ赴き観察・記録・協議を行い、3基の窯の窯壁や床に分布する焼土を計65点採取した。また、年代測定については、姫路工業大学理学部森永速男先生にお願いし、成果を頂いたので、署名原稿として以下に掲げる。

「小松原窯跡の考古地磁気年代」

姫路工業大学理学部

森永 速男

(1) はじめに

土壤中に含まれる磁性鉱物（酸化鉄や水和酸化鉄）は堆積時の地球磁場情報（強度と方向）を記録する。この磁化（磁場の化石）を堆積残留磁化と呼ぶ。さらに、堆積後に、土壤が何らかの過程（例えば、古代人の焚き火や窯の使用など）で熱を受けると、土壤中の磁性鉱物は化学的に変化したり（主に水和酸化物から酸化物に）加えて熱的磁化を獲得する（Morinagaほか, 1999）。そういう過程を経て、土壤は堆積時よりもかなり大きな強度の残留磁化（熱残留磁化）を示すようになる。同時に、その残留磁化方向は、堆積時よりもさらに正確に、受熱時の地球磁場方向と平行になることが知られている。

土壤が被熱を経て地球磁場の正確な記録を持つことを利用して、過去の地球磁場方向や強度の変化を復元する研究（考古地磁気学）が行われてきた。その成果として、過去2000年間の地球磁場方向変化のほぼ連続した標準曲線が作成されている（Hirooka, 1971, 1983; Maenaka, 1990）。この曲線と年代のわからない窯跡などの焼土の残留磁化方向を比較することによって、焼土の年代を決定できる。この方法を考古地磁気年代決定法と呼ぶ。

この方法を利用するときの注意点は、標準曲線の年代軸が考古学側から与えられたもの（土器編年など）であるということである。よって、土器編年などの修正が行われることがあれば、考古地磁気年代も修正されなければならない。また、地球磁場の永年変化には地域性がある。上述の標準曲線は近畿地方の考古資料を用いて作成されているため、近畿圏以外の考古遺物に

関してこの年代決定法を行う場合には、地理的相違に関する補正を行う必要がある。

(2) 試料、磁化測定および結果

小松原遺跡（山形市）で検出された3基の窯跡（SQ-1, SQ-2, SQ-3）から合計65個の焼土試料が採取された。採取には約2cm角のプラスチック製立方体容器を用い、現地において定方位で採取された。方位付けにはクリノンコンパスを用いた。山形県付近の現在の地球磁場方向は、国際標準磁場を用いて計算すると偏角=-7.9°（-は西偏）、伏角=52.0°となる。国際標準磁場以下の残留磁化測定で得られる偏角値に関して、現在の偏角值-7.9°を用いて補正した。

採取された試料の残留磁化は、スピナー磁力計（夏原技研製、姫路工業大学備品）を用いて測定された。雜音となる二次的な磁化成分の除去や安定性の検討のために、交流消磁を行った。段階的な交流消磁を7個の試料（試料番号1, 11, 21, 31, 41, 51そして61）について行った（付図1から付図7、図中では試料番号にYを付している）。消磁交流磁場レベルは3, 6, 9, 12, 15, 20, 25, 30, 35、そして40mTであった。どの試料も20mT程度までの消磁に対して安定であり、二次的な磁化成分は6mTくらいの磁場で除去できることがわかった。このため、残りの試料に関して消磁前の残留磁化を測定した後、6mTの交流磁場中で消磁した。

交流消磁前後の残留磁化的方向と強度を表1および図1に示す。図1でわかるように方向が集中する範囲から大きくかけ離れた方向値が存在する。この方向を示す試料の多くは残留磁化強度が小さい。このことは被熱の程度が低いことを示しており、よって当時の地球磁場方向を正確に記録できていないものと判断される。こういった方向のかけ離れた試料（試料番号3, 4, 6, 7, 9, 10-以上 SQ-1, 53, 64, 65-以上 SQ-3）を除外し、残りの試料を同様に図示すると図2の様になる。この選別により全試料の平均の残留磁化方向は変化する（表1、図1および図2）。

(3) 考古地磁気年代決定

年代決定には上記の選別で残った56個の試料の方向結果を用いた。現在の近畿（京都付近）の地球磁場方向は国際標準磁場を用いて計算すると偏角=-7.1°、伏角=48.7°となる。これと山形市付近の違いを補正する必要がある。選別された試料56個での平均方向は偏角=-8.7°、伏角=52.6°（消磁前）。さらに偏角=-10.5°、伏角=50.3°（消磁後）である。これに、現在の地球磁場後がに基づいて補正を行うと、平均方向は偏角=-7.9°、伏角=49.3°（消磁前）。さらに偏角=-9.7°、伏角=47.0°（消磁後）となる。平均方向を図3に、それぞれ○で示す。この平均方向を囲む楕円はフィッシャー統計の α 95%に基づき定義され、平均の確からしさを表している。楕円は95%の確率で真の値が含まれる範囲を示していて、楕円が小さいほど信頼性が高いことになる。また図3中の実線は近畿地方における過去2000年間の地磁気方向の永年変化（Maenaka, 1990）を表している。図3中の数字は西暦（年）である。

地磁気方向の
永年変化

雜音となる二次的な成分は6mTの交流消磁で除去されるので、図中の○で示した消磁後の平均方向と標準値（図3中の実線）の比較が妥当である。誤差範囲を考慮した比較では、西暦450年～550年に対応が見られる。この年代は考古学的な推定とは大きく異なる。

上記で行った補正是現在の地球磁場の地域差を仮定した補正であるが、これまでの研究によれば、近畿地方と東北地方間では奈良、平安時代頃には、偏角に関してさらに-5°程度の補正が必要といわれている（西谷、私信）。これを消磁後の平均方向に施すと、平均方向は偏角

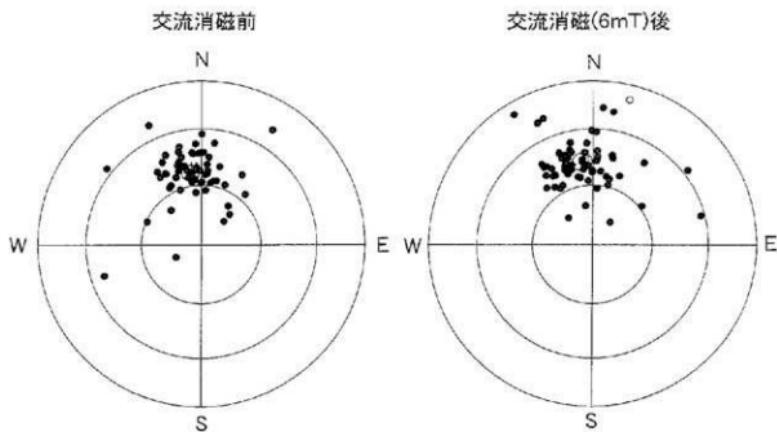


図1 小松原窯跡全採取焼土（65点）の残留磁化方向と平均方向

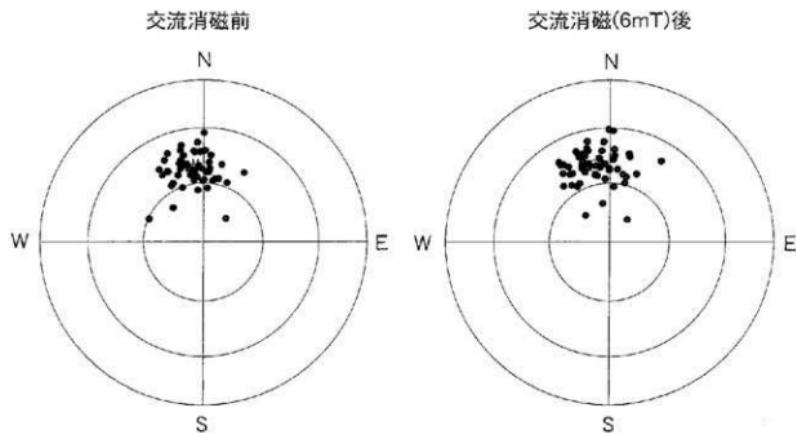


図2 小松原窯跡選別採取焼土（56点）の残留磁化方向と平均方向

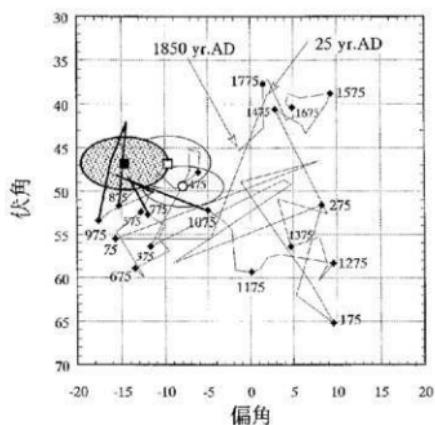


図3 考古地磁気曲線との比較 (Maenaka, 1990)

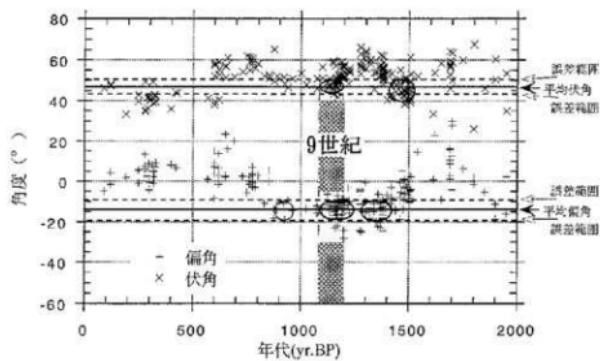


図4 考古地磁気標準データ (Hirooka, 1971 & 1983)

表1 測定結果表

偏角	交流消磁前			交流消磁(5mT)後		
	伏角	強度(10E-3Am/m)	偏角	伏角	強度(10E-3Am/m)	
1	15.8	50.0	0.00229	-19.2	52.3	0.00131
2	4.9	45.3	0.00045	1.7	31.8	0.00035
3	34.7	66.5	0.00028	8.6	19.5	0.00025
4	-108.2	37.8	0.00532	74.9	32.3	0.00517
5	13.1	49.4	0.00097	13.0	44.9	0.00063
6	-23.9	21.9	0.00287	-24.6	20.0	0.00262
7	42.7	69.3	0.00038	-21.7	18.8	0.00015
8	-20.9	60.6	0.00178	-38.8	53.4	0.00111
9	-116.5	76.0	0.00014	51.8	27.3	0.00010
10	-51.1	26.9	0.00029	-31.4	8.3	0.00015
11	-1.1	52.6	0.00029	-10.1	70.2	0.00017
12	-0.4	58.9	0.00038	6.0	52.7	0.00022
13	-31.2	50.1	0.00409	-33.8	47.8	0.00337
14	4.8	52.4	0.00081	3.0	45.4	0.00047
15	-12.0	49.4	0.00077	-19.7	43.3	0.00052
16	-26.5	50.0	0.00215	-28.3	46.3	0.00151
17	21.4	57.7	0.00217	21.2	52.7	0.00164
18	-3.7	50.8	0.01087	-3.4	49.9	0.01023
19	0.2	33.1	0.00610	-0.7	31.1	0.00550
20	4.1	49.0	0.00130	12.1	43.6	0.00093
21	-15.0	48.6	0.00143	-15.7	50.6	0.00134
22	-7.3	53.2	0.00047	-7.1	51.6	0.00046
23	4.2	62.6	0.00126	4.2	61.8	0.00120
24	-29.2	57.4	0.00137	-29.6	57.5	0.00132
25	-26.9	56.5	0.01494	-26.7	56.7	0.01472
26	-15.4	48.4	0.01922	-14.8	48.3	0.01888
27	0.6	58.4	0.00162	-4.0	57.7	0.00126
28	-5.5	43.5	0.00744	-5.0	42.8	0.00649
29	13.3	57.0	0.00420	14.1	55.9	0.00369
30	-12.9	38.7	0.00287	-12.5	36.5	0.00256
31	-14.1	41.3	0.00283	-17.0	42.5	0.00221
32	-6.1	43.0	0.00183	-13.3	41.7	0.00148
33	-3.6	38.4	0.00579	-3.6	37.9	0.00531
34	4.5	54.1	0.00229	-0.5	53.3	0.00175
35	-12.9	49.2	0.00278	-18.3	46.5	0.00235
36	-25.2	43.6	0.00239	-32.2	41.5	0.00189
37	-13.0	44.4	0.00595	-15.9	44.0	0.00486
38	1.1	42.9	0.00952	2.6	42.2	0.00878
39	30.2	49.0	0.00079	32.1	40.5	0.00067
40	-66.7	60.6	0.00365	-0.6	52.3	0.00289
41	10.3	57.4	0.00203	11.0	54.9	0.00120
42	-10.8	55.4	0.00021	-12.0	55.0	0.00016
43	-8.1	54.2	0.00053	-10.4	55.6	0.00035
44	-20.6	53.7	0.00020	-29.8	50.1	0.00015
45	8.5	58.5	0.00071	14.2	59.0	0.00045
46	-26.7	49.6	0.00425	-30.2	44.1	0.00369
47	-15.3	46.6	0.00091	-17.8	43.4	0.00076
48	-17.3	51.0	0.00114	-18.9	49.0	0.00076

49	-21.9	40.8	0.00368	-20.3	40.2	0.00191
50	-28.7	57.0	0.00120	-33.0	55.5	0.00078
51	-41.0	67.1	0.00090	-41.3	72.1	0.00060
52	43.6	73.8	0.00136	37.6	75.7	0.00109
53	40.9	56.4	0.00071	51.7	58.6	0.00049
54	-11.0	51.8	0.00308	-17.2	50.1	0.00239
55	-31.0	46.9	0.00225	-32.0	43.4	0.00194
56	2.7	54.4	0.00250	-7.1	46.5	0.00190
57	5.7	56.6	0.00113	-20.2	50.0	0.00091
58	-0.4	43.1	0.00133	-13.7	40.2	0.00093
59	-6.0	63.7	0.00128	-6.1	48.7	0.00105
60	-5.5	56.9	0.00137	2.5	47.4	0.00119
61	-16.8	47.9	0.00106	-16.6	49.4	0.00068
62	-2.2	43.5	0.00158	-28.1	50.2	0.00101
63	-8.5	58.3	0.00110	-19.6	48.1	0.00089
64	7.2	37.6	0.00085	4.1	17.5	0.00066
65	31.9	19.0	0.00055	14.1	-10.0	0.00034

平均方位(N=65) -8.8 53.3 0.0026 -7.4 47.6 0.0023
 $k=19.8 \alpha_{95}=4.1$ $k=15.8 \alpha_{95}=4.6$

3,4,6,7,9,10,53,64,65を除く
 平均方位(N=56) -8.7 52.6 0.0029 -10.5 50.3 0.0024
 $k=43.4 \alpha_{95}=2.9$ $k=36.4 \alpha_{95}=3.2$

$\delta = -14.5^\circ$ 、伏角 $= 47.0^\circ$ （消磁後）となる（図3中の■と網掛け楕円）。この平均方向と標準偏差（図3中の実線）を誤差範囲（図3中の網掛け楕円）を考慮して比較すると、西暦775年～850年（厳密には800年～850年）、875年～975年（厳密には900年頃および950年頃）、そして1025年～1075年（厳密には1050年頃）という3つの対応が認められる。このうち、西暦1025年～1075年の対応に関しては、この年代範囲の標準偏差の方向データが少ないので、信頼性は乏しいと思われる。

上記の議論からで残った2つの年代範囲のうち、どちらがもっともらしいかを、考古地磁気の生データと比較してみた。図4に Hirooka (1971と1983) のまとめた、近畿地方における過去2000年間の偏角 (+マーク) と伏角 (×マーク) の変化を示す。この図中に、小松原窯跡から求められた平均の偏角、伏角（太い実線）およびそれらの95%の信頼限界（太い破線）を描くと、楕円で示したところに偏角と伏角の対応が認められる。この図からは、西暦800年代に考古地磁気の生データが多く、その年代範囲で小松原窯跡のデータとの対応も良いことがわかる。⁹世紀前半頃の比較から小松原窯跡の考古地磁気年代は9世紀、特にその前半頃と考えた方が妥当である。

参考文献

- Hirooka, K., 1971. Archeomagnetic study for the past 2,000 years in south-west Japan, Mem. Fac. Sci. Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., 38, 167–207.
- Hirooka, K., 1983. Results from Japan, in Geomagnetism of Baked Clays and Recent Sediments, eds. Creer, K. M. et al., 150–157, Elsevier, Amsterdam.
- Maenaka, K., 1990. Archeomagnetic secular variation in Southwest Japan, Rock Mag., Paleogeophys., 17, 21–25.
- Morinaga, H., Inokuchi, H., Yamashita, H., Ono, A., and Inada, T., Magnetic detection of heated soils at Paleolithic sites in Japan, Geochaeology, 14 (5), 377–399, 1999.
- 西谷忠師、熱残留磁気による年代測定「沢田II遺跡の考古地磁気調査」、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第268集「沢田II遺跡発掘調査報告書」、94–99、岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財センター

写真図版



面整理作業



ステバ調査風景



遺跡空中写真



遺跡遠景（西から）



遺跡近景（北から）



遺跡鳥瞰写真（南から）



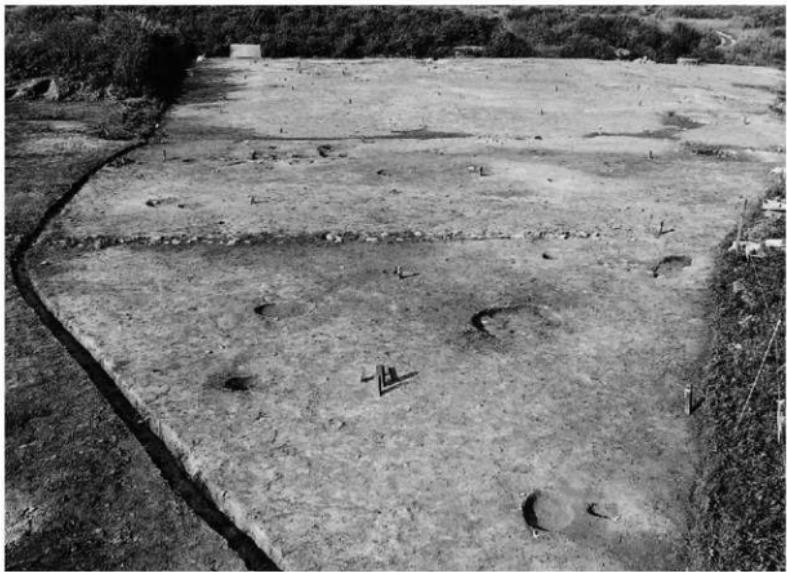
A区全景（北から）



A区全景（南から）



B区全景(北東から)



B区全景(南から)



S Q 1 窯跡焚き口付近遺物出土状況
(南西から)

S Q 1 窯跡遺物出土状況 (南西から)



S Q 1 窯跡完掘状況
(北東から)

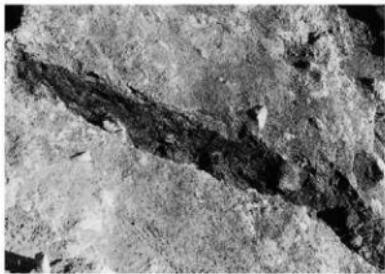


S Q 1 窯跡燃焼部船底ピット
(南から)

S Q 1 窯跡完掘状況 (南西から)



S Q 1 窯跡空中写真



S Q 1 窯跡 A-A' 断ち割り (西から)



S Q 1 窯跡 D-D' 断ち割り (西から)



S Q 2 窯跡縦断面（北西から）



S Q 2 窯跡横断面（南西から）



S Q 2 窯跡遺物出土状況（南から）



S Q 2 窯跡西側窯壁（東から）



S Q 2 窯跡焚口西側（南東から）



S Q 2 窯跡内出土遺物（南から）



S Q 2 窯跡完掘状況（南から）



S Q 2 完掘状況（北から）



S Q 2 窯跡 B-B' 断ち割り（南から）



S Q 2 窯跡 D-D' 断ち割り（南から）



S Q 2 窯跡 C-C' 断ち割り（南から）



S Q 3 窯跡完掘状況（南から）



S Q 3 窯跡C-C' 土層断面（南から）



S Q 3 窯跡D-D' 土層断面（南から）



S Q 3 窯跡芬口土層断面（南から）



S Q 3 窯跡前部土層断面（南から）



S Q 3 窯跡完掘状況（北から）



S Q 3 窯跡B-B' 断ち割り(南東から)



S Q 3 窯跡窯壁崩落状況（南から）



S Q 3 窯跡C-C' 断ち割り(南東から)



S Q 3 窯跡D-D' 断ち割り(南東から)



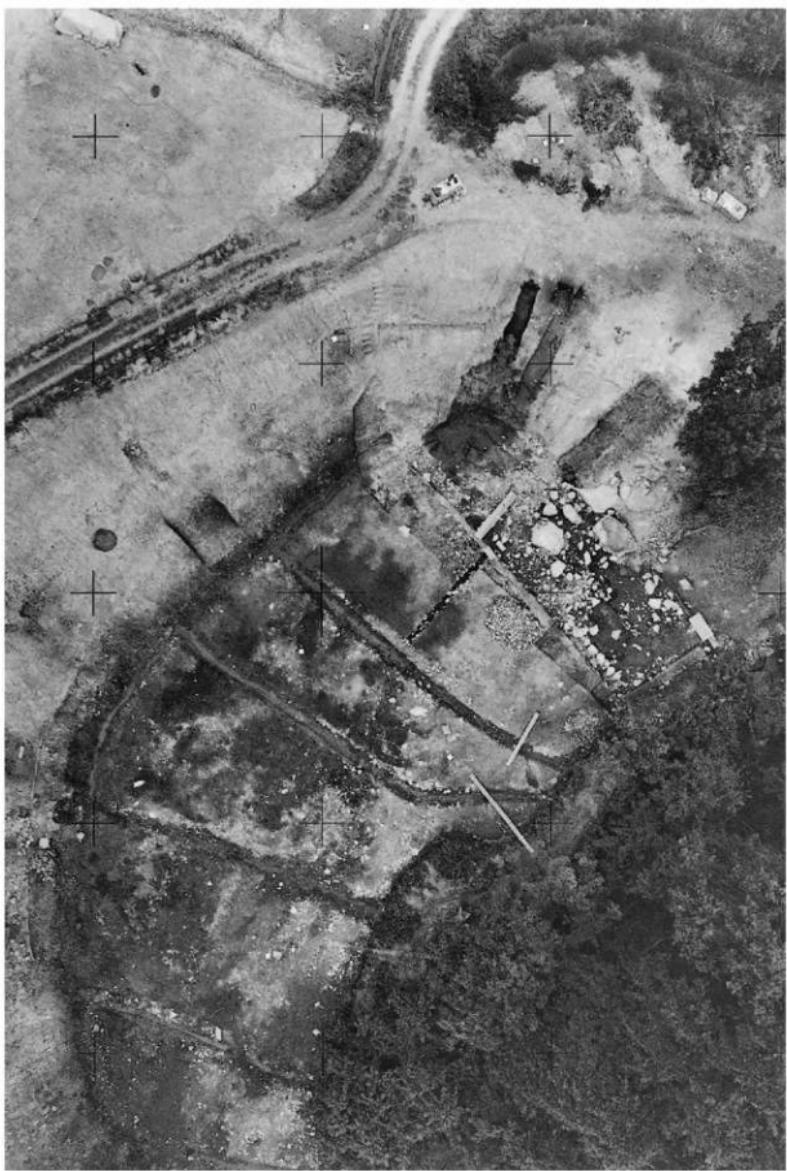
S Q 3 窯跡D-D' 断ち割り(南西から)



SQ 1・2・3 築跡完掘状況 (南西から)



SQ 1・2・3 築跡鳥瞰写真 (西から)



S Q 1 · 2 · 3 痕跡空中写真



S X 74焼壁坑遺物出土状況（北から）



S G328河川跡土層断面（南東から）



S X 74焼壁坑遺物出土状況（北から）



S G328河川跡5トレンチ遺物出土状況（北から）



S X 74焼壁坑完掘状況（東から）



S G328河川跡5トレンチ完掘状況（南東から）



S X 74焼壁坑ステップ遺物出土状況（東から）



S G328河川跡完掘状況（西から）



S G328河川跡完掘
状況（西から）



S G328河川跡完掘
状況（北西から）



S K 70土坑・S P 96柱穴（西から）



S K 76土坑（東から）



S K 80・81土坑（南西から）



S K 102土坑（東から）



S K 104土坑（西から）



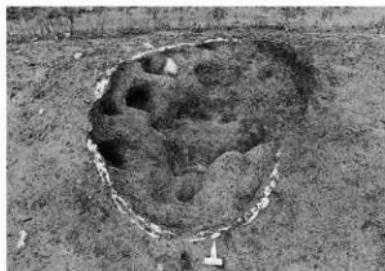
S K 108土坑（西から）



S K 121土坑（北から）



S K 140土坑（南から）



S K 150土坑（南から）



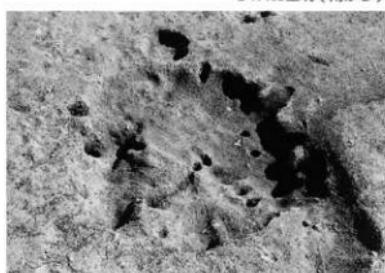
S K 166土坑・S P 167柱穴（北から）



S K 195土坑（南から）



S K 196土坑（南から）



S K 256土坑（北西から）



S K 287土坑（西から）



S K 324土坑（南から）



S K 341土坑（南西から）



R P 21-24出土状況（南東から）



R P 21-24出土状況（南西から）



R P 23取上げ後（南西から）



R P 22-23取上げ後（南西から）



S X 240完掘状況（南西から）



SP 77 (南から)



SP 107 (南から)



SP 136 (南から)



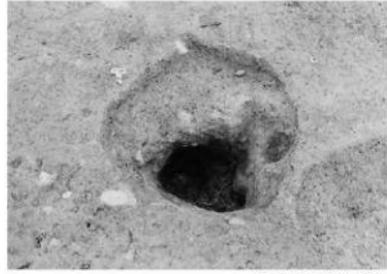
SP 177 (西から)



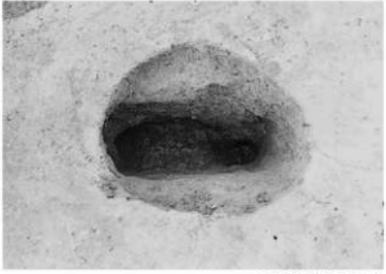
SP 205 (東から)



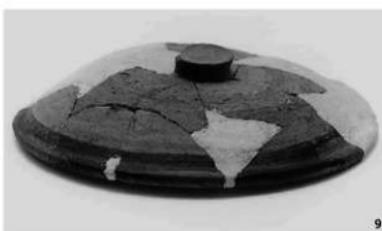
SP 209 (南東から)



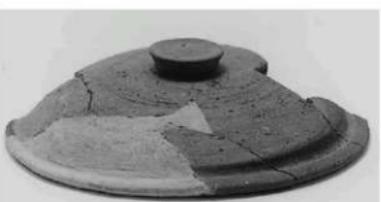
SP 245 (西南から)



SP 250 (東から)



9



10



13



14



21



22



24



29



35



39

S Q 1・S Q 2 ステバ出土遺物



45



50



40



44



52



53



54



56



57

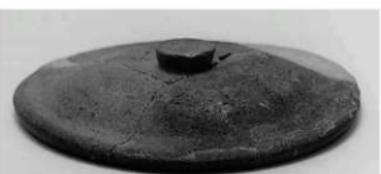


58

S Q 1・S Q 2 ステバ出土遺物(1)



59



60



61



62



66



72



75



77



89



90



80



95

S Q 2 出土遺物 (2)



S Q 2 出土遺物 (3)





153



154



155



158



159



160



161



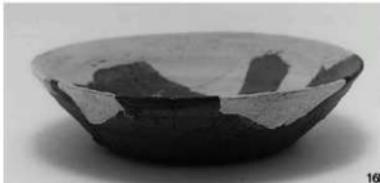
162



164



167



168



169

S Q 2 出土遺物 (5)



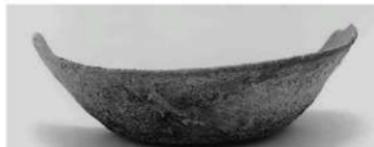
S Q 2 出土遺物 (6)



217



219



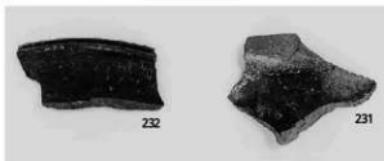
222



223



225



232

231



230



233



229



236

S Q 2 出土遺物 (7)



234



235



241



238



246



250

S Q 2 出土遺物 (8)



264



266



268



269



272



273



275



276



277



279

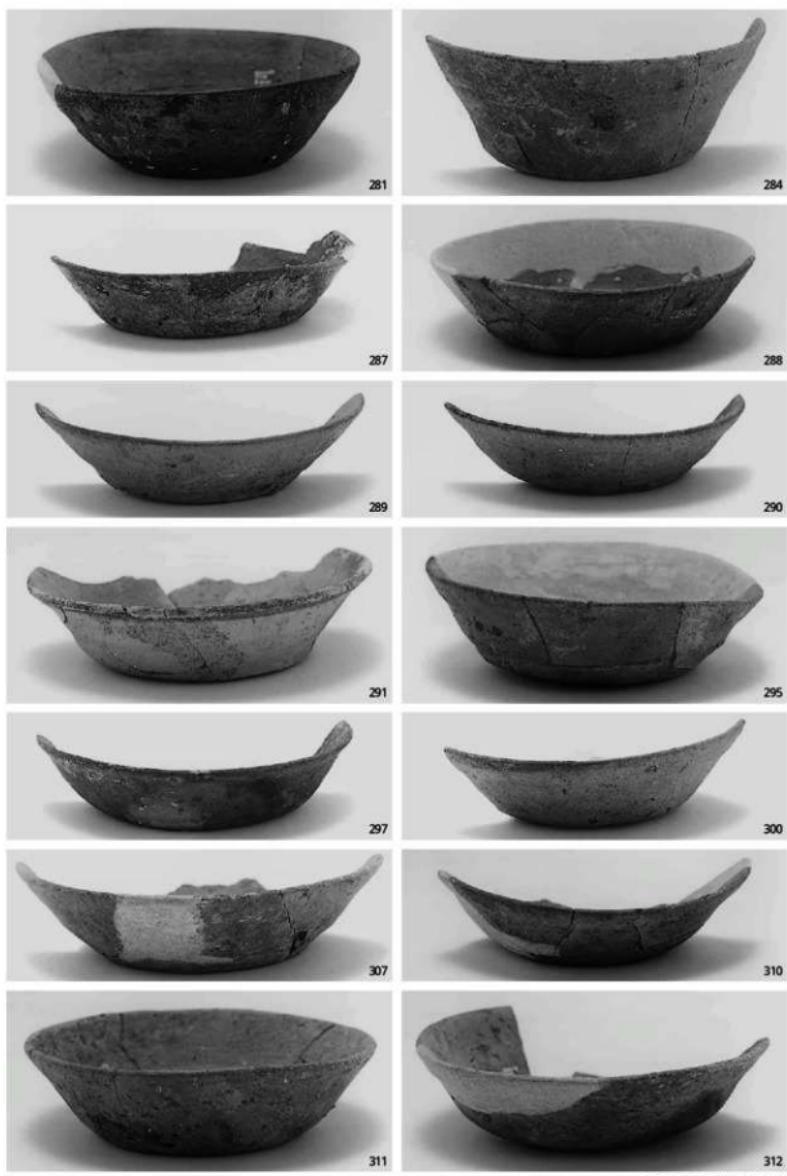


278



280

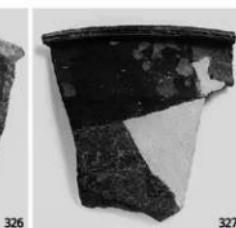
S Q 3 出土遺物 (1)



S Q 3 出土遺物 (2)

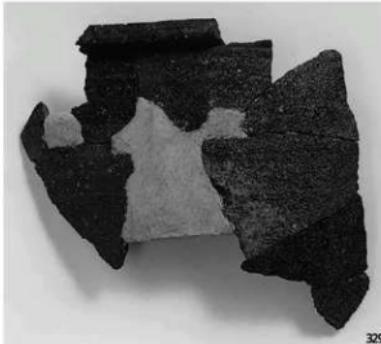


S Q 3 出土遺物 (3)



326

327



329



331



348



343



352



355



364



379

S Q 3 ステバ出土遺物



372



411



386



395



383



400



417



418



422



424

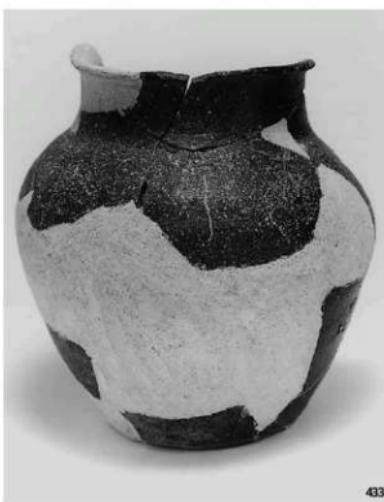


442



443

ステバ出土遺物(1)



433



444



439 · 440

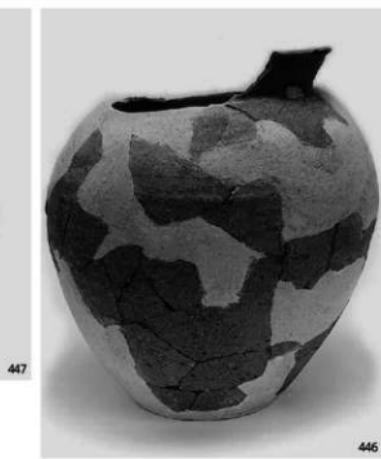


439



440

ステバ出土遺物(2)



447

446



448



452



448



452

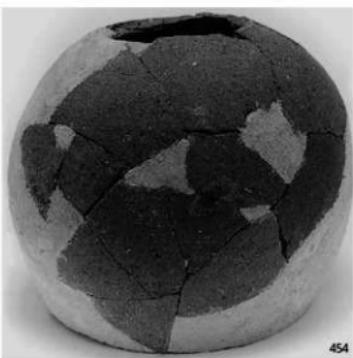
ステバ出土遺物(3)



451



471



454

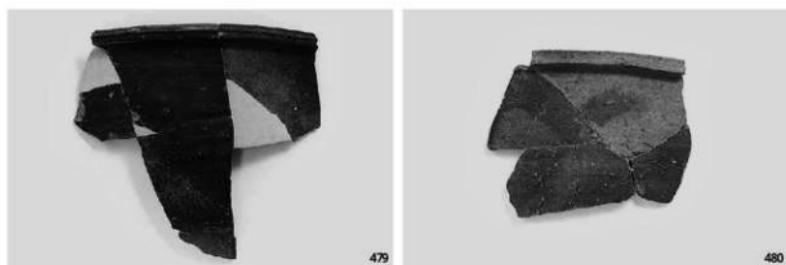


455



478

ステバ出土遺物(4)



479

480

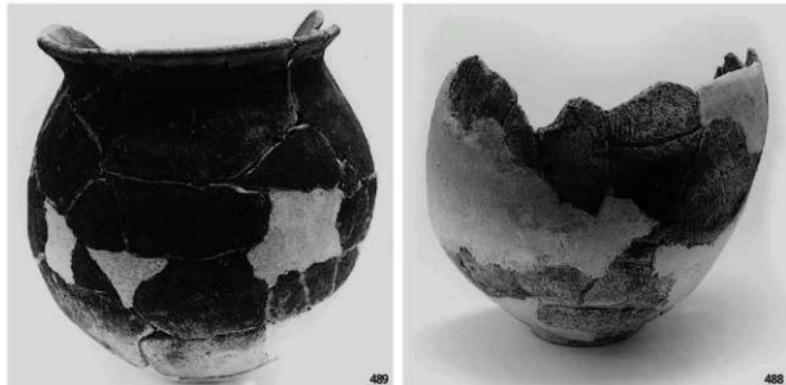


481



486

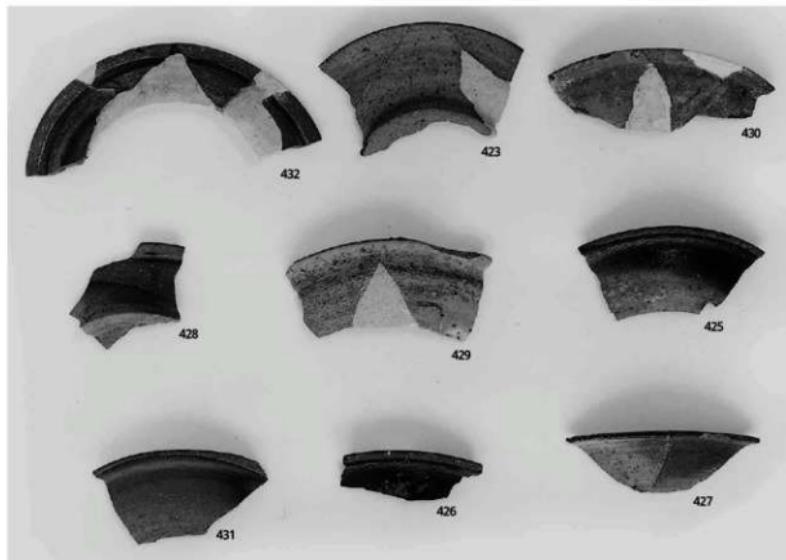
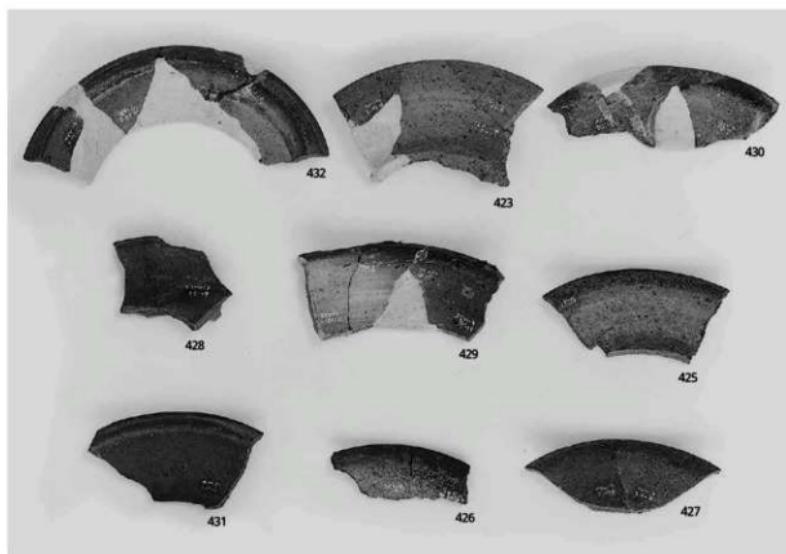
487



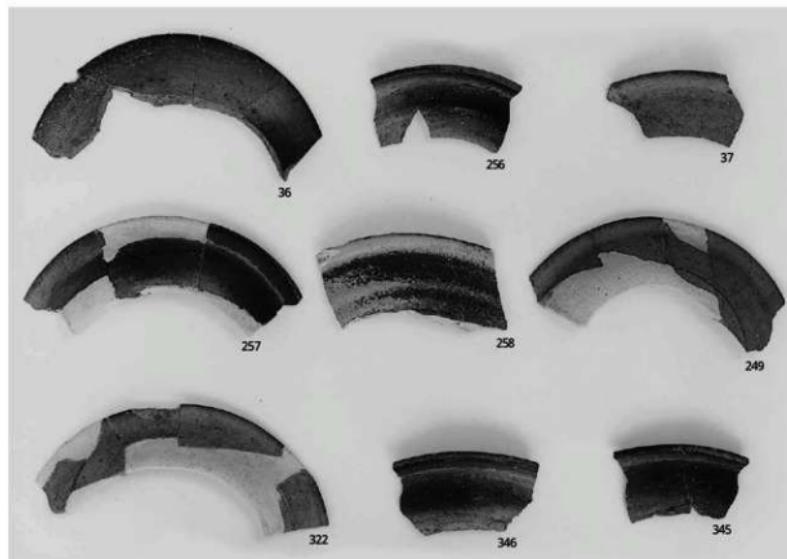
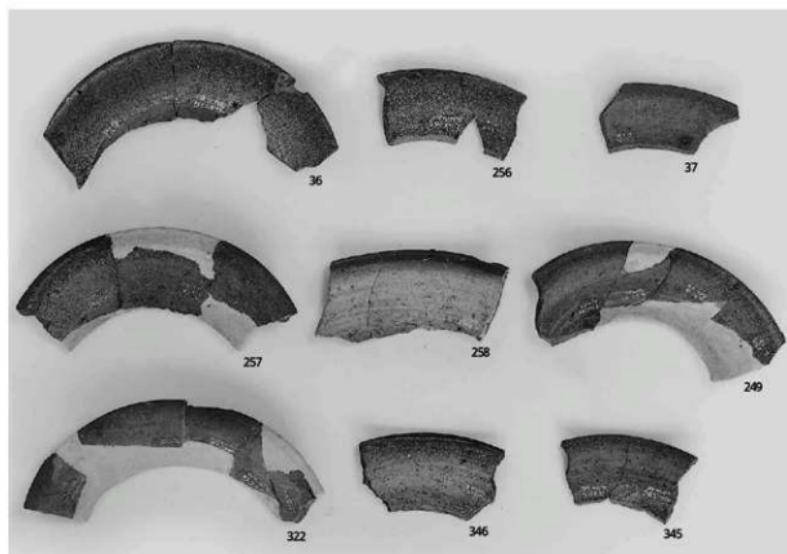
489

488

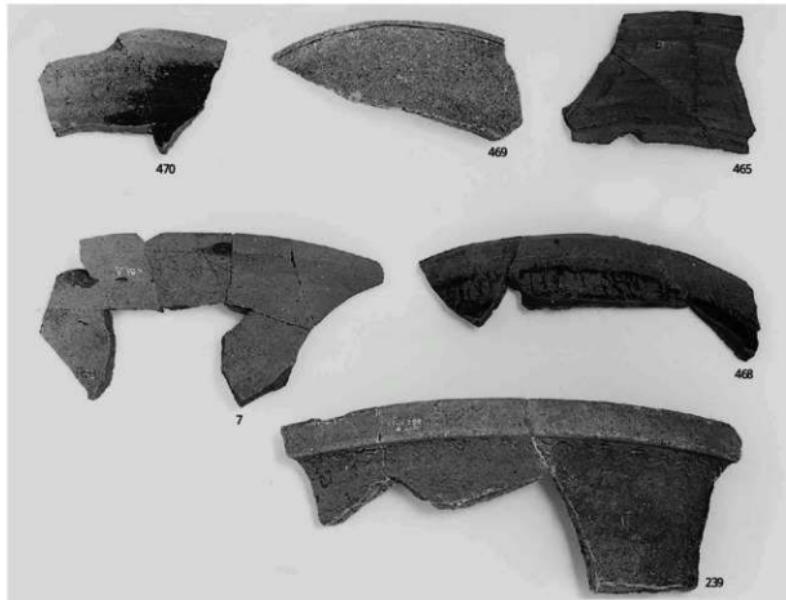
ステバ・河川跡・溝跡出土遺物



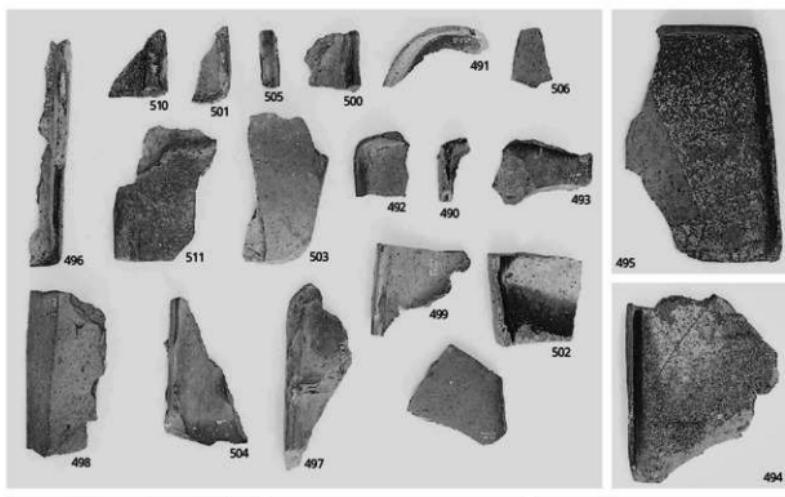
有台皿(1)



有台皿(2)



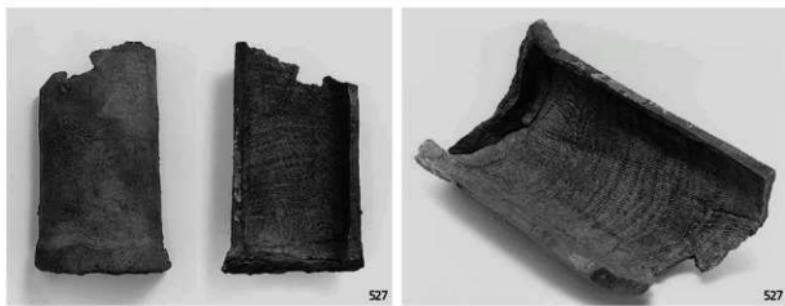
壺・瓶



風字硯

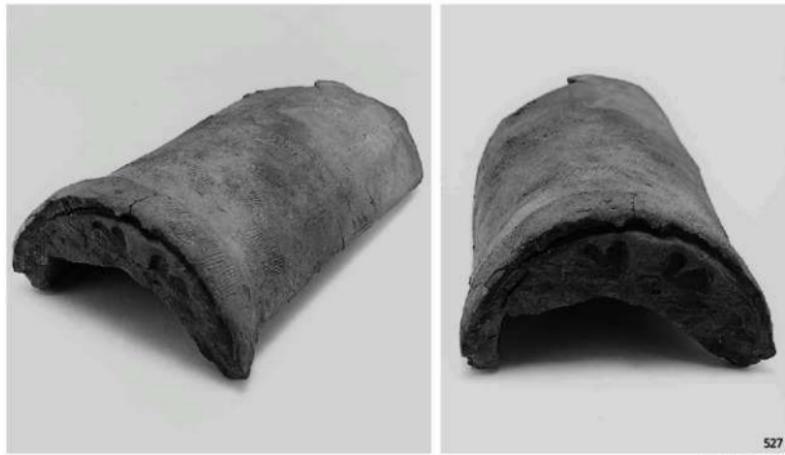


515



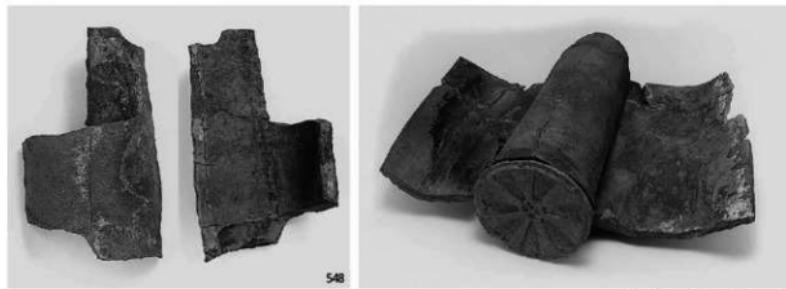
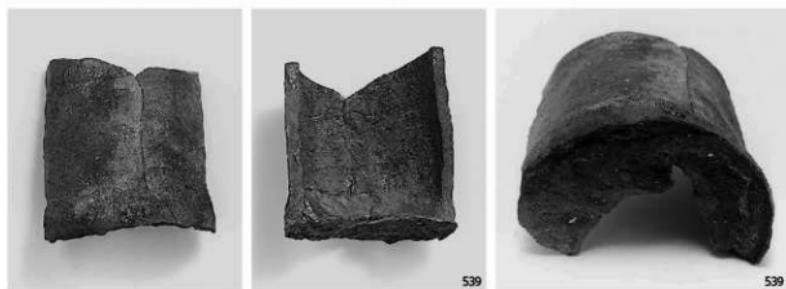
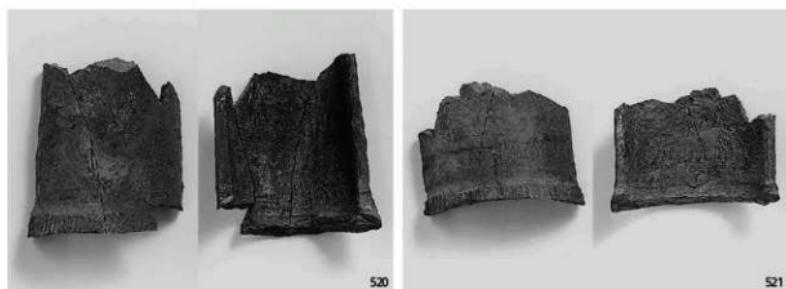
527

527



527

鐘瓦515・527



鎧瓦520・521・539・548



551



552



553



554

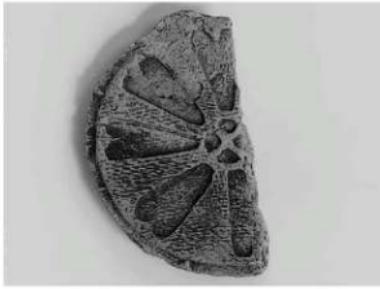
鐘瓦551~554



555



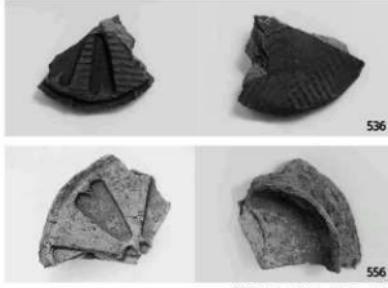
557



558

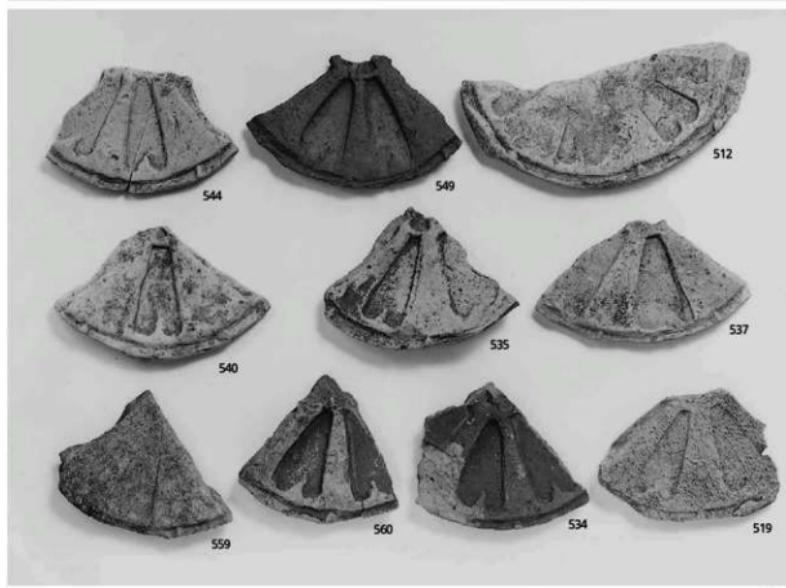
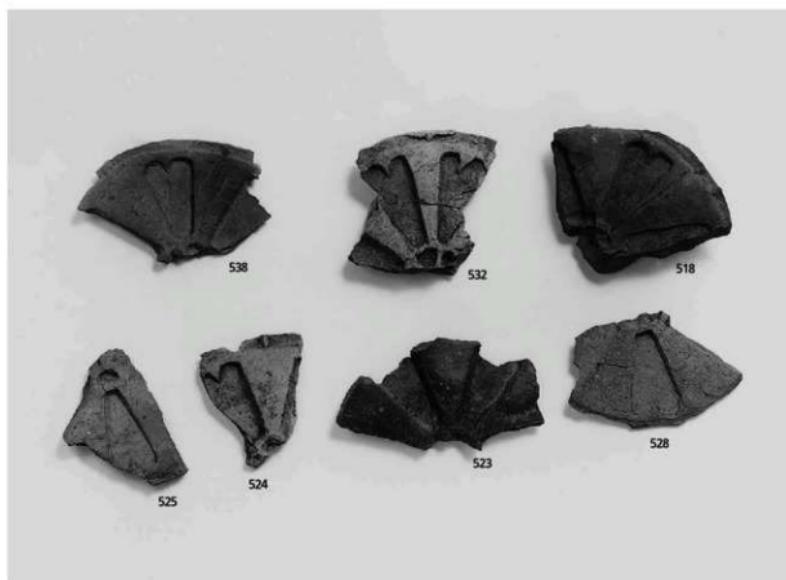


545

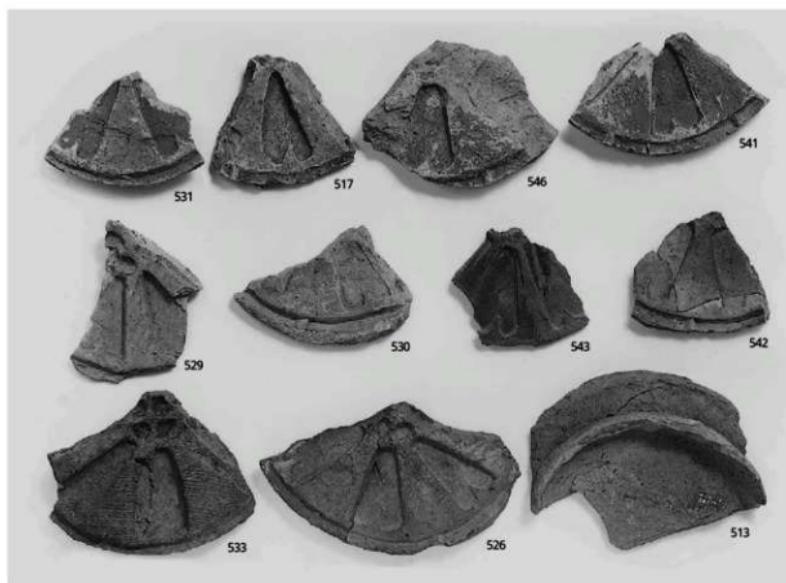


536

鎧瓦536・545・555～558



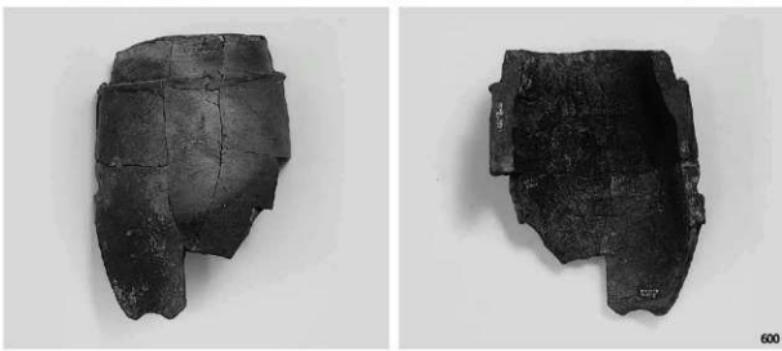
鎗瓦



鎗瓦



561



600



565

569

男瓦561・655・569・600



604



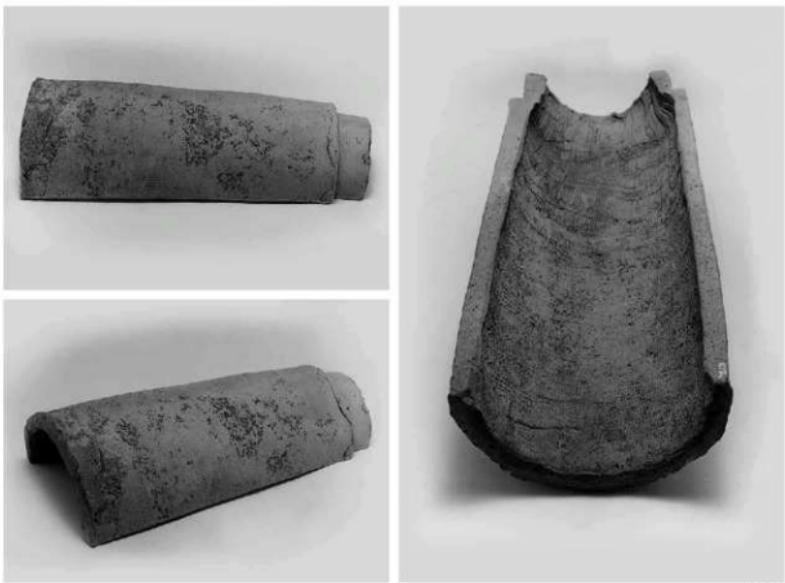
580



608

616

男瓦580·604·608·616



男瓦568



男瓦573



574



602



599



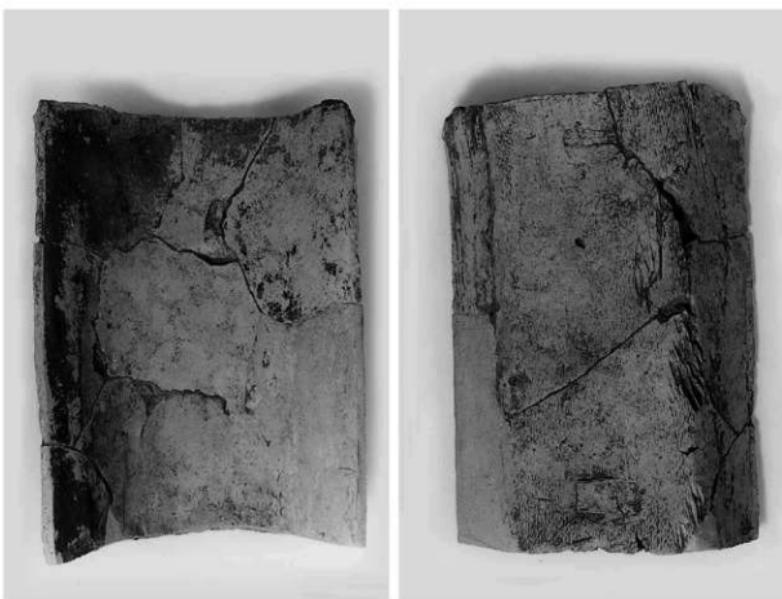
585



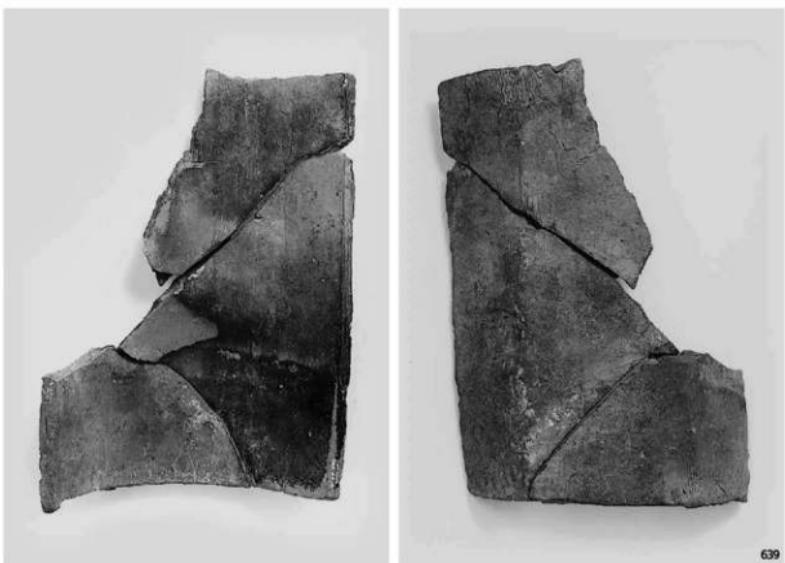
567



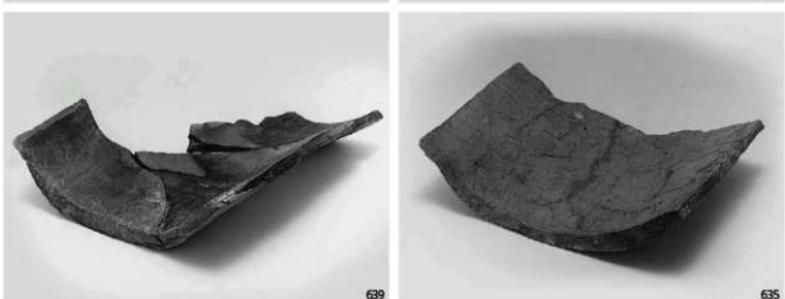
男瓦567·574·585·599·602



女瓦636

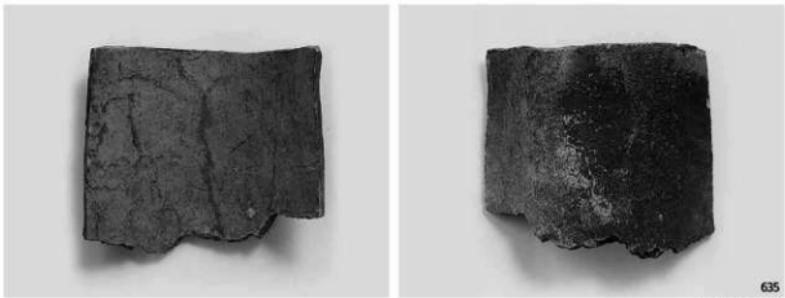


639



639

635



635

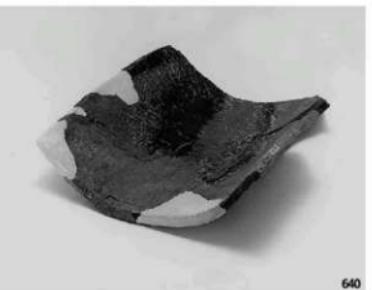
女瓦635・639



647



647



640



640

女瓦 640 · 647



651



651



651



651



641

女瓦641・651



648



648



648



649

女瓦 648 · 649



644



644



645



645



646



女瓦644·645·646

III 検出遺構（長者屋敷遺跡）

長者屋敷遺跡では、便宜上 2 つの調査区に分けて発掘調査をした。遺跡のほぼ中央を南西から北東に縦断する市道を境に、市道の西側を「西調査区」、東側を「東調査区」として進めた。両調査区で検出された主な遺構は、住居跡 2 基、土坑 20 基、性格不明土坑 15 基であった。遺構は調査区全域で検出されず、特定の場所に偏っていた。西調査区では、220~240 = 000~040 グリッドの間に、東調査区では、200~235 = 900~960 グリッドの間に偏在していた（第 2 図）。特に西調査区では土坑が中心に検出され、東調査区の遺構と様相が異なり、成立時期の違いによるものとも考えられる。

西調査区の袋状土坑について

西 調 査 区

袋 状 土 坑

西調査区の特徴的な遺構は、袋状土坑である。袋状の土坑の検出数が 4 つと限られるため土坑のタイプを明確に分類することはできないので、それぞれの特徴を述べていく。

S K 2001（第 4 図・図版 1）

平面の形がほぼ円形で、44cm ほどの掘り込みがあり、土坑内覆土に 20cm 前後の礫を含む。覆土は 3 つの層で構成される。出土遺物は、覆土 1・2 層より土器片 6・石核 3・碎片 6 である。

S K 2015（第 4 図・図版 1）

平面の形が梢円形で、長軸が 160cm ほど。64cm ほどの掘り込まれ、土坑内覆土に数 cm 程度の礫を含む。土坑の底部中央が周囲底部より 20cm ほど深い。出土遺物は、覆土 1・2 層から碎片 3 である。

S K 2030（第 4 図・図版 1）

平面の形が歪な円形で、近接する大小 2 つの土坑である。検出面では一つの長梢円形の遺構と判断したが、検出面から土坑内覆土を掘り下げる過程で 2 つの土坑となることが判明した。以前にあった性格不明の遺構を切る形で 2 つの土坑が形成されたことも考えられる。上記 2 つの土坑と同様、覆土には 20cm 大の礫や数 cm 程度の風化礫を土坑底部に含む。出土した石器は、石匙 1・二次加工痕のある石器 1・碎片 20 である。石匙は覆土 2 より、二次加工痕のある石器は覆土 13 の底より出土した。出土土器は、土器片が 30 点で大半が覆土 6 から覆土 7 からである。その他の土坑

S K 2031（第 3 図）

長軸 1.8m、短軸 1.2m のやや梢円形の性格不明遺構で、ほぼ垂直に半円状に掘り込まれている。底部はほぼ平坦で深さ 50cm。覆土は基本的に 3 つの層で構成され、レンズ状に堆積している。出土遺物は、土器片 20・碎片 5 である。土器片は、覆土 3 の最下層中より全て出土し、その標高は 190.50~190.65m の間である。碎片は覆土 1 と 2 の間より検出された。

S K2029 (第3図)

直径1mほどの平面形で検出面より30cmほど掘り込まれた浅い土坑。覆土は3層で構成される。覆土2と3より土器片4・碎片10を出土した。

S K2003 (第3図)

平面形は楕円形で、長軸1.6m短軸1.2m程である。ほぼ垂直に60cm掘り込まれ4層の覆土がほぼレンズ状に堆積する。この土坑から土器片8・搔器1・石核12・碎片3が出土した。土器片は最下層の4層から全て出土した。石核は第2層内の下部、検出面より40cm下の標高190.22mより検出された。頁岩の石核である。

以上、西調査区の遺構の特徴としては、土坑群を中心とする遺跡であること、しかも、その土坑群は西調査区の中で一番高い場所に集中していること、遺物の特徴としては、土坑内の土器は縄文時代前期末葉のものが大半であることなどである。

東調査区 東調査区の住居跡、土坑、性格不明の遺構について

豎穴住居跡 S T900 (第5図・図版2、3)

東調査区の西よりの最北端部で平坦面から急激に落ち込む際あたり、 $200 - 210 = 940 - 950$ グリッドに位置し、第II層疊・細砂を含む赤褐色シルトを掘り込んで作られている。平面形は不整の長方形を呈し、西側隅がやや角張っている。遺構の北側は不動川に向かって落ち込みが始まり、地面が動くなどして遺構は確認できなかった。壁は東・西とも緩やかに傾斜し、壁高は15~20cmである。遺構南辺中央部に浅い窪みが突出している。床面は東から西にかけて緩やかに傾斜し、中央付近でやや深くなり再び緩やかに西に上がっていく。同様に南から中央部にかけて床面が緩やかに傾斜し再び北に向かって上がっていく。この遺構の東側隅にある土坑S K702(第5図)は、この住居跡の壁を切っている。この住居跡に伴う遺構か判然としないが、豎穴式住居跡は、この土坑と同時期かより古いとも考えられる。S T900の出土遺物は、土器口部と土器片合わせて50・碎片60・石器1・石匙1・凹石1が出土した。土器口部を含む土器片群は床面より検出した。S K702からは、土器片30・碎片6が覆土1・2・3層より出土した。

S T901 (第6図・図版2)

遺構が集中する東調査区の北部中央部、 $210 - 220 = 920 - 930$ グリッドの間に位置する。第II層疊・細砂を含む赤褐色シルトを掘り込んで作られている。平面形は、南端部で一部突出するが、ほぼ円形である。壁は西から北にかけて以外は緩やかに立ち上がる。壁面は凹凸がないこと、他の遺構との切り合いもないことにより住居の作り替えがないある特定の時期に作られたものと推察できる。

覆土は5つの層に区別できるが、第4層と第5層は基本的な3つの層に一部攪乱的に検出されると袋状土坑S K732以外には確認されないことにより、基本的には3つの層が中心となる。それは、その3つの層の第1層は褐色シルトあるいは暗褐色シルト、第2層は暗褐色シルトに褐色シルトが混じる層、第3層は灰褐色シルトと暗褐色シルトの混合土である。第1層から第3層までほぼ水平堆積ではあるが、住居跡遺構の両端で各層が立ち上ることや遺構内ピットの堆積も考慮すると、幾分のレンズ状堆積とも考えられる。遺構中央には焼土が確認され、その焼土は袋状土坑S K732を一部覆っている(図版2の長者屋敷遺跡S T901全景矢印↑)

N E)。また、遺構内に伴う柱穴は S P 1060 ~ S P 1063まで 4 つある。径 28 ~ 48cm・深さ 12 ~ 24cm で半円形に掘り込まれている。竪穴住居跡 S T 901 の出土遺物は、体部中半から底部にかけての土器小鉢 1・土器片 100・石鎚 3・碎片 16 である。覆土 2 と覆土 3 の床面から土器と石器が共伴する。袋状土坑 S K 732 の出土遺物は、土器片 50・碎片 6 である。竪穴住居跡 S T 901 の床面が出土した土器と袋状土坑 S K 732 から出土した土器の特徴から、同時期に成立したか、S K 732 に土器を廃棄後にこの住居を使用したとも考えられる。

S K 1050 (第 5 図・図版 5)

平面形がほぼ直径 1m の円で、検出面より深さが 44cm の半円状の堀り込みである。最深部の標高は 183.560m であり、自然堆積と考えられる。覆土 1 の上面から覆土 2 の上面にかけて粗製の土器片 (第 19 図 1) を出土した。性格不明遺構 S X 510 (第 3 図 東調査区) に付随する遺構か、竪穴住居跡 S T 901 に関連する遺構かは不明であるが、S T 901・S X 510 と同時期の特徴を持つ土器が伴出した。

S X 502 (第 7 図・図版 5)

体部中半から底部が残存する土器と体底部が残るほぼ完形埋設土器 (第 17 図 1・第 20 図・図版 23-1・2) は、正立のものに一方の土器が横向きの状態で出土した。この遺構は 2 回の擾乱を受けたが、擾乱を免れた場所に残存したものと考えられる。覆土はレンズ状に堆積している。

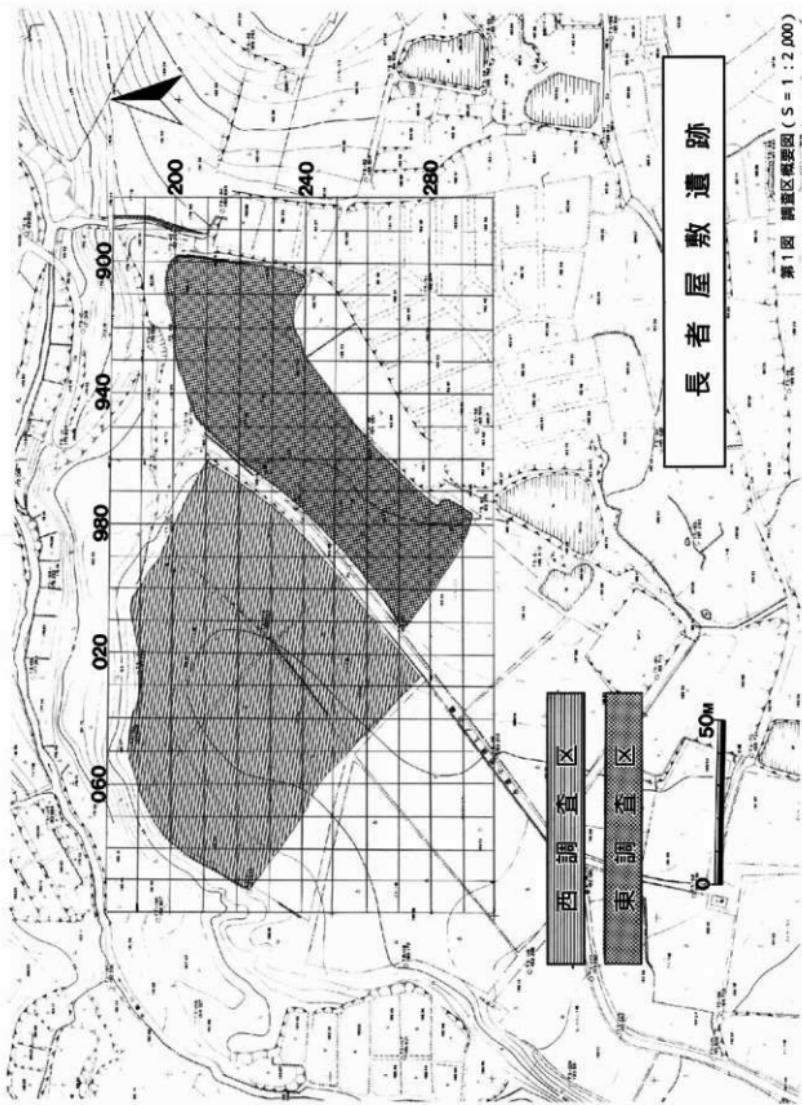
S X 513 (第 8 図・図版 3、4)

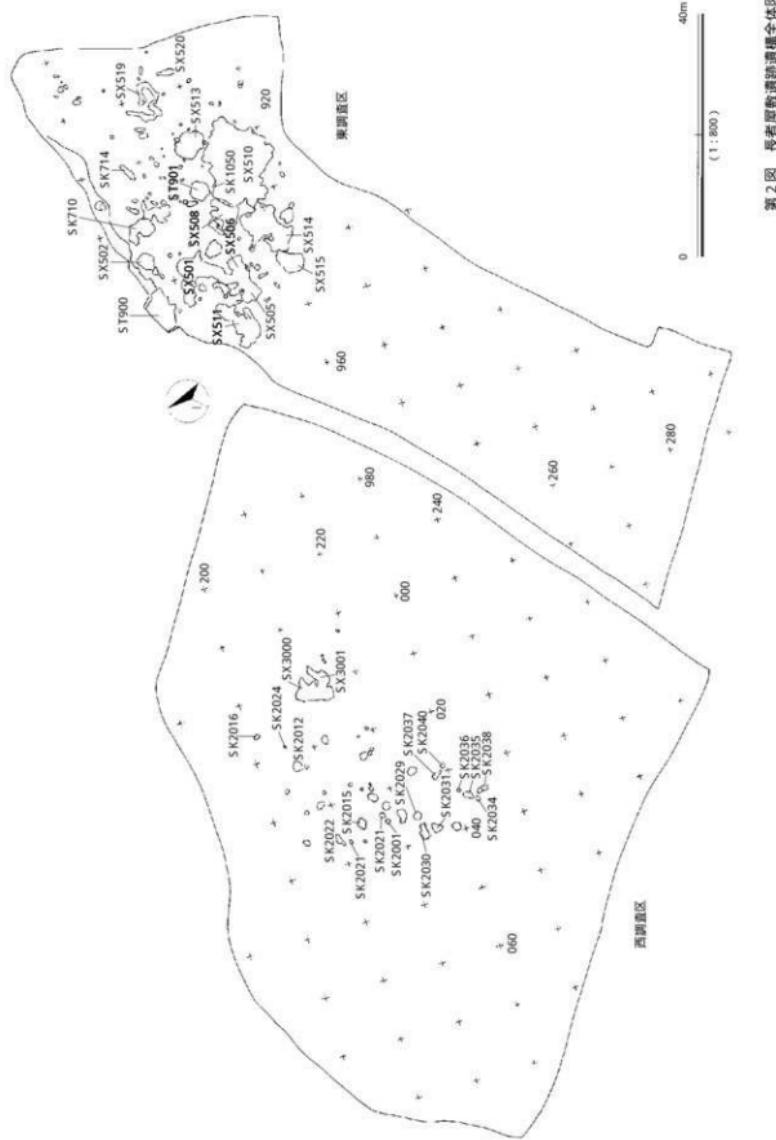
平面の形が歪な橢円形の遺構で、長軸 4.88m・短軸 3.6m である。遺構は南西から北東の向きには水平に掘り込まれているが、南東から北西方向では南東にかけて緩く傾斜している。西の壁と東の壁に掘り込まれた 2 つの穴 (S P 1057 他) 遺構中央部を中心に 4 つの穴 (S P 1054・1055・1056・1059) が検出された。径 32 ~ 48cm、深さは 8 ~ 24cm である。遺構の各ビットは炭化物を含む覆土 1 と炭化物あまりを含まない覆土 2 で充填されているが、構円に堀り込まれた大部分の遺構は、覆土 4・5 の堅くしまった層である。S P 1056 の南にある土坑と遺構の壁面が欠けている S P 1059 の北側は、ブドウ棚アンカーなどによる擾乱である。出土遺物は、土坑 S K 725 より土器片 90 (第 14 図 3・4)・碎片 5、その他遺構内より土器片 12・碎片 6 である。S K 725 の覆土 1・2 から集中して出土することから土器の捨て場とも考えられる。

S X 514 (第 9 図・図版 4、5)

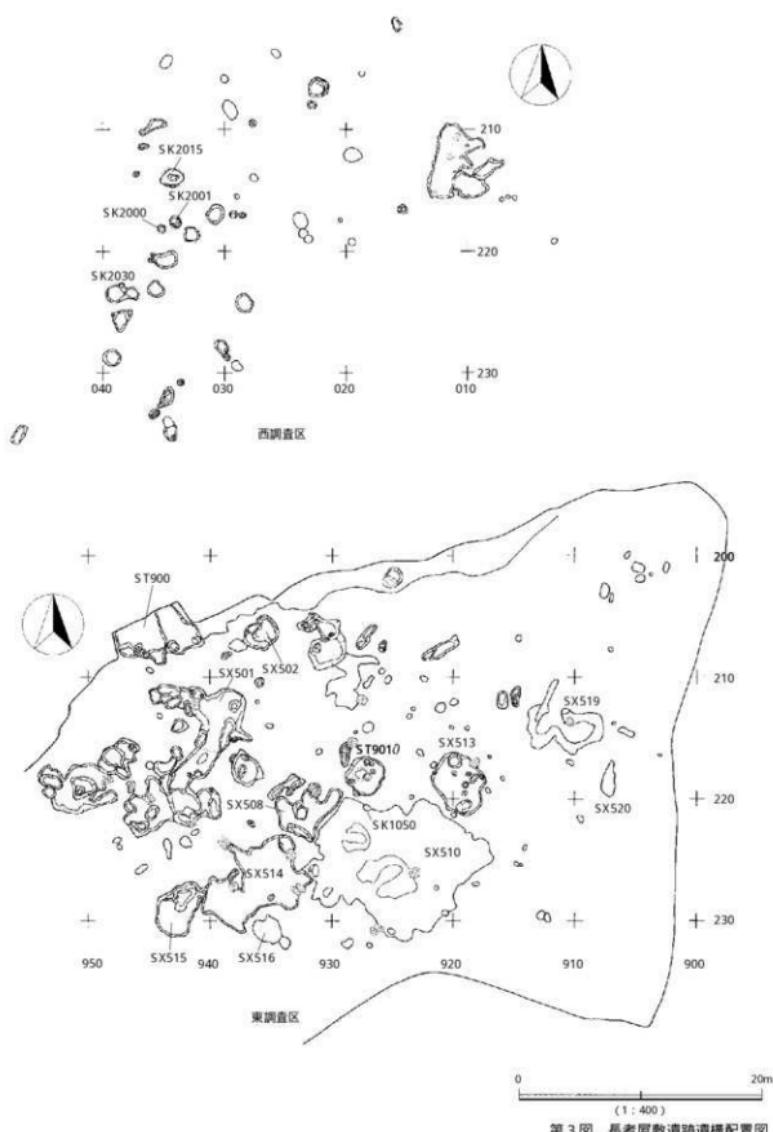
平面形が不整の遺構で、ブドウ棚アンカーによりかなりの擾乱を受けている。土坑 S K 721 と 225 ~ 228 = 933 ~ 935 グリッド間の 6m² の長方形から大量の土器片 250 (第 14 図 1・5・7、第 15 図 4、第 18 図 1) と石鎚 1 (第 21 図 8)・箇状搔器 1 (第 22 図 2)・磨石 1 (第 23 図 2)・石皿 1・碎片 12 が出土した。S K 721 外の土器片は狭い区域で出土し、しかも、覆土 1 からの出土のため、人為的に破棄されたものかどうかは不明である。土坑 S K 721 からは土器片 60 が出土した。

以上、東調査区の特徴としては、竪穴住居跡などの検出からある一定期間人々が生活した遺跡であること、また、竪穴住居跡から出土した土器は、縄文時代後期中葉のものが大半であることなどによりその時期に関わる遺跡と考えられる。しかし、出土数としては少ないが、縄文時代前期末葉の特徴をもつ土器や中期後半の特徴をもつ土器が共伴する。

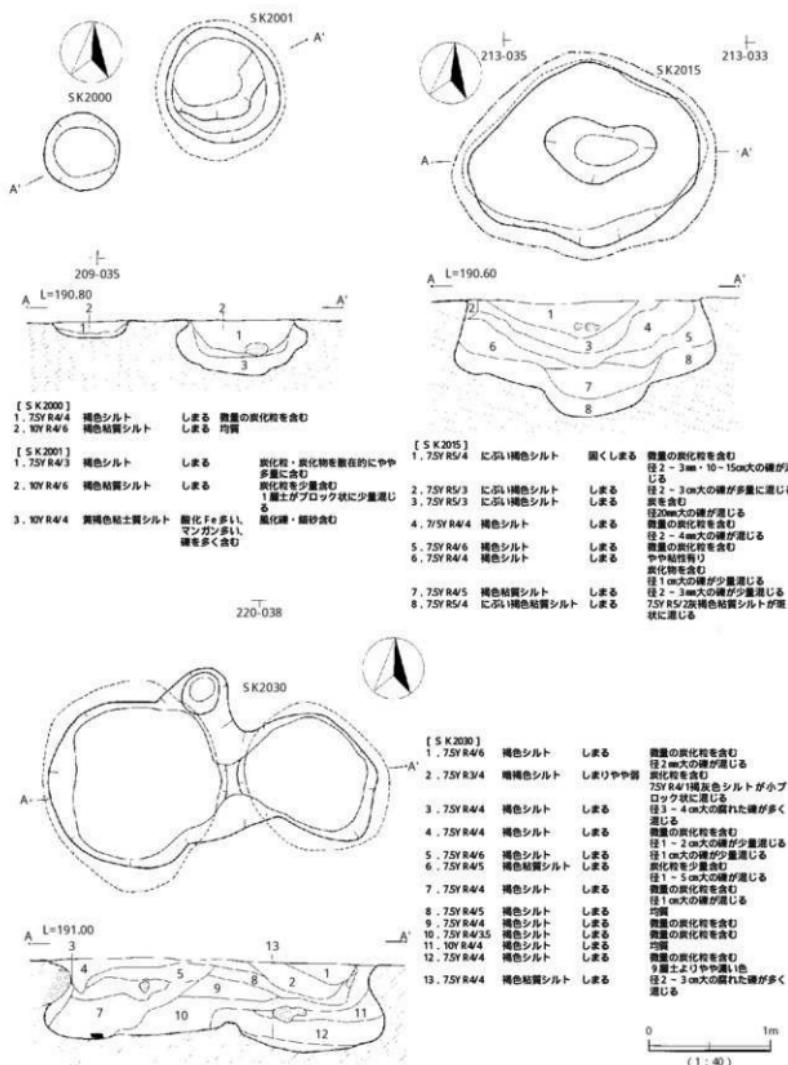




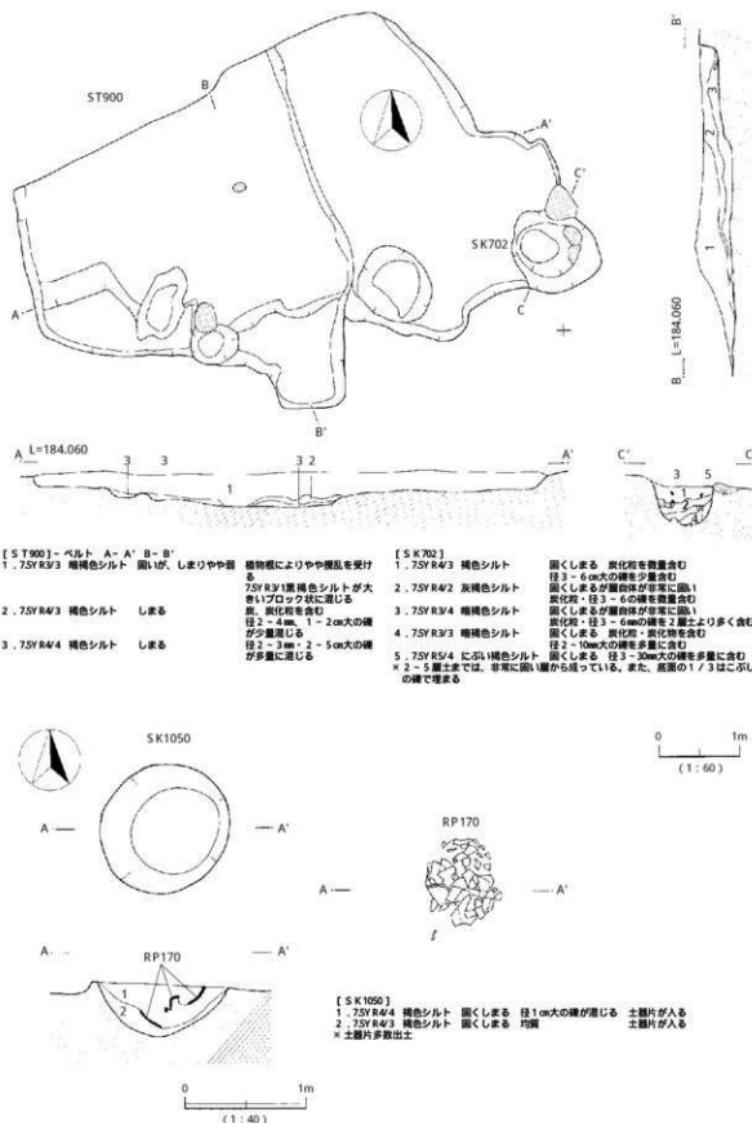
III 検出遺構（長者屋敷遺跡）



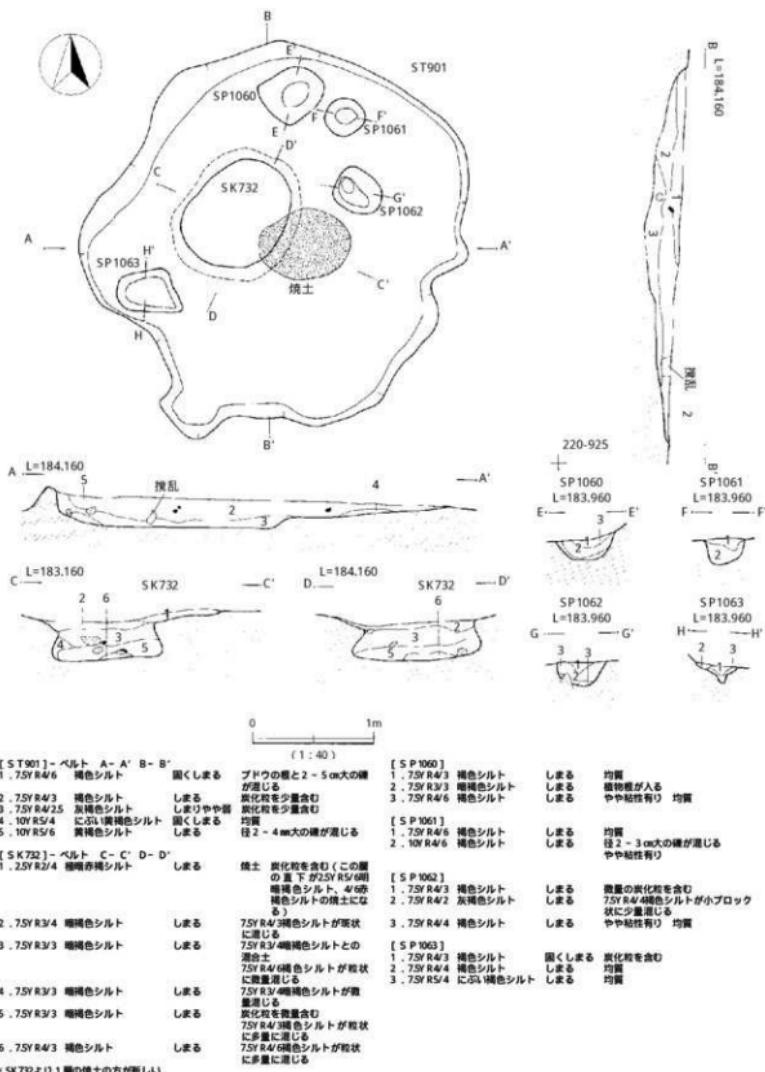
第3図 長者屋敷遺跡遺構配置図



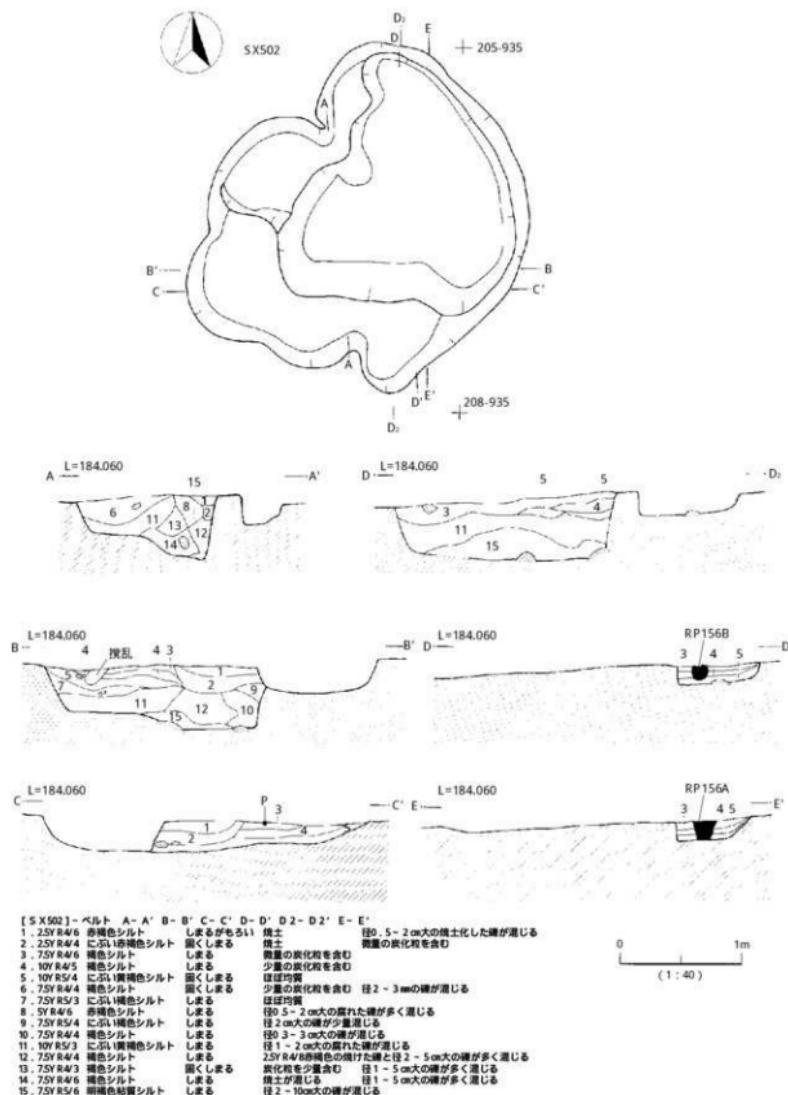
第4図 貯蔵穴土坑群



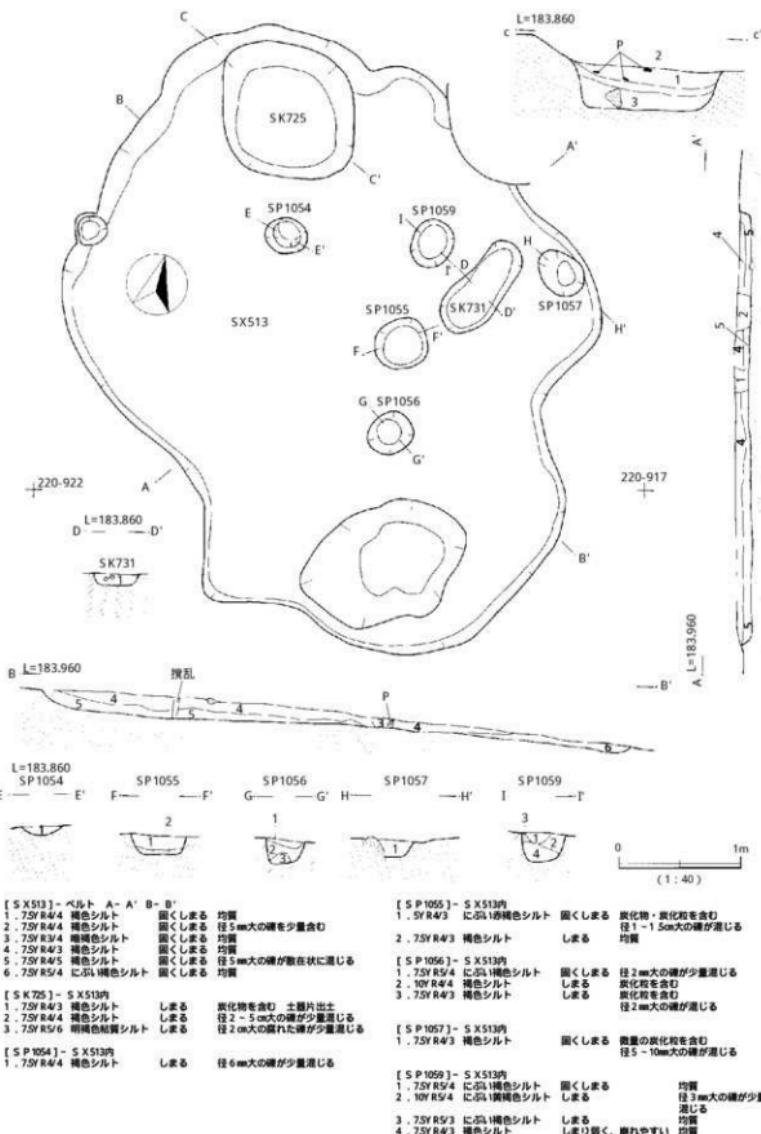
第5図 東調査区 S T900・SK1050



第6図 東調査区 ST901・SK732他

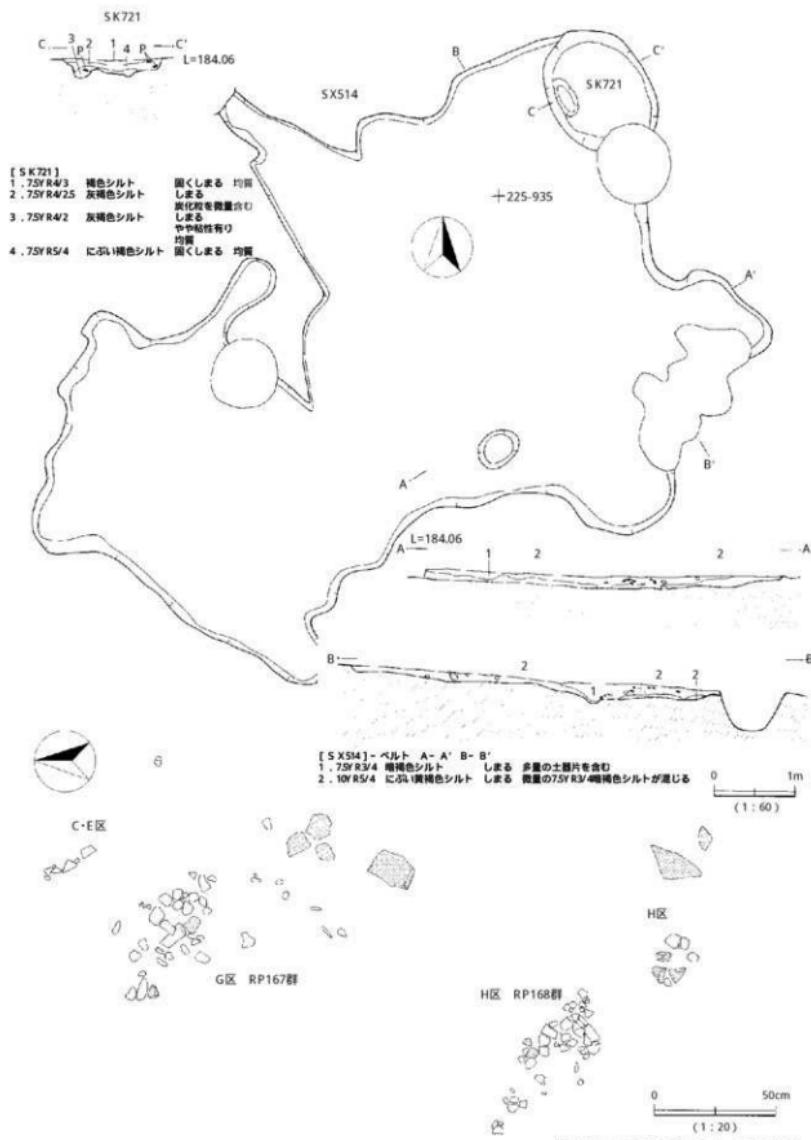


第7図 東調査区SX502



第8図 東調査区S-X513

III 検出遺構（長者屋敷遺跡）



第9図 東調査区 SX514・SK721

IV 出土遺物（長者屋敷遺跡）

長者屋敷遺跡から出土した遺物は、遺物の総数が1,571点で、その内訳が縄文土器1,053点、石器506点、近世陶磁器12点などである。遺物の出土状況は、遺構の周辺部はややまとまりを持つて出土しているが、その他の地区は散在し、遺存状態は全体に良くない。

(1) 縄文土器（第10～20図 図版21～28）

中でも縄文土器は表面の磨耗が激しく遺存状態が最も悪く、文様など識別の可能なものと遺構内から出土した43点について選別し掲載した。土器の分類は概ね3つに大別され文様などによって細分した。

1類土器：縄文時代前期未葉の大木式に相当する時期である。

1 a類（第10図1～4）半截竹管による爪形文で渦巻文様などを構成し、器形が深鉢の台付 半截竹管鉢になる一群である。

1・4は細い粘土紐を貼り付け、恐らく半截竹管の押引きによる爪形が施されている。結節沈線に似た押引きの爪形文の平行沈線(2)、竹管の背で沈線を施し頸部には竹管による円文を施す(3)などがある。

1 b類（第15図6 第16図1～4 第17図1）器面全体に地文が縄文を施す。

6は口唇に縄文を施し、頸部付近では羽状縄文となり0段4本の多縄文で、粗製土器を呈す 多縄文器。3はR L付加縄文が、1・4はL R縄文、2はR L縄文をそれぞれ施している。恐らくは（第17図1）も表面全体に縄文が施されていたとみられる。中には精製土器の地文を構成しているものもある。

1 c類（第10図5 第11図1 第12図1～3）表面全体が無文の粗製土器である。

表面が摩滅しているため文様構成が分かり難い、第12図2は全体を指先による指頭圧痕によって仕上げられ、裏面も丁寧に研磨調整されている。他も同様な造りと見られる。

2類土器：縄文時代中期後半の大木式9（新）に比定される。

2 a類（第13図6 第14図1）充填縄文によるC字・U字文様を構成する。

6は器形が小形鉢で恐らく4単位の波状口縁を呈するとみられ、文様構成が横位のU字文となり、L R充填縄文が施されている。底部は中ほどが上げ底で縄の圧痕が見られる。表裏面とも良好研磨調整され丁寧な造りである。1はU字文を示し充填縄文が施されている。

2 b類（第13図4）器面全体を縱位の縄文を施す粗製土器である。

4は深鉢の底辺部でL R縄文が斜位回転に施す。

3類土器：縄文時代後期中葉の宝ヶ峰式の時期に対応する。

3 a類土器（第13図1・3 第14図2・3 第15図1～4 第17図2）1条から3条の平行沈線によって主に頸部から体部にかけて文様が描かれ、平行沈線の間を弧線で区切る文様になり、横位回転の磨消縄文が主体となる。

磨消縄文

第13図3と第14図2・3は突起状の波状口縁が1単位若しくは3単位付けられる。R L縄文の（第13図1）やL R縄文の（第15図1～4）などある。胎土の焼成が良く硬い。第17図2は

口縁から頸部にかけて大きく外反する深鉢になり、丁寧な研磨調整がなされている。頸部には1条の沈線が巡り口縁部と体部を区別している。体部には横位回転のL R繩文が見られ中下半では斜位の回転となる。

3 b 類土器（第13図2 第14図4～7）器形は口唇から口縁にかけて内弯する鉢形を示し、沈線によって区画されS字状に反転し垂下する文様など描出される。3 a 類と同様に横走する磨消繩文が主体である。

土器の表面はやや摩滅しているが胎土の焼成も良く、表裏面とも良く研磨調整がなされ丁寧な造りである。第14図4・6・8はL R繩文でR L繩文が（第14図7）である。

3 c 類（第15図5・7・8 第18図1 第19図1 第20図1）器面全体に横走する繩文が施される粗製土器の一群である。

研磨調整 口縁は、口唇直下から繩文を施す（第15図7）と（第18図1）が有り、第15図5は口唇が第15図8では口縁部がそれぞれ研磨調整されている。底辺部が横方向に丁寧に調整された（第19図1）と（第20図1）がある。（第15図8）は繩文が継位方向の羽状になり、L R繩文が（第15図5）・（第18図1）・（第19図1）・（第20図1）で、第15図7はR L繩文となる。

4 類土器（第13図5 第16図5～6）底部を一括した。

第13図5と第16図5は手捏土器で、第16図7では底辺が直しし内弯する特徴から三点とも3類土器の時期に相当するが、第16図6は時期不明である。

(2) 石器（第21～24図 図版34～35）

本遺跡から出土した石器は、住居跡などの遺構及びその周辺部からのものが殆んどで、中でも完成品など24点を掲載した。

石鎌（第21図1～9）形態は基部に抉入のある（2～8）有茎の石鎌が（1）折損により基部が不明な（9）がある。3～6は繩文時代前期、7・8が繩文時代中期、1・2で繩文時代後期以降にそれぞれ相当する時期である。

石匙（第21図10～13）摘みを上方に置いたときに側縁が刃部となる縦形の（10・11）、さらに下端が尖頭器のようになる（13）、同様に示したとき下端の縁辺が刃部になる横形（12）がある。13が繩文時代前期、10・11で繩文時代中期、12は繩文時代後期にあたる。

石箇（第22図2）短冊形で刃部が片刃状で丸みがあり、両面加工で調整が素材の全体を覆っている。繩文時代中期の時期に当たる。

横形剥片

削器（第22図3）剥片の縁辺に連続的に調整加工を施して刃部を作出し、横形剥片を素材としている。恐らく繩文時代中期の時期に相当すると見られる。

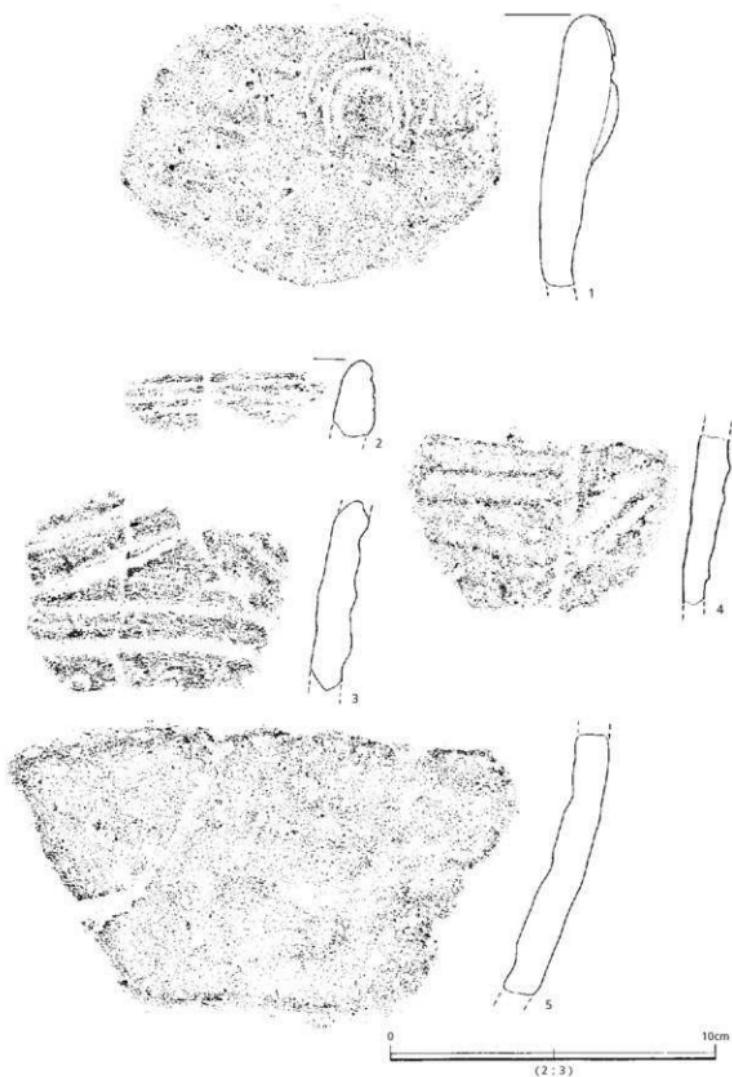
搔器（第22図4）縦形剥片を素材とし、一方の側辺を片面加工の調整を施す。繩文時代に属するが、詳細な時期は不明である。

石核（第24図2～4）いずれもが石核片で3点出土している。時期は不明である。

砥石（第22図1 第23図3）1は3面を、3は1面をそれぞれ磨面としている。

磨石（第23図2）片面が良くなじんで擦っている。繩文時代中期の所産と見られる。

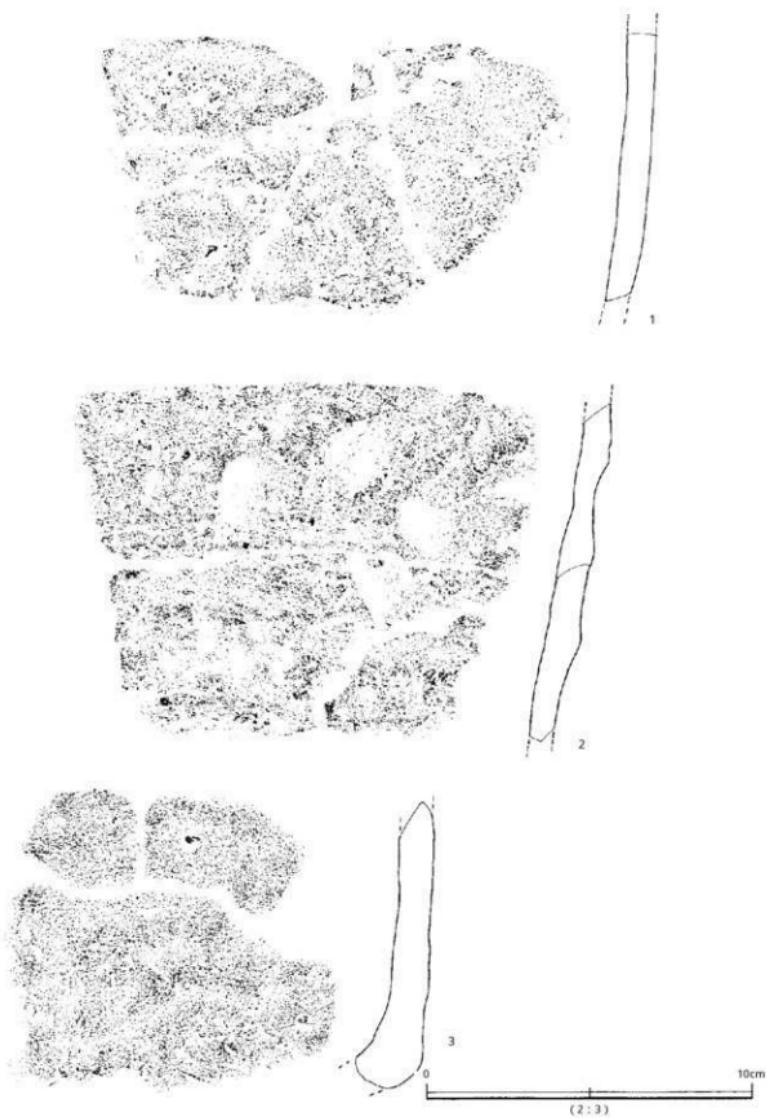
凹石（第23図1 第24図1）使用後に磨石として転用している。



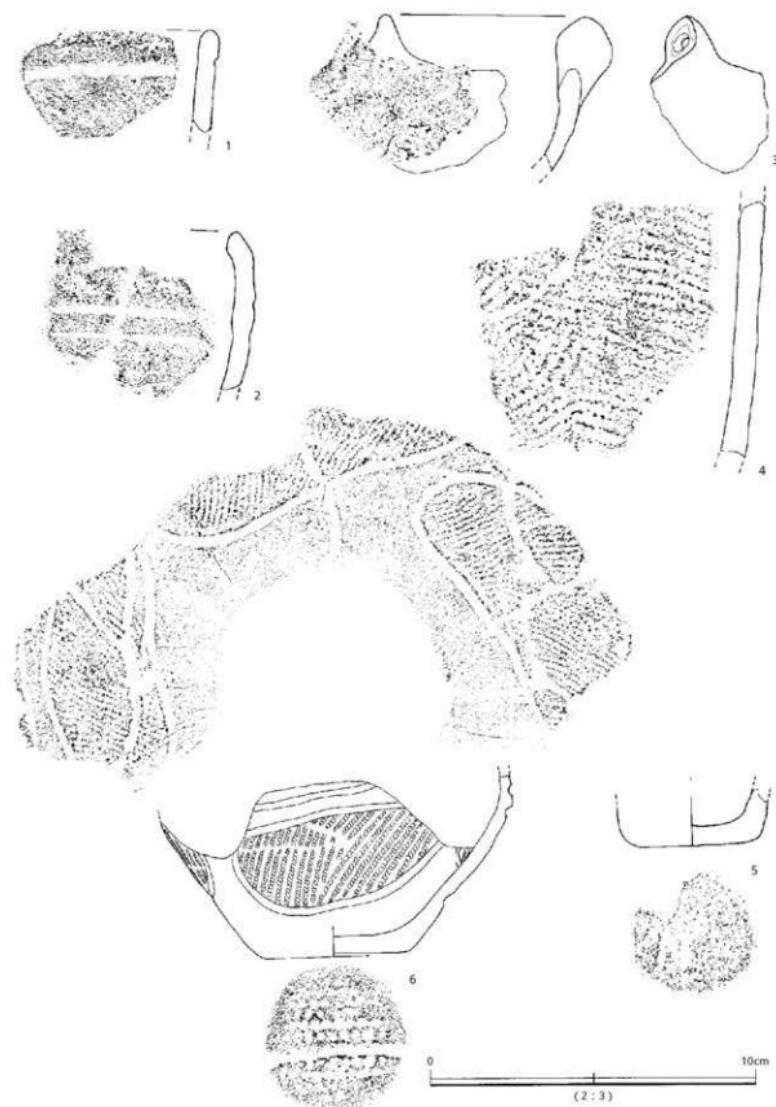
第10図 長者屋敷遺跡縄文土器（1）



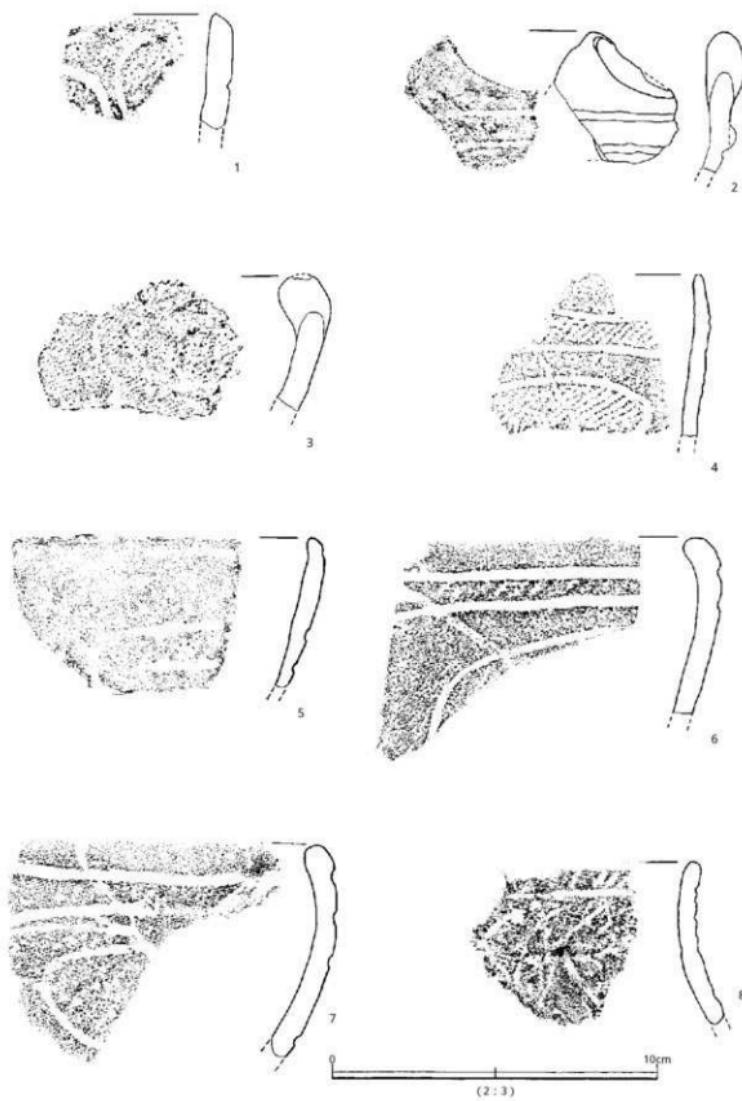
第11図 長者屋敷遺跡縄文土器（2）



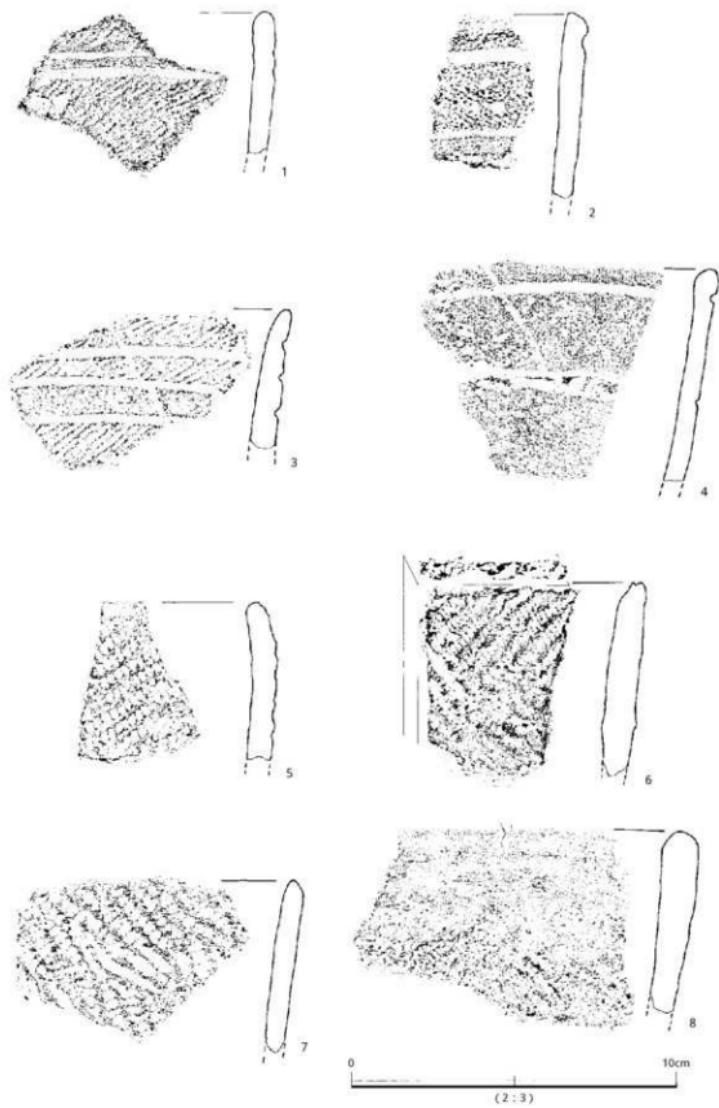
第12図 長者屋敷遺跡縄文土器（3）



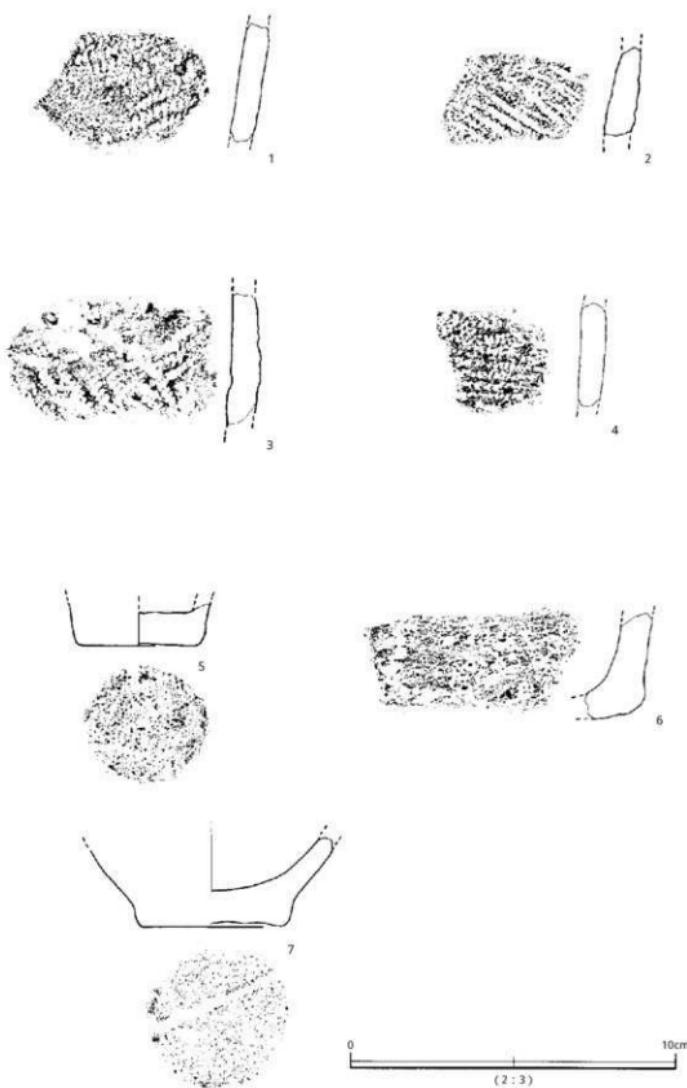
第13図 長者屋敷遺跡縄文土器(4)



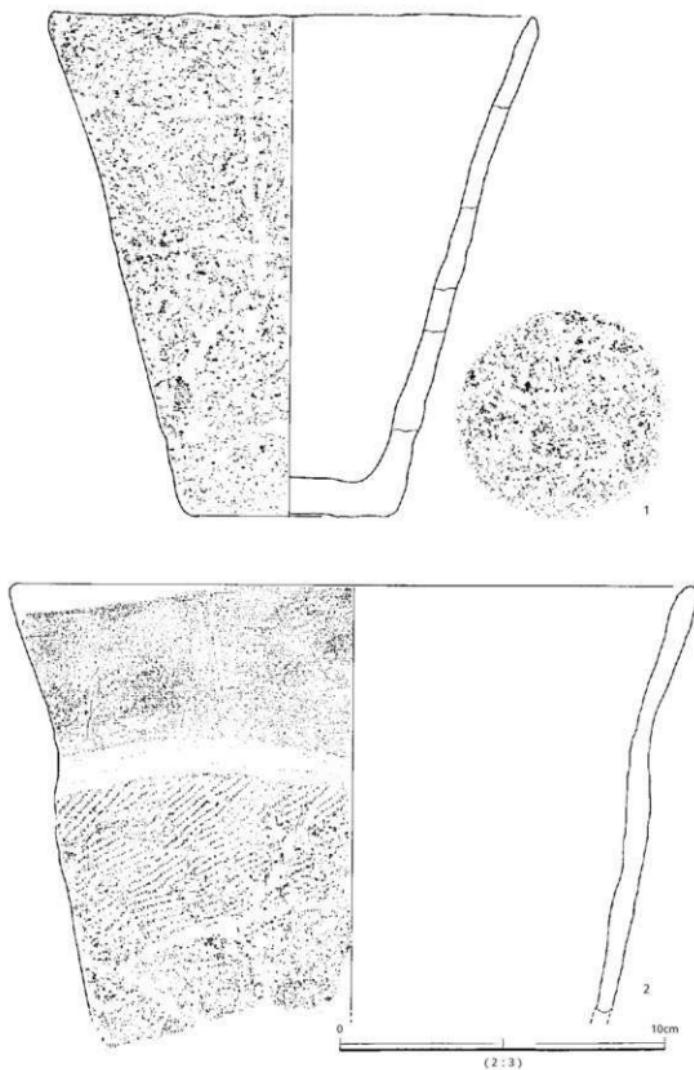
第14図 長者屋敷遺跡縄文土器 (5)



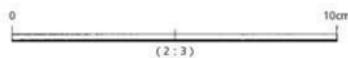
第15図 長者屋敷遺跡縄文土器（6）



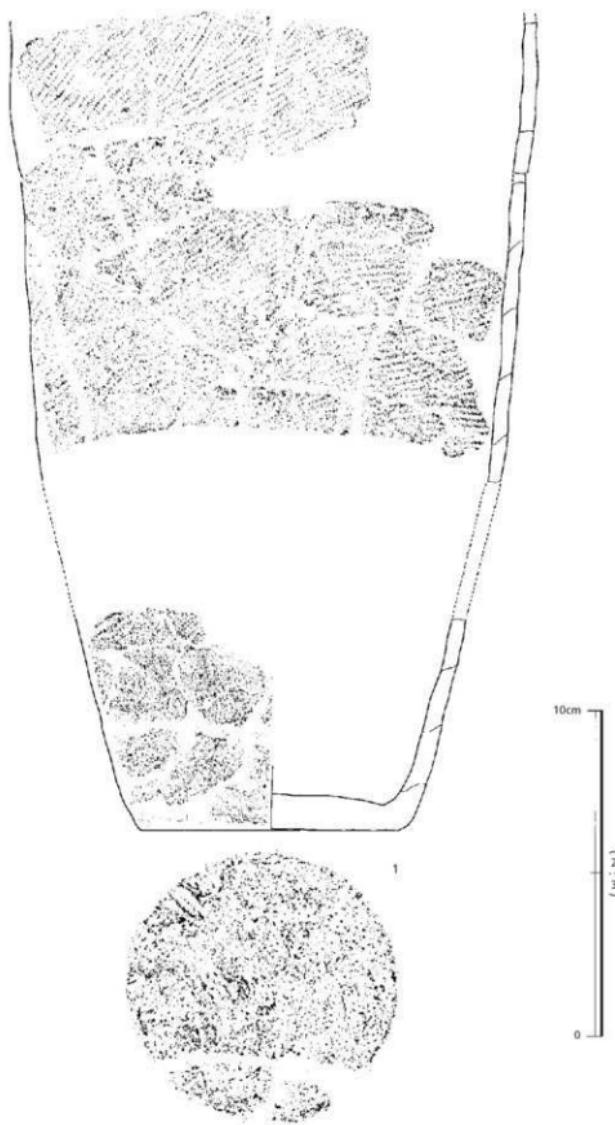
第16図 長者屋敷遺跡縄文土器（7）



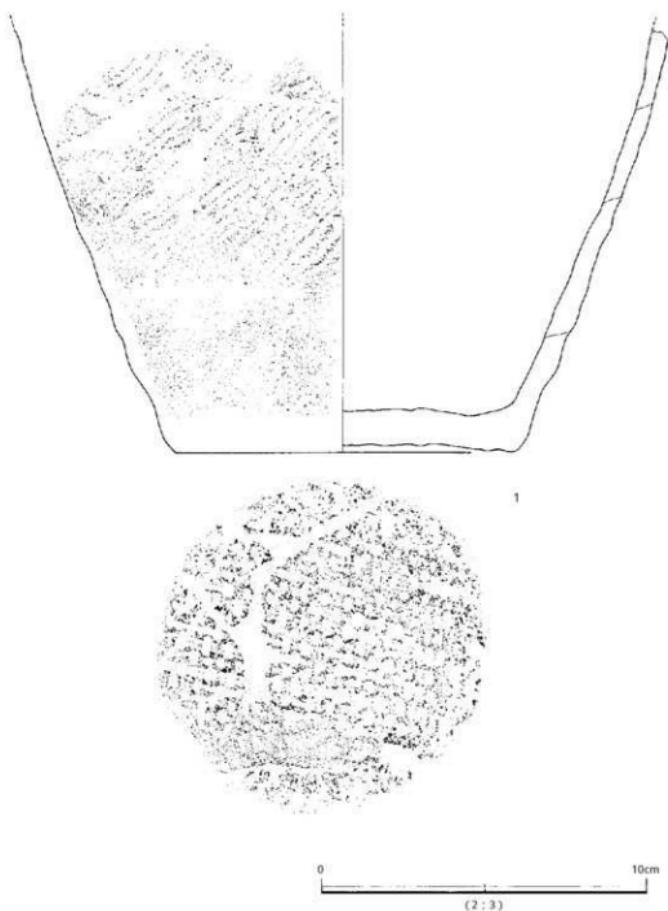
第17図 長者屋敷遺跡縄文土器（8）



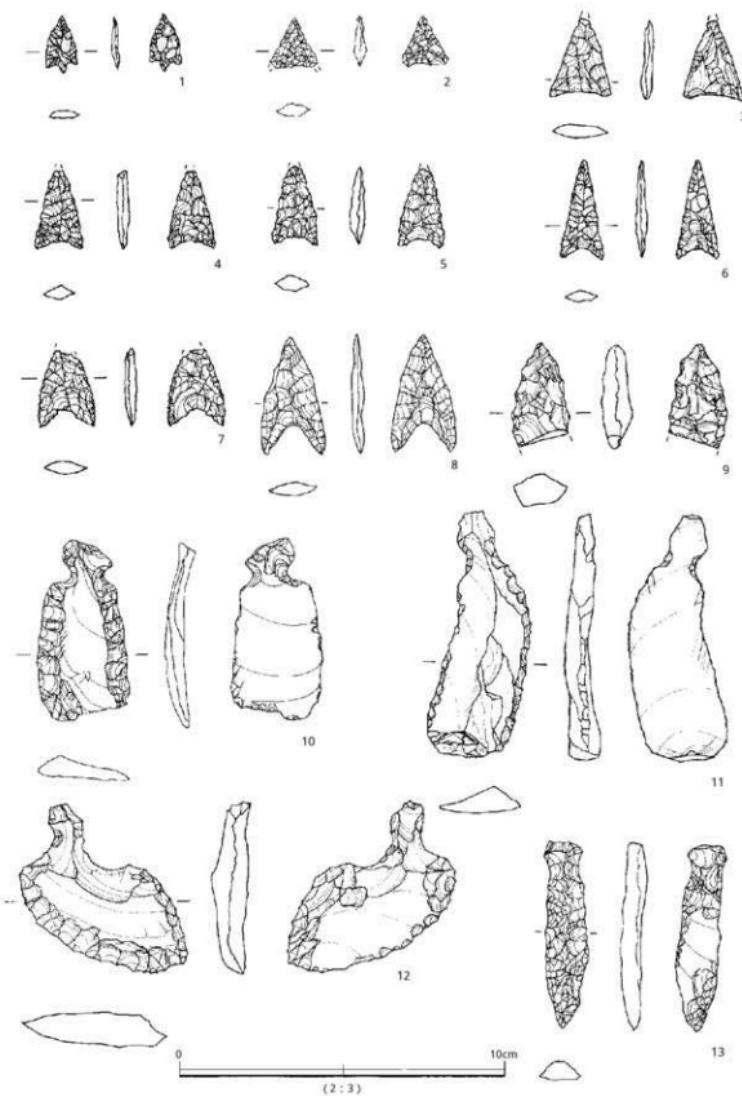
第18図 長者屋敷遺跡縄文土器（9）



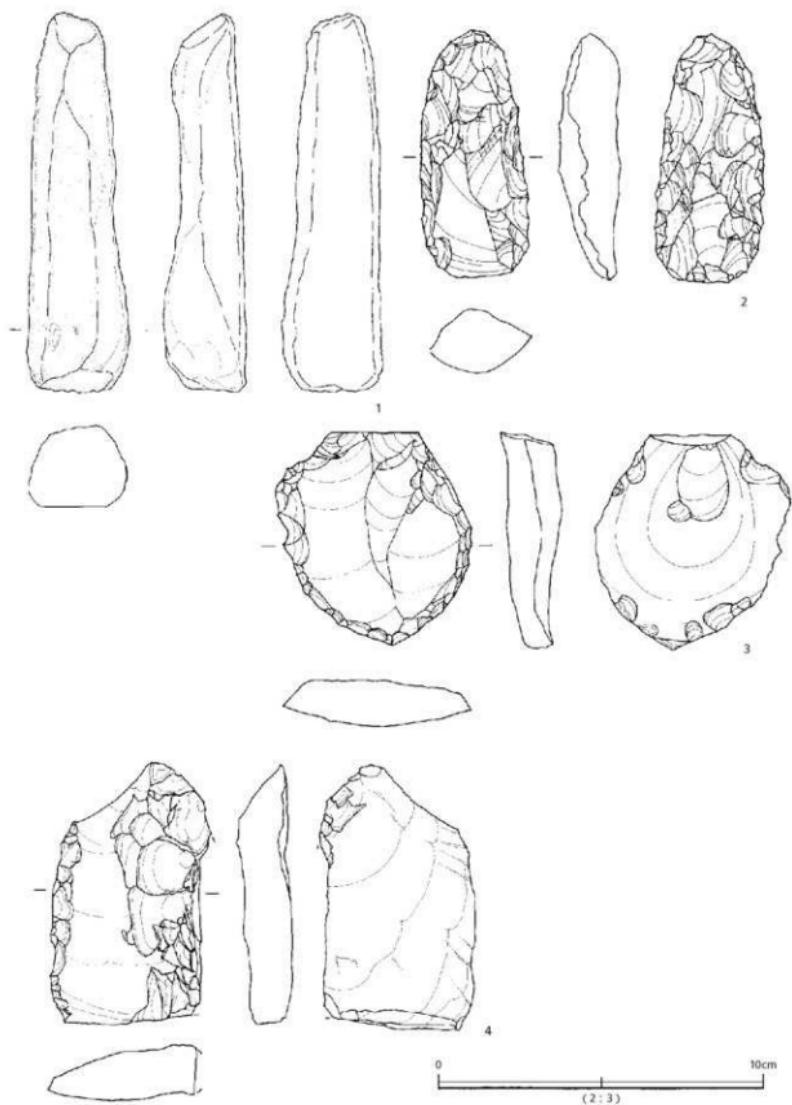
第19図 長者屋敷遺跡縄文土器 (10)



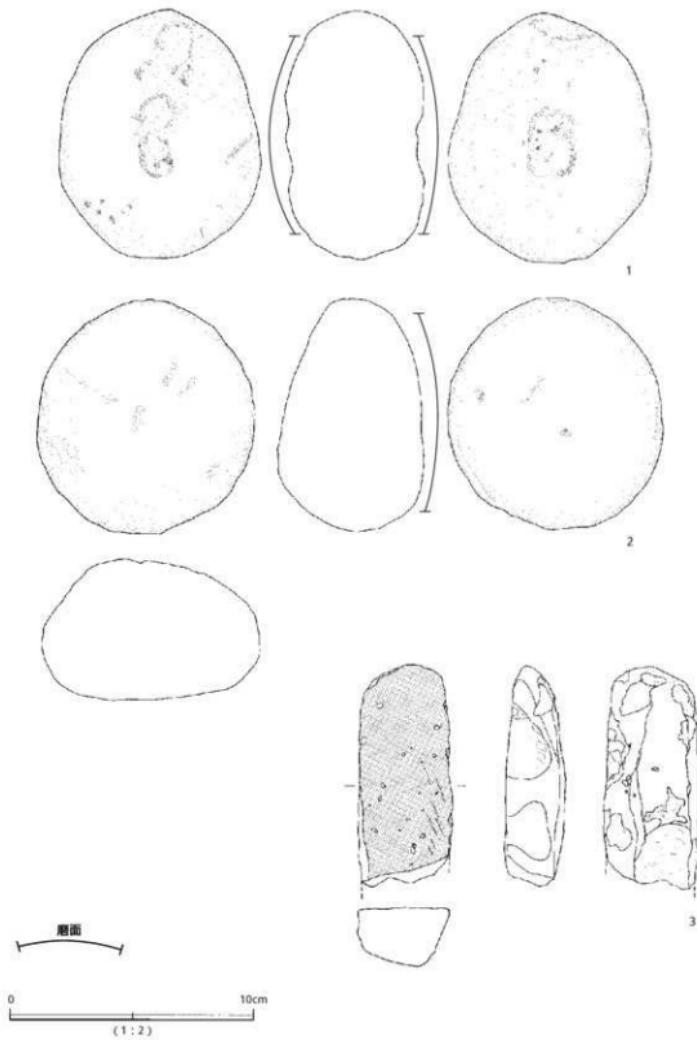
第20図 長者屋敷遺跡縄文土器 (11)



第21図 長者屋敷遺跡石器（1）

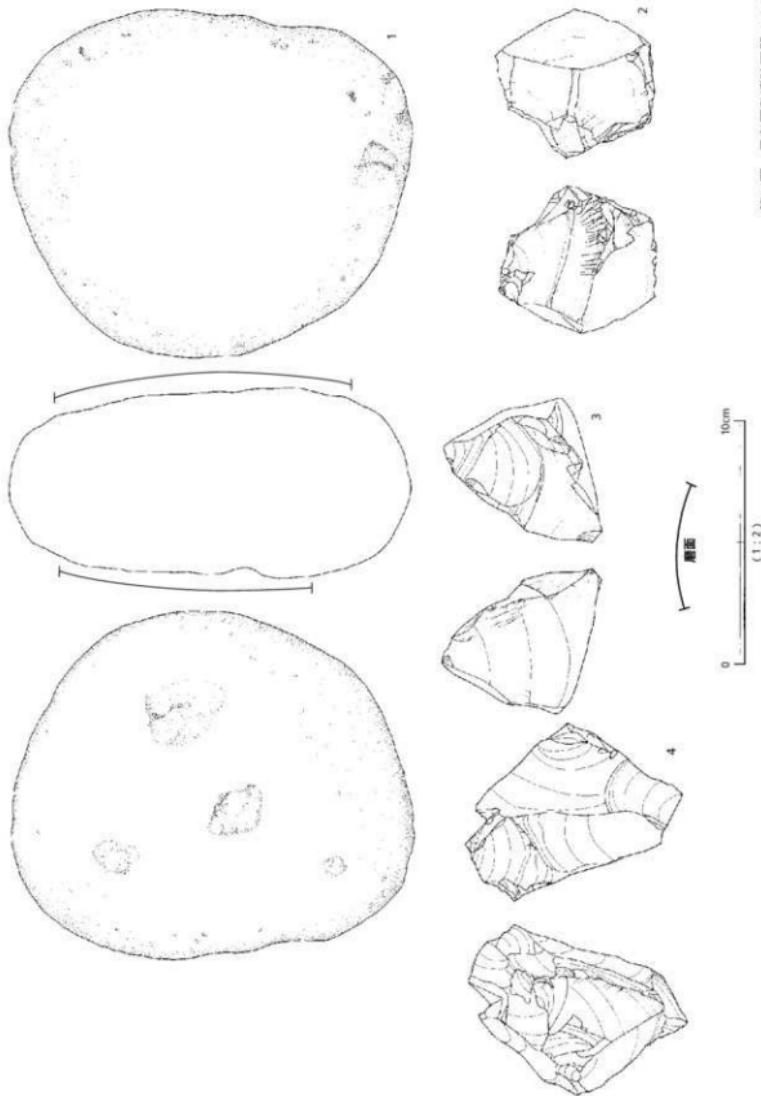


第22図 長者屋敷遺跡石器（2）



第23図 長者屋敷遺跡石器（3）

第24図 長者屋敷遺跡石器（4）



III 検出遺構（坂ノ上遺跡）

坂ノ上第1次調査 坂ノ上遺跡で検出された主な遺構は、第1次調査では住居跡2、土坑12、溝跡2、性格不明土坑21、第2次調査では街道跡である。遺構は、遺跡の東側を中心に検出された。

基本層序は、I層 = 暗褐色シルト質粘土、II層 = 再堆積した褐色粘土、III層 = 極暗褐色シルト質粘土、IV層 = 黄褐色疊混じり粘土である。IVは地山である。

大形堅穴住居跡 S T21 (第4図・巻頭写真図版2)

調査区の南の275～285 = 745～765グリッドに位置し、遺構確認面はIV層で地山を堀り込んでいる。

覆土の様相や柱穴、壁の切り合いなどから、少なくとも2回以上建てかえられ、住居跡東西の長軸長が、18.6mから16.8mに縮小された可能性がある。南北の短軸は6.1mで、全体の平面形は長楕円形（わらじ形）の遺構である。床面は、検出面より最大28cmの深さである。長い年月の間に土地が斜面に向かって徐々に傾斜したものか、当時から緩やかな斜面であったのかは不明だが、遺構は南西に向かって緩やかに落ち込む斜面に位置している。この傾斜立地のため、遺構の北壁上端より南壁の上端が最大36cm低く、同様に遺構東壁上端より西壁上端が最大28cm低い。また、遺構南辺の西半分の壁には、明瞭な立ち上がりを確認できなかった。壁柱穴と思われるピットはいくつか検出したが、壁溝は検出されない。床面はIV層の地山となり固くしまっている。

遺構に関係する柱穴は、P 1・P 2・P 5・P 6・P 7・P 26・P 29・P 41・P 40・P 27・P 22・P 30・P 25・P 20・P 15・P 10で、径28～64cm・深さは32～70cm。柱穴平面形は大半が円形であり、ほぼ垂直に掘り込まれている。この柱穴は対になって構造物を支えているとも考えられる。

P 1 (径26・深さ58) = P 10 (径26・深さ40)

P 2 (径32・深さ64) = P 15 (径30・深さ40)

P 29 (径24・深さ68) = P 20 (径32・深さ60)

P 5 (径48・深さ60) = P 25 (径44・深さ60)

P 6 (径40・深さ68) = P 30 (径36・深さ52)

P 7 (径44・深さ64) = P 22 (径24・深さ48)

P 26 (径32・深さ52) = P 27 (径36・深さ36)

P 41 (径32・深さ44) = P 40 (径32・深さ44)

その他のピット P 12・P 17 o r P 18・P 29・P 32 o r P 33・P 37・P 22は補助的な柱穴（支柱穴）とも考えられる。

P 12 (径32・深さ12) = P 17 o r P 18

P 29 (径24・深さ38) = P 32 o r P 33

P 37 (径40・深さ24) = P 22 (径24・深さ48) {単位はcm}

ピットの覆土は3層から4層に区分される。1層は径2～3mmの礫が混じる褐色シルト・2

層は微量の炭化物が混じる黄褐色シルト・3層は固くしまった褐色シルトで、ピットによっては径5mm大の礫が混じる層・4層は場所によっては黄橙色のシルトが混じる粘質の褐色シルトである。自然堆積状に覆土が疊重するピットと1層覆土だけのものとばらつきはある。

遺構中央部に東西一列に並ぶE L 1～E L 7までの地床炉を検出した。土はかなり受熱して 地 床 炉 あり、にぶい赤褐色に変質し非常に固くしまっている。出土遺物は覆土2と3に集中するが、第18図の土器片群や碎片など床面より出土するものも多い。出土数は、土器片132・石鏡12・石匙4・削器4・石錐・石槍・搔器・凹石・石板7・石斧・磨石3・剥片と碎片2 909を数える。石器製作過程で生じた剥片や碎片の数が多いこと、竪穴住居跡が一般のものよりかなり大きいこと、縄文時代前期中葉様相を呈する土器が大半であることなどにより、この大形竪穴住居跡は縄文時代前期の石器工房跡と考えられる。(写真図版45、12はP 29より・13はP 3より・石器工房 14はP 2より・15はE L 4より・16はP 25より・17はP 20より・19はP 41より・25はP 6より・27はP 40より出土の所謂石屑群、他は住居跡内より出土)

S T 22 (第7図)

調査区の南東276-734に位置し、遺構確認面はIV層で地山を掘り込んでいる。本住居跡を含め東側から縄文土器片が一定量出土しており、大小の遺構が検出されている。前述した大形竪穴住居跡は本住居跡の南西方向に隣接している。

平面形は、南西・北東側にそれぞれ突出している不整橢円形で、長軸3.5m、短軸3.0mを測る。壁の立ち上がりは緩やかで、壁高は最大10cmと浅い。壁溝や貯蔵穴などではなく、底面中央部は平坦である。しかし、周辺に向かって若干の傾斜がついている。

柱穴は、本住居跡に伴うものとしてP 1～8がある。いずれも掘り込みが浅く、柱痕も検出されていない。住居内の位置関係からP 1～4は主柱穴と思われる。規模が40～60cm、深さ5～15cmを測る。形状は、不整橢円形で、断面途中に段を持つものもある。その他、壁周辺に柱穴が散見される。位置関係から壁柱穴であったと思われる。P 5～8がそれに当たり、規模が径30～50cm、深さ5～15cmを測る。

焼土はなく、炉などの痕跡もない。覆土は、5層確認されたが、その内の2層を基調としている。F 1が暗褐色シルト・F 2が褐色シルトで2層とも固くしまっている。いずれも薄い堆積層である。覆土内に地山がブロック状に入る土が混入している。

遺物は、縄文土器片や石器の碎片が主に覆土内から出土する。数量は土器片20・剥片は44を数える。大半の土器片には埴輪が混入するが、土器の表面が摩滅しているものが多く、地文を確認できるものは1点である(第21図9・図版30-17)。その1点の土器片は、深鉢の体部で、外面にR Lの附加条縄文を施している。本報告では3a類に分類しており、大木2aの縄文時代前期初頭に入る。床面直上に年代観の決め手となる遺物が伴出しないが、R P64土器片は本住居跡の所属時代を考える上で一つの示唆を与えるものと言える。

他の土器片も深鉢の体部が多く、底部付近の部位で煤が内面に付着しているものもある。石器の剥片は全て5cm以下で、多くは石器製作途上でできた碎片、チップである。加工痕のあるものは2点で、いずれも片方のみの細工で、その内1点は押圧工具を用いての加工である。石材は主に頁岩でやや変成しているものもある。

縄文混入土器

S X 20（第8図）

この遺構は、南西から北東に長軸4.2mのほぼ楕円形の遺構であろうと思われるが、西側でかなりの擾乱と削平があり不明である。遺構内にも数か所の擾乱があったが、遺構底部は固くしまり、遺構中央から辺縁にかけ緩く立ち上がるよう振り込まれている。また、2つのピットを確認した。この遺構は南端部で他の遺構（S X 90）を切っているが、このS X 90を拡張してS X 20があるのかは不明である。遺構の北東部は、土坑S K 1088に切られている。

S X 20の覆土1・2・3から、土器片80（第19図3～4～5～10～13・第21図1～3～10～11～12）・石鏃3（第25図2・第26図14）・石匙2（第28図6）・石篋2（第30図2・第31図2）・碎片4が出土している。S X 20を切っている土坑S K 1088からは、土器片16（第19図1～2～9）・碎片8が覆土1～6より出土した。S X 20から流れ込んだ可能性もある。

S K 1097・S X 97（第9図）

土坑S K 1097

長軸2.0m・短軸1.2m・深さ42cmの平面形が歪な楕円の土坑で、中心の底部が少し窪んでいる。覆土1～5より、土器片18（第19図6）・石鏃（第24図2）・削器・磨石・剥片と碎片24が出土した。

S X 97

S K 1097とほぼ同じ大きさの遺構で、深さは16cmと浅い。覆土1～3より、土器片50・石鏃（第27図10）。

石鏃（第27図10）・磨り面をもつ砥石（第35図2）・剥片と碎片25が出土した。大半の土器は摩滅が激しい。ほとんどが纖維混入の土器片で、地文が確認できるのは1点である。その1点の土器片は、半截竹管刺突円文が施されている。

以上、坂ノ上遺跡には、大小の竪穴住居跡が各1棟、竪穴住居跡の可能性をもつ性格不明遺構のS X 20と住居跡が限られる。また、大量の剥片と碎片が大形竪穴住居跡を中心に他の遺構からも出土することにより、人々が定住した性格の遺跡ではなく、石器を作ったり、近くの湿地に飛来する鳥などを捕獲するための季節的なキャンプ地としての役割があったことを推察される。

坂ノ上第2次調査 坂ノ上遺跡第1次調査の翌年度に第2次調査を行った。坂ノ上遺跡の東端部、南南西から北東にかけて幅10m・長さ100m、市道下と市道の両脇を含んだ調査区である（第1図）。

前年の第1次調査で、遺跡の東の辺縁に溝跡、その溝跡の覆土に混じって何点かの陶磁器片、崩れかかった市道の法面途中から数cm大の丸碌が山形市道黒沢上山線下へ続いていることを確認した。しかし、溝跡と市道が近接し、巡回路設置までは安全上からも翌年度の調査となつた。この市道は、標高135mに立地する山形市の黒沢地区から不動川を跨ぎ、つづら折りの山坂にある福田神社脇を迂回しのぼってくる。のぼりきった場所より蔵王連山を見ると、その20m先の標高200m地点に神明神社がある。神明神社の麓と山形市黒沢との直線距離は125mほどなので、平坦部より一気に65m登りつめることとなる。

今回の調査は、神明神社下の市道より開始し南に調査を進めていく。神社下の市道上面の標高は193.33mを測る。標高189.87mの調査区南端との高低差は3.46mである。

街道跡 街道跡（第12図・巻頭写真図版4）とSD 1・SD 2

市道は、幅2.6mのコンクリート舗装で、コンクリートの厚さは平均10cm。コンクリート上面を水平にするため、コンクリート舗装の直下には角張った細かい碎石が一層敷かれている。昭和41年5月に黒沢より電話線敷設が農道（現市道）を掘り下げておこなわれたため、南北グリッド220からグリッド240までは、市道下より東に広がる玉石の一部を除けば、その工事の擾乱のため街道跡は確認できなかった（第14図・図版15）。しかし、電話線敷設工事が行われた道路の脇に玉石群が検出されたことは、玉石が敷かれた時期は電話線敷設工事の以前であること、また、地元の古老たちの話では電話線工事以降に農道の舗装が行われたこと、明治以降に村普請でこの玉石を葺いたことは地区に伝承されていないことなどにより、羽州街道の遺構と捉えてよいものと考える。幸いにして電話線埋設工事がグリッド240辺りから地中から地上に電信柱を立て上山へと延伸されたため、240グリッド以南に比較的遺存のよい街道跡を検出した。

玉石が葺かれた道幅は、ほぼ3.5~3.6mで、覆土1は縄文土器片、陶磁器片、碎片、針金、ガラスなどが混在する層となっている。覆土2・3からは陶磁器片が中心に、覆土3の下には玉石群に混じって完形の石器も検出した。玉石群の下は地山層となり、2つの丘陵に挟まれた凹地を道路が通るため、周囲の雨水が一挙に集まる。小雨でも玉石がないと泥滑となる。この玉石は直径5cm前後の川原石である。この調査区の東に流れる須川の河原と同じ石なので、須川沿いから運ばれて利用されている可能性もある。敷石面の一部に長さ1m・幅10cm・深さ2~3cmほどの櫛のような凹みを検出した（写真図版61）。調査区南端部の道路中央にのみ、玉石群の上に大きな石が縦列（第13図・巻頭写真図版4）に敷かれている場所を検出した。道路の高低差をなくすためなのか、大雨で冠水する道路のためか不明である。

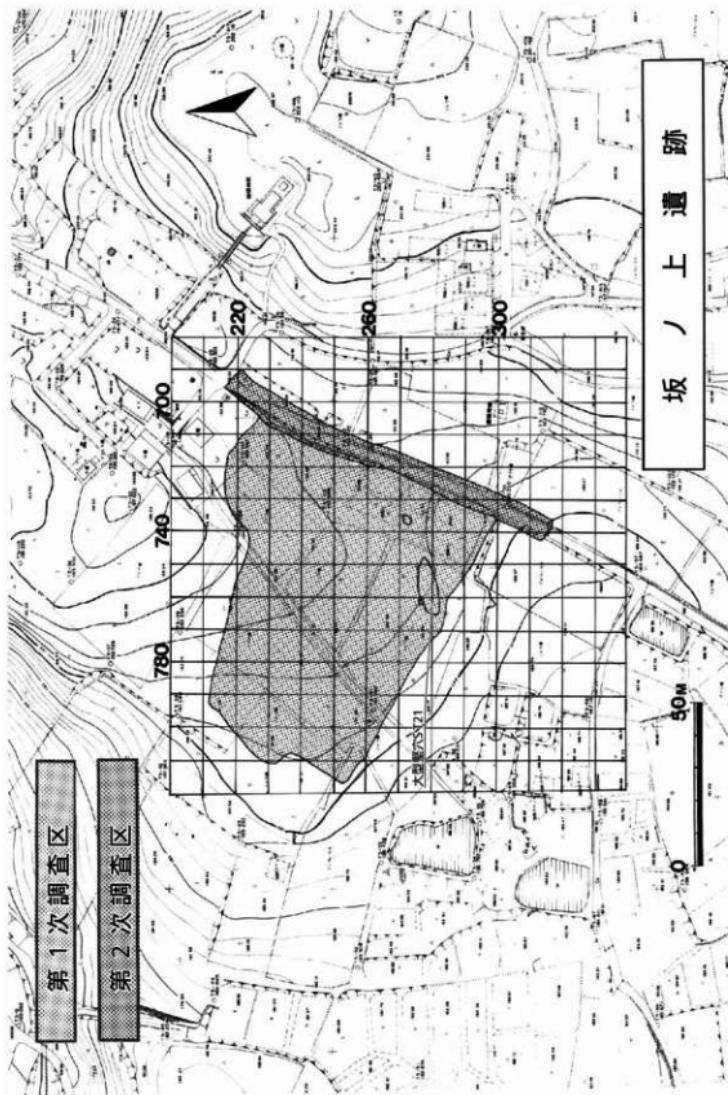
道路の両脇から溝を検出した。道路西の溝跡SD1・SD2（第15図）はSD1がSD2に溝一部切られているためSD1が古いものと考えているが、廃棄されたり流れ込んだ数十cmもある礫が入り込むため第11図はSDとして統一した（図版13）。道路の西侧にも溝跡を一部検出したが、果樹栽培などの耕作の結果、掘り込まれたり削平が激しく筋状の土色の変化しか追えなかった。

跡

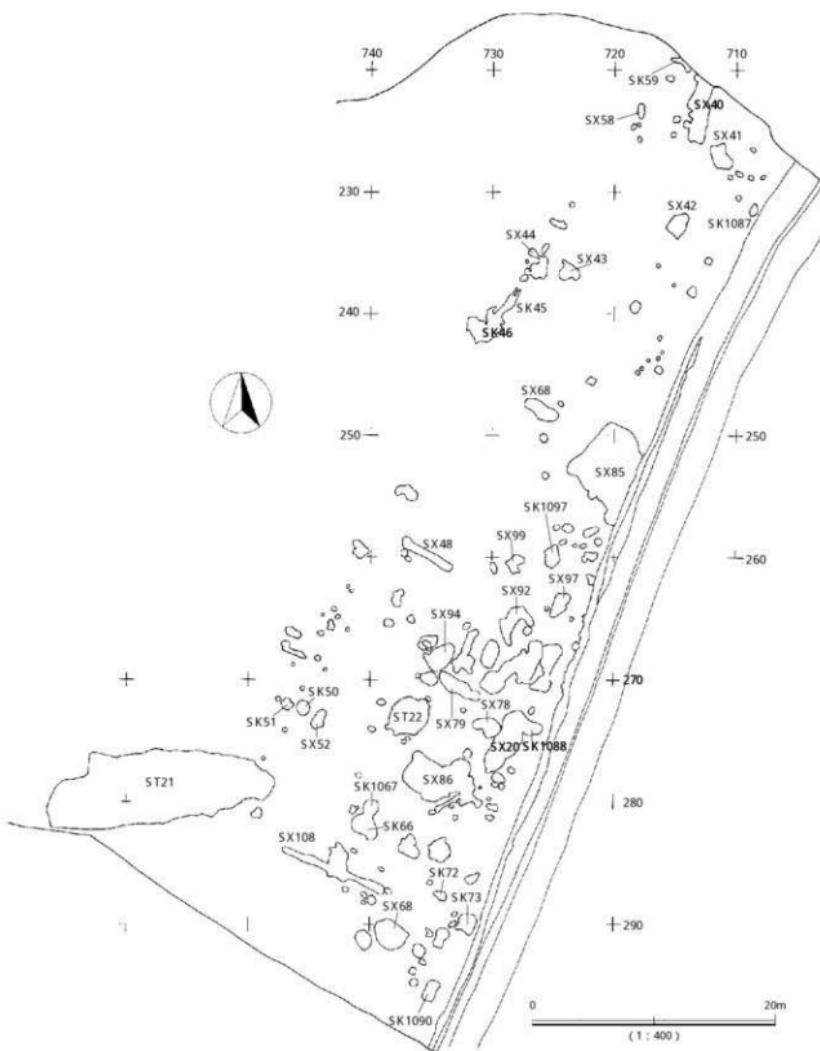


写真図版 61

III 検出構（坂ノ上遺跡）



第1図 調査区概要図 ($S = 1 : 2,000$)

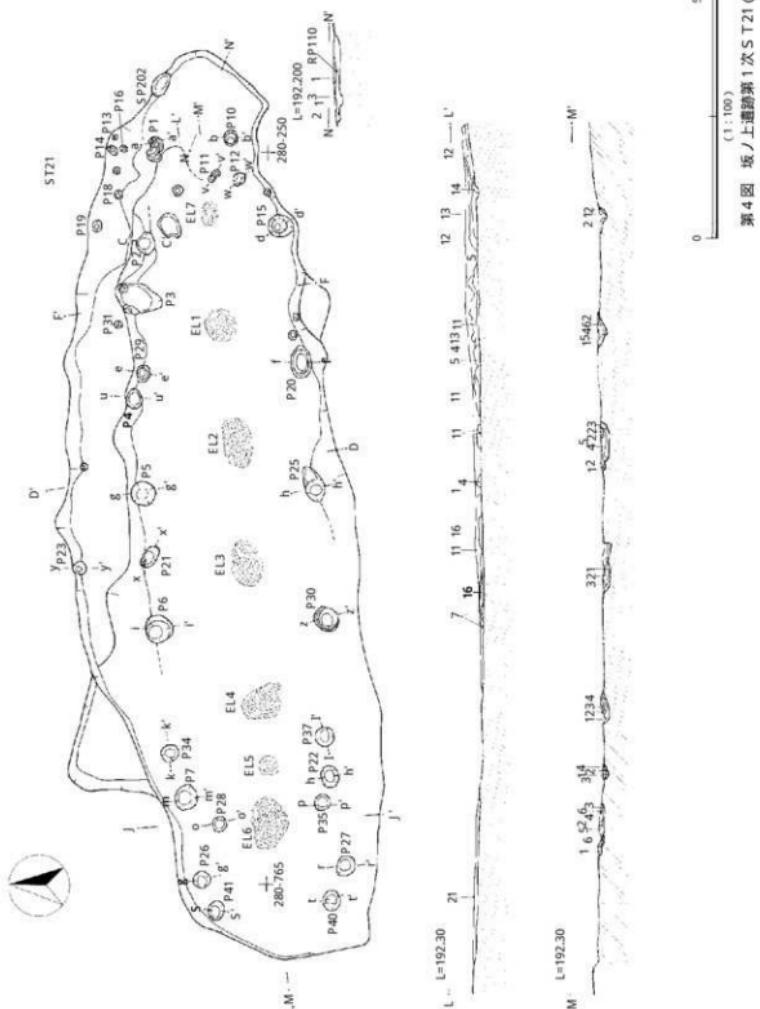


第2図 坂ノ上遺跡第1次遺構全体図

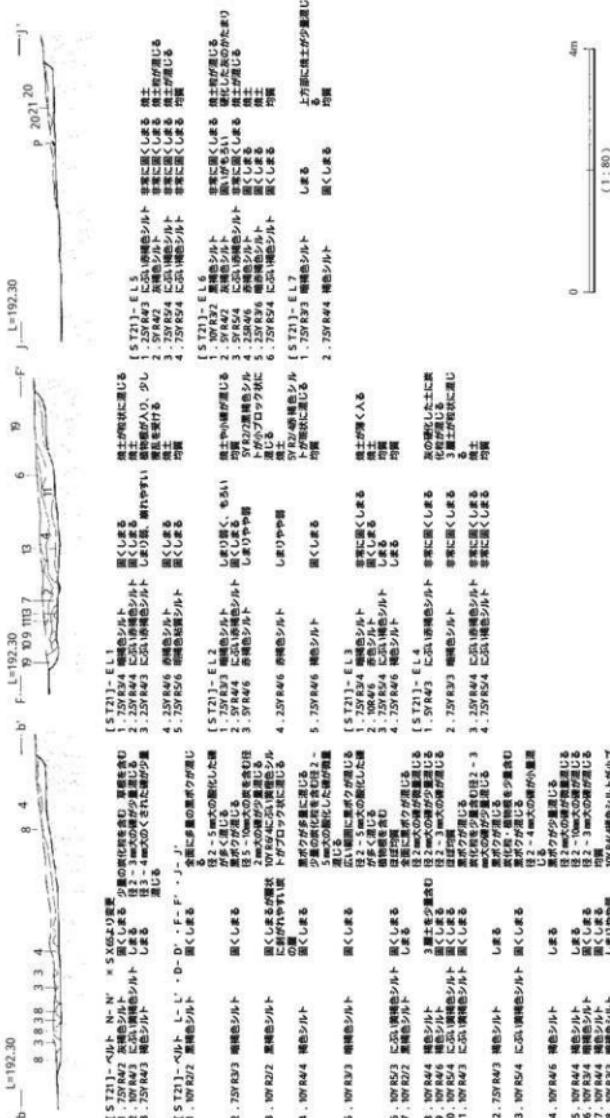
III 検出遺構（坂ノ上遺跡）



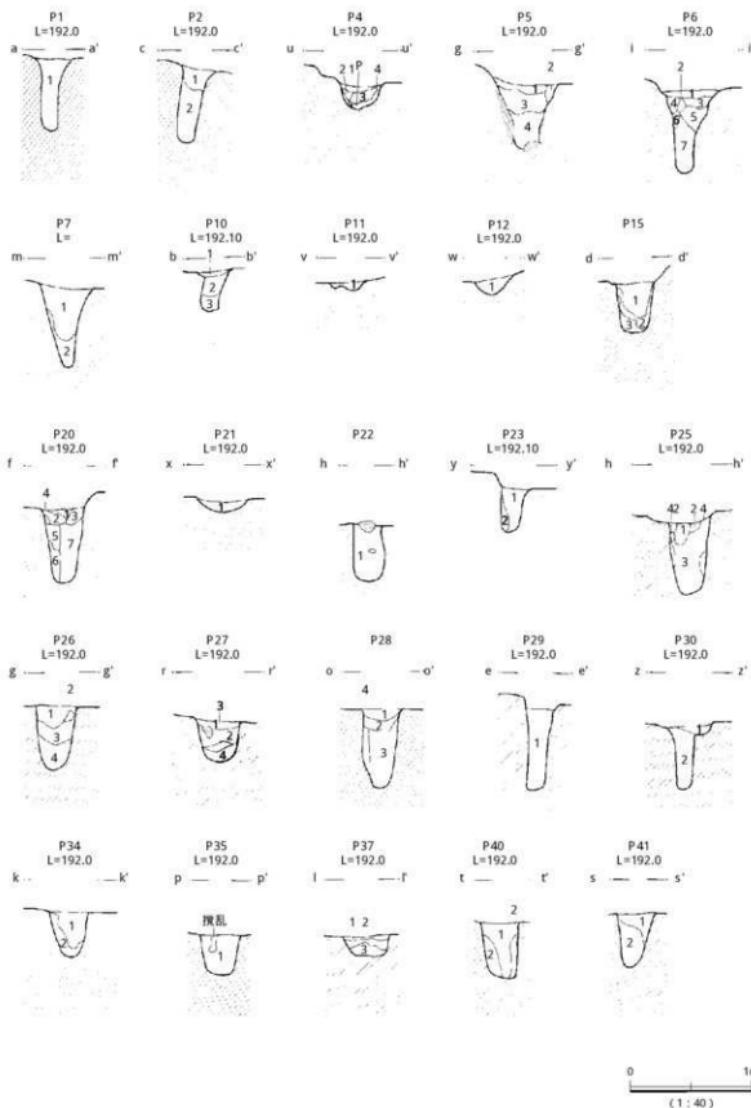
第3図 坂ノ上遺跡第1次遺構配置図



第4圖 坂ノ上遭跡第1次ST21(1)



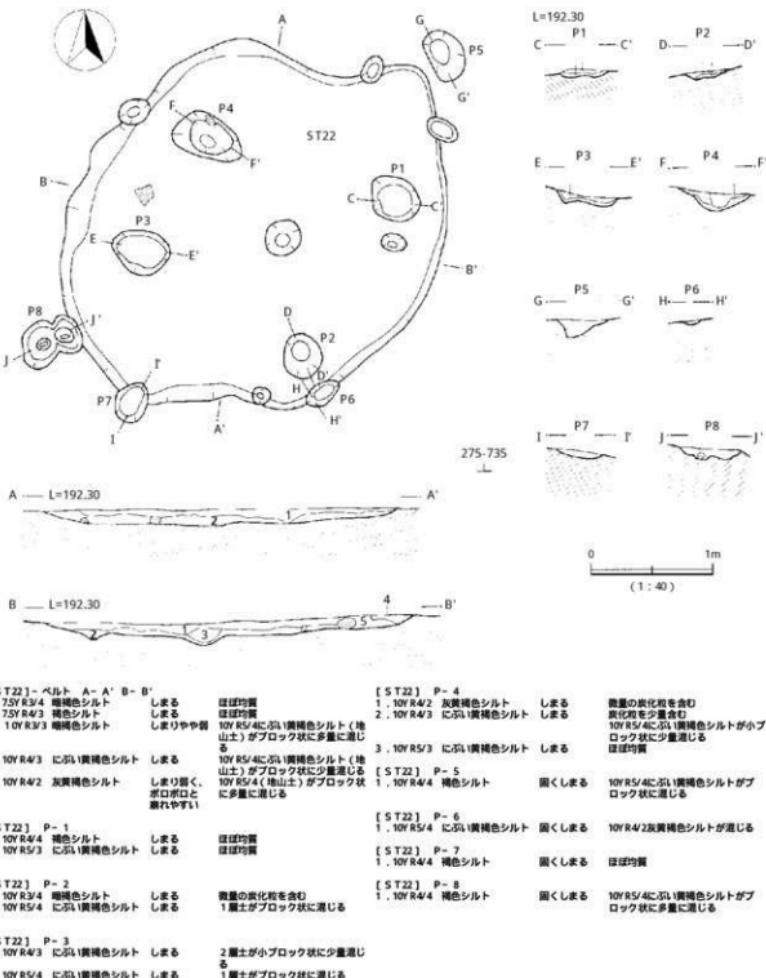
第5圖 坂上通跡第1次ST21(2)



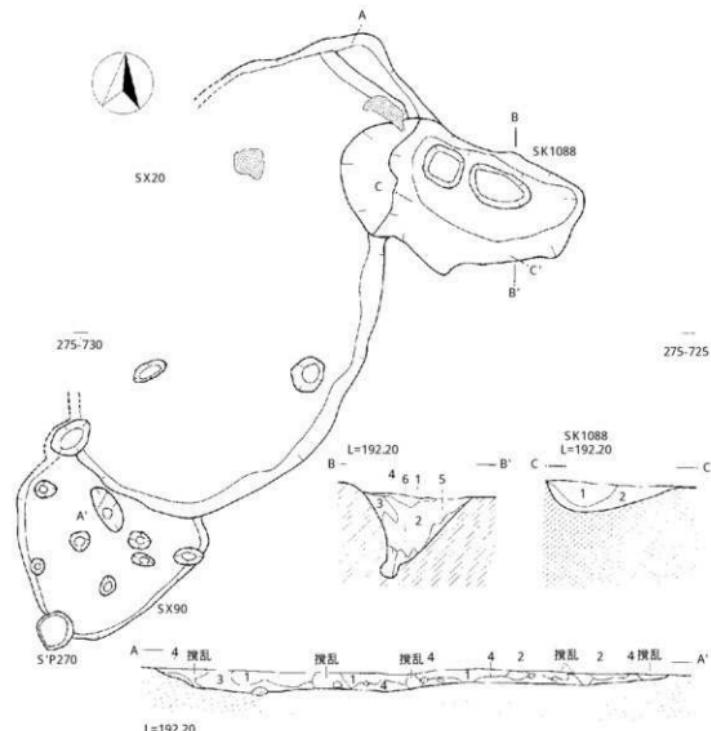
第6図 坂ノ上遺跡第1次S T21 (3)

III 検出構造（坂ノ上遺跡）

[S T 21] P - 1 1 . 10Y R/4/4 褐色粘質シルト	しまりやや器 塗化粧を含む	[S T 21] P - 26 1 . 10Y R/4/6 褐色シルト 2 . 10Y R/4/2 灰褐色シルト 3 . 10Y R/4/5 褐色シルト 4 . 7SY R/4/3 褐色粘質シルト	固くしまる 固くしまる 固くしまる 固くしまる	径 2 ~ 3mm 大の礫が少量混じる 均質 均質 均質 均質
[S T 21] P - 2 1 . 10Y R/3/4 褐褐色シルト	固くしまる 径 5 ~ 20mm 大の炭化物が少量と 灰化粧を含む礫が混じる	[S T 21] P - 27 1 . 7SY R/5/4 にない黄褐色シルト 2 . 10Y R/4/6 線状シルト 3 . 7SY R/4/3 線状シルトシルト 4 . 10Y R/5/4 にない黄褐色シルト	固くしまる 固くしまる 固くしまる 固くしまる	径 2 ~ 10mm 大の礫が多く混じる 径 2 ~ 5mm 大の礫が少量混じる 均質 均質 均質 均質
2 . 10Y R/4/4 褐色シルト	しまる 径 5 ~ 10mm 大の礫が混じる			
3 . 10Y R/3/4 褐褐色シルト	固くしまる 均質			
4 . 10Y R/5/4 にない黄褐色シルト	しまる 10Y R/3/4 褐褐色シルトが少量混 じる			
[S T 21] P - 4 1 . 10Y R/4/3 にない黄褐色シルト	固くしまる 炭化粧を含む 小礫が混じる	[S T 21] P - 28 1 . 10Y R/4/2 灰褐色シルト 2 . 10Y R/4/6 線状シルト 3 . 7SY R/4/4 褐色シルトシルト 4 . 10Y R/5/4 にない黄褐色シルト	固くしまる 固くしまる 固くしまる 固くしまる	炭化粧を含む 小礫が混じる 均質 均質 均質 均質
[S T 21] P - 5 1 . 10Y R/4/4 褐色シルト	しまる 炭化粧を微量含む 小礫が混じる	[S T 21] P - 29 1 . 10Y R/4/6 褐色シルト 2 . 10Y R/4/2 褐色シルト 3 . 7SY R/4/3 褐色シルト 4 . 10Y R/4/4 褐色シルト 5 . 10Y R/4/6 褐色シルト	固くしまる 固くしまる 固くしまる 固くしまる	炭化粧が化粧を含む 径 2mm 大 の礫が混じる 炭化粧を含む 径 5mm 大 の礫が少量混じる 炭化粧 植物粧が化粧したもの を少量含む 10Y R/4/6 にない黄褐色シルトが 小ブロック状に微量混じる
2 . 7SY R/4/4 褐色シルト	しまる 小礫が少量混じる			
3 . 7SY R/4/3 褐色シルト	しまる 灰化粧を含む			
4 . 10Y R/3/4 褐褐色シルト	しまりやや器 均質	[S T 21] P - 29 1 . 10Y R/3/4 褐褐色シルト	固くしまる	炭化粧を含む 小礫が少量混じる
5 . 10Y R/4/6 褐色シルト	しまる 均質			
[S T 21] P - 6 1 . 7SY R/4/3 両端シルト	しまる 炭化粧を多く含む 径 2 ~ 4mm 大の礫が混じる	[S T 21] P - 30 1 . 10Y R/4/6 褐色シルト	しまる	径 2 ~ 3mm 大の炭化粧を含む 径 2 ~ 3mm 大の礫が混じる
2 . 10Y R/4/4 褐色シルト	しまり器 均質			
3 . 7SY R/4/3 両端シルト	しまり器 均質	2 . 10Y R/4/3 にない黄褐色シルト	固くしまる	炭化粧を少量化 径 3 ~ 5mm 大の礫が混じる 均質
4 . 7SY R/4/2 灰褐色シルト	しまりやや器 均質			
5 . 7SY R/3/3 黄褐色シルト	しまりなし 灰化粧を含む	[S T 21] P - 34 1 . 7SY R/4/4 褐色シルト 2 . 7SY R/4/3 両端シルト	しまる しまる	径 2 ~ 3mm 大の炭化粧を含む 径 2 ~ 3mm 大の礫が混じる
6 . 7SY R/4/3 褐色シルト	しまり器 均質			
7 . 10Y R/3/3 黄褐色シルト	しまる 均質			
8 . 7SY R/4/3 両端シルト	やや粘性有 履くしまる ほぼ均質	[S T 21] P - 35 1 . 10Y R/4/3 にない黄褐色シルト	しまる	植物粧が入る
[S T 21] P - 7 1 . 7SY R/4/3 両端シルト	しまる 径 2 ~ 3mm 大の丸味のある礫が 混じる 植物粧が入る	[S T 21] P - 36 1 . 10Y R/5/6 黃褐色シルト 2 . 10Y R/6/6 明黄褐色シルト	しまる しまる	径 2 ~ 3mm 大の礫が混じる 径 5mm 大の礫が少量化
2 . 10Y R/3/4 黄褐色粘質シルト	しまる 1 層土が斑状に少量混じる	[S T 21] P - 37 1 . 10Y R/6/6 明黄褐色シルト	やや固くし しまる	植物粧が少量化 入る
[S T 21] P - 10 1 . 10Y R/4/3 にない黄褐色シルト	固くしま りや器 均質	2 . 10Y R/5/6 黄褐色シルト 3 . 10Y R/6/6 明黄褐色シルト	しまる しまる	植物粧が少量化 入る
2 . 10Y R/4/5 灰褐色シルト	しまる 10Y R/4/4 にない黄褐色シルトが 小ブロック状に少量化	[S T 21] P - 40 1 . 10Y R/3/4 明黄褐色シルト	固くしまる	径 2 ~ 5mm 大の礫が混じり、上 部ほど多い 均質
3 . 10Y R/4/4 褐色シルト	しまる 10Y R/4/3 にない黄褐色シルトが 小ブロック状に混じる	2 . 10Y R/5/4 にない黄褐色シルト	しまる	均質
4 . 10Y R/5/4 にない黄褐色シルト	ほぼ均質			
[S T 21] P - 11 1 . 10Y R/6/6 明黄褐色シルト	しまる 均質	[S T 21] P - 41 1 . 7SY R/3/4 褐褐色シルト	固くしまる	炭化粧を含む 径 2 ~ 3mm 大の礫が混じる
[S T 21] P - 12 1 . 7SY R/4/5 褐色シルト	しまる 均質	2 . 10Y R/3/3 明黄褐色シルト	しまる	炭化粧を少量化 径 1mm 大の砂が少量化
[S T 21] P - 15 1 . 7SY R/5/5 明黄褐色シルト	しまりやや器 径 1cm 大の礫が混じる	[S T 21] P - 42 1 . 10Y R/5/6 黄褐色シルト	固くしまる	炭化粧を含む 径 2 ~ 3mm 大の礫が多量に混 じる
2 . 7SY R/4/4 にない植木のシルト	しまる 均質	2 . 10Y R/6/6 黄褐色シルト	しまる	
3 . 7SY R/4/4 にない植木のシルト	しまる 均質			
[S T 21] P - 20 1 . 10Y R/4/3 にない黄褐色シルト	しまりやや器 均質			
2 . 7SY R/4/4 にない植木のシルト	しまる 均質			
3 . 7SY R/4/4 にない植木のシルト	しまる 均質			
4 . 10Y R/4/4 褐色シルト	しまりやや器 均質			
5 . 10Y R/4/4 褐色シルト	しまる 均質			
6 . 10Y R/4/4 褐色シルト	しまる 均質			
7 . 10Y R/3/4 褐色シルト	しまる 均質			
8 . 10Y R/4/6 褐色 細粒シルト	しまる 均質			
[S T 21] P - 21 1 . 7SY R/4/3 褐色シルト	固くしまる 炭化粧を少量化 径 2 ~ 4mm 大の礫が混じる			
[S T 21] P - 22 1 . 10Y R/4/3 にない黄褐色シルト	しまる 径 1 ~ 2mm の粗砂が少量化 する	[S T 21] P - 23 1 . 10Y R/4/6 褐色シルト	固くしまる	炭化粧を含む 径 2 ~ 3mm 大の礫が多量に混 じる
2 . 10Y R/4/3 にない黄褐色シルト	しまる 径 1 ~ 2mm の粗砂が少量化 する			
[S T 21] P - 25 1 . 10Y R/4/6 褐色シルト	固くしまる 10Y R/4/4 褐色シルトが小ブロック状に混じる			
2 . 10Y R/3/4 明黄褐色シルト	しまり器 花粉が少量化入る			
3 . 10Y R/4/4 褐色シルト	しまる 径 2 ~ 4mm 大の丸味のある礫が 少量化			
4 . 10Y R/3/4 褐褐色シルト	しまりやや器 均質			
5 . 10Y R/4/4 褐色シルト	しまる 均質			
6 . 10Y R/4/4 褐色シルト	しまる 均質			
7 . 10Y R/3/4 褐色シルト	しまる 均質			
8 . 10Y R/4/6 褐色 細粒シルト	しまる 均質			



第7図 坂ノ上遺跡第1次 T22



[S X 2 0] - ベルト A - A'

- 1 . 10Y R3/3 黄褐色シルト
2 . 10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト
3 . 10Y R4/3 にぶい黄褐色シルト
4 . 10Y R5/4 にぶい黄褐色シルト

固くしまる 少量のマンガン粉を含む
10Y R5/4C1-G1V黄褐色シルトを小
ブロック状に微量含む
往2~4mmの大粒を少量混じる
往3~4mmの大粒を少量含む
往R4/3-G1V黄褐色シルトが斑
状に少量混じる

[S K 1088] - B - B'

- 1 . 10Y R5/3 にぶい黄褐色シルト
2 . 10Y R5/2 灰黄褐色シルト
3 . 10Y R6/3 にぶい黄褐色シルト
4 . 10Y R4/2 灰黄褐色シルト
5 . 10Y R5/2 灰黄褐色シルト
6 . 10Y R5/1 棕灰色シルト

× 3~6mm土。非常に固く重で、移植ぐらが利きらない程である

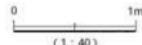
× 1~6mm土。全部の層に鐵化土が少量混じる

[S K 1088] - ベルト C - C'

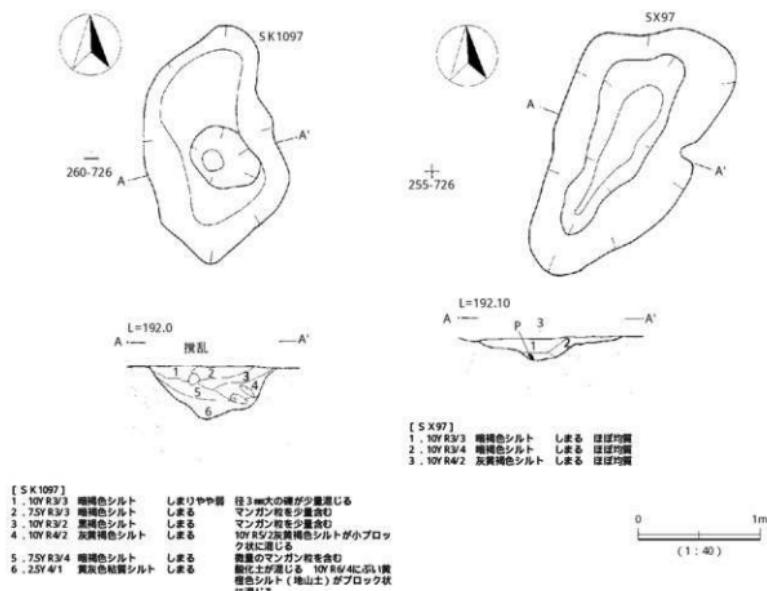
- 1 . 10Y R5/3 にぶい黄褐色シルト
2 . 10Y R5/2 灰黄褐色シルト

固くしまる マンガン粉を含む 往2~3mm大
の礫を含む

10Y R5/4C1-G1V黄褐色シルトが小ブロッ
ク状に混じる

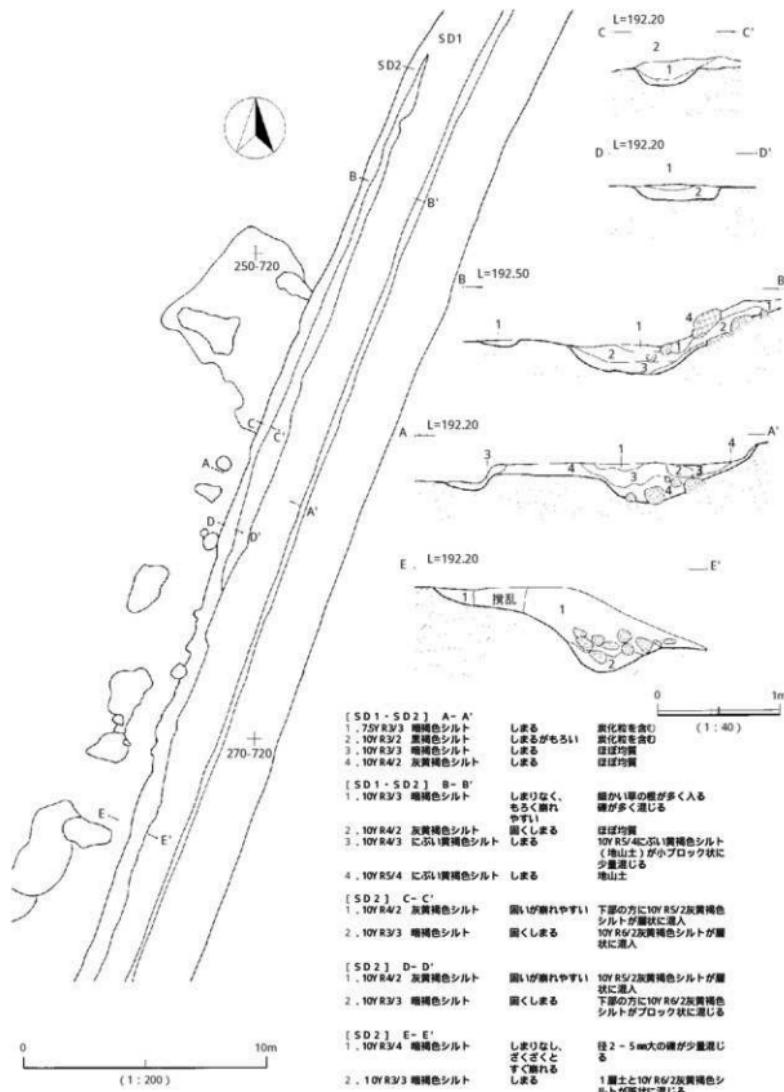


第8図 坂ノ上遺跡第1次 S X 20・S K 1088・S X 90

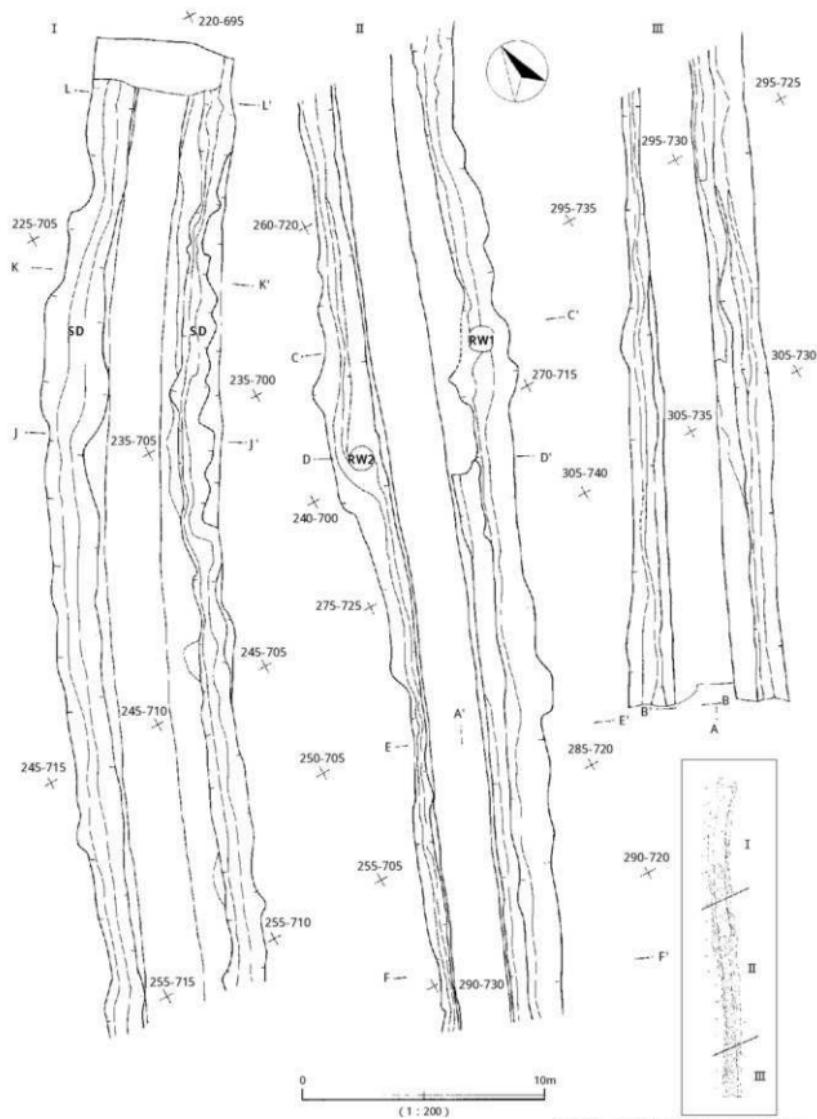


第9図 坂ノ上遺跡第1次 SK1097・SX97

III 検出断構（坂ノ上遺跡）

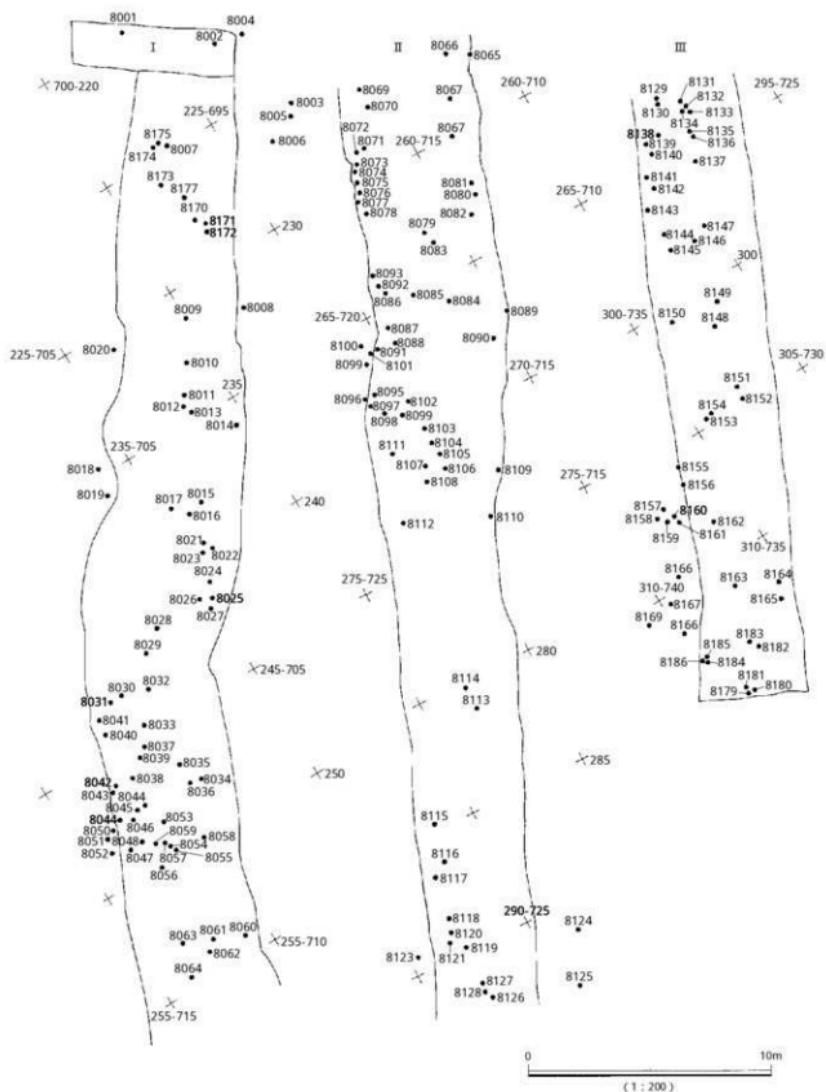


第10図 坂ノ上遺跡第1次 SD 1・SD 2

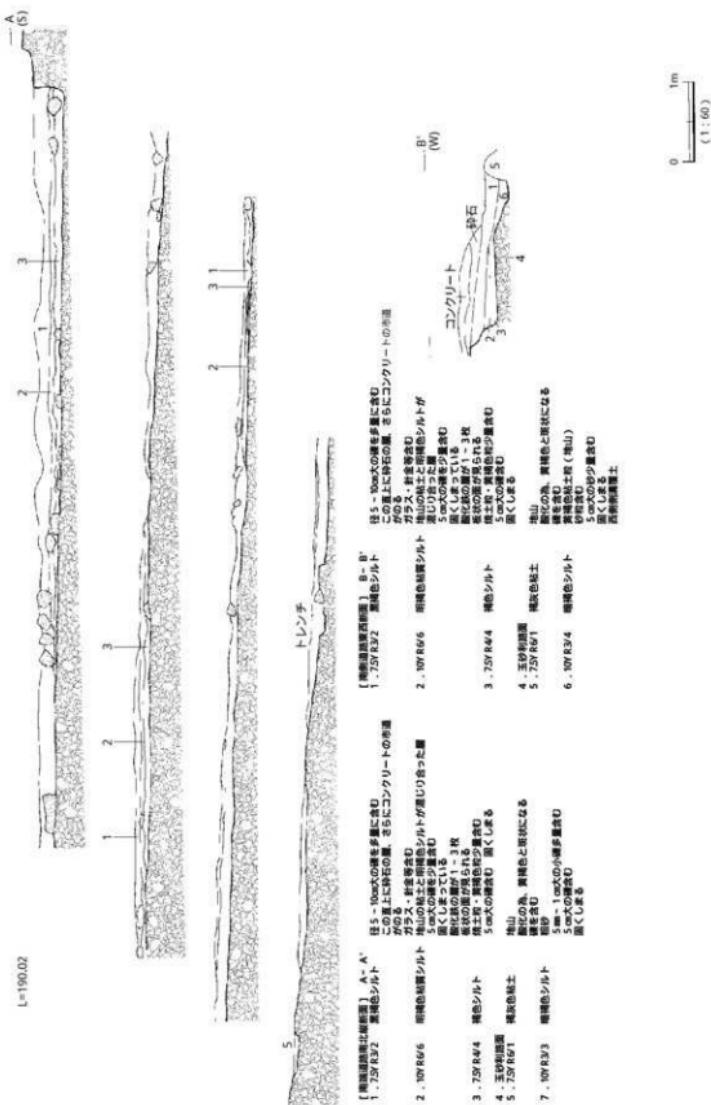


第11図 坂ノ上遺跡第2次遺構配置図

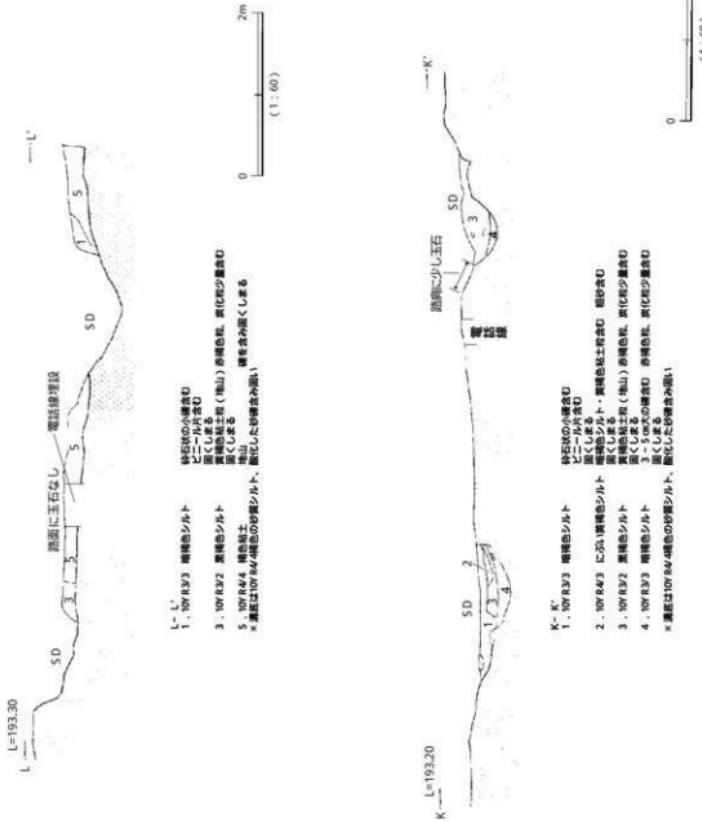
III 検出遺構（坂ノ上遺跡）



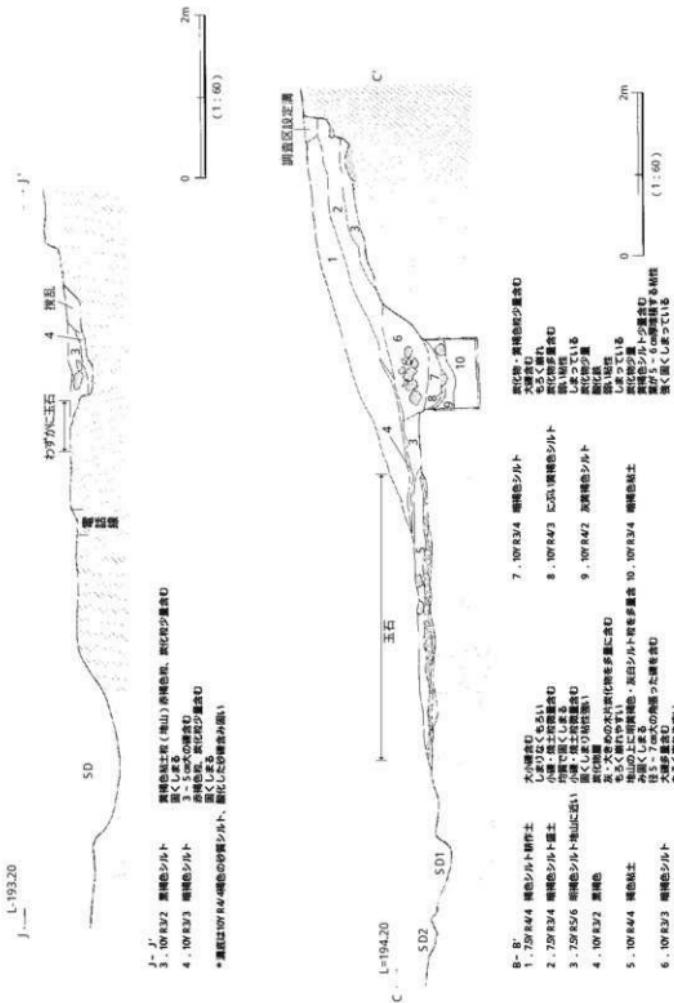
第12図 坂ノ上遺跡第2次遺物分布図



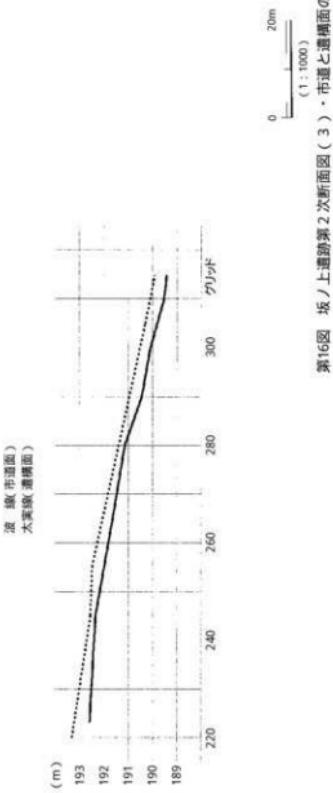
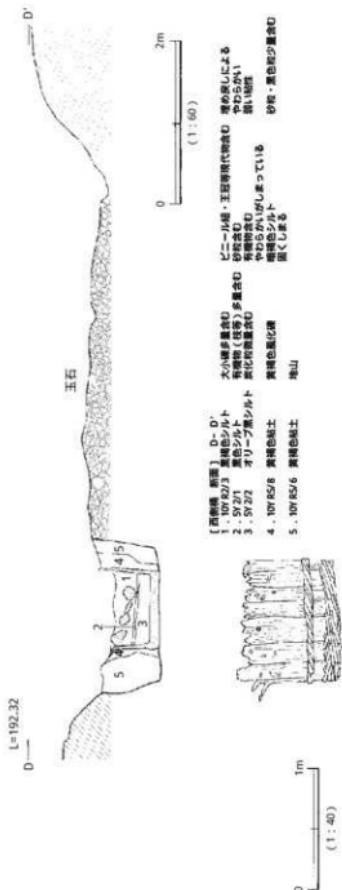
第13図 坂ノ上遺跡第2次南端道路南北線断面・南端道路東西断面



第14図 坂ノ上道路第2次断面図(1)



第15図 坂ノ上遺跡第2次断面図(2)



第16図 坂ノ上遺跡第2次断面図(3)・市街と通構面の標高結構



第17図 坂ノ上遺跡第2次断面図(4)

IV 出土遺物（坂ノ上遺跡）

坂ノ上遺跡から出土した遺物は、遺物の総数が15,107点で、その内訳が縄文土器723点、石器14,354点、近世陶磁器30点などである。遺物の出土状況は、遺構の周辺部はややまとまりを持って出土しているが、その他の地区は散在し、遺存状態は全体に良くない。

(1) 縄文土器（第18図～第22図 図版29～図版33）

中でも縄文土器は表面の磨耗が激しく遺存状態が最も悪く、文様など識別の可能なものと遺構内から出土した49点について選別し掲載した。土器は、概ね縄文時代前期中葉の時期で施文具や文様の違いによって区分し、1類から4類に分類してそれぞれ細分した。

1類土器

工具は半截竹管を主な施文具として、文様が口縁部に隆帯を巡らし上面に刻目や刺突を施している。

半 截 竹 管
1 a 類（第18図1・5・7～10 第19図10・11・12・14 第20図1 第21図1～6）器形は深鉢の波状口縁を示すものが多く、半截竹管による刺突文が重複している。さらに、第18図5・8・9、第19図10・12・14、第21図1・3～5はそれぞれ半截竹管の外側を利用し、半截竹管の内側の部分で施すものが（第18図1・6・10、第20図1、第21図2）あり施文方法の違いが見受けられる。第18図1・7～10と第20図1は口縁が肥厚し2から3列の刺突文が施され、口唇部に施文される（第19図11）などもある。第19図12は口唇直下には円形の竹管が重列しさらに刺突文が配されている。第21図3は斜め下からそれぞれ突き刺すように施している。第21図1～6は、恐らく頸部付近から体部にかけての破片で、体部には地文が見られる。口縁が内弯する（第18図1）などがある。

1 b 類（第18図2～4 第19図4・5）隆帯に半截竹管による刻目を施し、同じ種類の施文具によって隆帯の上と下に連続する刺突文を描画している。

第18図2・4は半截竹管の外側で、第18図3と第19図4・5が半截竹管の内側でそれぞれ施文している。口唇直下には（第18図2）と（第19図5）が、第18図4と第19図4は隆帯刻目の下に、隆帯刻目を挟んでそれぞれ施文されている。

2類土器

環 状 付 文
1類土器と同様に半截竹管を主たる施文具であり、粘土紐の細いものや太いものが棒状或は環状などの付文が配置される。

2 a 類（第18図6 第19図1・2・6・9 第20図3）細い粘土紐を貼付している。施文具は半截竹管と棒状工具の2種類を使って粘土紐に押しあてている。

半截竹管の施文具は、（第19図2・6）で竹管の背部を、（第18図6）と（第19図1）では連続する押し引きによる爪形が施されている。第19図9と第20図3はやや角張った棒状工具を押しあてている。第18図6は判別しにくいが口唇直下に円文が付された波状口縁になり、第20図3では環状に施される文様の一部分とみられる。

2 b 類（第19図3・7・8・13）太い粘土紐を貼付している。施文の方法は2 a 類に同じで

ある。波状口縁を呈するものが多い。

第19図8はやや角張った棒状工具を押しあて、3・7・13では半截竹管の外側を使って刻目などを施している。13は、口唇から交差するように付文が伸び頸部で環状に配され、頸部には刺突文が重畳するように描かれている。8は、口縁に沿うように施され波頂部の口唇から垂下し交差する。頸部には半截竹管の内側で下方から連続して突き刺している。

3 類土器

体部の地文が縄文や不整捺糸文などを一群とした。1類土器や2類土器の一部を構成している。

3 a類（第20図2 第21図9）いずれもR L附加条縄文である。

3 b類（第20図4・5・7 第21図10・12）第20図5はR L縄文で斜位方向に回転、第20図4・7と第21図10・12はいずれもR L縄文を施している。

3 c類（第20図6 第21図7）絡条体の不整捺糸文になる。

3 d類（第20図8 第21図11）S字状結節文となる。

3 e類（第21図8）擬似縄文で施文具は大葉子（オオバコ）を使用している。

擬似縄文

4 類土器（第20図9 第22図1～4）底部を一括し、3つに区分される。

底辺部が、直立する（第22図1～3）や、やや内窓する（第22図4）ものと（第20図9）のように外傾するものとがある。いずれも1類土器や2類土器の底部を構成するものである。

以上のように、坂ノ上遺跡から出土した縄文土器は、遺存状態が悪く磨耗しているため、なかなか施文方法が判りにくい状態である。中でも、1類土器や2類土器のうち第18図7・9・10と第19図3・10・13と第20図1は、概ね2種類の施文法に分けられる。

一つは、施文具が半截竹管で円形の竹管を均等に縦截し、施文が鈍角で半截竹管の内皮を器面に押し当てるII C類（内側竹管）。他方施文具が劣截或是円形の竹管を不均等に縦截し、鋭角に円形や半截などの竹管の外皮を器面に向けたものIII B類（外側竹管）に分けることが出来る（佐原1956 西川1994）。

II C類は、（第18図7・10）・（第19図8）・（第20図1）がそれぞれ対応し、III B類には（第18図9）・（第19図3・10・13）がこの類にあたる。いずれも口縁がやや有段化から肥厚に変化し始め、3条を基本に1つずつ突き刺しながら、口縁部に沿うように施し、列点状をなしているのが特徴である。第19図8は口縁から垂下する刻目を持つ隣帶に沿って下方から施文され、第18図10および第19図13は縄文時代前期の大木系の特徴である環状の付文が配されているが、関東地方北部や中部地方（長野県）さらに新潟県などで見られる口縁部の主文様である菱形の構成をとる文様が認められない。

縄文時代 前期

II C類やIII B類に相当する土器群の施文或は文様を見る限り、長野県における有尾式で主なる文様を櫛齒状工具による列点状の刺突文で描き、肥厚した口縁に沿うに施文されている。新潟県の清水ノ上II式段階でも同様に半截竹管の手法がとられている。本遺跡の1類土器や2類土器の内、II C類或はIII B類の手法を持つ土器は有尾式の櫛齒状工具の列点状刺突文の置換えと見られ、清水ノ上式と共に通する施文法を取っている。

坂ノ上遺跡から出土した縄文土器の1類土器と2類土器は、有尾式や清水ノ上II式に見られる古い要素を保ちながら、環状付文などの新しい素材が加わり、縄文時代前期の大木2b式でも古い段階に位置づけられ、半截竹管の手法によって細分が可能となりうる。

参考文献

- 佐原 真 1956 「土器における横位文様の施文方向」『石器時代3号』 石器時代研究会
 保角里志ほか 1975 『小林遺跡－绳文前期遺跡と平安時代集落跡－』 東根市教育委員会 小林遺跡調査団
 佐藤正俊ほか 1976 『小林遺跡発掘調査報告書』(山形県埋蔵文化財調査報告書第8集) 山形県教育委員会
 芳賀英一ほか 1984 『南宮遺跡』(福島県会津高田町文化財調査報告書第5集) 福島県会津高田町教育委員会
 友野 良一 1990 『中越遺跡』宮田村教育委員会
 埼玉考古学会 1990 シンボジウム「大木、有尾、そして黒浜」埼玉県考古別冊3
 寺崎 祐助 1996 「B 錆文時代前期前半の土器について」『清水ノ上遺跡II』(新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集) 新潟県教育委員会・新潟県埋蔵文化財調査事業団

(2) 石器 (第23~37図 図版36~45)

坂ノ上遺跡から出土した石器は、住居跡や土坑などの遺構及びその周辺部からのものがほとんどで、中でも完成品など152点について記載することにした。

石鏸 (第23図1・2・6~15 第24図1~17 第25図1~21 第26図1~12・14~16 第27図1~13 第37図1~4)

出土数は84点で石材がすべて頁岩である。形態はすべて無茎であり、抉入の状態と大きさなどから次のように細分できる。全体に丁寧な作りとなり、特に先端部が括れを持ちより細かな作出となっている。

1類 小型で形が不定形になり中央の稜線が無く扁平なもの (第23図9・13 第25図9・16・18 第27図3・4)

2類 やや抉入が浅く、中央から基部側縁にかけて丸くなり、中央の稜線の部分がやや厚みを持ち、先端は括れるようになり丁寧に作出しているもの (第23図6・14 第24図11・26図15 第27図4 第32図1・2)

3類 抜入が殆んど無く、基部の返しがやや丸くなり、厚みもなく先端から基部にかけて直線的なもの (第24図10 第25図14 第26図5・11 第27図12 第37図3)

4類 抜入の状態が浅く形としては3類に類似しているが、基部側縁の返し鋭角的に入り、中央の部分が厚みを持つもの (第24図3・5・9・17 第25図1~3・5・11 第26図2・6・7・10・12・14・16)

5類 二等辺三角形の形を示し大型と小型に分けた。

5a類 大型で抉入の中央が丸くなり、基部側縁の返しも鋭角的で、側縁がほぼ直線的で、中央に厚みがあり丁寧な作出になるもの (第23図11・12 第24図1・2・4・8・13 第25図4・6・7・12・17 第26図1・4・8・9 第37図7・9~11)

5b類 大きさが5a類の半分より小さくなるもの (第23図15 第24図7・12 第25図15・20・21 第27図1・2・5・6・8・13)

6類 抜入の状態が不定形になり浅く、形が中央から先端にかけて丸みがあり、基部にかけやや直線的で、中央が厚みを持つもの (第23図1・2・7・8・10 第24図15・16)

7類 やや二等辺三角形の形に近く、抉入も鋭角的に深く、返しも鋭く、全体に丁寧な作りになるもの (第24図6 第25図19 第26図2)

石匙 (第28図1~7 第29図1~8)

相対する二つのノッチを入れることによって作出された摘みを持つものを石匙とした。いずれアスファルト付着痕 れも石材は頁岩である。なお第28図6と第29図3にはノッチの入った部分にアスファルトが付

着している。摘みを上方に置いたときに左右対称形となる（第28図1・4）があり、その外は左右が非対称となる。いずれもが片面加工で側縁が刃部となる縦形を呈している。第28図2・7や第29図5は丁寧な作出である。

石鎔（第30図1～6 第31図2・6 第32図1・3 第33図2 第37図6～8）

片面加工と両面加工のものがあり大半が片面加工で、両面が（第30図6・第32図1）の2点である。縦形のものが（第30図1・4）と（第37図7）が、短冊を示す（第30図6）・（第31図2）・（第32図3）・（第37図8）があり、いずれも刃部が片刃状となっている。

搔器（第23図3・4 第31図1・3・5・7 第32図4～7 第33図1・3 第34図5 第37図10）

急角度の調整加工によって刃部を作出した石器を搔器とした。すべてが縦長の剥片が素材として用いられている。円形または橢円などの形を示し側縁全体が刃部となる（第23図3・4）・（第31図1・3・5・7）・（第33図3）・（第37図5）があり、縦長の両側縁を刃部とする（第32図4・5・7）・（第33図1）・（第34図5）・（第37図10）がある。

石槍（第23図5 第26図13 第31図4・8 第32図2 第33図4 第34図1～4・6～9）

恐らくは縦長剥片の素材を使用して作出了したものとみられる。大半が折損しており先端部や基部を残すものが多い。（第34図7）は先端が折損しているがほぼ完成品で、基部が斜めから交互剥離加工され、両側縁は丁寧な交互剥離調整を施し、全体に厚みがある。

石錐（第33図5～9）

素材となった剥片の縁辺に調整加工を施し、その一端或に尖った先端部を作出したもので、いずれも尖頭部の断面が四辺形を呈している。7・8・9は摘部を扁平に調整加工し形態も類似している。6は破片を用いて両端を調整するに留めている。5は摘部から尖頭部まで丁寧な調整を施している。

加工痕のある剥片（第36図2 第37図9）

剥片に二次加工を施しながらも、刃部を形成するような連続した加工とはなったいないものである。

磨製石斧（第36図1）

1点のみ出土である。基部と中ほどから先端部が欠損し、石材は安山岩である。両面には多少の敲打痕が見られ、全体として丸みがあり、丁寧に研磨調整されているが、側縁の一方が扁平に磨かれている。

凹石（第36図3）

1点出土し石材は凝灰岩質砂岩である。孔が一つの河原石を使用する。

砥石（第35図1・2）

形は不定形になりいずれも半分が欠損している。1は4面のうち3面が、2では4面いずれも磨り面が残っている。

坂ノ上遺跡第2次調査で出土した遺物は、木製品2・土器片2・石器10・陶磁器片142・古銭7・金属製品2である。第1次調査で道路脇の溝5D（街道跡の西側の溝）から出土した石器は第37図で、陶磁器片は第38図・第39図・表6で、また、第2次調査で出土した陶磁器片・古銭・金属製品は第40図から第47図、また、表7・8で一括取り上げる。

(3) 木製品（第15～16図 図版15・19）

第11図の道路両脇より地山を掘り込んで設置された2つの桶を検出した。2つの桶とも、底板と竹のたがが残存していたが、共に桶の上部側板がなく破断面がぎざぎざに朽ちた状態で出土した。RW1は道路の東にある薄い土色変化で確認した溝の一部に、入り込むように設置されていた。上部の覆土6は小児の頭大の石がぎっしり積まれていたが、桶の底には砂混じりの腐葉が数cm堆積しているだけである。道路西にあるRW2は、溝の中心部に設置されずに溝がカーブする位置に設置されていた。東の桶と同様に上部がぎざぎざに朽ちた状態であった。東の桶には自然遺物しかなかったが、このRW2の覆土1からは、ビニルひもやサイダーの王冠が磯に混じって出てきた。下部の覆土には腐葉や砂が混じるだけである。桶が市道の脇にあつたことはこれまで聞いたことも見たこともなかったと黒沢地区の話だが、街道に付随するものなのか明治以降に使われたものかは不明である。

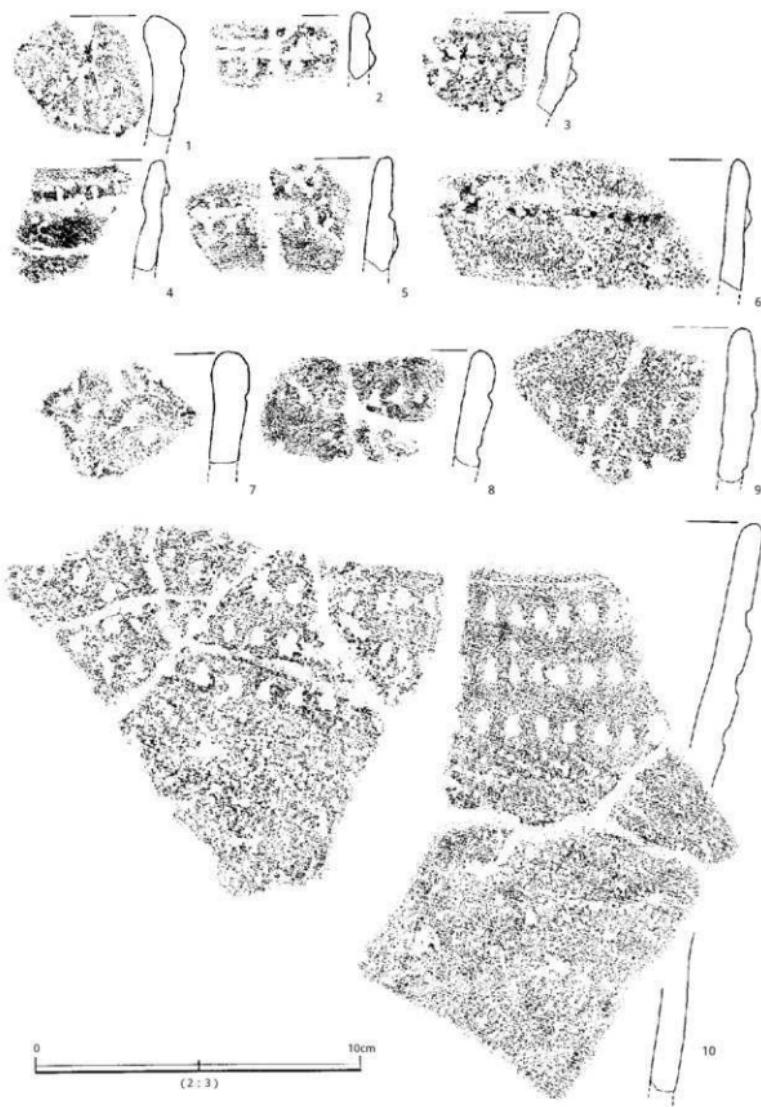
(4) 陶磁器など（第38～47図 図版48～60）

肥前系の磁器染付の磁器片（第38図2～7・第39図1）がある。筒碗や波佐見のくらわんか手の破片7や陶器灯明皿（第39図3・4）である。

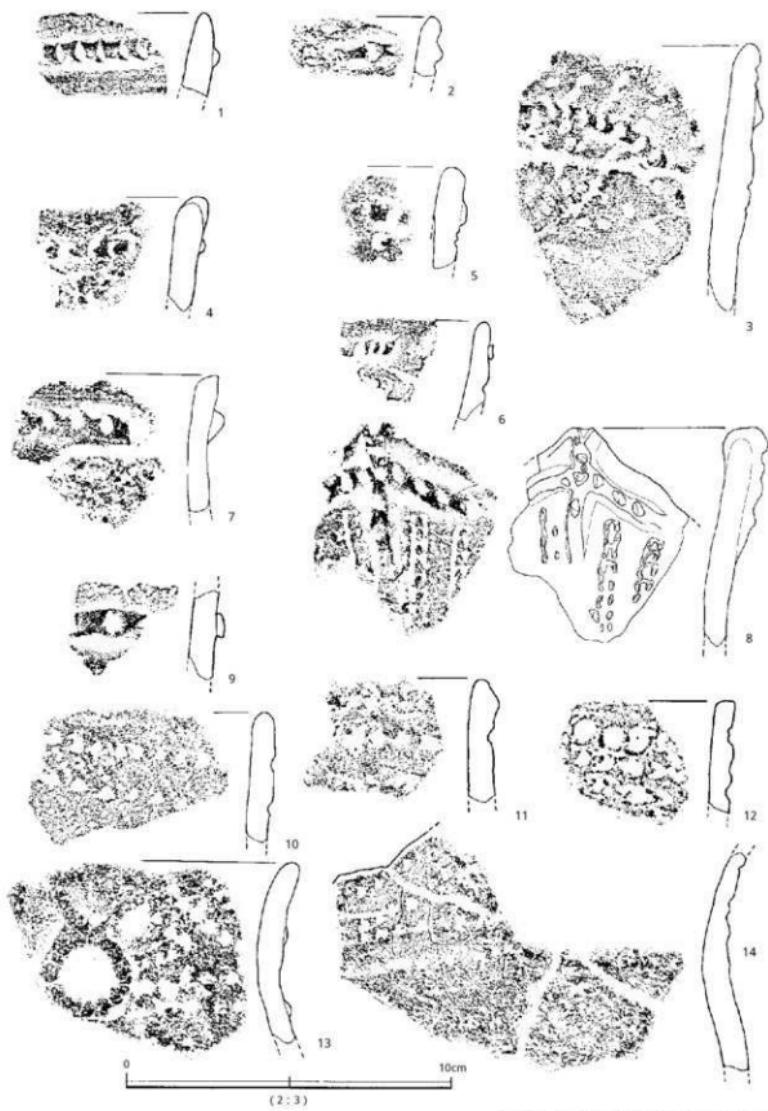
第2次調査では、溝跡や市道舗装直下と電話線敷設跡からは主に近世・近代の陶磁器片が、街道跡直上や玉石群の間からは近世陶磁器や古銭が出土した（表7以下参照）。南北235～245=東西700～705の間の玉石の敷石群が残存していた場所からはくわんか手の碗が出土（第40図1・2・4）。

参考文献

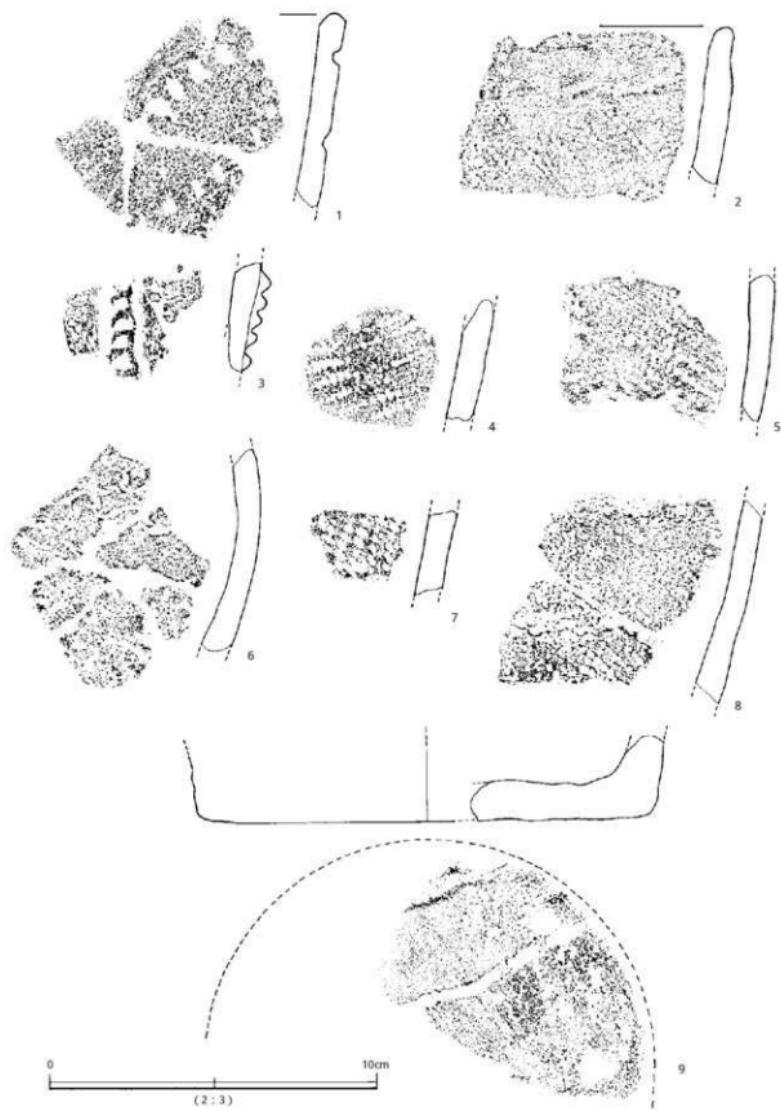
- | | |
|---------|---|
| 日本土木学会 | 1936「明治以前道路土木史」 |
| 長井政太郎 | 1973「金井村村史」 |
| 渡辺 信三 | 1989「南山形郷土史探訪」 |
| 渡部 素一 | 1992「梅津政景日記」読本秋田藩家の日記を読む |
| 横山 明男 | 1996「羽州山形歴史風土記-近世の道と人」 |
| 横山 昭男他 | 1998「山形県の歴史」 |
| 渡部 真治 | 1998「蘇る敷石道-越後街道黒沢跡の変遷を迎へる-」 |
| 佐々木義之介他 | 2000「北秋田と羽州街道」 |
| 横山 昭男 | 2001「最上川と羽州浜街道」 |
| 渡辺 信三 | 2002「黒沢村の歴史」 |
| 藤原優太郎 | 2002「羽州街道をゆく」 |
| そ の 他 | 「松原神明神社の遷座歴」
「谷柏周辺村史」
「東北の街道-道の文化史いまむかし-」(渡辺信夫監修)
「山形県歴史の道調査報告書-羽州街道」
「山形県歴史の道調査報告書-関山街道」
「山形県歴史の道調査報告書-米沢・板谷街道」
「歴史の道保存整備工事報告書-出羽街道中山越・山刀伐越崎」
「宮城県文化財調査報告書第66集」「同66集」「同80集」
「秋田県文化財調査報告書第132集」
「季刊考古学第46号古代の道と考古学」
「大日本道中行程編見記大全(江戸期刊行)」 |



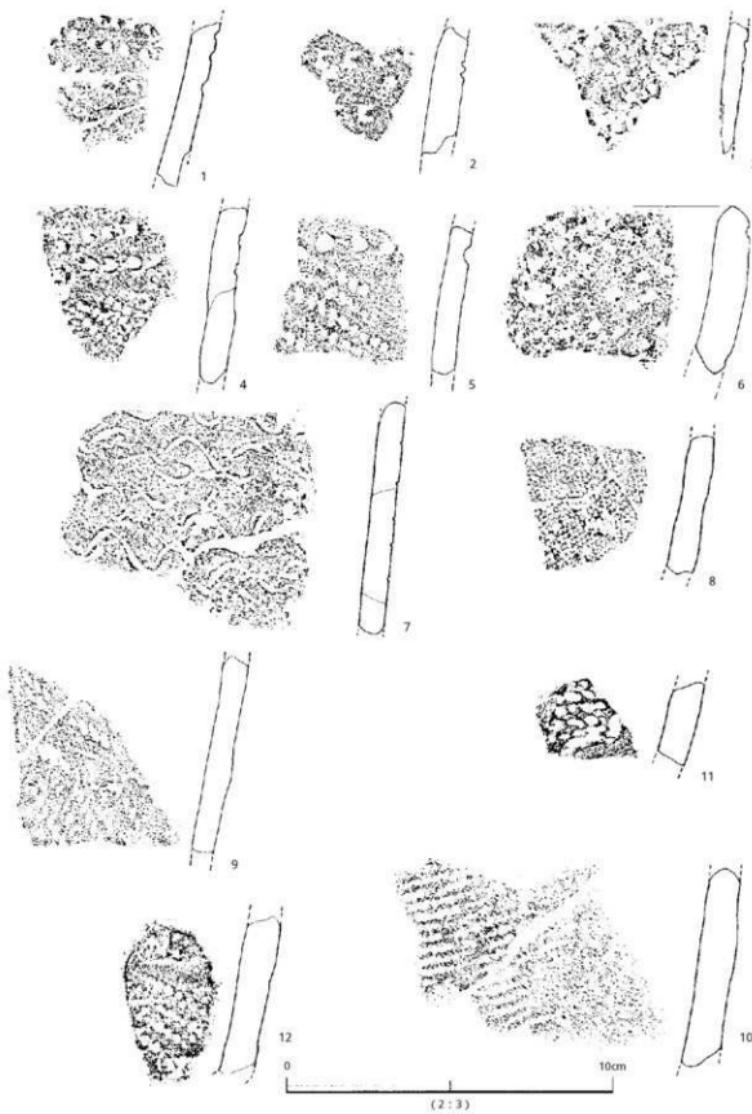
第18図 坂ノ上遺跡第1次縄文土器(1)



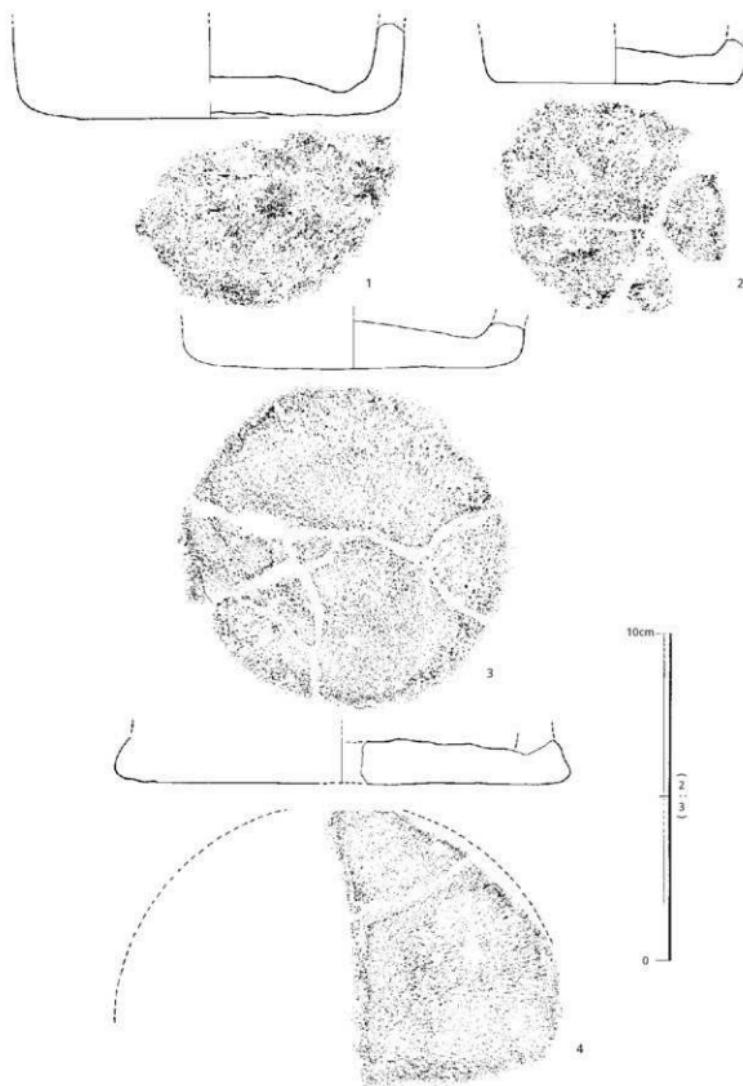
第19図 坂ノ上遺跡第1次縄文土器 (2)



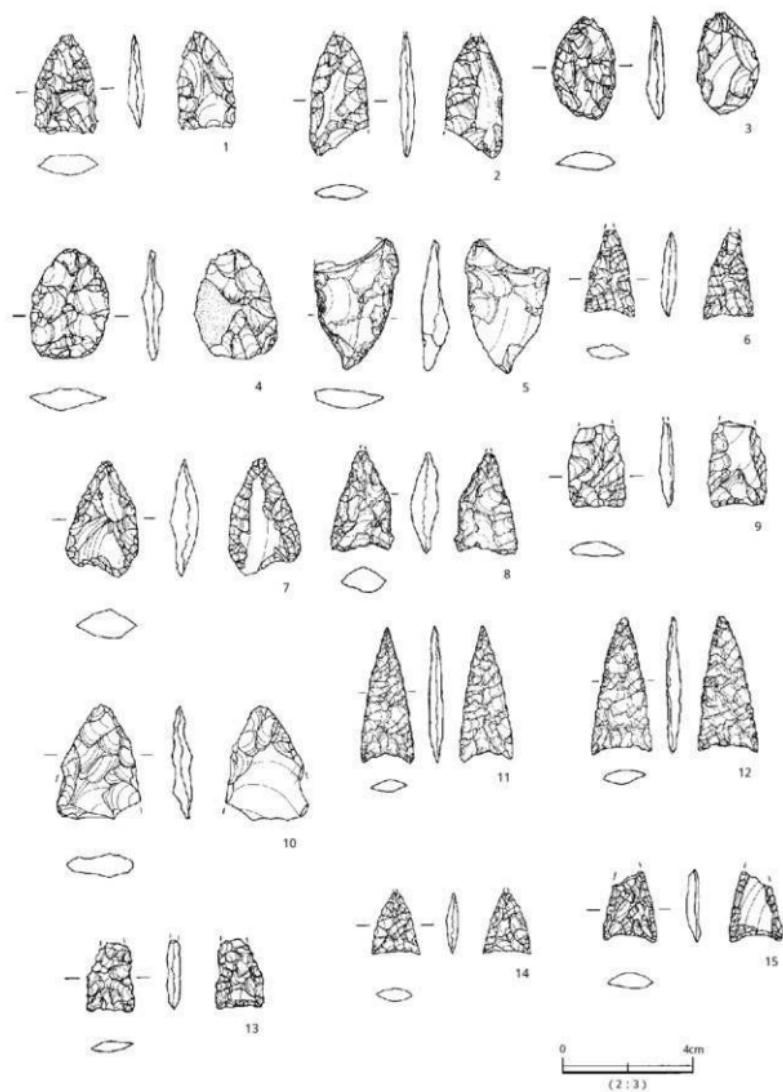
第20図 坂ノ上遺跡第1次縄文土器（3）



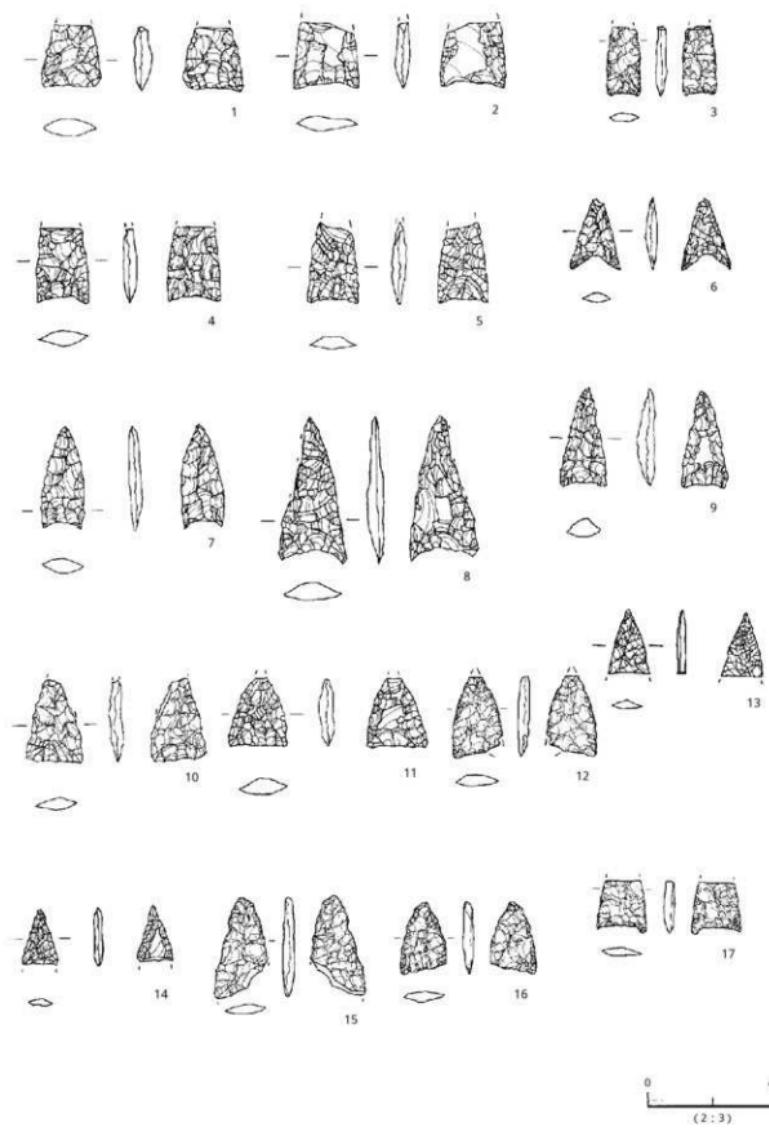
第21図 坂ノ上遺跡第1次縄文土器(4)



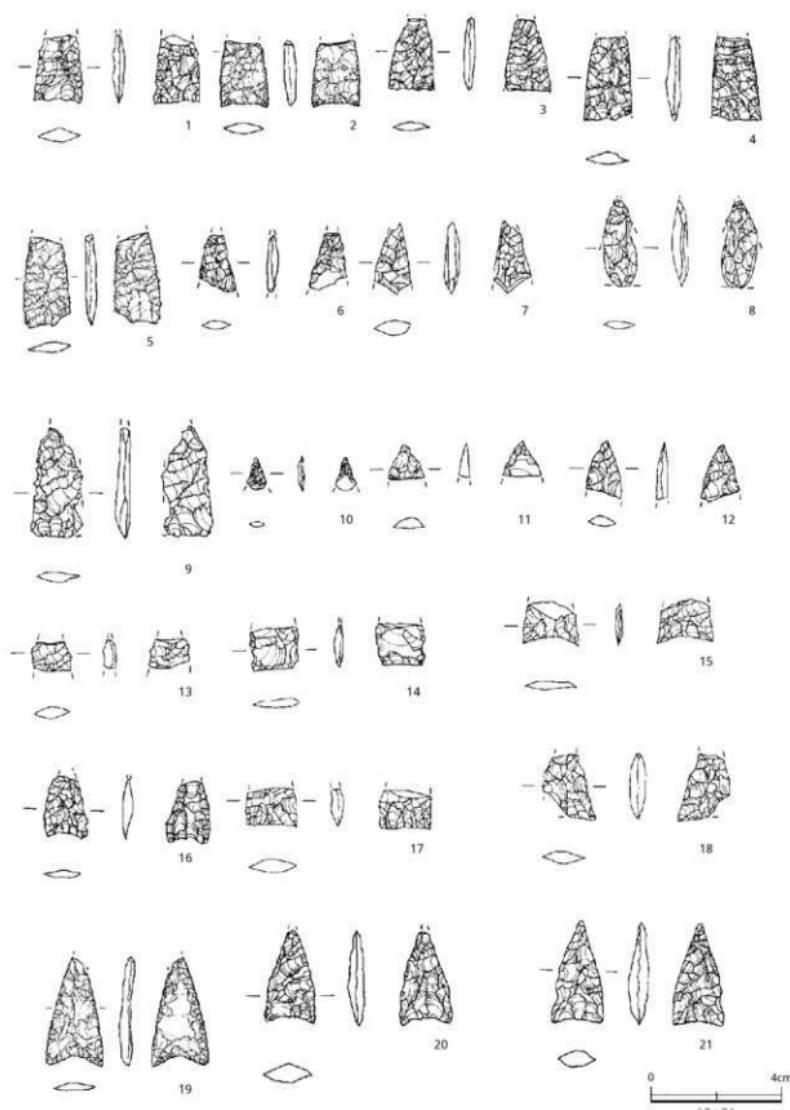
第22図 坂ノ上遺跡第1次縄文土器(5)



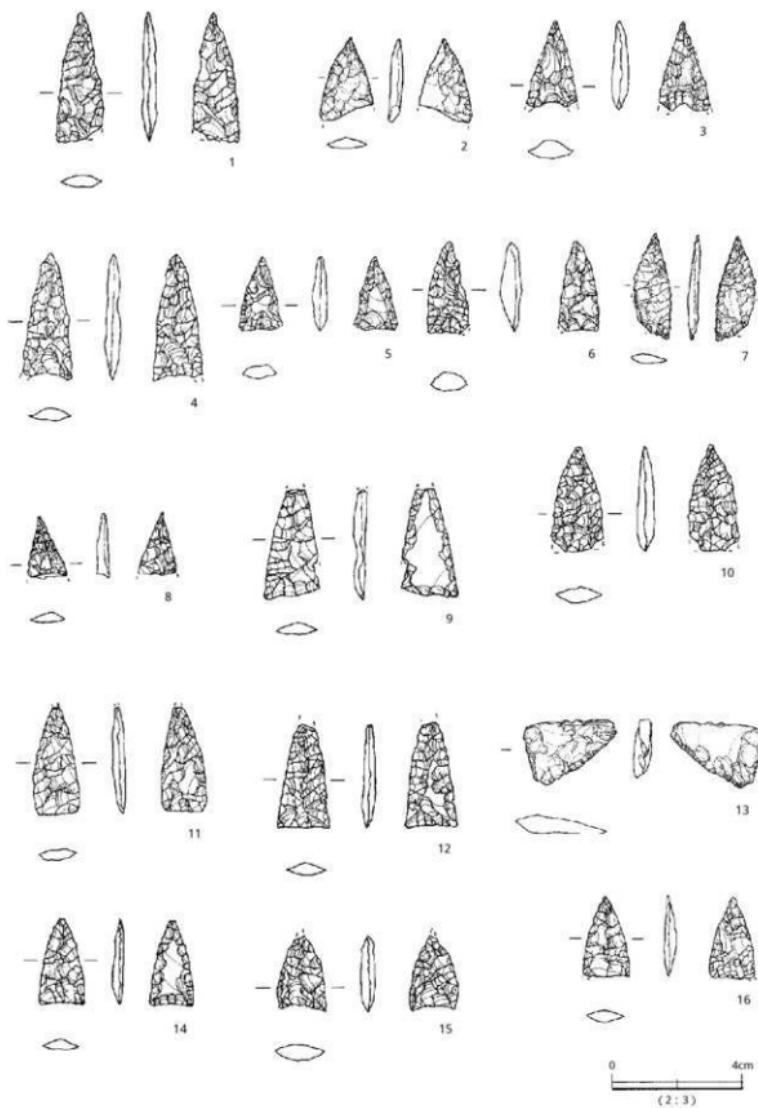
第23図 坂ノ上遺跡第1次石器(1)



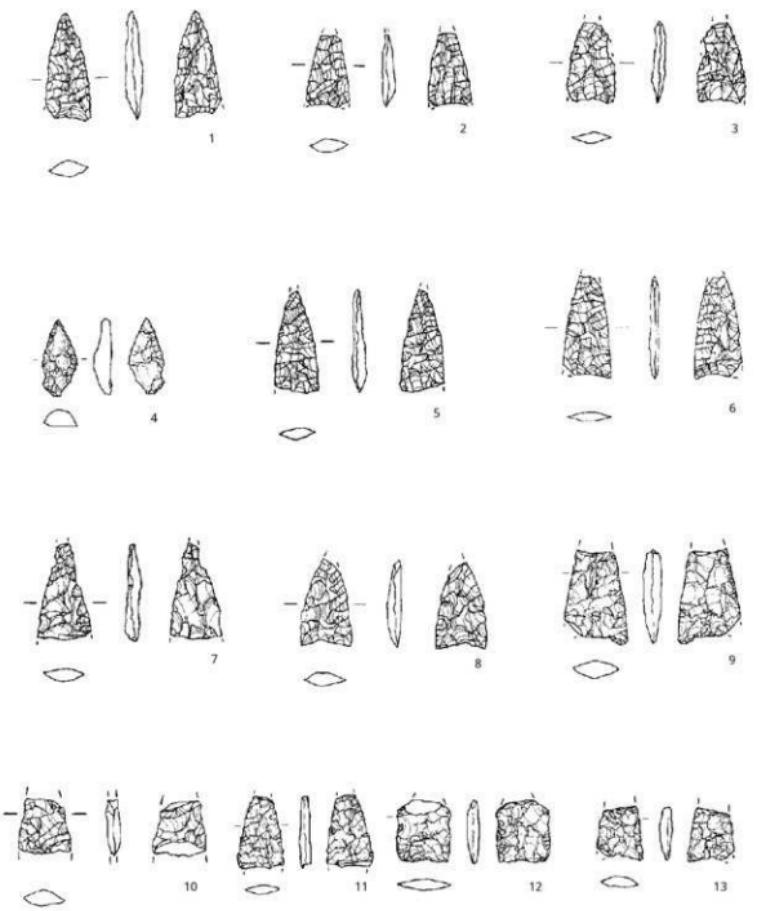
第24図 坂ノ上遺跡第1次石器（2）



第25図 坂ノ上遺跡第1次石器(3)

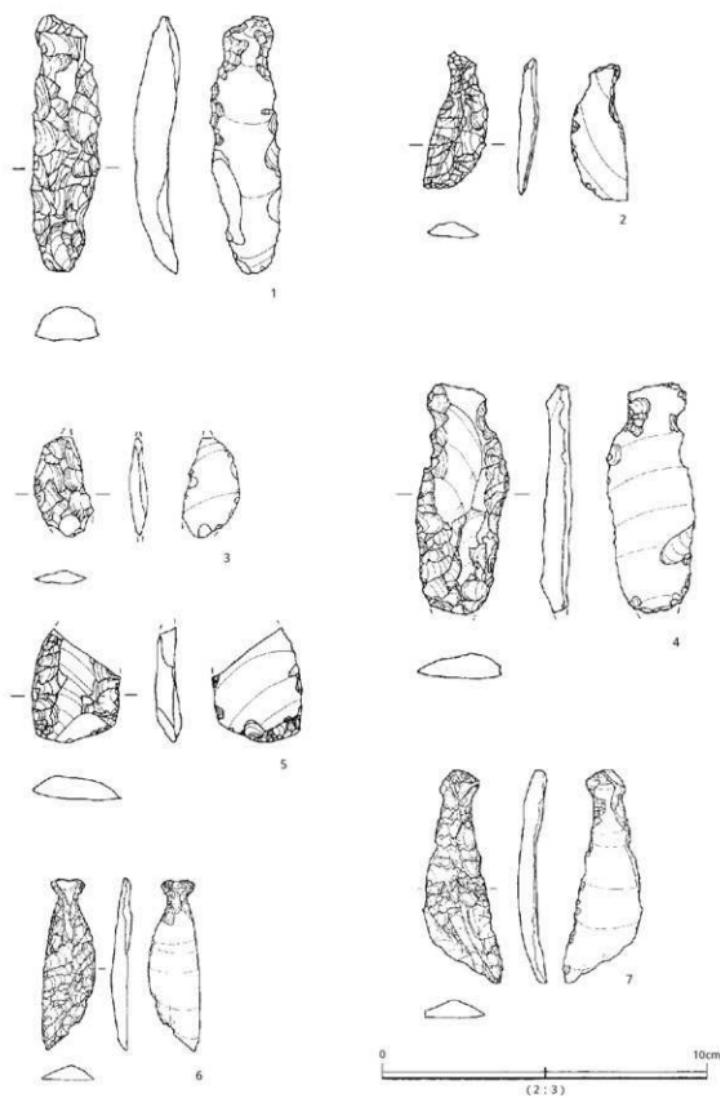


第26図 坂ノ上遺跡第1次石器(4)

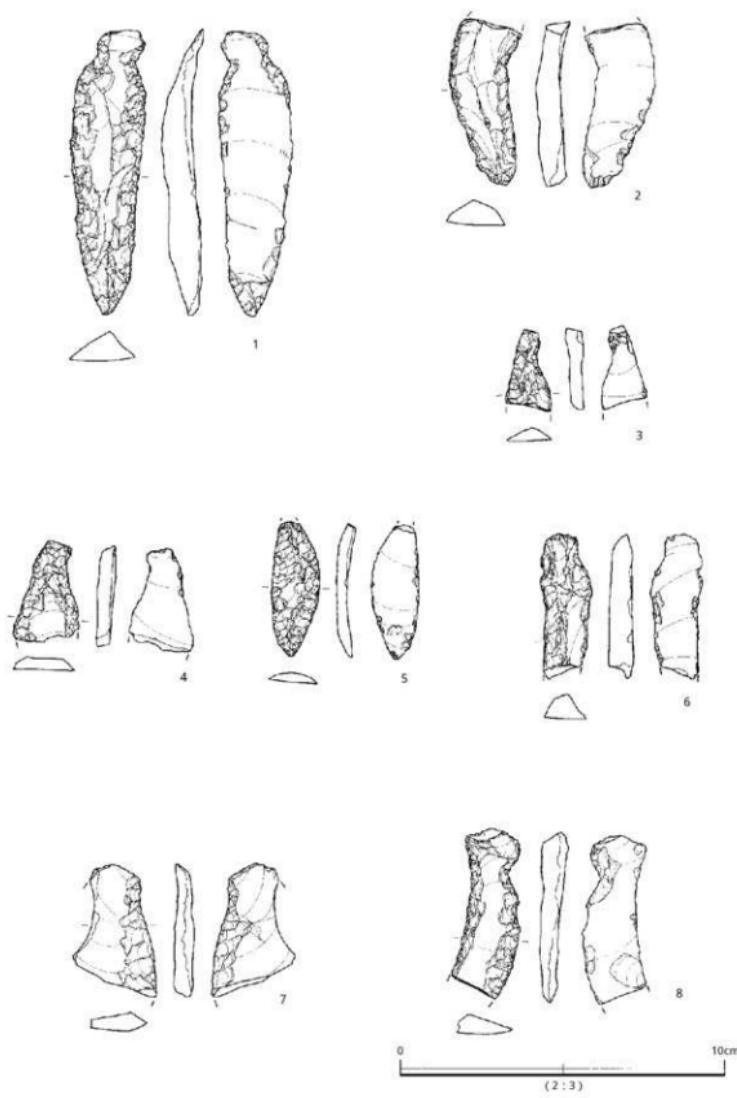


0 4cm
(2 : 3)

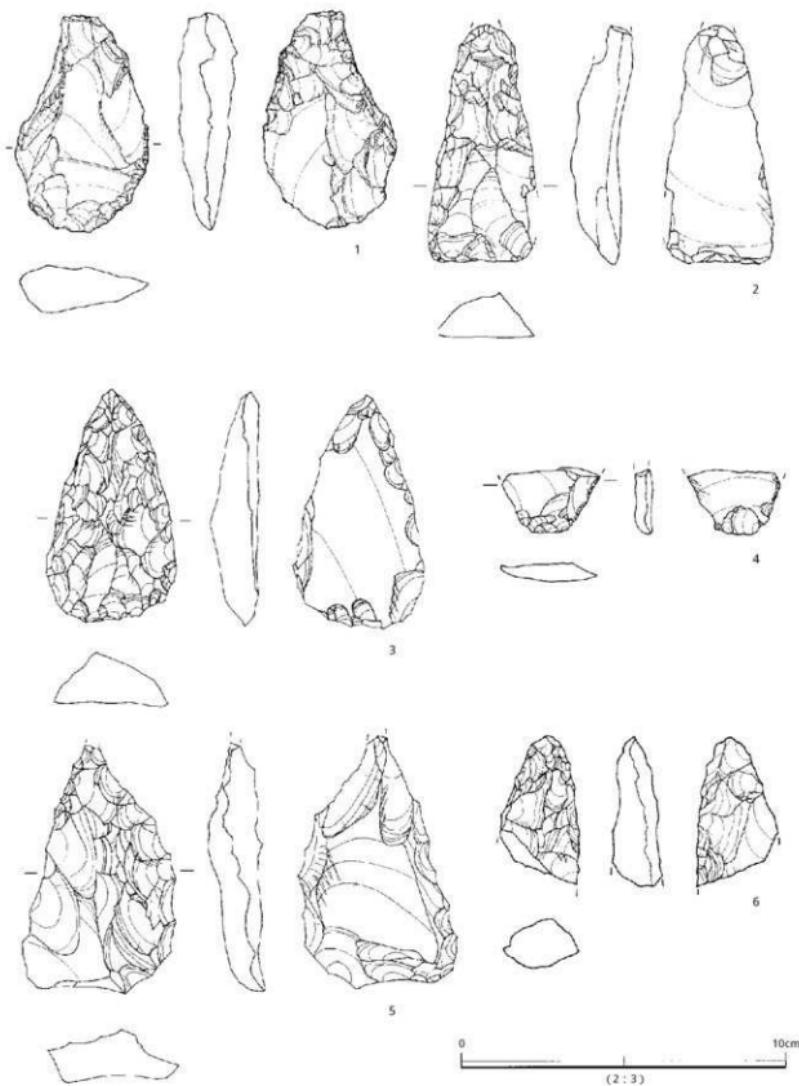
第27図 坂ノ上遺跡第1次石器(5)



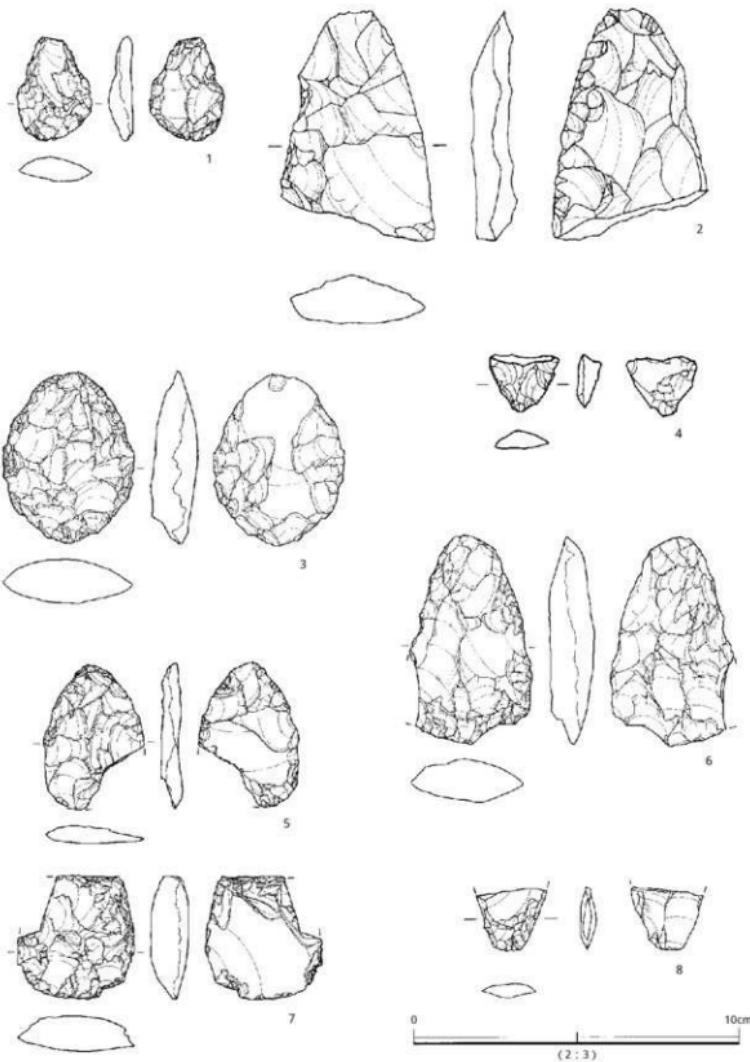
第28図 坂ノ上遺跡第1次石器 (6)



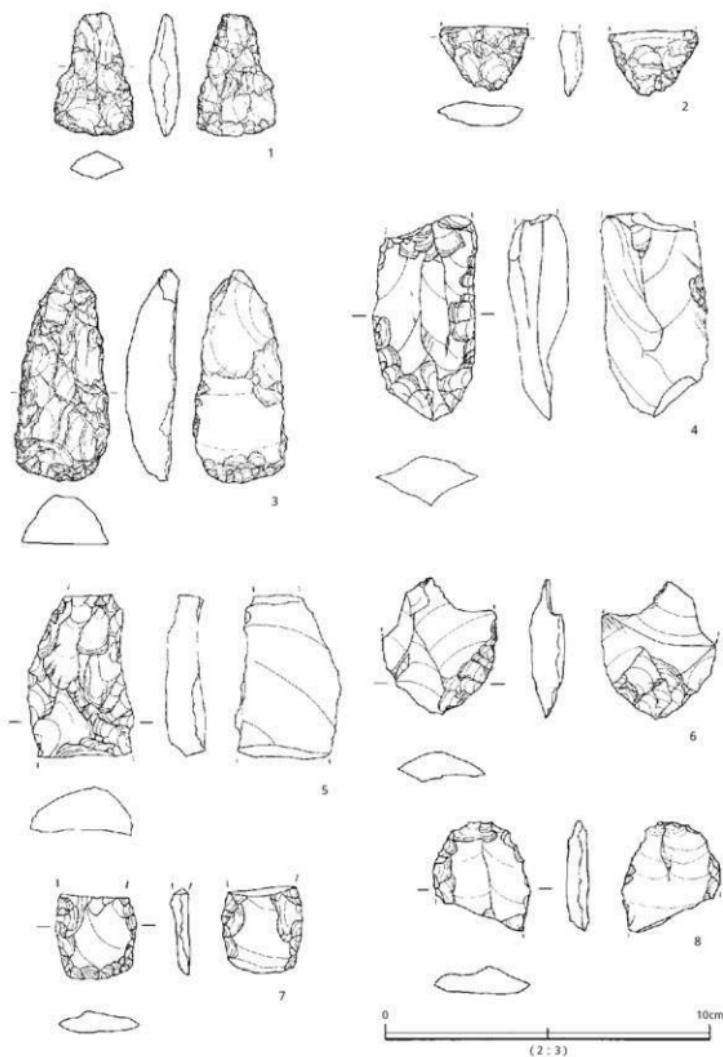
第29図 坂ノ上遺跡第1次石器（7）



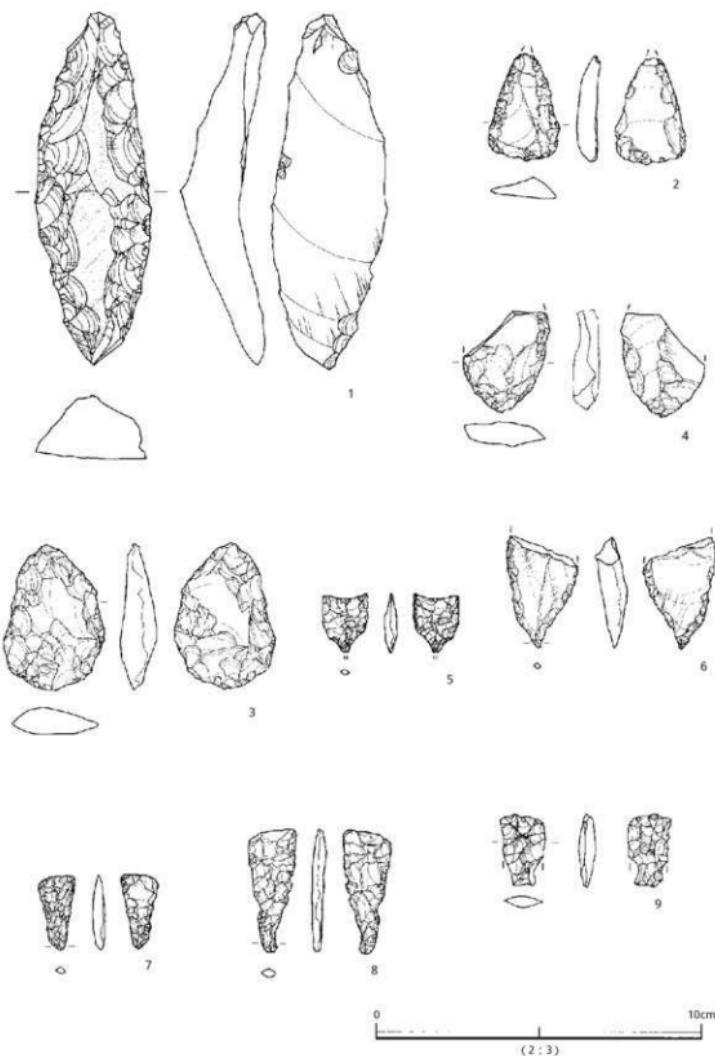
第30図 坂ノ上遺跡第1次石器(8)



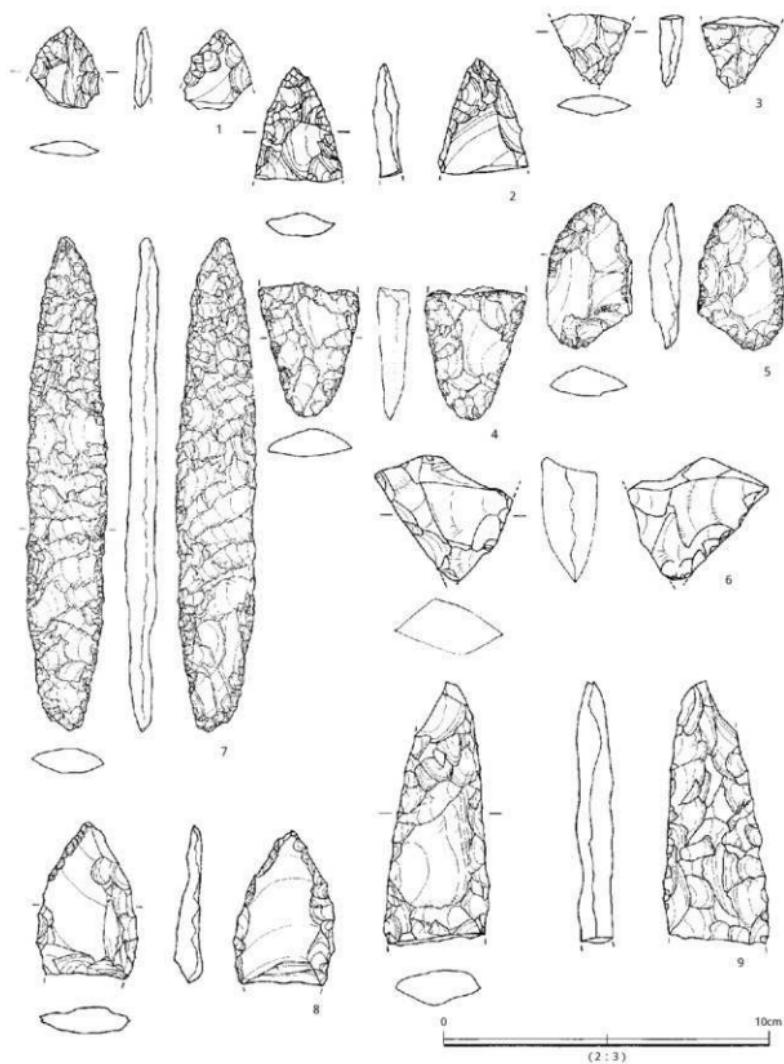
第31図 坂ノ上遺跡第1次石器 (9)



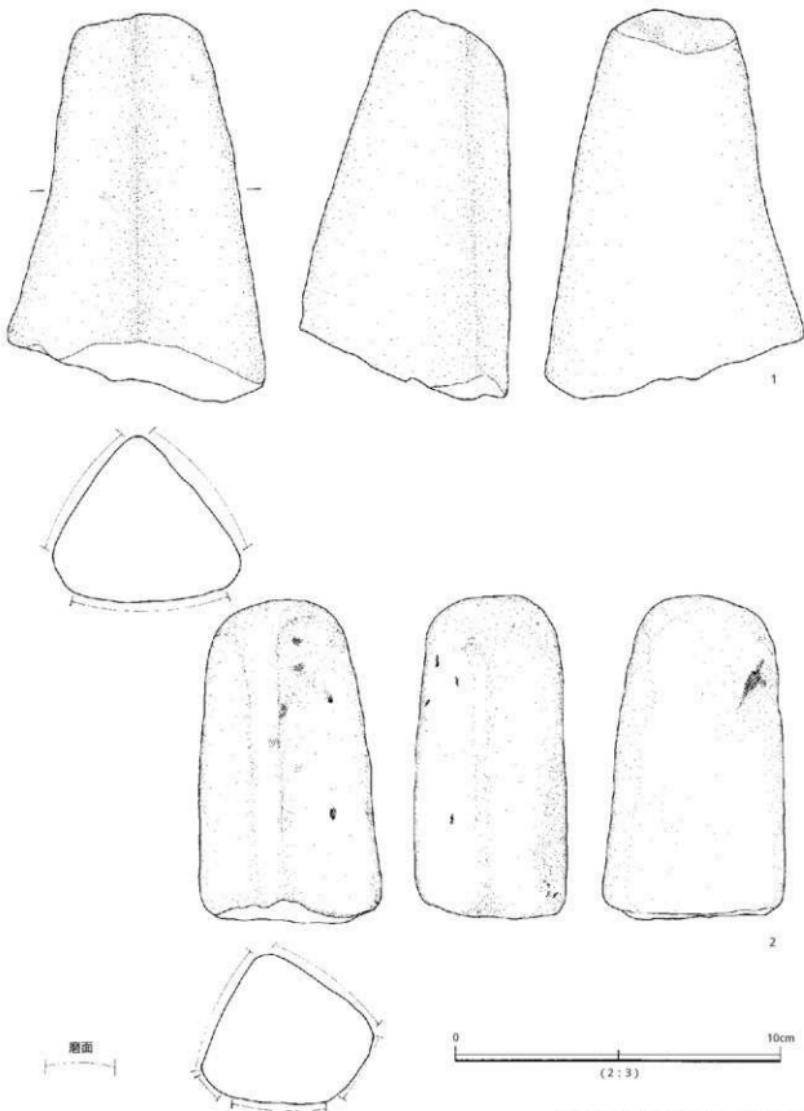
第32図 坂ノ上遺跡第1次石器 (10)



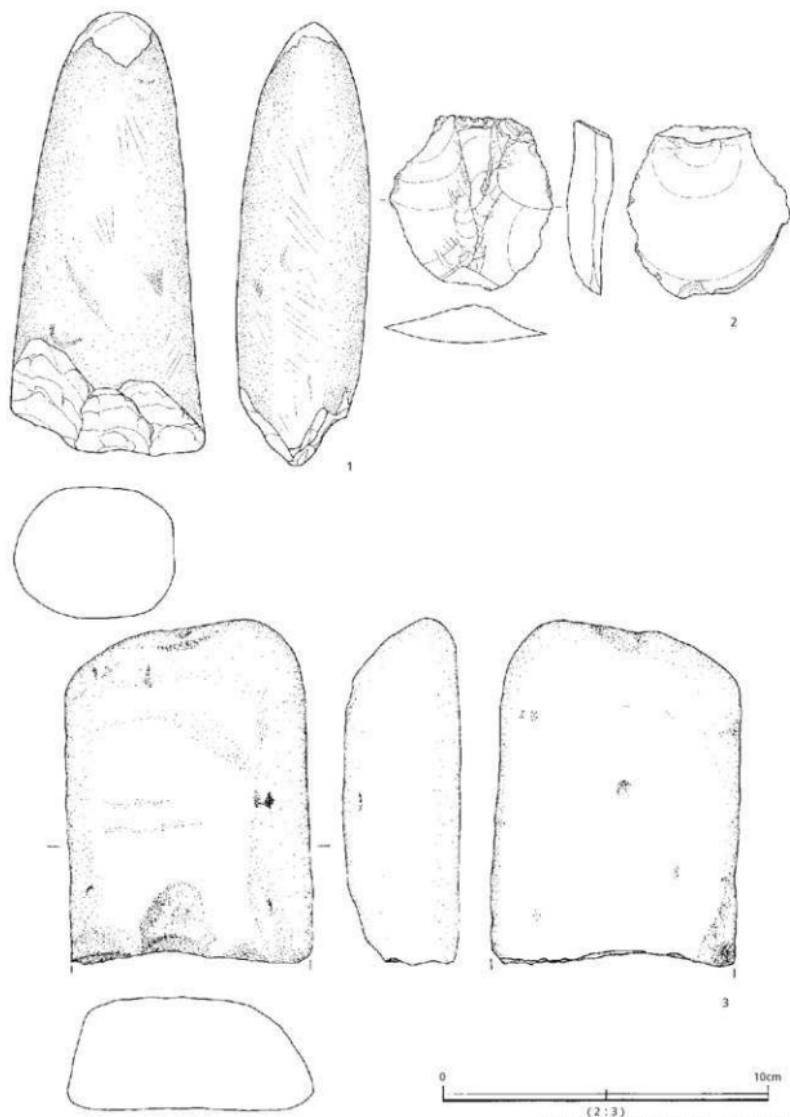
第33図 坂ノ上遺跡第1次石器 (11)



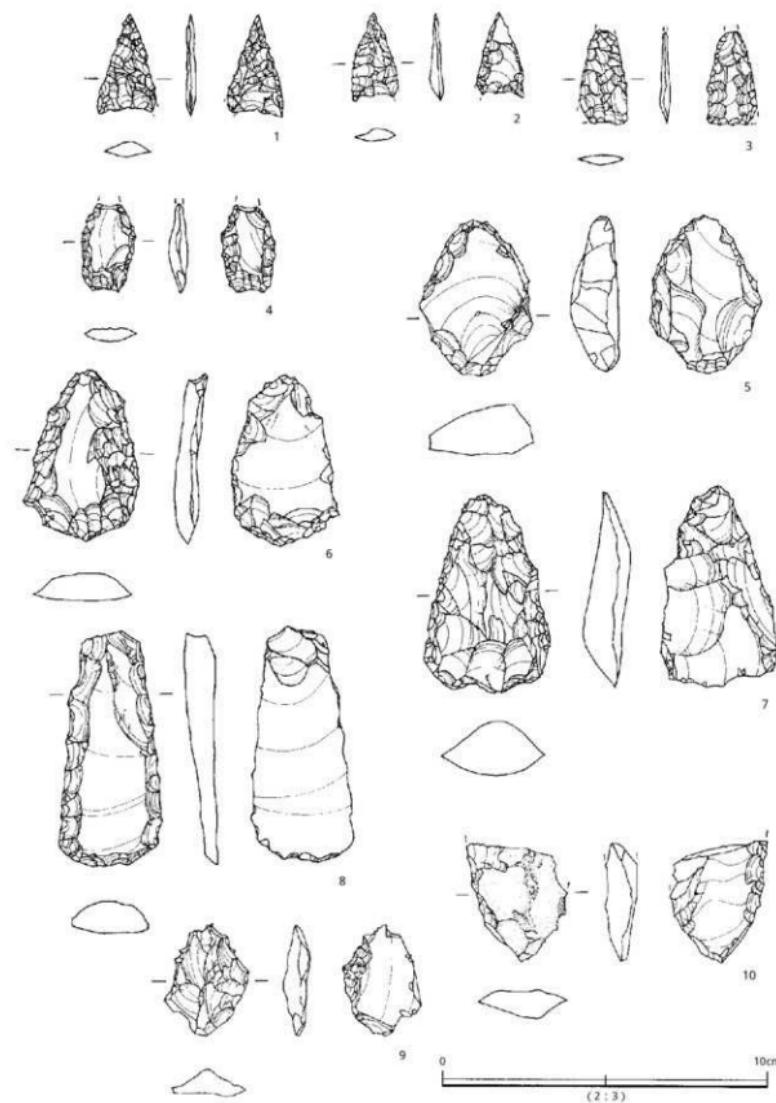
第34図 坂ノ上遺跡第1次石器 (12)



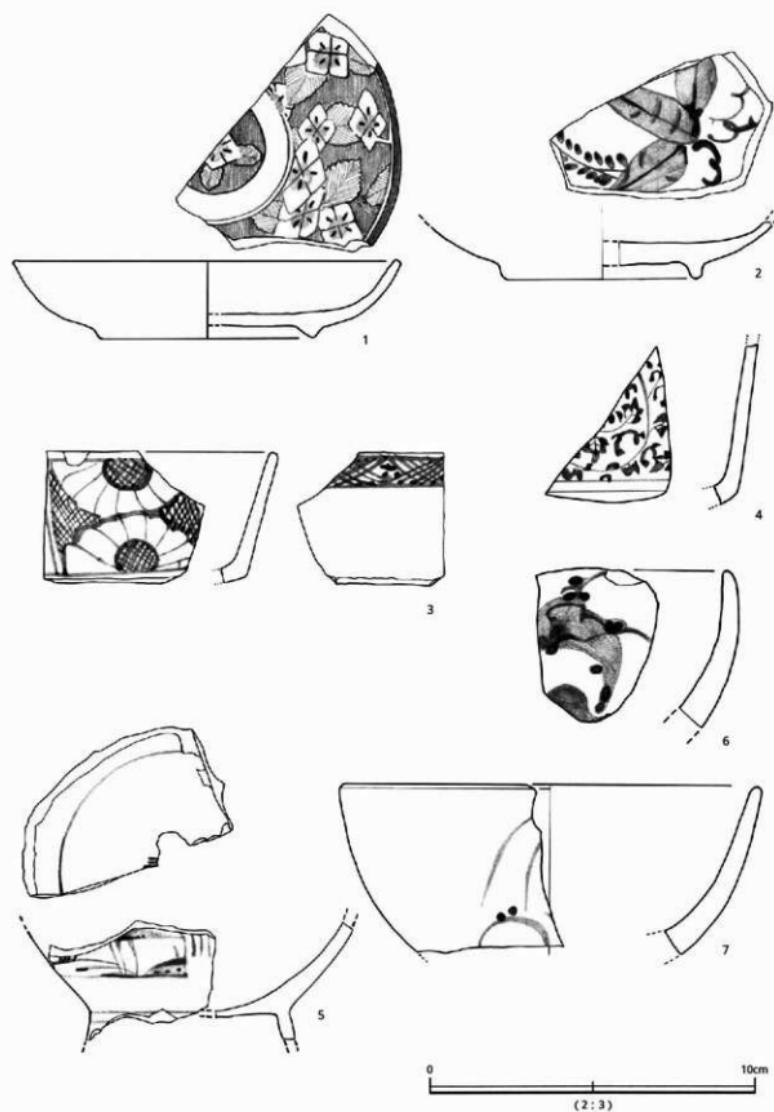
第35図 坂ノ上遺跡第1次石器 (13)



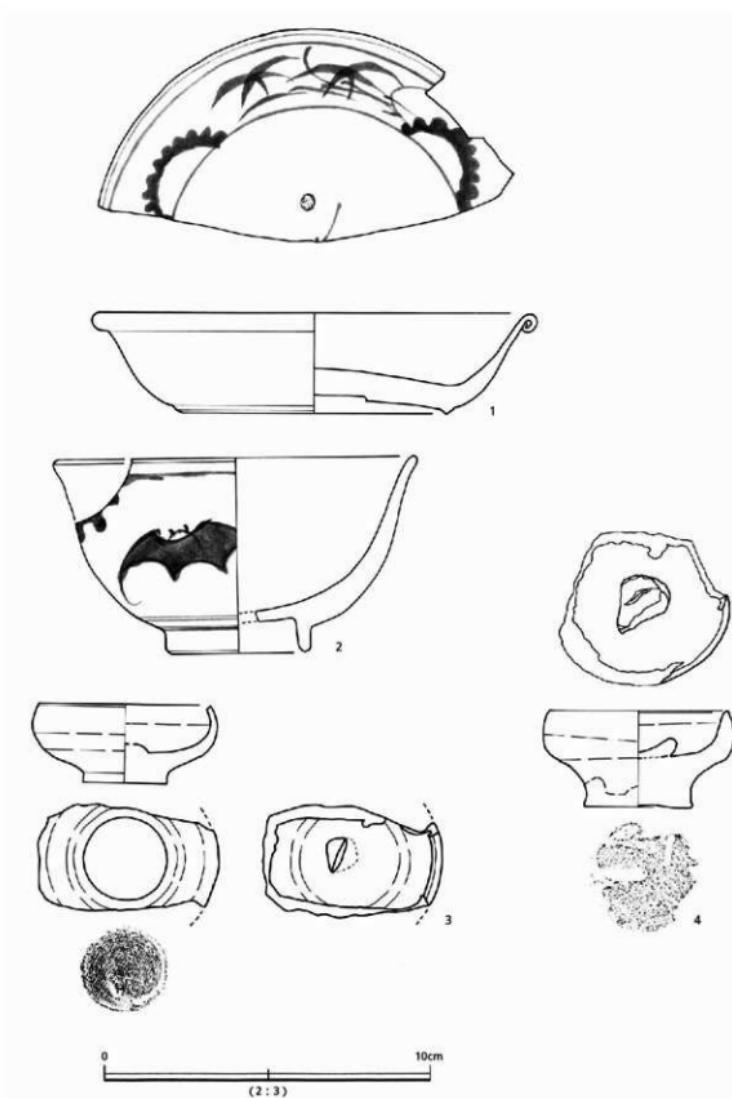
第36図 坂ノ上遺跡第1次石器 (14)



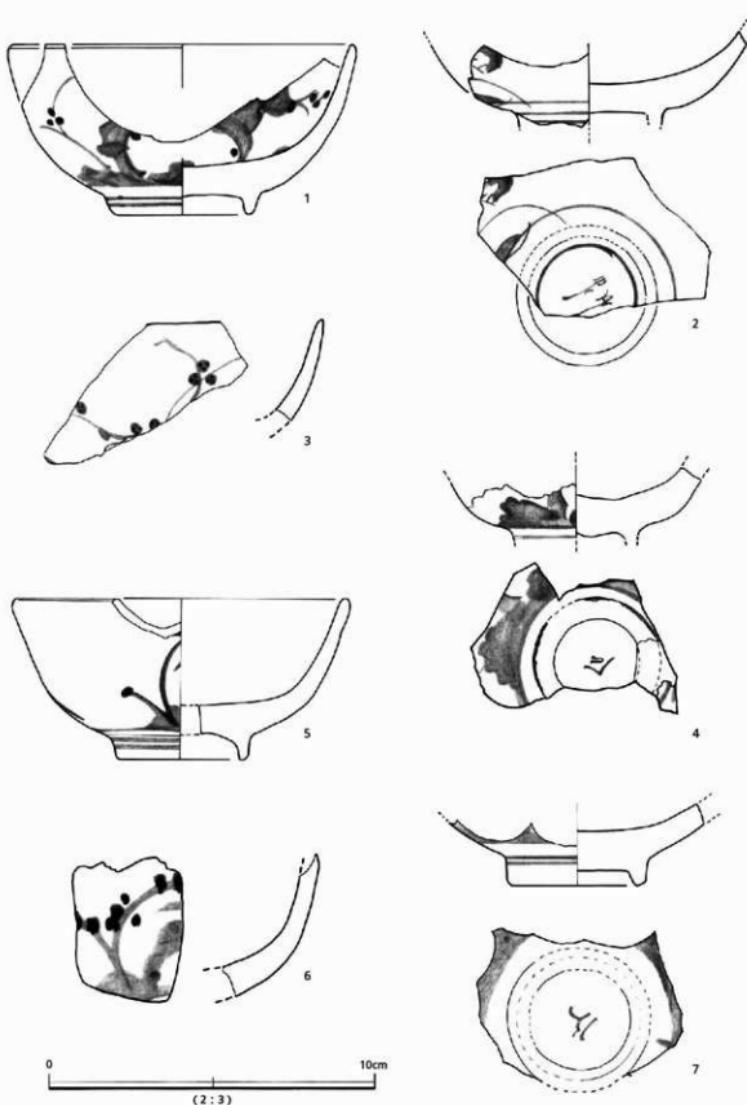
第37図 坂ノ上遺跡第2次石器 (15)



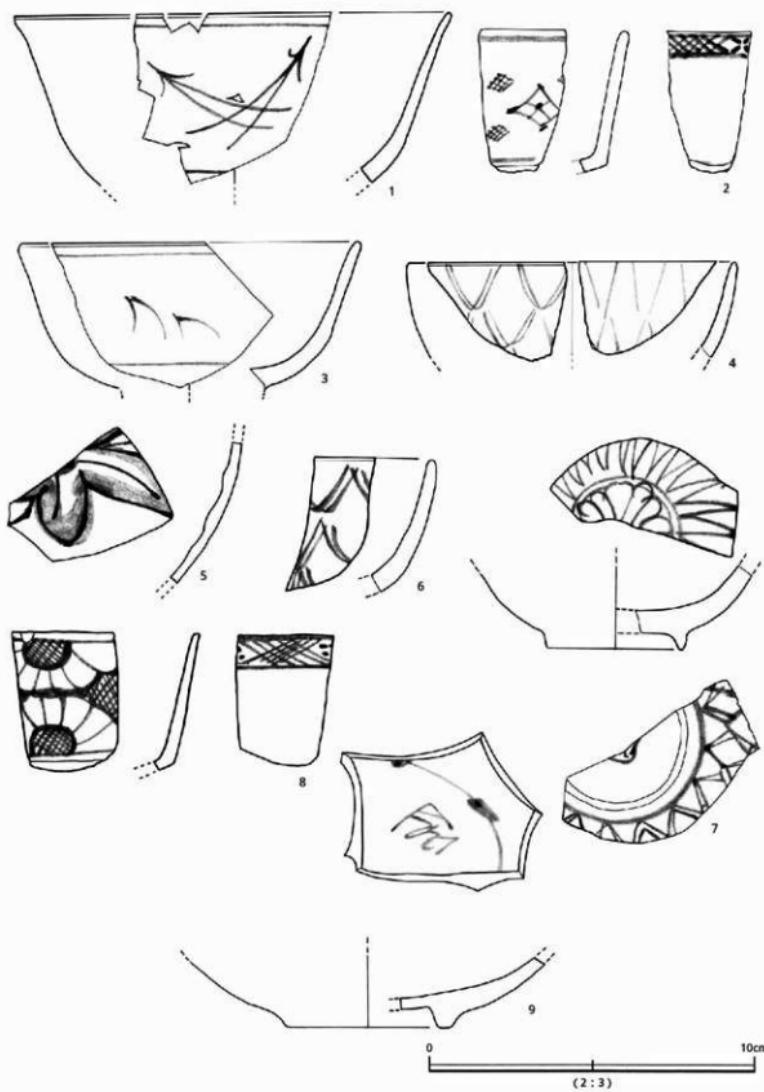
第38図 坂ノ上遺跡第1次陶磁器(1)



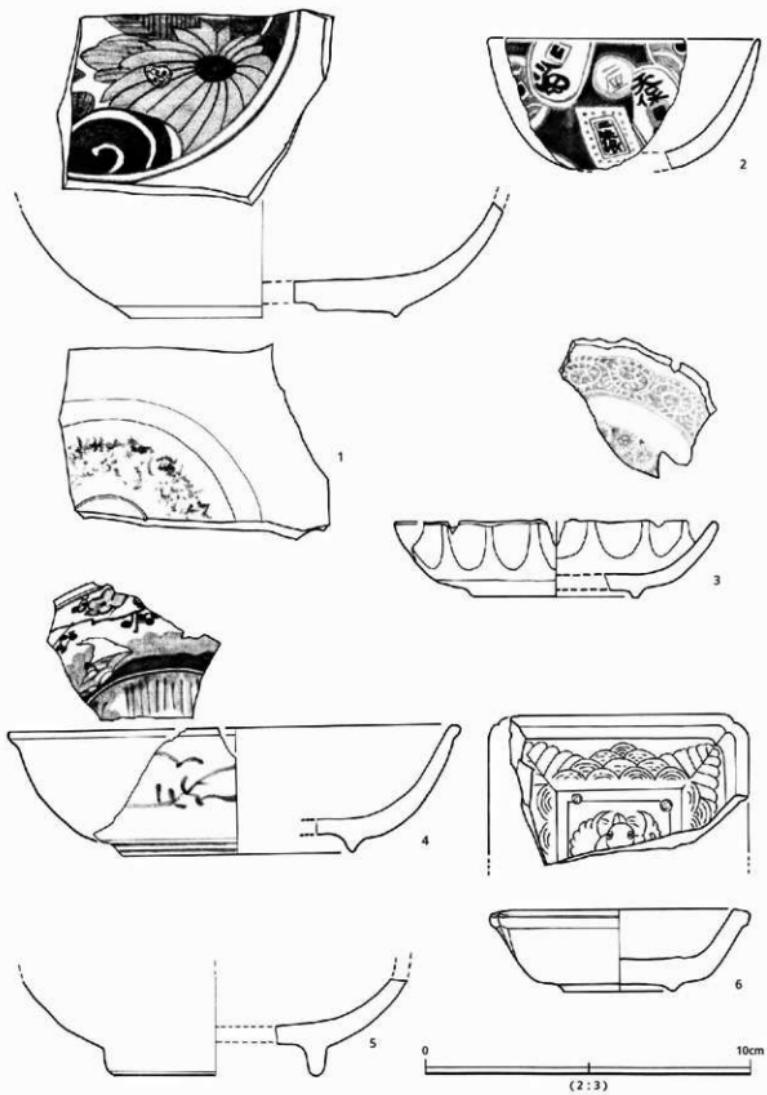
第39図 坂ノ上遺跡第1次陶磁器 (2)



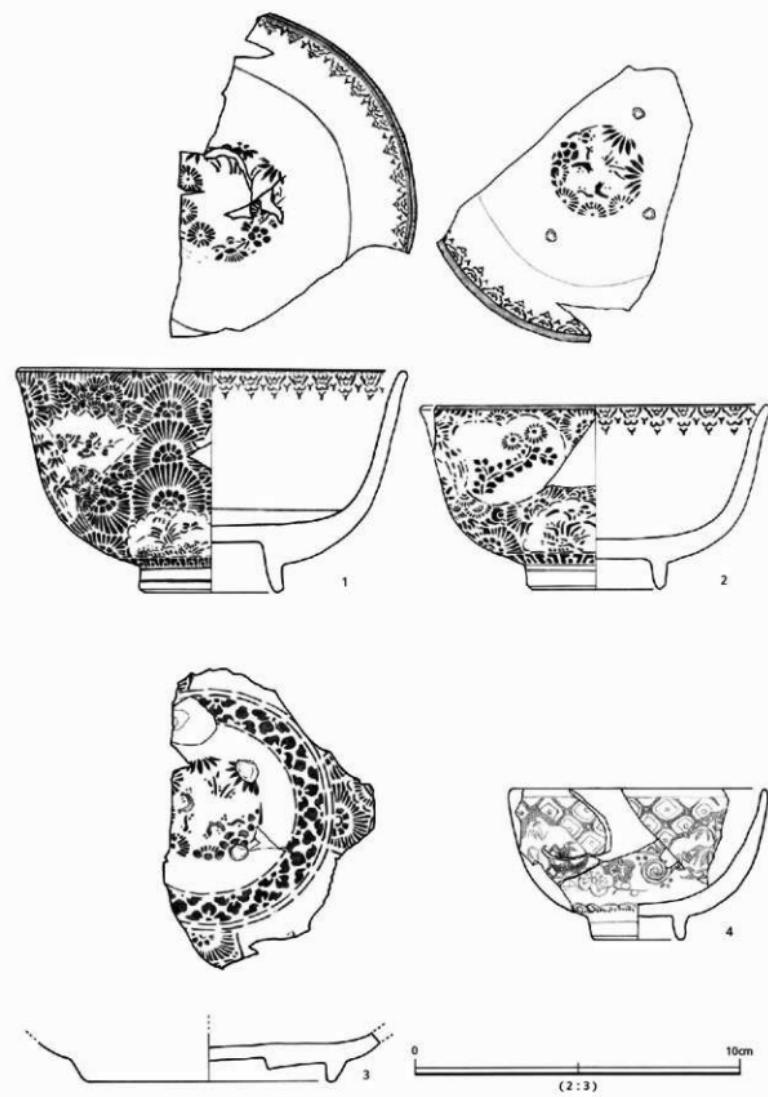
第40図 坂ノ上遺跡第2次陶磁器(3)



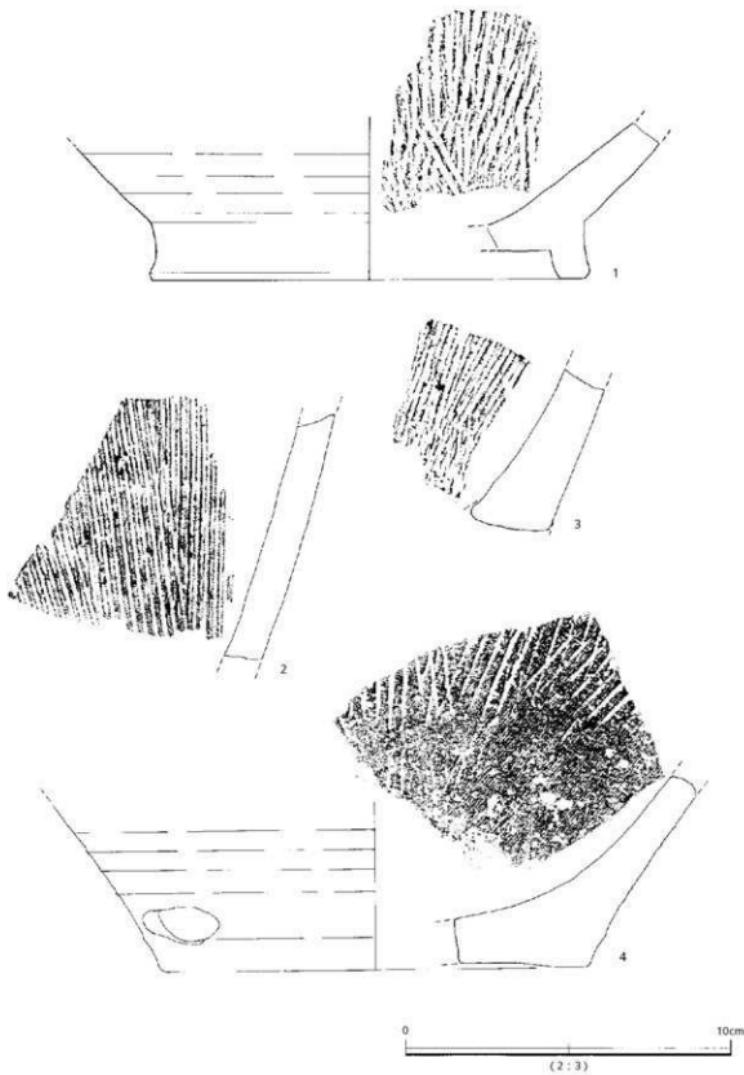
第41図 坂ノ上遺跡第2次陶磁器(4)



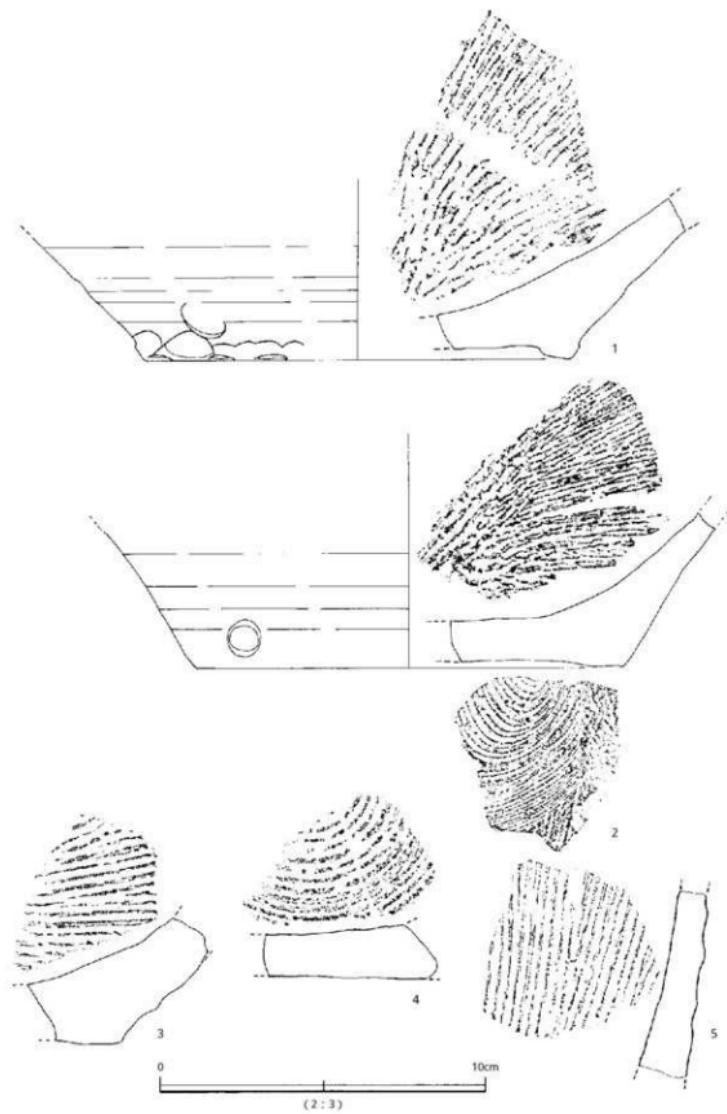
第42図 坂ノ上遺跡第2次陶磁器(5)



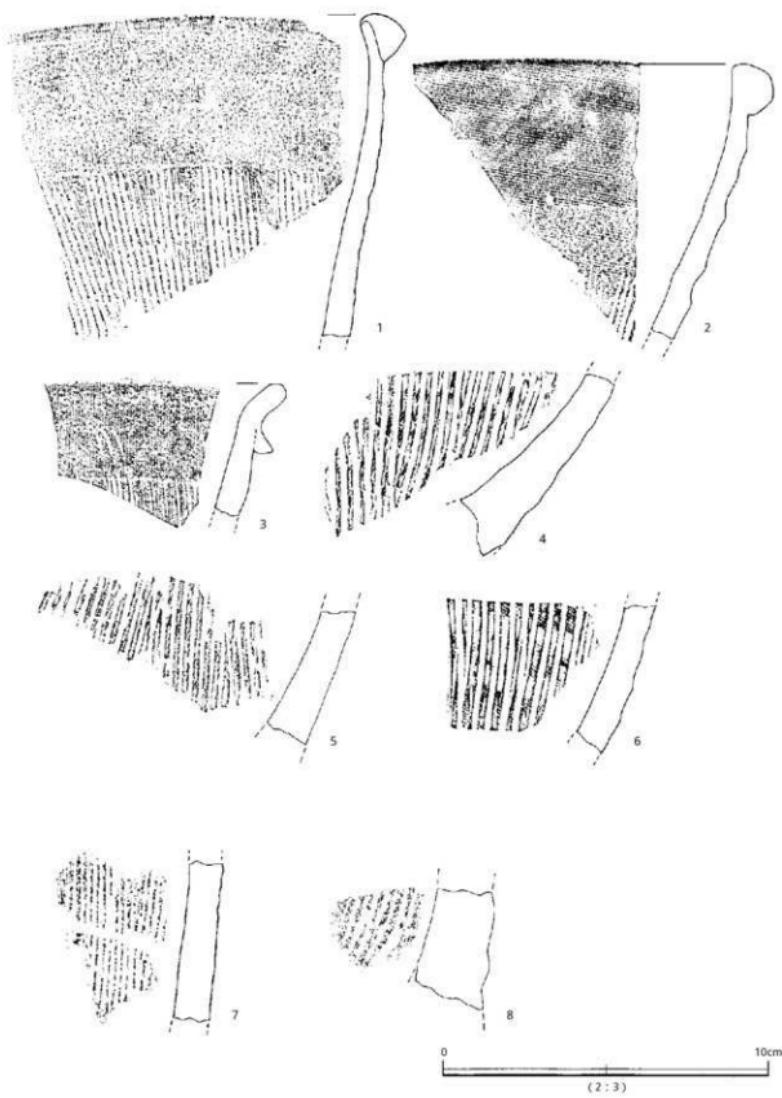
第43図 坂ノ上遺跡第2次陶磁器(6)



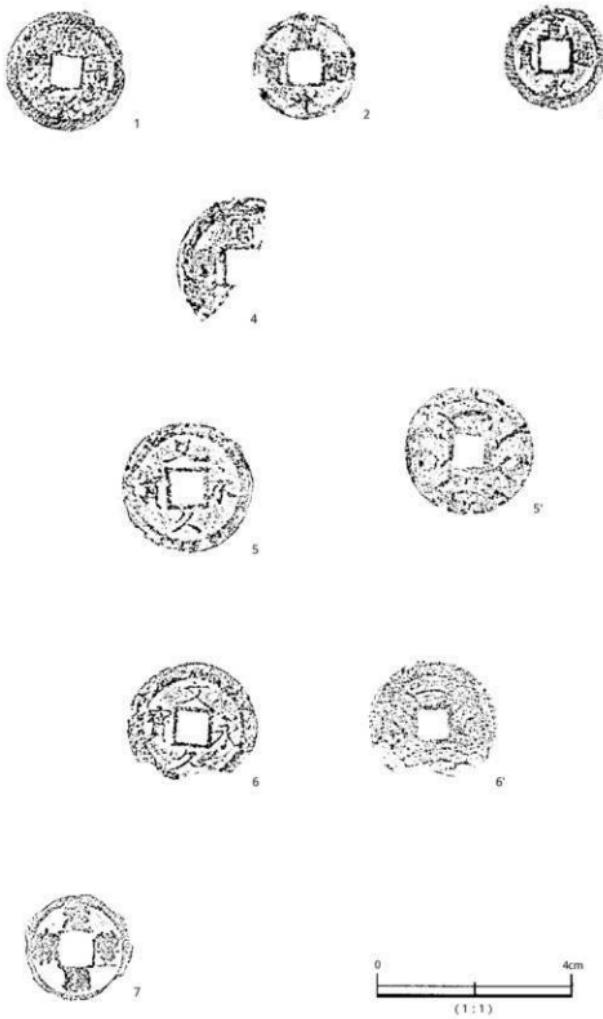
第44図 坂ノ上遺跡第1・2次陶磁器 (7)



第45図 坂ノ上遺跡第2次陶磁器(8)



第46図 坂ノ上遺跡第2次陶磁器(9)



第47図 坂ノ上遺跡第2次古銭

表3 長者屋敷遺跡縄文土器観察表

番号	神岡番号	国版番号	出土位置	器種	文様	分類	備考
1	10- 1	28- 1	S K 2030	深 裂・口縁部	波状口縁・細い粘土紐貼付 押引爪形文の平行沈線	1 a 類	
2	10- 2	28- 6		台付鉢・口縁部		1 a 類	
3	10- 3	28- 5	S K 2032	台付鉢・縁部	竹籠文・竹籠の円文	1 a 類	
4	10- 4	28- 2		台付鉢・縁部	細い粘土紐貼付の文様	1 a 類	
5	10- 5	28- 4	S K 2030	深 裂・全体	(表面摩滅のため不明)	1 c 類	
6	11- 1	27- 1	S K 2030	深 裂・全体	(表面摩滅のため不明)	1 c 類	
7	12- 1	28- 3	S K 2030	深 裂・全体	(表面摩滅のため不明)	1 c 類	
8	12- 2	27- 3	S K 2026	深 裂・全体	指頭丘痕文	1 c 類	
9	12- 3	27- 2	S K 2030	台付鉢・底辺部	(表面摩滅のため不明)	1 c 類	
10	13- 1	25- 14	S K 702	小形鉢・口縁部	沈線文・横位R L 繩文	3 a 類	
11	13- 2	25- 2	S T 901	鉢・口縁部	沈線区画文・磨消縄文	3 b 類	
12	13- 3	25- 7	S T 901	小形鉢・口縁部	波状口縁	3 a 類	
13	13- 4	26- 6	S T 901	深 裂・底辺部	L R 繩文模位回転	2 b 類	粗製土器
14	13- 5	26- 11	S T 901	小形鉢・底部		4 類	手捏土器
15	13- 6	21- 2	S T 901	小形鉢・底部	C字状文・L R 充填縄文	2 a 類	
16	14- 1	25- 1	S X 514	小形鉢・口縁部	U字状文	2 a 類	
17	14- 2	25- 9	S X 505	小形鉢・口縁部	波状口縁・沈線文	3 a 類	
18	14- 3	25- 8	S X 513	小形鉢・口縁部	波状口縁	3 a 類	
19	14- 4	25- 16	S X 513	鉢・口縁部	沈線区画文・L R 磨消縄文	3 b 類	
20	14- 5	25- 13	S X 514	鉢・口縁部	沈線区画文・磨消縄文	3 b 類	
21	14- 6	25- 11	S X 515	鉢・口縁部	沈線区画文・L R 磨消縄文	3 b 類	
22	14- 7	25- 10	S X 514	鉢・口縁部	沈線区画文・L R 磨消縄文	3 b 類	
23	14- 8	25- 15	S X 510	鉢・口縁部	沈線区画文・L R 磨消縄文	3 b 類	
24	15- 1	25- 3		鉢・口縁部	平行沈線・L R 磨消縄文	3 a 類	
25	15- 2	25- 5	S X 520	鉢・口縁部	平行沈線・L R 磨消縄文	3 a 類	
26	15- 3	25- 4	S X 510	鉢・口縁部	平行沈線・L R 磨消縄文	3 a 類	
27	15- 4	25- 12	S X 514	鉢・口縁部	L R 磨消縄文	3 a 類	
28	15- 5	26- 5	S X 510	深 裂・口縁部	L R 繩文模位回転	3 c 類	粗製土器
29	15- 6	26- 7		深 裂・口縁部	羽状縄文(多掘文)	1 b 類	粗製土器
30	15- 7	26- 2	S T 900	深 裂・口縁部	R L 繩文模位回転	3 c 類	粗製土器
31	15- 8	26- 1		深 裂・口縁部	口縁磨消・縦羽状縄文	3 c 類	粗製土器
32	16- 1	26- 8		深 裂・体部	L R 繩文	1 b 類	
33	16- 2	26- 6		深 裂・体部	R L 繩文	1 b 類	
34	16- 3	26- 4	S K 709	深 裂・体部	R L 付加縄文	1 b 類	
35	16- 4	26- 3		深 裂・体部	L R 繩文	1 b 類	
36	16- 5	26- 9	S K 710	深 裂・底部	箆工具の擦痕	4 類	手捏土器
37	16- 6	26- 12		深 裂・底部		4 類	
38	16- 7	26- 10	S X 515	深 裂・底部		4 類	上げ底
39	17- 1	23- 2	S X 502	深 裂・体底部	(地文不明)	1 b 類	網代痕?
40	17- 2	21- 1	S T 900	深 裂・口縁部	口縁磨消・縫合部1条沈線	3 a 類	
41	18- 1	24- 1	S X 514	深 裂・口縁部	L R 繩文模位回転重疊	3 c 類	粗製土器
42	19- 1	22- 1-2	S P 1050	深 裂・体底部	L R 繩文・底辺磨消	3 c 類	粗製土器
43	20- 1	23- 1	S X 502	深 裂・底部	L R 繩文・底辺磨消	3 c 類	網代痕・粗製土器

坂ノ上遺跡縄文土器観察表

番号	辨団番号	國版番号	出土位置	器種	文様	分類	備考
1	18- 1	32- 1	S T21	(不明)・口縁部	半截竹管刺突文	1 a 類	胎土に植物纖維含む
2	18- 2	32- 3	S T21	(不明)・口縁部	半截竹管刺突文・隆蒂刻目	1 b 類	
3	18- 3	29- 7	S T21	深 莔・口縁部	半截竹管刺突文・隆蒂刻目	1 b 類	國版29- 10と同一個体
4	18- 4	29- 8	S T21	(不明)・口縁部	半截竹管刺突文・隆蒂刻目	1 b 類	纖維を多量に含む
5	18- 5	32- 2	S T21	深 莔・口縁部	竹管刺突文・隆蒂刻目・口縁肥厚	1 a 類	
6	18- 6	32- 4	S T21	深 莔・口縁部	波状口縁・粘土紐貼付	2 a 類	
7	18- 7	29- 6	S T21	深 莔・口縁部	波状口縁・刺突文・口縁刻目	1 a 類	
8	18- 8	29- 5	S T21	深 莔・口縁部	波状口縁・竹管刺突・口縁肥厚	1 a 類	
9	18- 9	29- 3	S T21	深 莔・口縁部	波状口縁・竹管刺突文	1 a 類	國版29- 4と同一個体
10	18- 10	29- 1	S T21	深 莔・口縁部	波状口縁・半截竹管刺突文 粘土紐貼付円文・R L繩文	1 a 類	
11	19- 1	30- 8	S K1088	(不明)・口縁部	粘土紐貼付・半截竹管押引・爪形文	2 a 類	
12	19- 2	33- 8	S K1088	(不明)・口縁部	粘土紐貼付	2 a 類	
13	19- 3	30- 1	S X20	深 莔・口縁部	粘土紐貼付・絆条体網目文?	2 b 類	
14	19- 4	33- 3	S X20	(不明)・口縁部	半截竹管刺突文・隆蒂刻目	1 b 類	
15	19- 5	33- 4	S X20	(不明)・口縁部	半截竹管刺突文・隆蒂刻目	1 b 類	
16	19- 6	33- 7	S K1097	(不明)・口縁部	半截竹管刺突文・粘土紐貼付	2 a 類	
17	19- 7	30- 6	265- 725	(不明)・口縁部	粘土紐貼付・刻目・口縁肥厚 絆条体網目文?	2 b 類	
18	19- 8	30- 3	265- 725	深 莔・口縁部	大人物土紐貼付・刻目 口縁刻目・絆条体網目文?	2 b 類	
19	19- 9	33- 9	S K1088	(不明)・體 部	粘土紐貼付・刻目	2 a 類	
20	19- 10	30- 4	S X20	深 莔・口縁部	半截竹管刺突文	1 a 類	
21	19- 11	30- 11	270- 725	深 莔・口縁部	半截竹管刺突文	1 a 類	纖維を少量含む
22	19- 12	30- 14	265- 725	深 莔・口縁部	竹管円文・半截竹管爪形文	1 a 類	
23	19- 13	30- 2	S X20	深 莔・口縁部	半截竹管刺突文・粘土紐貼付円文	2 b 類	
24	19- 14	30- 9	265- 725	深 莔・口縁部	波状口縁・半截竹管刺突文	2 b 類	纖維を少量含む
25	20- 1	29- 2	S T21	深 莔・口縁部	半截竹管刺突文	1 a 類	
26	20- 2	32- 10	S T21	深 莔・口縁部	口縁小波状・R L付加縄文	3 a 類	
27	20- 3	29- 9	S T21	深 莔・体 部	粘土紐貼付・刻目	2 a 類	纖維を少量含む
28	20- 4	32- 8	S T21	(不明)・体 部	L R繩文	3 b 類	円盤状土製品?
29	20- 5	32- 5	S T21	(不明)・体 部	R L繩文斜位回転	3 b 類	
30	20- 6	32- 9	S T21	深 莔・体 部	不整捺糸文	3 c 類	纖維を微量に含む
31	20- 7	32- 6	S T21	(不明)・体 部	R L繩文	3 b 類	
32	20- 8	32- 7	S T21	深 莔・体 部	S字状縫織文 (R L繩文横位回転)	3 d 類	
33	20- 9	29- 11	S T21	深 莔・体 部		4類	網代痕?
34	21- 1	33- 6	S X20	深 莔・体 部	半截竹管刺突文	1 a 類	纖維を微量に含む
35	21- 2	30- 5	深 莔・体 部	半截竹管刺突文	1 a 類	纖維を微量に含む	
36	21- 3	30- 7	S X20	深 莔・体 部	半截竹管刺突文	1 a 類	
37	21- 4	30- 15	深 莔・体 部	半截竹管刺突文・R L繩文	1 a 類	纖維を微量に含む	
38	21- 5	30- 16	270- 730	深 莔・体 部	半截竹管刺突文	1 a 類	
39	21- 6	30- 12	270- 725	深 莔・体 部	半截竹管刺突文	1 a 類	
40	21- 7	30- 13	275- 730	深 莔・体 部	不整捺糸文	3 c 類	纖維を微量に含む
41	21- 8	30- 10	265- 725	深 莔・体 部	擬似縫織文(施工具:才オバコ)	3 e 類	纖維を微量に含む
42	21- 9	30- 17	S T22	深 莔・体 部	R L附加条縄文	3 a 類	
43	21- 10	33- 1	S X20	深 莔・体 部	L R繩文斜位回転	3 b 類	
44	21- 11	33- 5	S X20	(不明)・体 部	S字状縫織文?	3 d 類	
45	21- 12	33- 2	S X20	深 莔・底辺部	R L繩文斜位回転	3 b 類	
46	22- 1	31- 4	265- 725	深 莔・底 部		4類	纖維を多量に含む
47	22- 2	31- 2	S K1067	深 莔・底 部		4類	纖維を多量に含む
48	22- 3	31- 1	S K1067	深 莔・底 部		4類	纖維を多量に含む
49	22- 4	31- 3	250- 765	深 莔・底 部		4類	纖維を微量に含む

表4 長者屋敷遺跡石器観察表

番号	辨別番号	図版番号	出土位置	器種	石材	長さ mm	幅	厚さ	重量 g	分類	備考
1	21- 1	34- 1	S T901	石鏟	石英	17	10	2	0.24	有茎	(アスファルト付着)
2	21- 2	34- 7	S X510	石鏟	頁岩	15	14	4	0.47	無茎	基部欠損
3	21- 3	34- 6	S T901	石鏟	頁岩	(24)	19	3	1.05	無茎	先端部欠損
4	21- 4	34- 9	220- 940	石鏟	頁岩	(24)	15	3.5	1.06	無茎	先端部欠損
5	21- 5	34- 8	S T900	石鏟	頁岩	(24)	14	4	1.17	無茎	先端部欠損
6	21- 6	34- 3	G276- 489	石鏟	頁岩	30.5	13	3	0.76	無茎	(アスファルト付着)
7	21- 7	34- 2	不明	石鏟	頁岩	(24)	18	4	1.09	無茎	先端部欠損
8	21- 8	34- 4	S X514G区	石鏟	頁岩	37	20	4	1.76	無茎	(完形)
9	21- 9	34- 5	G200- 900	石鏟	頁岩	31	17	9	4.73		基部欠損
10	21- 10	34- 10	S K2030	石匙	頁岩	55	28	6	7.42	縱形	(両端刃部片面削離) 片面加工
11	21- 11	34- 11	S T900	石匙	頁岩	76	27	7	16.21	縱形	(両端刃部片面削離) 片面加工
12	21- 12	34- 13	G220- 940	石匙	頁岩	53	44	9	19.55	横形	(刃部片面加工) 刃溝あり
13	21- 13	34- 12	G220- 920	石匙	頁岩	57	12.5	6	5.69	縱形	片面加工・片面削離
14	22- 1	35- 5	G196- 064	砥石	安山岩	116	30	24.5	121.76		
15	22- 2	35- 1	S X514G区	石鎚	頁岩	76	31.5	19.5	46.24		(両面加工・両端交互削離)
16	22- 3	35- 3	G220- 920	削器	頁岩	65	58	14	65.69		
17	22- 4	35- 2	G219- 043	捲器	頁岩	79	(45)	14	67.5		
18	23- 1	35- 6	S X515	凹石	安山岩	103	81	55			孔1両面各2 とも中軸部に磨面 磨石再利用
19	23- 2	35- 8	S X514	磨石	安山岩	96	88	58			片面にのみ磨面あり
20	23- 3	35- 4	G200- 900	砥石	安山岩	(89)	38	24	118.63		
21	24- 1	35- 7	S T900	凹石	安山岩	166	143	78			孔片面に3 両面に磨面
22	24- 2	35- 9	S K2033	石核	頁岩	65	61	35	116.37		
23	24- 3	35- 9	S K2033	石核	頁岩	66	58.5	40	111.79		
24	24- 4	35- 9	S K2033	石核	頁岩	89	70	51	287.09		

坂ノ上遺跡石器観察表

番号	辨別番号	図版番号	出土位置	器種	石材	長さ mm	幅	厚さ	重量 g	分類	備考
1	23- 1	38- 1	S X40	石鏟	頁岩	30	18.5	5.8	3.55	6類	先端部欠損 基部に アスファルト付着痕
2	23- 2	38- 2	273- 727	石鏟	頁岩	37	17.5	4.0	2.70	6類	先端部欠損 基部欠損
3	23- 3	38- 3	275- 749	捲器	頁岩	31	19	5.0	2.98		
4	23- 4	38- 40- 10	S Y21P 2	捲器	頁岩	33.5	24	7.5	5.76		両端に交互削離技法
5	23- 5	39- 16	255- 755	石槍	頁岩	(42)	25	5.5	6.11		基部のみ
6	23- 6	38- 4	265- 730	石鏟	頁岩	(28)	15	4.0	1.22	2類	先端部欠損
7	23- 7	38- 5		石鏟	頁岩	35.5	22	8.3	5.48	6類	
8	23- 8	38- 6	S T21	石鏟	頁岩	(31)	19.5	8.0	3.66	6類	先端部欠損
9	23- 9	38- 7	S T21	石鏟	頁岩	(25)	17	4.3	2.29	1類	先端部欠損
10	23- 10	38- 8	S T21D区	石鏟	頁岩	(35)	(25.5)	5.8	4.22	6類	裏面基部欠損
11	23- 11	38- 9		石鏟	頁岩	42	16	3.5	2.20	5a類	(完形品)
12	23- 12	38- 10	265- 725	石鏟	頁岩	(42)	18	4.0	2.28	5a類	先端部欠損
13	23- 13	38- 11	284- 748	石鏟	頁岩	(21)	15	4.0	1.28	1類	先端部欠損
14	23- 14	38- 12	275- 730	石鏟	頁岩	(20)	15	4.0	0.83	2類	先端部欠損
15	23- 15	38- 13	245- 770	石鏟	頁岩	(22)	17	4.0	1.31	5b類	先端部欠損
16	24- 1	38- 14		石鏟	頁岩	(20)	19	5.0	2.11	5a類	先端部欠損
17	24- 2	38- 15	S K1097	石鏟	頁岩	(20)	20	4.0	2.16	5a類	先端部欠損 基部に アスファルト付着痕
18	24- 3	38- 16	260- 770	石鏟	頁岩	(21)	10.5	3.5	0.70	4類	先端部欠損
19	24- 4	38- 17	S T21- E区	石鏟	頁岩	(22.5)	16	4.0	1.51	5a類	先端部欠損
20	24- 5	38- 18	S T21- E区	石鏟	頁岩	(24.5)	15.5	4.0	1.55	4類	先端部欠損

番号	掉却番号	國版番号	出土位置	器種	石材	長さ mm	幅	厚さ	重量 g	分類	備考
21	24- 6	36- 1	220- 740	石鏟	頁岩	(22)	15	3.0	0.60	7類	先端部欠損
22	24- 7	36- 2	S T21P 3	石鏟	頁岩	32	14	4.0	1.50	5 b類	(完形品)
23	24- 8	36- 3		石鏟	頁岩	45	21	5.0	2.96	5 a類	側縁欠損
24	24- 9	36- 4	275- 730	石鏟	頁岩	30	14	5.0	1.67	4類	
25	24- 10	36- 5	282- 731	石鏟	頁岩	(25.5)	7.5	4.0	1.52	3類	先端部欠損
26	24- 11	36- 6	S T21	石鏟	頁岩	(21)	18	4.5	1.52	2類	
27	24- 12	36- 7		石鏟	頁岩	(25)	15.5	3.5	1.37	5 b類	先端部欠損 基部欠損
28	24- 13	36- 8		石鏟	頁岩	(19)	13	3.0	0.53	5 a類	基部欠損
29	24- 14	36- 9	275- 730	石鏟	頁岩	(17)	11	2.0	0.32	3類	基部欠損
30	24- 15	36- 10	285- 735	石鏟	頁岩	31.5	14	3.0	1.54	6類	基部欠損
31	24- 16	36- 11	275- 730	石鏟	頁岩	22	14.5	3.0	0.95	6類	先端部欠損 基部欠損
32	24- 17	36- 12	S T21	石鏟	頁岩	(16)	15	2.5	0.87	4類	先端部欠損
33	25- 1	36- 13	271- 727	石鏟	頁岩	(21)	14.5	4.0	1.21	4類	先端部欠損
34	25- 2	36- 14	S X20	石鏟	頁岩	(20)	15	3.5	1.31	4類	先端部欠損
35	25- 3	36- 15		石鏟	頁岩	(22)	14.5	3.5	1.12	4類	先端部欠損
36	25- 4	36- 16	251- 721	石鏟	頁岩	(26)	15	4.2	1.92	5 a類	基部欠損
37	25- 5	36- 17	S T21	石鏟	頁岩	(28)	14	3.0	1.49	4類	先端部欠損 基部欠損
38	25- 6	37- 16	S X72	石鏟	頁岩	(17)	11	3.0	0.61	5 a類	先端部欠損 基部欠損
39	25- 7	37- 17		石鏟	頁岩	(24)	11	4.0	0.95	5 a類	先端部欠損 側縁欠損
40	25- 8	37- 18	285- 735	石鏟	頁岩	(27)	12	3.0	1.08	(不明)	先端部欠損 側縁欠損
41	25- 9	37- 19	290- 735	石鏟	頁岩	(34)	15	4.0	2.17	1類	先端部欠損 側縁欠損
42	25- 10	37- 20	271- 728	石鏟	頁岩	(10)	5.5	2.0	0.06	(不明)	先端部のみ
43	25- 11	37- 21	S T21	石鏟	頁岩	(11)	12	3.5	0.30	4類	先端部のみ
44	25- 12	37- 22	S T21E 区	石鏟	頁岩	(17)	11	3.0	0.58	5 a類	先端部のみ
45	25- 13	37- 23	300- 740 G	石鏟	頁岩	(9)	12	4.0	0.38	(不明)	脇部のみ
46	25- 14	37- 24	255- 760	石鏟	頁岩	(12)	15	3.0	0.65	(不明)	基部のみ
47	25- 15	37- 25		石鏟	頁岩	(13.5)	17	3.0	0.50	5 b類	基部のみ
48	25- 16	37- 26	290- 735	石鏟	頁岩	(19)	14	3.0	0.85	1類	先端部欠損
49	25- 17	37- 27	239- 715	石鏟	頁岩	(20)	14	5.0	1.29	5 a類	先端部欠損
50	25- 18	37- 28	S T21C-E 区	石鏟	頁岩	(12)	16	4.0	0.75	1類	先端部欠損 基部欠損
51	25- 19	37- 1	S X75	石鏟	頁岩	33	17.5	2.5	1.68	7類	先端部欠損 (アス ファルト付着痕)
52	25- 20	37- 2		石鏟	頁岩	(29)	16	4.5	1.52	5 b類	先端部欠損
53	25- 21	37- 3	280- 730	石鏟	頁岩	31	16	5.0	2.07	5 b類	最先端欠損
54	26- 1	37- 4	280- 760	石鏟	頁岩	40	14	4.0	1.57	5 a類	基部欠損
55	26- 2	37- 5	S T21	石鏟	頁岩	(26.5)	15.5	3.5	1.33	4類	先端部のみ
56	26- 3	37- 6	268- 755	石鏟	頁岩	(27)	15	5.0	1.55	(不明)	基部側縁欠損
57	26- 4	37- 7	275- 730	石鏟	頁岩	37	15	4.0	1.91	5 a類	基部一部欠損
58	26- 5	37- 8	300- 740	石鏟	頁岩	23	14	4.0	0.96	3類	最先端欠損
59	26- 6	37- 9	S T21	石鏟	頁岩	(28)	13	6.0	1.86	4類	基部一部欠損
60	26- 7	37- 10		石鏟	頁岩	(32)	11	3.0	1.09	4類	基部側縁欠損
61	26- 8	37- 11	285- 748	石鏟	頁岩	(21)	12	3.5	0.69	5 a類	最先端欠損 基部欠損
62	26- 9	37- 12		石鏟	頁岩	(34)	(18)	3.0	2.09	5 a類	先端部欠損 - 基部一部 欠損
63	26- 10	37- 13	240- 780	石鏟	頁岩	(32)	16	5.0	2.09	4類	最先端欠損 両端基部欠損
64	26- 11	37- 14	265- 725	石鏟	頁岩	(32)	14	4.0	1.77	3類	先端部欠損
65	26- 12	37- 15	S T21	石鏟	頁岩	(32.5)	16	3.5	1.82	4類	先端部欠損
66	26- 13	41- 3		石鏟	頁岩	28.5	19	5.0	2.99		基部のみ
67	26- 14	36- 18	S X20	石鏟	頁岩	27.5	14	3.0	1.05	4類	最先端欠損 (アス ファルト付着痕)
68	26- 15	36- 19	S T21C 区	石鏟	頁岩	(24)	15	4.0	0.99	2類	最先端欠損

番号	掉片番号	國版番号	出土位置	器種	石材	長さ mm	幅	厚さ	重量 g	分類	備考
69	26- 16	36- 20	S T21-E 区	石鏟	頁岩	25	15	3.5	1.12	4類	一部基部欠損
70	27- 1	36- 21	S T21	石鏟	頁岩	33	13	5.0	1.62	5b類	一部基部欠損
71	27- 2	36- 22	275- 730	石鏟	頁岩	(21)	13	4.0	1.03	5b類	先端部欠損 基部阿波欠損
72	27- 3	36- 23	S T21 S X65 C区	石鏟	頁岩	(24.5)	15	3.5	1.42	1類	先端部欠損
73	27- 4	36- 24	295- 740	石鏟	頁岩	23.5	10.5	5.0	1.27	2類	
74	27- 5	36- 25	265- 725	石鏟	頁岩	(31)	14	4.0	1.39	5b類	先端部欠損 基部アボ欠損
75	27- 6	36- 26	S T21E- F区	石鏟	頁岩	(31.5)	15	3.0	1.37 (不明)		先端部欠損
76	27- 7	36- 27	278- 760	石鏟	頁岩	(29)	16.5	4.0	1.79	5a類	先端部欠損 基部アボ欠損
77	27- 8	36- 28	275- 730	石鏟	頁岩	(28)	16	4.0	1.56	5b類	先端部欠損
78	27- 9	36- 29	245- 740	石鏟	頁岩	(28.5)	19	5.5	2.97	5a類	基部側面欠損 (基部アスファルト 付着痕)
79	27- 10	36- 30	S X97	石匙	頁岩	(17)	16	5.0	1.17	5a類	先端部欠損 基部アボ
80	27- 11	36- 31	285- 730	石匙	頁岩	(22)	14.5	3.0	1.04	5a類	先端部欠損 基部アボ
81	27- 12	36- 32		石匙	頁岩	(18.5)	16.0	3.5	1.51	3類	先端部欠損
82	27- 13	36- 33	265- 756	石匙	頁岩	(16.5)	14	3.0	0.89	5b類	先端部欠損 基部アボ
83	28- 1	39- 1	280- 740	石匙	頁岩	78	20	9.5	19.39	纏形	つまみ部 (全體に剥離面摩耗)
84	28- 2	39- 2	S T21E 区	石匙	頁岩	42	16	5.0	3.02	纏形	つまみ部 (全體に剥離面摩耗)
85	28- 3	39- 4	295- 735	石匙	頁岩	(30.5)	15.5	4.0	2.42	纏形	つまみ部 (先端部欠損)
86	28- 4	39- 5		石匙	頁岩	(70)	26	85.0	16.81	纏形	つまみ部 (先端部欠損)
87	28- 5	39- 3		石匙	頁岩	(35)	27	7.5	7.06	纏形	先端部のみ
88	28- 6	39- 6	S X20	石匙	頁岩	52	16	4.5	3.53	纏形	裏面つまみ部にアス ファルト付着痕
89	28- 7	39- 7	S T21	石匙	頁岩	66	21	5.5	7.66	纏形	つまみ部明確に作り 出している
90	29- 1	39- 8		石匙	頁岩	87	22	9.0	17.84	纏形	先端を丁寧に作り出 している
91	29- 2	39- 9		石匙	頁岩	(50)	20	8.0	1.80	纏形	先端部のみ (先端部にトラン シェ様の剥離)
92	29- 3	39- 10	265- 725	石匙	頁岩	(24.5)	14	5.0	1.33	纏形	つまみ部のみ (つまみ部にアス ファルト付着痕)
93	29- 4	39- 11	290- 730	石匙	頁岩	(31.5)	20	5.0	3.19	纏形	つまみ部のみ
94	29- 5	39- 12	S K51	石匙	頁岩	(40.5)	14.5	3.0	2.55	纏形	つまみ部欠損 (前面面摩耗)
95	29- 6	39- 13	285- 750	石匙	頁岩	(43)	15	8.0	6.18	纏形	先端部欠損
96	29- 7	39- 14	S T21内	石匙	頁岩	(40.5)	25	5.5	5.60 (纏形)		つまみ部のみ (つまみ部側面剥離 を残して作り出している)
97	29- 8	39- 15	285- 735	石匙	頁岩	(51)	17	5.5	6.82	纏形	つまみ部のみ
98	30- 1	40- 1	275- 730	石匙	頁岩	66	40.5	14.5	40.61 (摺形)	片面加工	
99	30- 2	40- 2	S X20	石匙	頁岩	(72)	30	14.5	34.02	短冊形	片面加工 (峰の部分が摩耗)
100	30- 3	40- 3	S T21E 区	石匙	頁岩	71	40	13.0	34.80 (摺形)	片面加工 (横削ぎ刃 部・峰が摩耗)	
101	30- 4	40- 4	235- 761	石匙	頁岩	(20)	30	5.0	3.28		片面加工 上部欠損
102	30- 5	40- 5	271- 752	石匙	頁岩	(76.5)	46.5	14.0	44.15		片面加工
103	30- 6	40- 6	266- 753	石匙	頁岩	(47)	25	14.0	14.65	短冊形	両面加工 刃部欠損
104	31- 1	40- 7	295- 740	搔器	頁岩	(31.5) (22.5)	7.5	4.45			
105	31- 2	40- 8	S X20	石匙	頁岩	(70.5)	46.5	13.5	41.14 (短冊形)	基部に摩耗あり	
106	31- 3	40- 9	S P254	搔器	頁岩	53	40	13.5	29.65		エンドスクレーパー
107	31- 4	41- 1		石槍	頁岩	(16.5)	22	6.5	1.99		基部のみ
108	31- 5	41- 10	274- 725	搔器	頁岩	44.5	31	5.0	8.06		刃部欠損
109	31- 6	40- 11		石槍	石英	63	35	12.5	34.00		両面加工 側縁部欠損
110	31- 7	40- 12	280- 745	搔器	頁岩	37	35.5	10.5	18.39		片面加工

番号	掉却番号	國版番号	出土位置	器種	石材	長さ mm	幅	厚さ	重量 g	分類	備考
111	31- 8	41- 12	285- 735	石槍	頁岩	(19)	22	5.0	2.24	基部のみ	
112	32- 1	40- 14	275- 740	石鎧	頁岩	37	24	8.5	6.83 (撮形)	両面加工	
113	32- 2	41- 13	278- 751	石槍	頁岩	(20)	26.6	7.0	3.68	基部のみ	
114	32- 3	44- 3	275- 730	石鎧	頁岩	65	28.5	15.0	29.66 (短冊形)	峰がかかるこ状で片面加工(鋸面摩耗)	
115	32- 4	44- 1		搔器	頁岩	(63)	33	16.0	29.43	(剥離面摩耗)	
116	32- 5	44- 2	S T21	搔器	頁岩	(50)	31	12.5	24.45	片面加工(刃部欠損) 上、先端部欠損	
117	32- 6	44- 4	S T21	搔器	頁岩	(42)	35	10.5	10.47	未製品	
118	32- 7	44- 5	275- 730	搔器	頁岩	(25)	24.5	6.0	4.02		
119	32- 8	44- 6	295- 745	二次加工のある剥片	頁岩	(34)	30	7.0	7.15		
120	33- 1	41- 17	S X80	搔器	頁岩	108	35	18.0	52.83	表皮を残す	
121	33- 2	41- 16	265- 759	石鎧	頁岩	(33)	21.5	6.5	4.24	片面加工	
122	33- 3	41- 14	S T21	搔器	頁岩	45	31	8.0	13.81	両面加工	
123	33- 4	41- 15	274- 726	石槍	頁岩	(31)	24.5	7.0	6.07	基部のみ一部交互剥離	
124	33- 5	38- 19	S T21H区	石鎧	頁岩	(18)	14	1.5	0.84	先端部欠損	
125	33- 6	38- 20	275- 740	石鎧	頁岩	(34.5)	22	1.5	7.50		
126	33- 7	38- 21	261- 757	石鎧	頁岩	23	11	2.0	0.88		
127	33- 8	38- 22	290- 735	石鎧	頁岩	37	14.5	3.0	1.98		
128	33- 9		285- 735	石鎧	頁岩	(22)	13	4.0	1.35	先端刃部欠損	
129	34- 1	41- 4		石槍	頁岩	(24)	21.0	4.0	2.85	基部のみ	
130	34- 2	41- 7		石槍	頁岩	(35)	27	6.5	5.59	先端部のみ横剥ぎ	
131	34- 3	41- 1		石槍	泥質凝灰岩	(21.5)	25	7.5	2.76	基部のみ	
132	34- 4	41- 2	290- 735	石槍	頁岩	(41)	30	8.5	11.22	基部のみ	
133	34- 5	40- 13		搔器	頁岩	45	26	9.0	9.51		
134	34- 6	41- 5	260- 726	石槍	頁岩	(38)	40	15.0	17.04	基部のみ	
135	34- 7	41- 8	236- 746	石槍	頁岩	151	23	7.5	34.94	両面加工で刃部が交差剥離	
136	34- 8	41- 6	S T21E P30	石槍	頁岩	(47)	30.5	8.0	10.93	先端部のみ 刃部交互剥離	
137	34- 9	41- 9		石槍	流紋岩	(78)	31	11.0	7.06	中半から先端部	
138	35- 1	44- 8		砥石	安山岩	(119)	79	58.0	548.04	下部欠損	
139	35- 2	44- 7	S X97	砥石	安山岩	(98)	56	46.0	359.50	下部欠損	
140	36- 1	44- 10	267- 725	磨製石斧	安山岩	(137)	59	40.0	459.55	刃部欠損	
141	36- 2		223- 774	加工後のあ る剥片	頁岩	60	58	13.5	47.89		
142	36- 3	44- 9	S T21F	凹石	凝灰岩質砂 岩	(106)	75	36.0	331.27	半分欠損	
143	37- 1	42- 1		石鎧	頁岩	31	17.0	4.5	1.52	2類	
144	37- 2	42- 2		石鎧	頁岩	27	13.5	4.5	1.38	2類	受熱(先端)
145	37- 3	42- 3		石鎧	頁岩	(29)	14.5	4.0	1.81	3類	先端部欠損 基部欠損
146	37- 4	42- 4		石鎧	頁岩	(26.5)	16.0	4.0	2.44	1類	先端部欠損
147	37- 5	42- 8		搔器	頁岩	48	33.0	15.0	23.94	アスファルト付着痕 (片面加工)	
148	37- 6	42- 5		石鎧	頁岩	52	35.0	9.0	19.04	(片面加工)	
149	37- 7	42- 6		石鎧	頁岩	61	39.0	16.5	31.91 (撮形)	(片面加工)	
150	37- 8	42- 7		石鎧	頁岩	71	31.0	9.5	24.58	短冊形	(片面加工)
151	37- 9			搔器	頁岩	34	24.0	9.0	6.82	アスファルト付着痕	
152	37- 10			加工後のあ る剥片	頁岩	(36)	30.0	9.0	10.78		
153			45- 1-27	S T21						S T21の碎片群	

表5 長者屋敷遺跡陶磁器観察表

掉査番号	国版番号	出土地点	種類・器種	文様・調整・年代	他
46- 1	S P 1041内	磁器染付皿	口縁部輪花皿		
46- 2	S X510外	磁器染付	口縁部 輪花皿？		
46- 3		磁器染付碗？	口縁部		
46- 4		磁器白磁	高台あり 陰刻回		
46- 6		磁器染付碗？	口縁部と思われる 内側に染付		
46- 5	S X513 N外	磁器染付碗？			
46- 7	S X510	磁器染付壺？ 体部			
46- 8		磁器染付碗	高台あり 印花渦巻文 一部ピンク色の不名文		
46- 9		磁器染付碗？	底部無釉、同心円状回転痕		
46- 10	S K 720	磁器碍子			
46- 11	S P 1007	陶器壺？	口縁部肥厚 内外面鉄釉 白色斑点在		
46- 12	S P 1026- N W外へ4 m	陶器碗？	口縁部折り曲げ肥厚 外面灰釉		
46- 13		陶器壺？	口縁部 内外面鉄釉		
46- 14		陶器碗？	口縁部 内外面光沢のある鉄釉		
46- 15		陶器碗？	口縁部 内外面無釉		
46- 16		陶器壺？	口縁部 外面自然釉 内面黒サビ釉		
46- 17		陶器碗？	体部片 一部なまこ釉		
46- 18		陶器取手？			
46- 19		陶器皿？	底部付近 内面自然釉 外面無釉（受熱黒化） 底部剥出で高台製作 見込み目跡甚司底		
47- 1		陶器擂鉢	口縁部 内外面鉄釉 卸目 1 cm内に条10本		
47- 2		陶器擂鉢	外外面鉄釉 卸目 2 cm内に条10本		
47- 3		陶器擂鉢	内外面鉄釉？ 卸目 2 cm内に条11本		
47- 5		陶器擂鉢	内外面鉄釉 卸目 2 cm内に条11本		
47- 4	S P 1026 N外へ8 m	陶器擂鉢	内外面鉄釉 卸目 2 cm内に条4 - 5本		
47- 6		陶器擂鉢	内外面鉄釉 卸目 2 cm内に条8本		
47- 7		陶器擂鉢	内外面鉄釉 卸目 2 cm内に条5本		
47- 8		陶器擂鉢	胎土黒い卸目 1 cm内に条4本		
47- 9	S X515 西側	陶器擂鉢	灰釉？鉄釉？		

坂ノ上遺跡第1次陶磁器観察表

掉査番号	国版番号	出土地点	種類・器種	口径 mm	底径 mm	器高 mm	文様・調整・年代	他
39- 1	48- 1	S D 2	磁器染付皿	137	81	31	肥前系 笠文 蛇ノ目袖封ぎ 蛇ノ目凹形高台	
39- 2	48- 2	S D 2	磁器染付碗	112	45	60	外表面輪文 見込み目跡 近代	
38- 1	48- 3	S X41	磁器染付皿	108	64	23	銅板転写 近代	
38- 2	48- 4	S K 76	磁器染付皿		50	(17)	肥前系 内面藤花文 19世纪	
38- 3	48- 5	S D 2	磁器染付筒碗	70		(44)	肥前系 外面割刷花文 内面四方禪 19世纪	
38- 4	48- 6	S D 1	磁器染付筒碗	80		(51)	肥前系 外面花唐草文 19世纪	
38- 5	48- 7	S D 1	磁器染付碗？			(41)	肥前系	
38- 6	48- 8	S D 1	磁器染付碗	98		(48)	肥前系 外面雪輪梅樹文 18世纪	
38- 7	48- 9	S D 2	磁器染付碗	130		(52)	肥前系 外面草花文 18世纪	
39- 3	59- 7	G220- 723	陶器灯明皿	53	26	25	体部中半周で鉄釉 底部回転糸切り 芯台上部欠損	
39- 4	59- 8	S D 1	陶器灯明皿	54	33	30	岸窯？高台中半周で灰釉 底部回転糸切り	
49- 1		磁器染付					釉葉色銅 HuesY 4/3 志台上部欠損	
49- 2	265- 725 G	磁器染付碗？					角回 高台あり 入り隠彌別 見込み葉形？文	
49- 3		磁器染付 德利？					高台あり 内外面白濁釉	
49- 4		磁器染付碗					高台あり 外面不明文 高台付近砂目あり	
49- 5		磁器染付碗？					肥前？波佐見？ 外面團線	
49- 6	250- 720 G	磁器染付碗？					高台疊付近に砂目あり 高台あり	
49- 7		磁器染付碗？					肥前？波佐見？ 高台脇に梅花皮	
49- 8	270- 730 G	磁器染付碗					肥前？波佐見？ 口縁部のみ	
							口縁部 外面葉文？ 葉文の上に赤茶色の円を貼付	

擇図番号	国版番号	出土地点	種類・器種	口径 mm	底径 mm	器高	文様・調整・年代	他
49- 9			磁器染付碗				体部外面赤絵 高台脇二重圓線	
49- 10			磁器染付碗？				波佐見？ 口縁部のみ 内外面青磁釉 内側不規則(波頭文?)	
49- 11			磁器染付碗？				肥前？ 外面不明文 見込みに一重圓線	
49- 12			磁器染付碗				肥前(波佐見、くらわんか) 外面雪輪梅樹文	
49- 13			磁器染付皿				内面口縁に櫻塔文 見込み松・蝶文	
49- 14	S D 1		磁器染付皿				高台 蛇の目凹形高台 高台内無釉 見込みに目跡	
49- 15			磁器染付デリ				外面点描地	
49- 16			磁器染付デリ					
49- 17			磁器染付碗？				肥前(波佐見) 外面不明文	
49- 18			磁器染付德利？					
49- 19			磁器蓋				蓋上面青磁ひび？	
49- 20			陶器甕？				口縁部 濱戸美濃系？	
49- 21			陶器擂鉢？				外面面鉄釉 口縁部外反 口縁部2cm下に断面三角形状帶	
49- 22			陶器皿？				内外面白青磁基調 口縁部より鮮青色で染付(平清水?) S U II 8144と接合	
49- 23			陶器皿？				外面無釉 底部高台内を削り出して作成	
49- 24			陶器擂鉢				胎土色調(Hue2.5Y R3/3、濁茶色)	
49- 25			陶器皿？				見込み？ 白濁釉基調に鮮青色で不明文 底部自然釉	
265- 725			陶器円盤？ (不明)				上面三段状の同心円 下面渦巻成形 直径27mm	
270- 725 G			磁器 (器種不明)				上面布目跡に白濁釉 下面無釉・布目痕	
44- 1	59- 1	S D 1	陶器擂鉢	136	(47)		付高台 内外面鉄釉 莢目条5~6本(2cm) 胎土色調(Hue2.5Y R6/6や8/8赤褐色)	
44- 2	59- 2		陶器擂鉢		(73)		内外面鉄釉(Hue2.5Y R3/2) 莢目条6~7本(2cm) 胎土色調 Hue2.5Y R3/4(赤い茶色) 胎土緻密	
44- 3	59- 3	S D 2	陶器擂鉢		(46)		内外面鉄釉 莢目条10~11本(2cm) 胎土色調(Hue2.5Y R6/6や8/8赤褐色)	

坂ノ上遺跡第2次陶磁器観察表

擇図番号	国版番号	出土地点	種類・器種	口径 mm	底径 mm	器高	文様・調整・年代	他
42- 1	50- 1	240- 705	磁器染付皿			(92)	肥前 見込み菊文・渦文? 蛇ノ目輪刻凹形高台 高台内に铭あり 見込みに培養窓 内外面青磁釉 輪刻ぎ部分に砂付着	
42- 4	50- 2		磁器染付皿	(130)	(72)	(40)	肥前 内面梅花文 外面唐草文 生焼け磁器 蓋付無釉	
42- 6	50- 3	270- 725	磁器白磁皿			25	型内入り環回 内面体部陽刻青海波文 見込み環刻鶴文見込み に2ヶ所以上目跡	
42- 3	50- 4		磁器染付皿	(98)	(50)	23	型内輪花文 内面輪唐草陽刻 蓋付無釉	
42- 5	50- 5		磁器青磁碗			(64)	肥前 内外面青磁釉 蓋付無釉	
42- 2	50- 6		磁器染付碗			(82)	濱戸 外面模擬天保等紋 19世紀(濱戸10小判)	
40- 1	51- 1	240- 705	磁器染付碗	(110)	(40)	52	肥前 外面雪輪梅樹文 蓋付無釉 高台内に铭あり 18世紀	
40- 3	51- 2	240- 705	磁器染付碗				肥前(波佐見、くらわんか) 外面雪輪梅樹文 18世紀	
40- 5	51- 3		磁器染付碗	(104)	(40)	49	肥前(波佐見、くらわんか) 外面雪輪梅樹文 高台内に铭あり 蓋付無釉 18世紀	
40- 6	51- 4	260- 725	磁器染付碗				肥前(波佐見、くらわんか) 外面雪輪梅樹文 18世紀	
40- 2	51- 5		磁器染付碗			(44)	肥前(波佐見、くらわんか) 外面梅花文? 高台内「重圓線」・「大明年製」の跡?	
40- 4	51- 6	240- 705	磁器染付碗			(40)	肥前(波佐見、くらわんか) 外面雪輪梅樹文 高台内に铭あり 18世紀	
40- 7	51- 7	270- 725	磁器染付碗			(44)	肥前(波佐見、くらわんか) 外面雪輪梅樹文 高台内に铭あり 18世紀	
41- 1	51- 8		磁器染付碗?	(134)			肥前 外面松葉文?	
41- 3	51- 9		磁器染付碗	(106)			肥前(波佐見、くらわんか) 不明文(柳葉?) 見込一重圓線	

排番号	国版番号	出土地点	種類・器種	口径 mm	底径 mm	器高 mm	文様・調整・年代・他
41- 5	51- 10	240- 705	磁器染付壺?				肥前 外面草花文
41- 8	51- 11	300- 745	磁器染付碗 (60)				肥前 簡形 外面半菊花文 内面四方禪 19世紀
41- 2	51- 12	250- 715	磁器染付碗 (58)				肥前 簡形 外面七宝文 内面四方禪 19世紀
41- 4	51- 13		磁器染付碗 (88)				肥前 外面二重網目文 内面一重網目文 18世紀
41- 6	51- 14		磁器染付碗? (68)				肥前 外面二重網目文 19世紀
41- 9	51- 15		磁器染付皿? (51)				肥前 (初期伊万里?) 唐草文? 17世紀?
41- 7	51- 16	250- 715	磁器染付碗 (41)				肥前 外面二重網目文 内面二重丸菊文 高台内四角状の鋸あり 15世紀
52- 1			磁器染付碗?				肥前 (波佐見?) 外面不明文
52- 2			磁器染付碗?				肥前 (波佐見、くらわんか?) 外面草花文
52- 3			磁器染付碗?				肥前 (波佐見?) 外面二重網目文 内面一重網目文?
52- 4			磁器染付皿?				肥前 (波佐見?) 内面不明文 内外面青磁赤基調 高台内無縫で妙付着
52- 5	東S D内		磁器染付皿?				肥前? 高台内鋸 (大明...) 高台原一重圓線 高台底二重圓線 畳付のみ無縫?
52- 6			磁器染付 (器種不明)				肥前 (波佐見、くらわんか?) 見込みに不明文 高台原一重圓線 高台底圓線 畳付のみ無縫
52- 7			磁器染付皿?				肥前? 外面不明文 畳付のみ無縫 見込面細かい凹み
52- 8			磁器染付碗?				肥前? 高台原大一重圓線 高台底二重圓線 見込面細かい凹み多數 畳付のみ無縫
52- 9			磁器染付 (器種不明)				内面無縫 高台底二重圓線
52- 10			磁器染付皿?				高台四角形
52- 11			磁器染付碗?				型紙描 外面竹・菊花文 内面口縁部埋咲文 見込菊文 近代?
52- 12			磁器染付碗?				口縁部残存 外面白口縁部埋咲文? 菊花纹型紙描
52- 13			磁器染付碗?				外面菊花重ね文 寄絵不明文 内面白口縁部に埋咲文 型紙描
52- 14			磁器染付碗?				外面草花文 内面白口縁部埋咲文 型紙描
52- 15	東S D内		磁器染付碗?				外面不明文
52- 16			磁器染付碗?				外面松竹梅文・四方禪? 銅板転写
52- 17			磁器染付皿?				外函 2-3mm幅の沈線 9条 高台底圓線? 内面草花文? 型紙描り 口径 (90mm)
52- 18			磁器染付碗?				外面草花文
52- 19			磁器染付皿?				見込み菊竹丸文 型紙描 蛇の目彫高台 高台内無縫
52- 20			磁器染付皿?				見込み草花文 型紙描 蛇の目彫高台 畠付と高台中心部の間は無縫
52- 21			磁器染付皿?				外面不透明 内面窓絵草花文? 型紙描 口径 (64m)
52- 22			磁器染付輪花皿?				内外面貫入 刻繕鶴唐草文 見込み帯状円形不明文? 口径 (94mm)
53- 1			磁器染付皿?				内面草花文? 外面不明文
53- 2			磁器染付碗?				外面不文
53- 3			磁器染付碗?				外面水文?
53- 4			磁器染付碗?				口縁部崩反り 外面圓線より下垂する三本線? 内面白口縁部に太圓線? 見込み一重圓線
53- 5			磁器染付碗?				外面不透明 文字「胡雁鳴...」などの文字
53- 6			磁器染付 (器種不明)				外面に不明文 口縁部外反
53- 7			磁器染付碗?				外面青色内中の一部を輪剥ぎ 高台底のみ鉛色袖
53- 8			磁器染付碗?				外面草花文 内面白口縁部一重圓線 口縁部外反
53- 9			磁器染付碗?				外面宝文? 斜格子?
53- 10			磁器染付角皿?				外面草花文? 内面文
53- 11			磁器染付皿?				口縁部
53- 12			磁器染付碗?				外面草花文?
53- 13			磁器染付急須蓋?				外面花唐草文? 直径 2mm穴
53- 14			磁器染付急須蓋?				外面一重網目文
53- 15			磁器染付碗?				肥前 (波佐見、くらわんか?) 外面雪輪文? 高台原一重圓線?
53- 16			磁器染付碗?				外面格子文?

擇図番号	国版番号	出土地点	種類・器種	口径 mm	底径 mm	器高	文様・調整・年代	他
53- 17			磁器染付 (各種不明)				外面不明文 内面無地	
53- 18			磁器染付碗?				外面布目状の草花文? 淡紫色花纹?	
53- 19		西橋より	磁器染付碗?				肥前? 外面不明文 見込み中心に不明文 一重圓線	
53- 20			磁器染付皿?				肥前? 内面草花文? 高台厚一重圓線	
53- 21			磁器染付皿?				高台厚二重圓線 高台内一重圓線	
53- 22			磁器染付皿?				内面不明文 高台のみ縁封ぎ	
53- 23			磁器染付 (各種不明)				見込み不明文 着付き以外施釉 非常に緻密な胎土 初期伊万里?	
53- 24			磁器染付碗				外面体部のみ施釉 底部糸切り 見込み中心に向かって高巻き向心円 見込み中心凸形	
53- 25			磁器染付六角 小皿?				外面草花文? 高台厚二重圓線 高台内一重圓線 銅板転写?	
53- 26			磁器染付 德 利?				外面草花文? 高台厚圓線 高台内圓線	
53- 27			磁器染付 德 利?				外面体部のみ施釉 外面横状文? 内面と底部赤茶色	
53- 28		西橋より	磁器染付碗?				外面下部より底部・内面無施釉 外面横状文?	
43- 1	53- 29		磁器染付碗	(120)	42	69	外面 - 高台内まで白釉色 ただし着付き無地	
43- 2	53- 30	290- 735	磁器染付碗	(114)	39	56	腰膨形 外面窓絵松竹梅文 内面口縁部墨書き 見込一重圓線・松竹梅丸文 型紙描 着付無地 近代	
43- 3	54- 1	270- 725	磁器染付皿?		80		在地: 腰膨形 外面窓絵草花文 内面墨書き 見込松竹梅丸文 見込竹林丸文 鈴ノ目凹形高台	
43- 4	54- 2		磁器染付碗	(80)	28	46	見込松竹梅丸文 鈴ノ目凹形高台 着付: 高台内全て無地 近代	
54- 3			磁器 話?				外面窓絵竹文 銅板転写 着付無地	
54- 4			磁器染付鉢?				外面灰白花皮 施釉度と白漆頭貼付 底部から体部1cmまで黒色釉 白漆頭塊を等間隔に貼付 底部無地 口径(85mm) 底径(84mm) 器高45mm	
54- 5			磁器碗				外面波? 内面宝文の一部? 口径(170mm)	
54- 6			磁器碗				内外面反釉 玉縁口縁	
54- 7			磁器 小皿?				内外面透明釉 着付のみ無地	
54- 8・9			磁器 花瓶?				内外面のみ無地 痕部付近に滑着痕	
54- 10			磁器染付碗?				肥前(波佐見、くらわんか?) 着付のみ無施釉 高台厚一重圓線 底径(45mm)	
54- 11			磁器 (各種不明)				外面のみ無明釉	
54- 12			磁器 盖?				内外面青磁釉	
54- 13			磁器白磁蓋?				中央部に向けて何本かの低い壁線が收れん 朝唐草深刻 盖直径(56mm)	
54- 14			磁器 人形?				外面白磁釉 膝の上に様? 底部中央に直径2mmの穴	
54- 15			陶器皿?				瀬戸美濃系? ガラス質綠釉 寶入あり	
54- 16			陶器碗?				瀬戸美濃系? 灰釉 緑釉かけ流し 寶入あり	
54- 18			陶器角皿?				瀬戸美濃系? タタラ成形 透明釉基調 角に緑釉 寶入	
54- 17・ 20・21			陶器花瓶?				内面綠釉 外面灰釉 体部1半は梅花皮 底部中央に円錐状の凹み(直径50mm) 高さ(40mm) 口径(170mm) 底径(120mm)	
55- 1			陶器鉢?	(200)			内面深緑色の釉	
55- 2			陶器染付鉢?				口縁部から外面に白漆釉 口縁部に3リットリ下に横位青色線 外面に青色不明文	
55- 3			陶器皿?	(240)			口縁部にセンチ下まで鼠色の釉	
55- 4			陶器鉢?				内面に波状の刷毛目 内外面鼠色の釉	
55- 5			陶器染付鉢?				外縁部水平に外反 内外面白漆釉 但し内面口縁部2センチ下より無地	
55- 6			陶器鉢?	(340)			口縁部水平に外反 内外面白漆釉 但し内面口縁部2センチ下より無地	
55- 7			陶器染付鉢?				内面無地 外面白化粧様の釉 釉の厚み1ミリ	
55- 8			陶器 (各種不明)				内面無地 外面墨書きの釉 釉の厚み1ミリ 胎土堅牢	
55- 9			陶器鉢?	(70)			内外面無地 内面と底部に油?のような炭化物 底部凹輪口切り	
55- 10			陶器俵?	(150)			内外面に鉄釉 外面口縁部下にまこ釉?	
55- 11			陶器俵?	(200)			内外面に鉄釉 口縁部折縫	
55- 12			陶器鉢				内外面鉄釉 赤褐色胎土	

排番号	国版番号	出土地点	種類・器種	口径 mm	底径 mm	器高	文様・調整・年代	他
55- 13			陶器鉢?	(160)		内外面鉄釉		
55- 14			陶器鉢?			内外面鉄釉(内外面とも白班) 玉縁口縁		
55- 15			陶器鉢			端反り口縁 体部に横位刷毛目		
55- 16			陶器鉢?	(110)		内外面鉄釉		
55- 17			陶器鉢?			内外面鉄釉 赤褐色胎土		
55- 18			(器種不明)			内外面灰釉? 玉縁口縁		
55- 19			陶器鉢?			外面口縁・口縁2cm下まで白班(なまこ釉)それ以外は鉄釉 内面口縁1cm下まで鉄釉、あとは無施釉 玉縁口縁		
56- 1			陶器(器種不明)			底部以外鉄釉 底部中心に径20mm位の穴		
56- 2			陶器鉢?			内外面鉄釉 外面に垂下する流し縫		
56- 3			(器種不明)			外面鉄釉		
56- 4			陶器壺?			外面コバルト色発色釉 内面無釉		
56- 5			(器種不明)			内外面灰釉?		
56- 6			陶器			見込みに白く光沢 無施釉基本 春筍底		
56- 7			陶器鉢?			外面部鉄釉 凸部あり 高台脇から底部無施釉 内面灰釉? 春筍底		
56- 8			陶器皿?			内面鉄釉? 貫入 外面部、底部無施釉 底部平底		
56- 9			陶器鉢?			見込みに高台原白濁釉		
56- 10			陶器碗?			内外面白濁釉 外面一部青色の縫 高台脇から底部にかけて外面貫入		
56- 11			(器種不明)			口唇から裏面鮮青色		
56- 12			陶器碗?			外面白濁釉、貫入 外面白濁釉を筆で点状や帯状に盛り上げ		
56- 13			陶器鉢?			外面から高台原まで白濁釉 内面無釉 一部切り高台		
56- 14			(器種不明)			底部と外面薄茶色の釉 底部回転の跡 内面無釉		
56- 15			陶器皿?			内面無釉 外面から底部全体が黒っぽい 平底?		
56- 16			磁器壺			見込みに「被四十二 尾形松太」? の文字		
56- 17			ガラス白濁瓶			底部に「KINTSUBU PERFUMERY CO LTD」の文字		
44- 4	57- 1		陶器擂鉢			底部を切り(高台なし) 内外面鉄釉 割目条5本(2cm当) 内外無施釉(いい) 胎土色調(器壁内 Hue2.5Y R5/1その外はSHR6/6やや赤色)		
45- 1	57- 2		陶器擂鉢	(130)		高台邊存わるい! 内外面鉄釉(Hue2.5Y R4/3) 割目6条(2cm) 胎土色調(Hue7Y R6/6やや明るい)橙色、一部鼠色生焼け		
45- 2	57- 3		陶器擂鉢	(132)		指頭痕、底部回転系切り 内外面鉄釉(Hue2.5Y R3/4) 割目6~7条(2cm) 胎土色調(Hue7Y R4/6鼠色赤茶色)		
45- 3	57- 4		陶器擂鉢	(110)		内外面鉄釉(Hue5Y R6/6)		
57- 5			陶器火鉢?			底部か脚貼りかけの痕跡		
45- 4	57- 6		陶器擂鉢			会津本郷か? 内外面鉄釉(Hue2.5Y R4/4) 見込み同心円状 割目条5本(2cm) 胎土色調(Hue5Y R5/6)		
45- 5	58- 5		陶器擂鉢			内外面鉄釉(Hue2.5Y R3/4) 割目条7本(2cm) 胎土色調(Hue7Y R6/6)		
46- 1	58- 1		陶器擂鉢	(320)		玉縁口縁 内外面鉄釉(Hue2.5Y R4/3) 割目条9~10本(2cm) 胎土色調(Hue2.5Y R3/2) 硬い焼き上がり		
46- 2	58- 2		陶器擂鉢	(290)		玉縁口縁 内外面光沢のある鉄釉(Hue2.5Y R4/3) 一部なまこ釉 胎土色調(Hue5Y R5/4) 硬い		
46- 3	58- 3		陶器擂鉢	(240)		口縁部外反 口縁部2cm下に断面形状三角形凸縁帯 内外面鉄釉(Hue2.5Y R4/2) 割目条6本(2cm) 胎土色調(Hue2.5Y R6/8)		
46- 4	58- 6		陶器擂鉢			内外面鉄釉(Hue2.5Y R4/3) 割目条6(2cm) 胎土色調(Hue7.5Y R5/4~一部生焼け) 胎土緻密		
46- 5	58- 7		陶器擂鉢			内外面鉄釉(Hue2.5Y R3/2) 割目条6~7本(2cm) 胎土色調(Hue2.5Y R3/4鼠色) 胎土緻密		
46- 6	58- 4		陶器擂鉢			内外面灰釉(Hue5Y R4/4薄茶まだらが入る) 割目条5本(2cm) 胎土緻密		
46- 7	58- 8		陶器擂鉢			内外面鉄釉(Hue2.5Y R3/4) 割目条8~9本(2cm) 胎土色調(Hue5Y R5/4)		
46- 8	58- 9		陶器擂鉢			内外面鉄釉(Hue2.5Y R4/3) 割目条6~7本(2cm) 胎土色調(Hue7.5Y R6/8やや明るい)橙色		

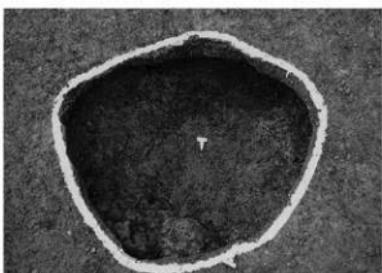
表6 坂ノ上遺跡銭貨・金属製品観察表

辨別番号	國版番号	銭貨名	計測値	材質
47- 7	60- 1	元寶通宝	直径 20.7mm	銅
47- 1	60- 2	寛永通宝	直径 25mm	銅
47- 2	60- 3	寛永通宝	直径 21.9mm	銅
47- 4	60- 4	寛永通宝	直径 26.7mm	銅
47- 5	60- 5	文久永宝	直径 26.7mm	銅
47- 6	60- 6	文久永宝	直径 26.7mm	銅
47- 3	60- 7	寛永通宝	直径 21.9mm	銅
	60- 8	刀子?	厚さ 6.5mm	鉄
	60- 9	刀子?	厚さ 4.6mm	鉄

写真図版



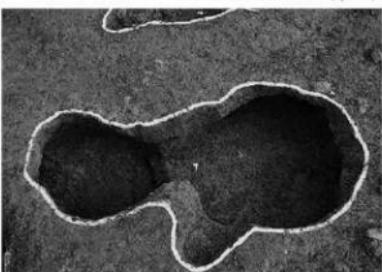
長者屋敷遺跡西調査区(↑ S)



長者屋敷遺跡SK2001(↑ S)



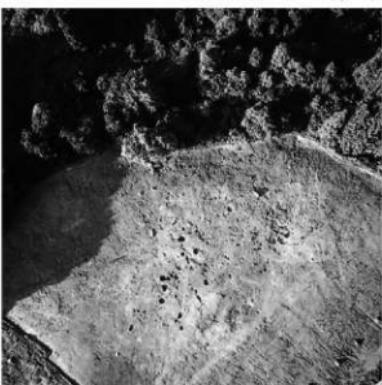
長者屋敷遺跡西調査区表土除去(↑ W)



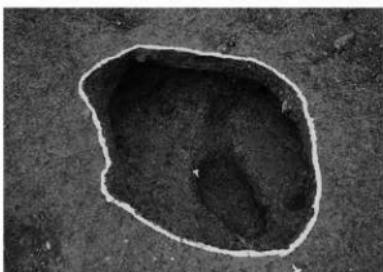
長者屋敷遺跡SK2030(↑ W)



長者屋敷遺跡西調査区安山岩



長者屋敷遺跡西調査区空撮



長者屋敷遺跡SK2015(↑ E)



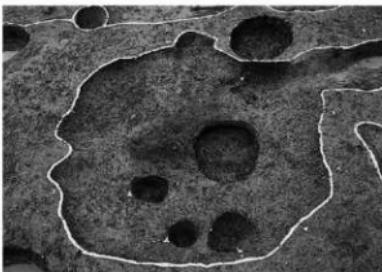
長者屋敷遺跡東調査区(↑ E)



長者屋敷遺跡SK732(ST901内)(↑ W)



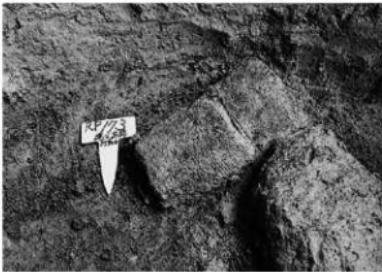
長者屋敷遺跡東調査区調査風景(↑ W)



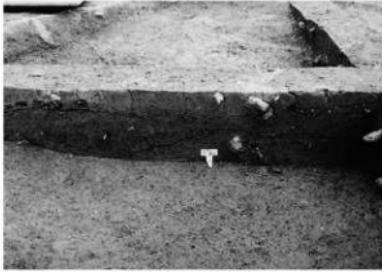
長者屋敷遺跡ST901完掘(↑ S)



長者屋敷遺跡ST901全景(↑ NE)



長者屋敷遺跡ST900土器検出(↑ E)



長者屋敷遺跡ST901B-Bベルト(↑ W)



長者屋敷遺跡ST1061断面(↑ S)



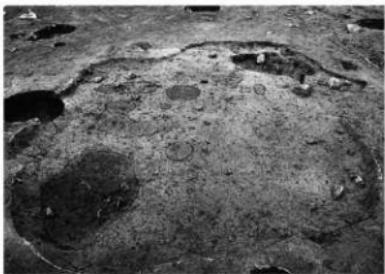
長者屋敷遺跡東調査区 S T900 (↑ E)



長者屋敷遺跡 S X513A 面 (↑ W)



長者屋敷遺跡 R P150 (S X502) (↑ W)



長者屋敷遺跡 S X513 (↑ NW)



長者屋敷遺跡 S X502



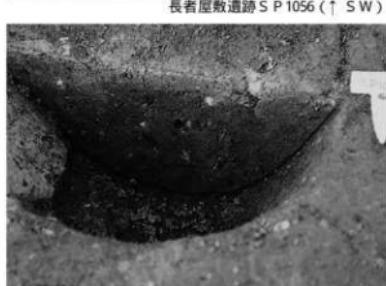
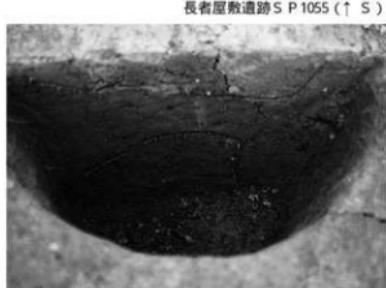
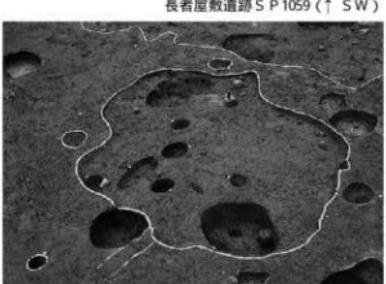
長者屋敷遺跡 S K725 (S X513) (↑ W)



長者屋敷遺跡 S X513C 面 (↑ E)



長者屋敷遺跡 S K731 (S X513) (↑ SW)





長者屋敷遺跡 S X514 B-B ベルト (↑ W)



長者屋敷遺跡 S K 1050 完掘



長者屋敷遺跡 S X514 土器検出 (↑ N)



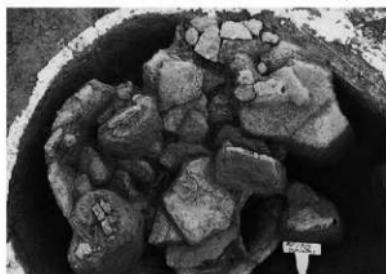
長者屋敷遺跡東調査区 (↑ W)



長者屋敷遺跡 S X514 完掘 (↑ N)



長者屋敷遺跡東調査区空撮



長者屋敷遺跡 S K 1050 (R P 170) (↑ W)



長者屋敷遺跡西調査区遠景 (↑ S)



長者屋敷遺跡東調査区遠景 (↑ E)



坂ノ上遺跡遠景 (↑ S)



調査風景 (↑ SW)



坂ノ上遺跡遠景 (↑ N)



大形竪穴住居検出 (S T21) (↑ W)



遺構検出 (↑ N)



S T21遺構精査 (↑ N)



S T21遺物出土状況 (C 区) (↑ N)



S T21 (P27断面) (↑ E)



S T21F-Fベルト (E 区東) (↑ W)



S T21 (P6 断面) (↑ S)



S T21F-Fベルト (E 区南) (↑ W)



S T21 (P27 断面) (↑ S)



S T21 (P6 断面) (↑ W)



S T21石槍 (P30 · R Q127) (↑ S)



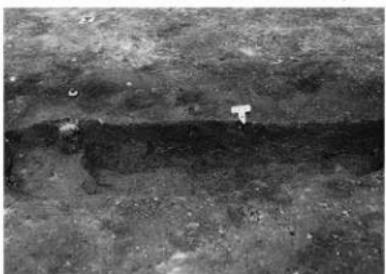
S T21炉跡 (E L 1) (↑ S)



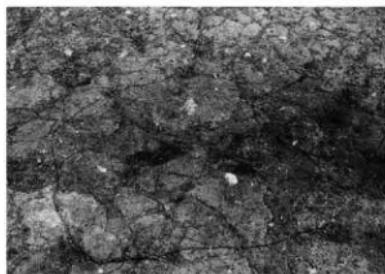
S T21 (E L 1断面) (↑ S)



S T21炉跡 (E L 2) (↑ S)



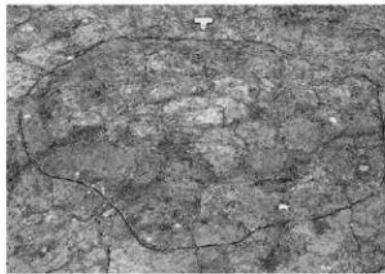
S T21 (E L 2断面) (↑ S)



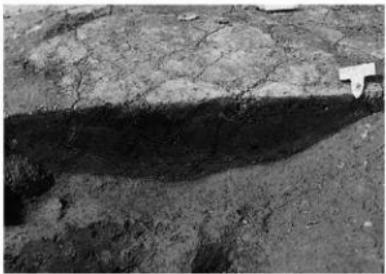
S T21 (E L 3) (↑ S)



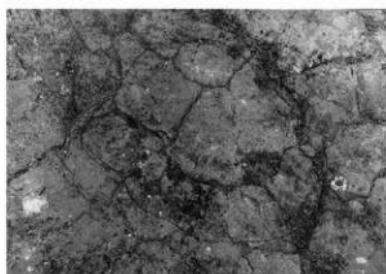
S T21 (E L 3断面) (↑ S)



S T21 (E L 4) (↑ W)



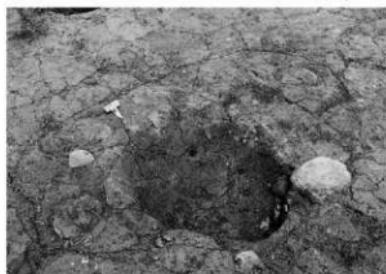
S T21 (E L 4断面) (↑ S)



S T21 (E L 5)(↑ S)



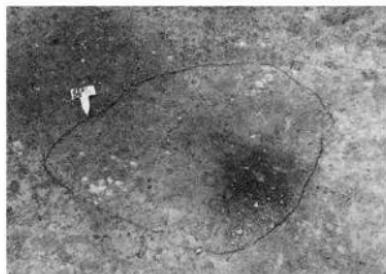
S T21 (E L 5 断面)(↑ S)



S T21 (E L 6)(↑ SW)



S T21 (E L 6 断面)(↑ S)



S T21 (E L 7)(↑ S)



S T21 (E L 7 断面)(↑ S)



S T21 烧石 (R Q138)(↑ S)



S T21 石炭 (R Q140)(↑ S)



坂ノ上遺跡縄文土器検出 (R P129) (↑ E)



坂ノ上遺跡縄文土器 (R P22・竹箇刺突文・粘土組貼付円文) (↑ S)



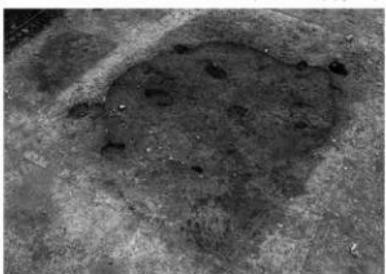
坂ノ上遺跡竪穴住居 (ST 22) (↑ N)



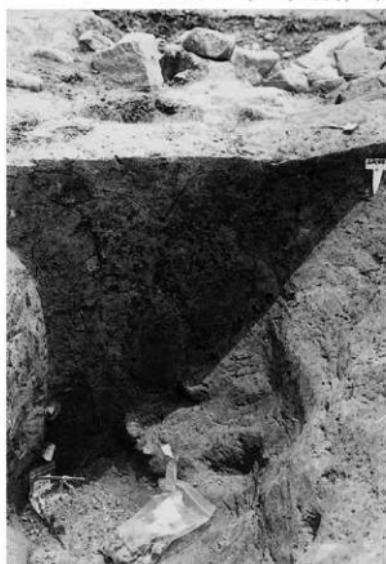
ST 22 (P 4断面) (↑ S)



ST 22ピット7 (P 7) 断面 (↑ S)



ST 22完掘 (↑ S)



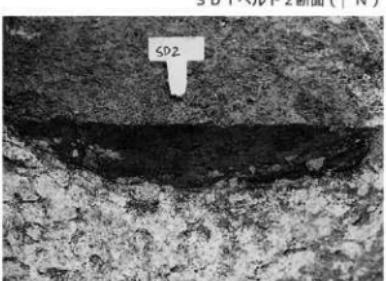
SK 1088 (↑ W)



SX 20完掘 (↑ W)



SK 97断面 (↑ E)





坂ノ上遺跡空撮 (SW↑)



坂ノ上遺跡空撮 (SW↑)



右手道路が坂ノ上遺跡第2次調査区(↑S)



調査北区の埋設電話線(↑N)



坂ノ上遺跡第2次調査(↑N)



電話線標柱(昭和41年5月)



埋設木桶(↑S)



調査作業風景(↑NE)



敷石面調査(↑N)



調査区北側より山形市を望む(↑ 5)



坂ノ上二軒茶屋跡あたり(↑ 5)



コンクリート道下の様子(↑ S)



神明神社前より南の市道(↑ N)



市道コンクリート除去(↑ E)



調査区空撮(↑ S)



坂ノ上二軒茶屋井戸跡(↑ W)



『蔵王みはらしの丘(山形ニュータウン)』造成工事(↑ E)



坂ノ上遺跡第2次調査区空撮(↑N)



東西桶上空より(↑ N)



(上山) 三本松追分道標



供養万人衆石碑（後方上山の久保手）



(上山) 新丁坂下 左羽州街道 右早坂新道(↑ S)



坂ノ上遺跡(↑ S)



首さらし場跡



神明神社（坂ノ上遺跡頂上付近）



地蔵堂跡



(上山) 黒沢入口付近（文政12年鳥居）

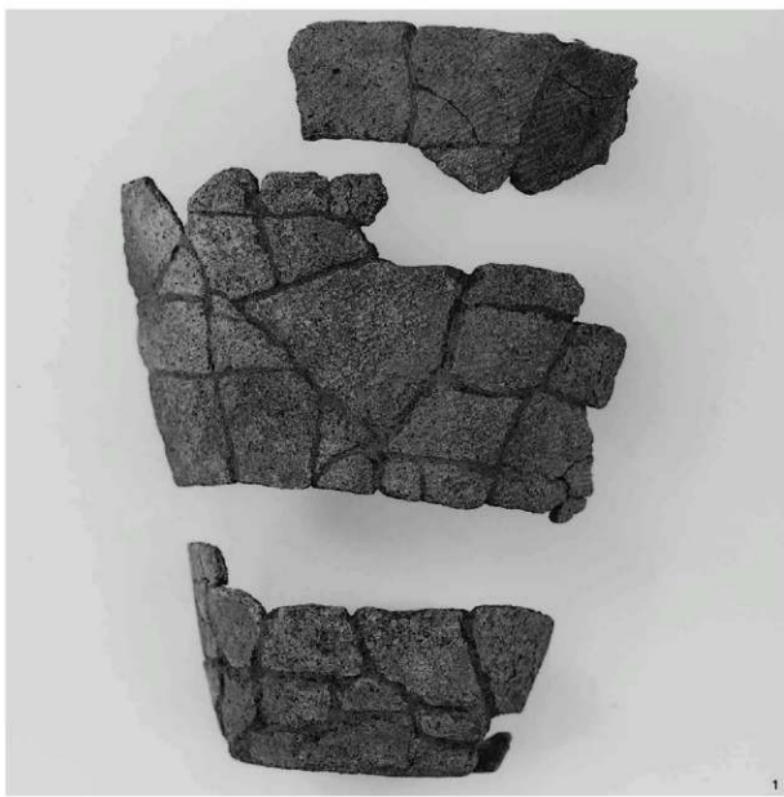


1



2

長者屋敷遺跡縄文土器（1）



1



2

長者屋敷遺跡縄文土器（2）



1

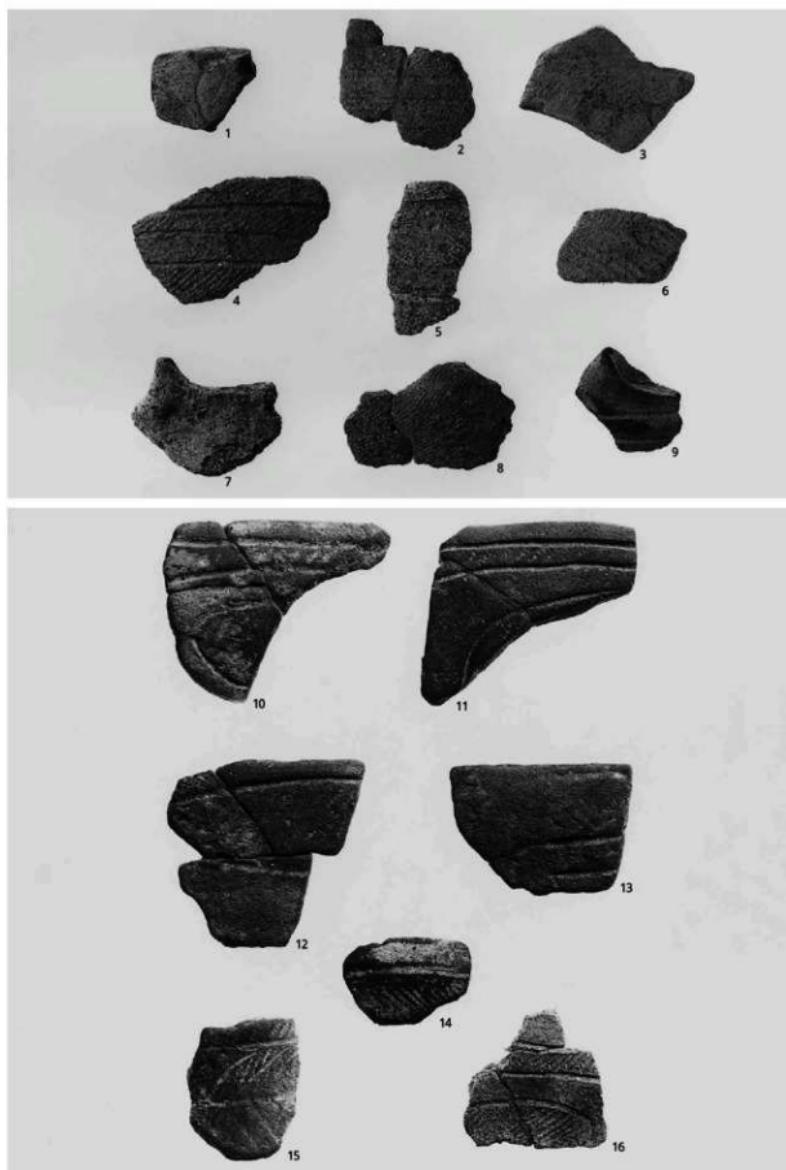


2

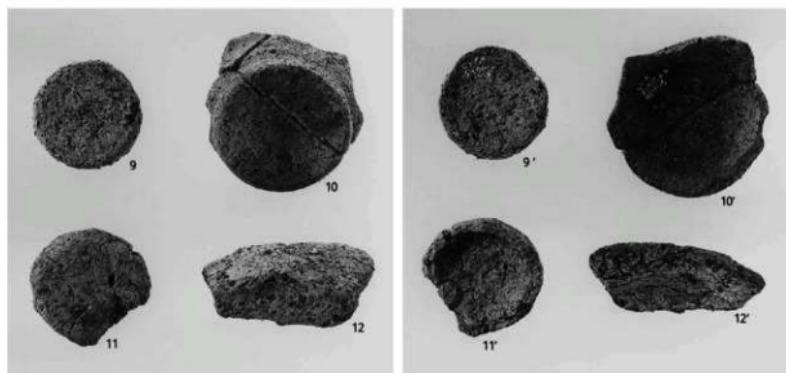
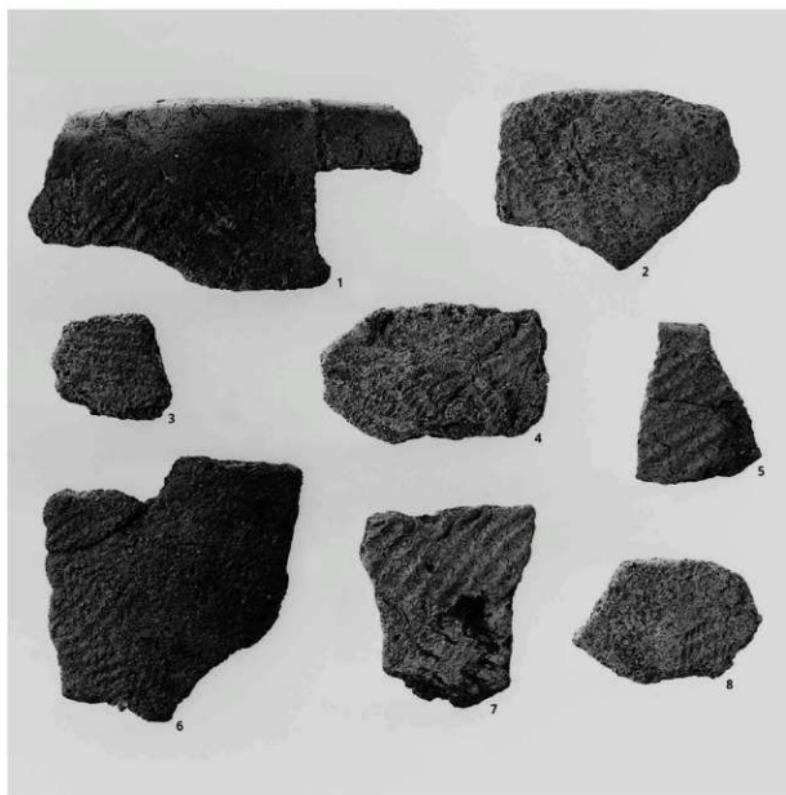
長者屋敷遺跡縄文土器（3）



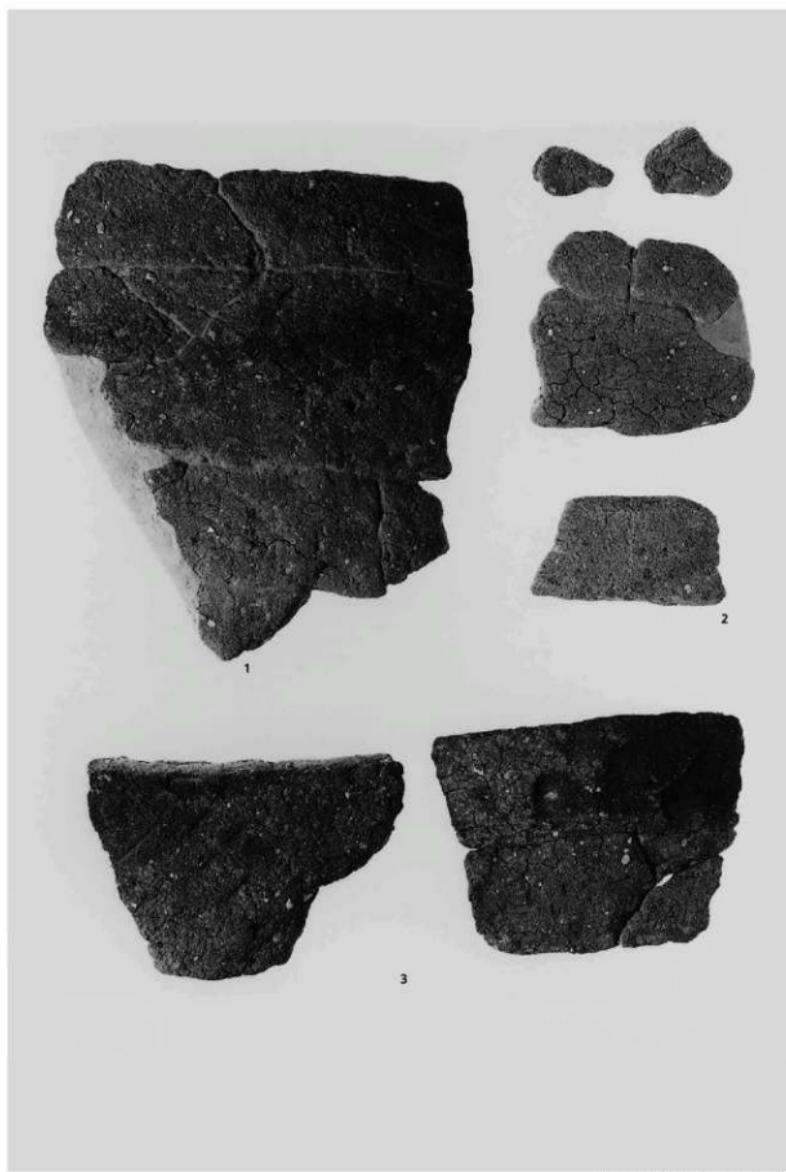
長者屋敷遺跡縄文土器（4）



長者屋敷遺跡縄文土器（5）



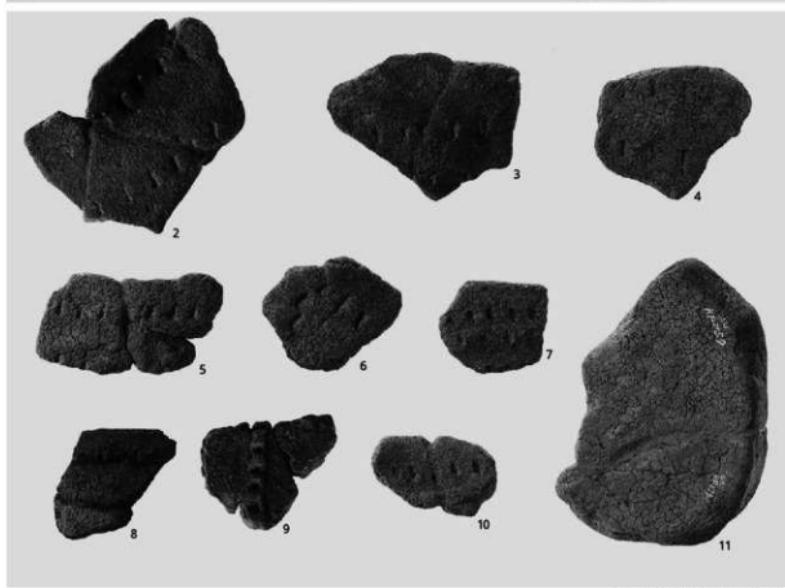
長者屋敷遺跡縄文土器 (6)



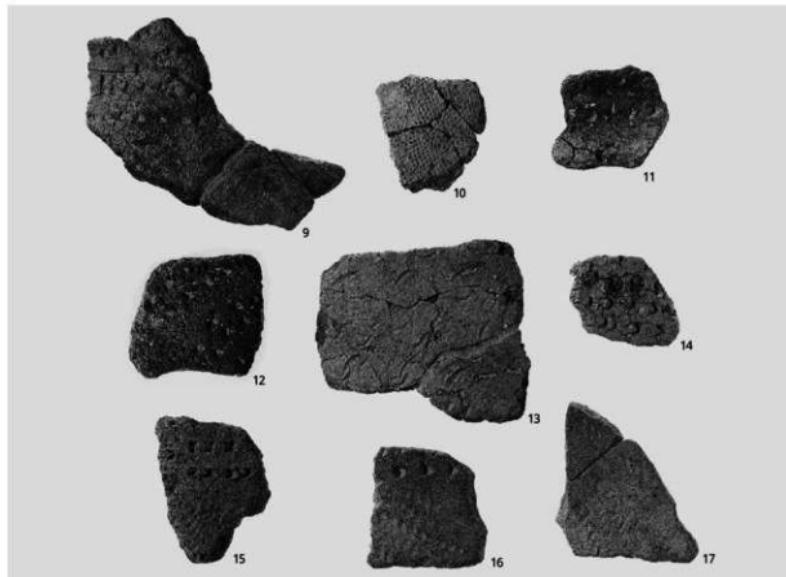
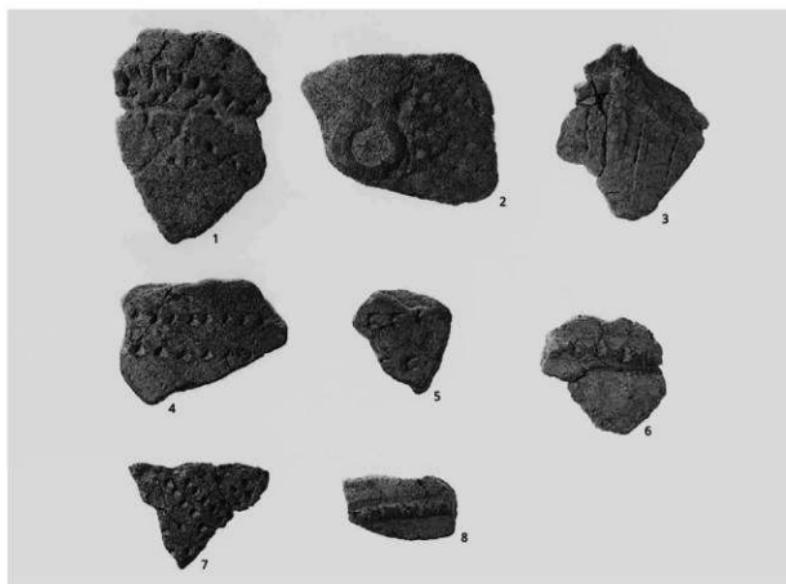
長者屋敷遺跡縄文土器（7）



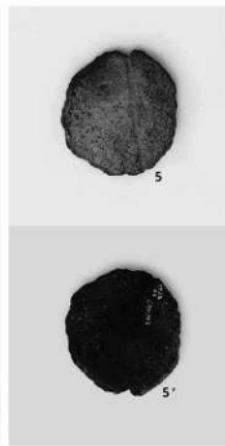
長者屋敷遺跡縄文土器 (8)



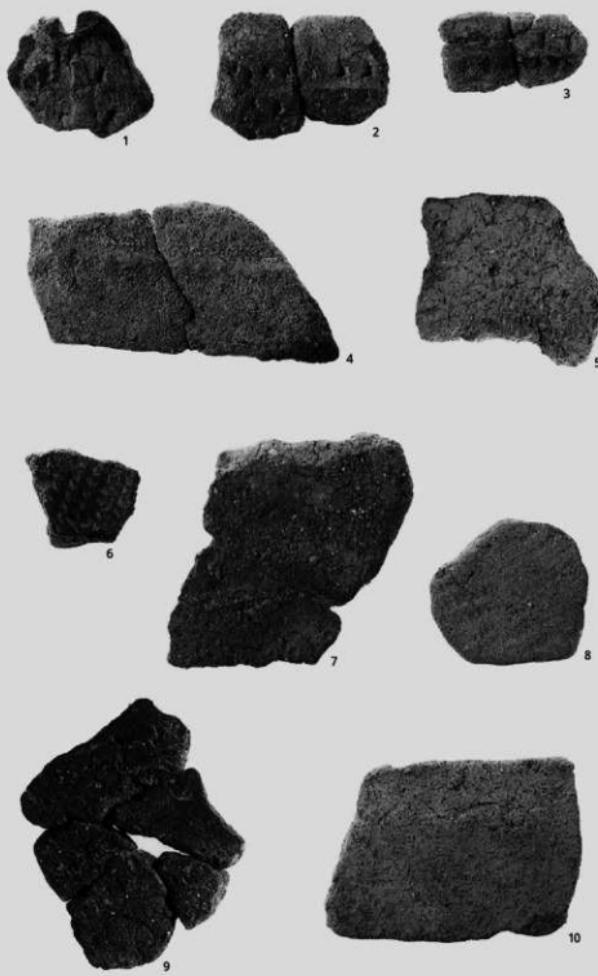
坂ノ上遺跡縄文土器(1)



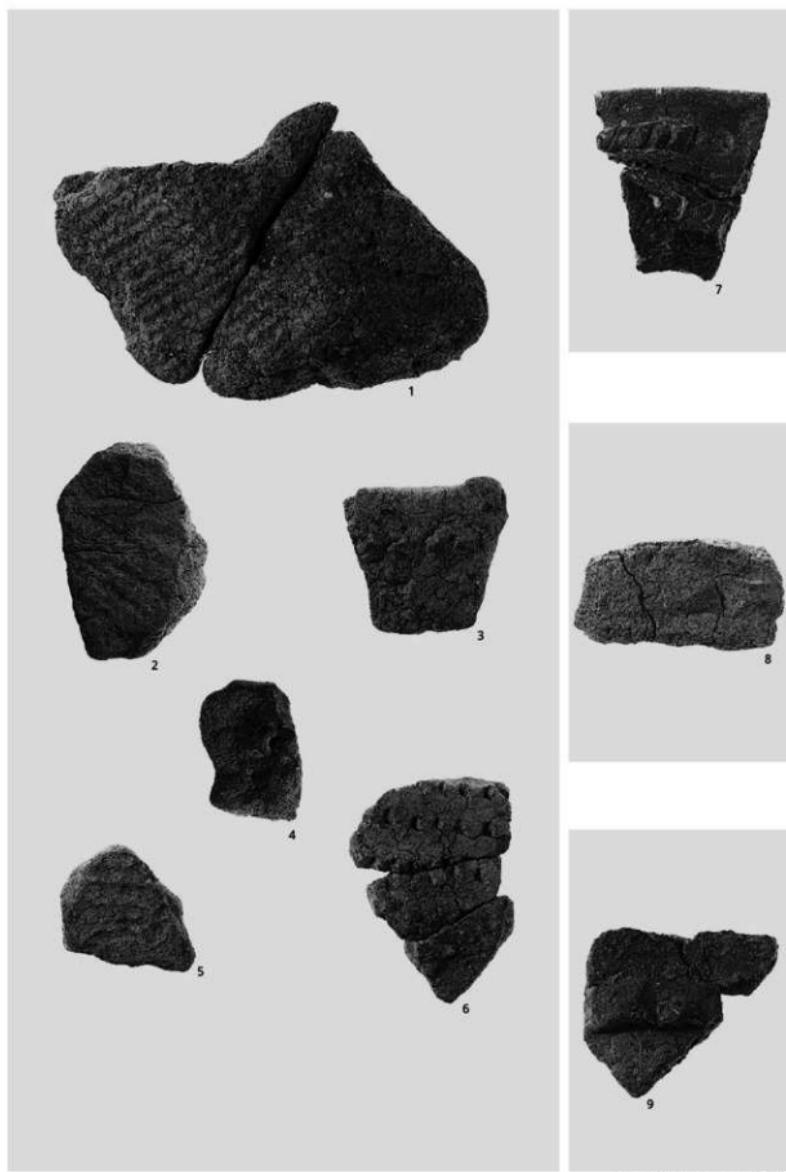
坂ノ上遺跡縄文土器(2)



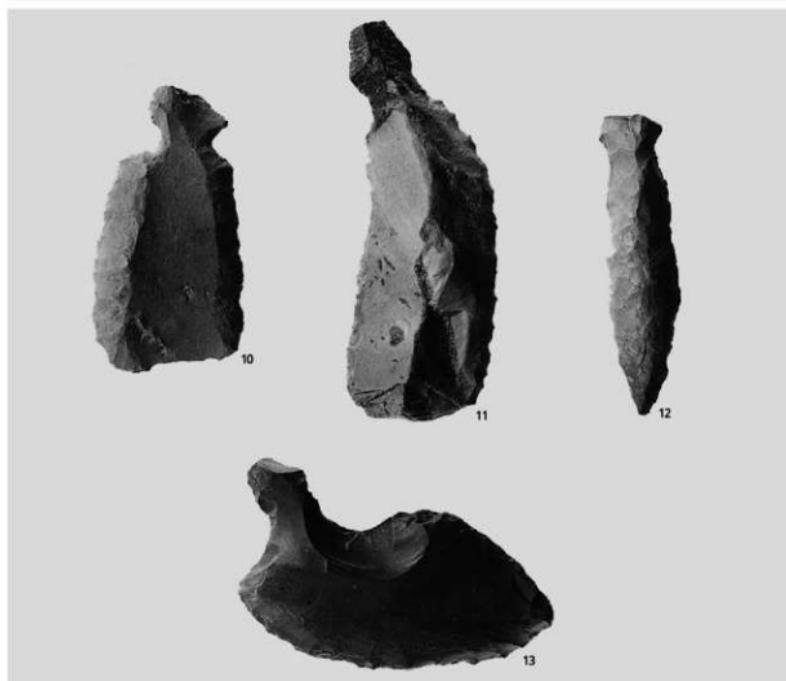
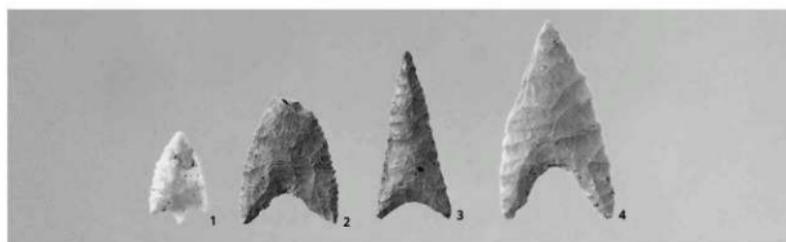
坂ノ上遺跡縄文土器（3）



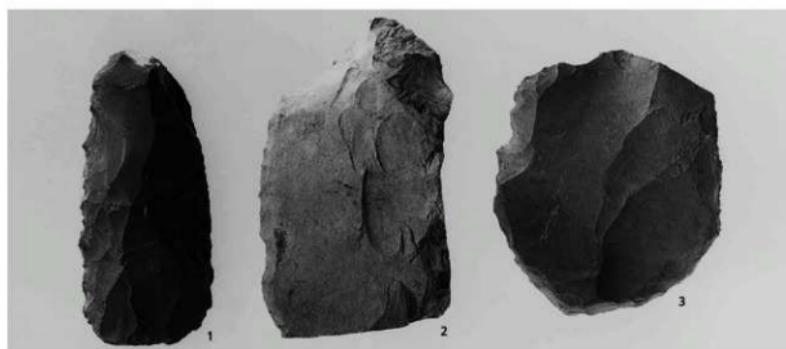
坂ノ上遺跡縄文土器(4)



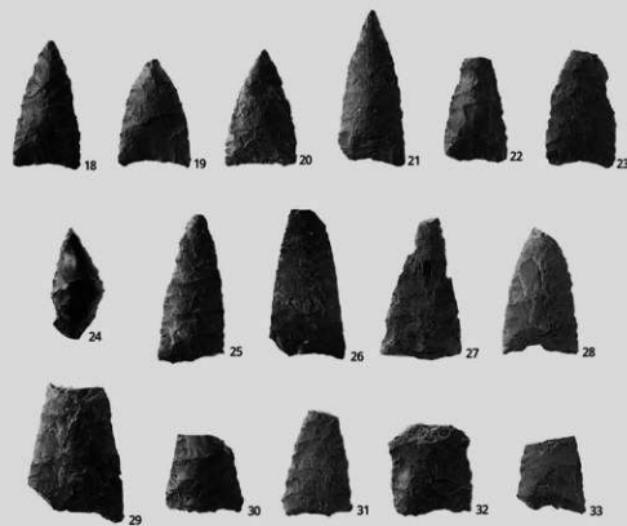
坂ノ上遺跡縄文土器（5）



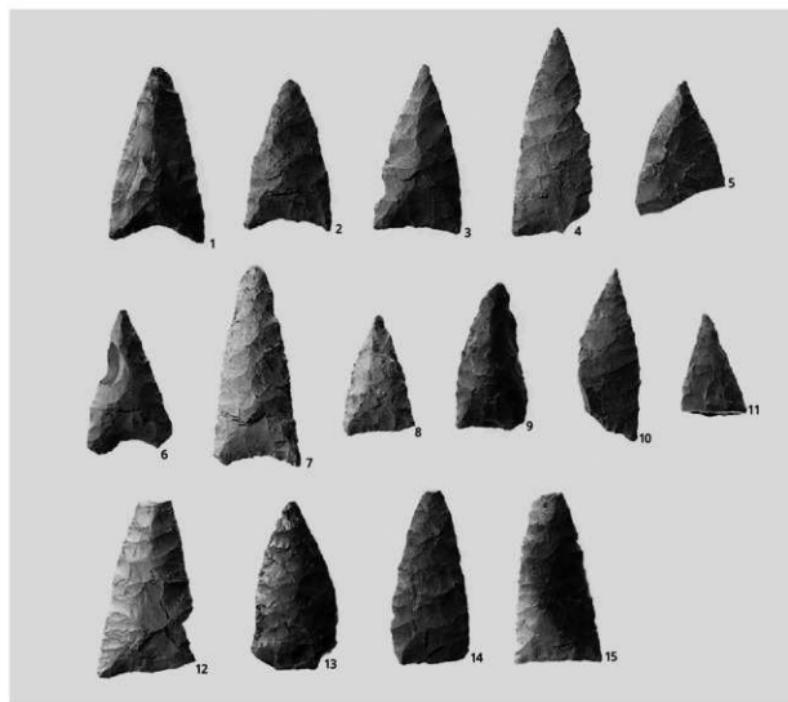
長者屋敷遺跡石器（1）



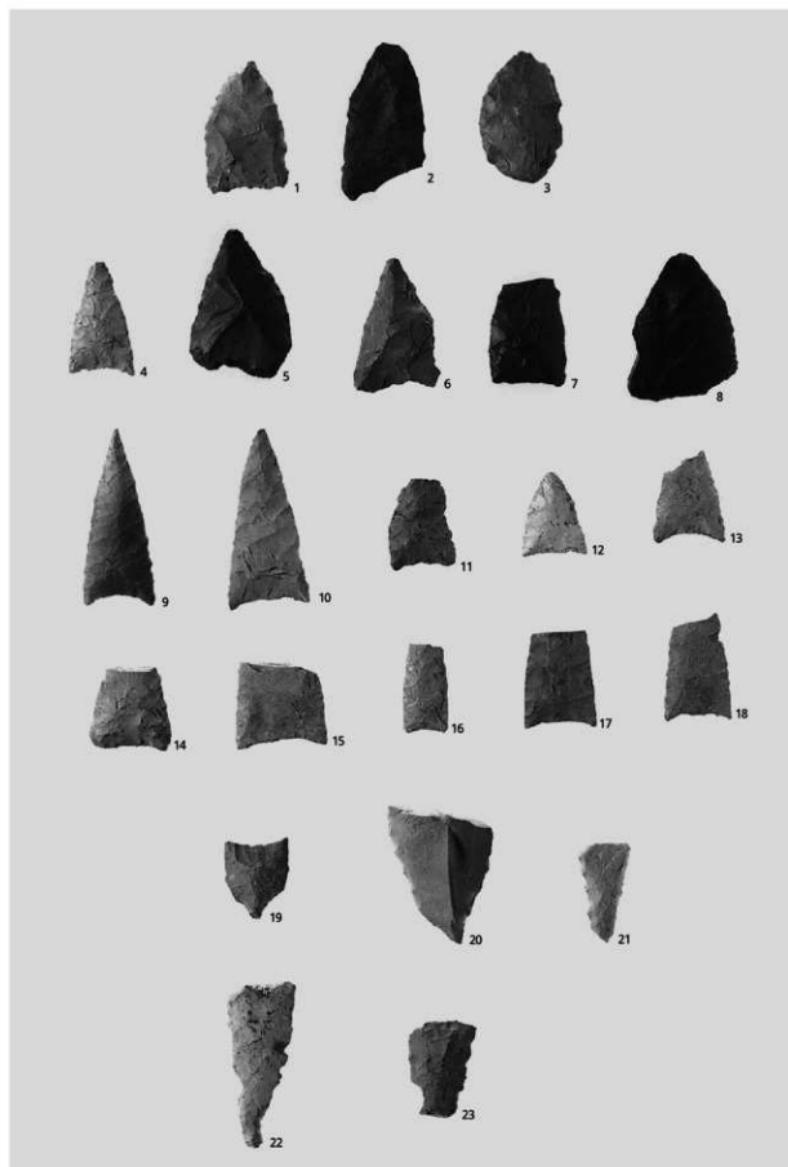
長者屋敷遺跡石器（2）



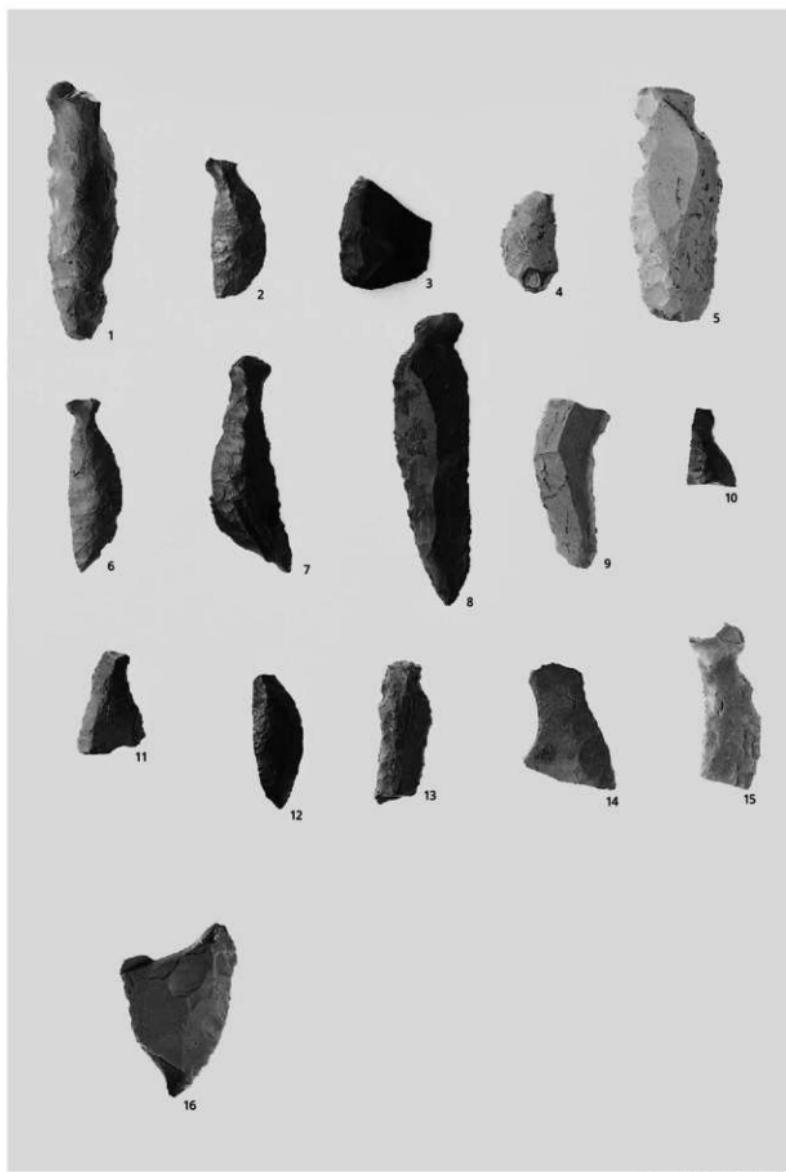
坂ノ上遺跡石器（1）



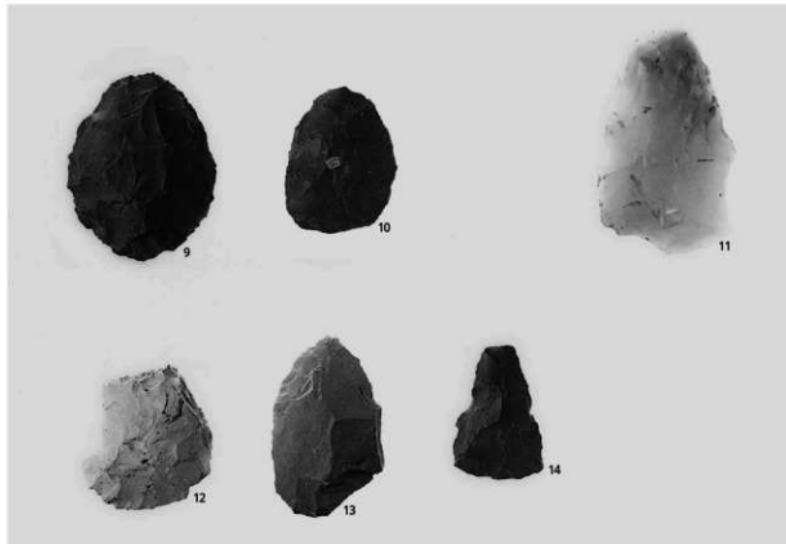
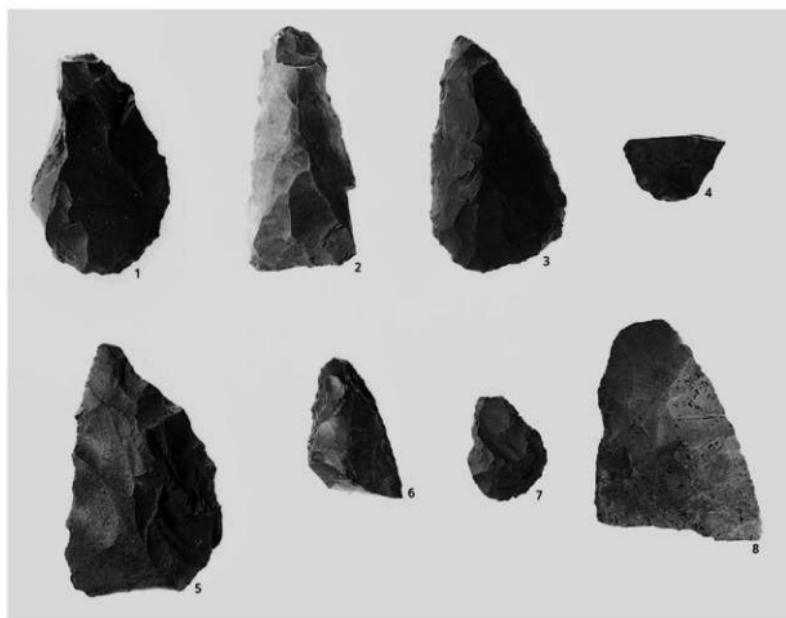
坂ノ上遺跡石器(2)



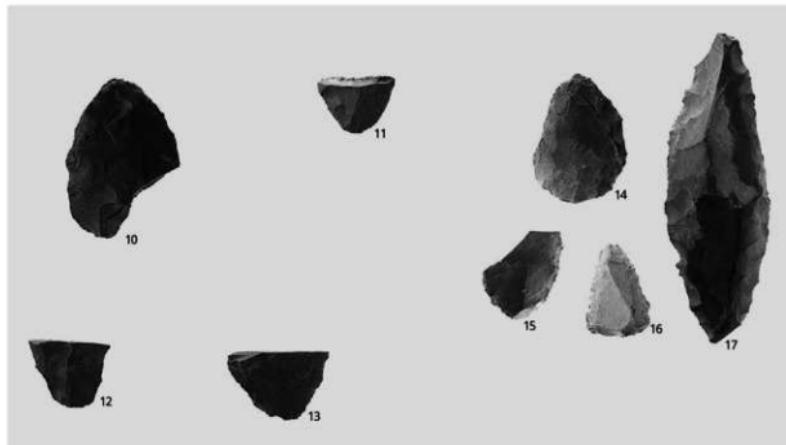
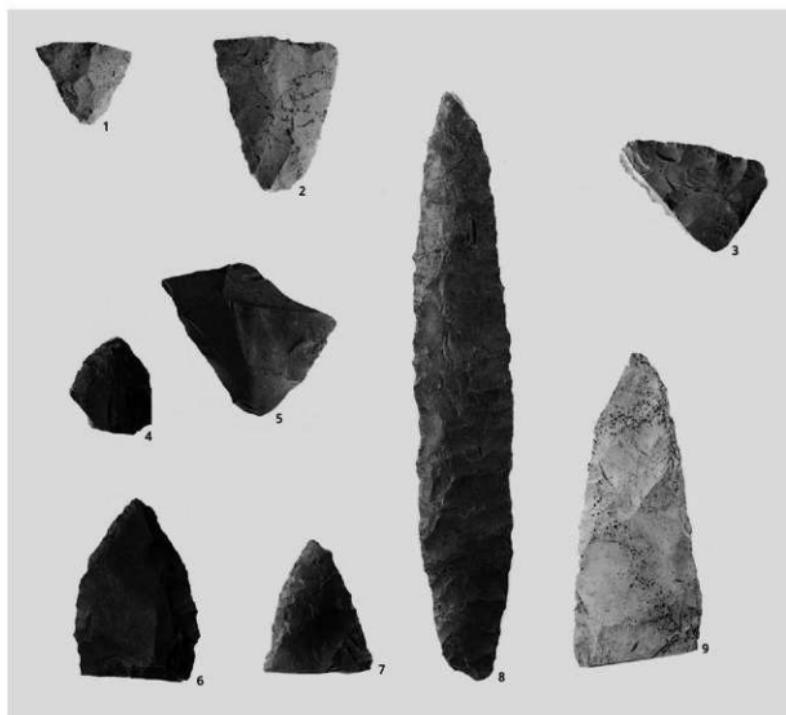
坂ノ上遺跡石器(3)



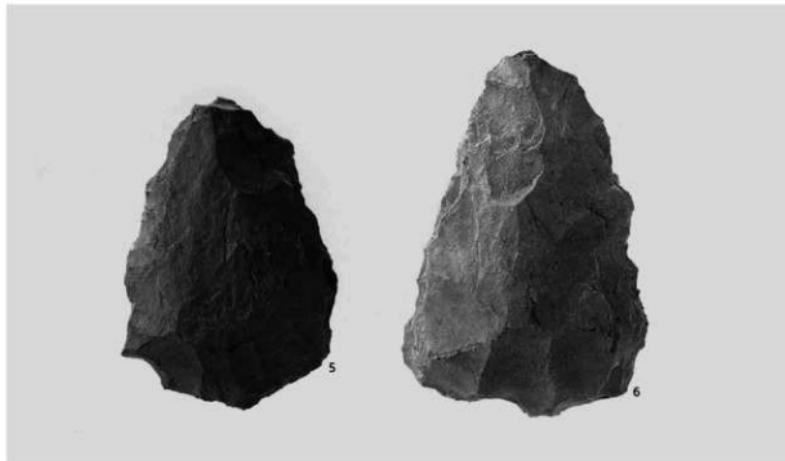
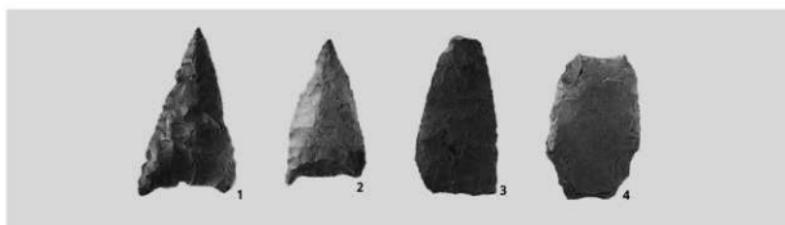
坂ノ上遺跡石器(4)



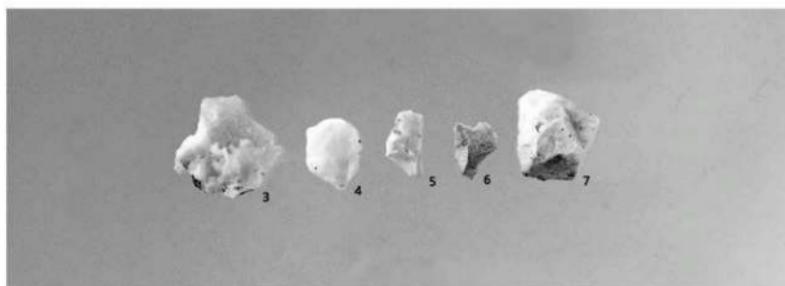
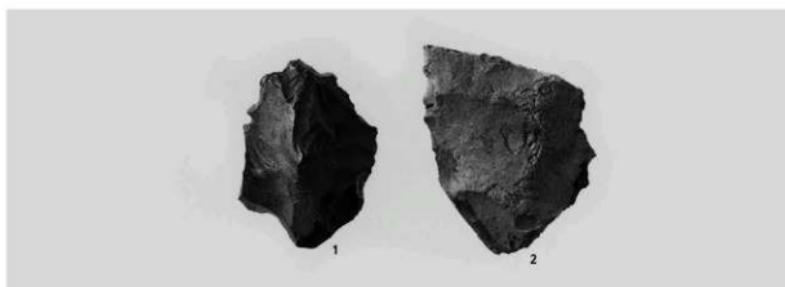
坂ノ上遺跡石器(5)



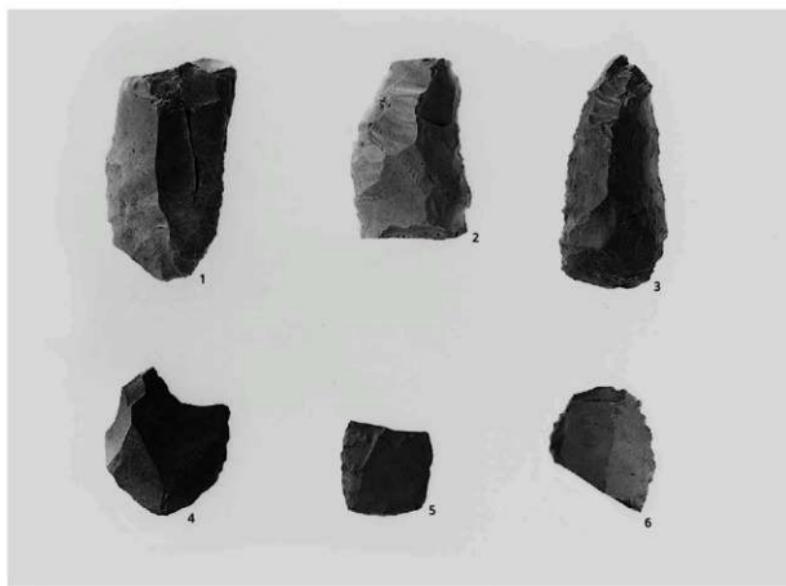
坂ノ上遺跡石器(6)



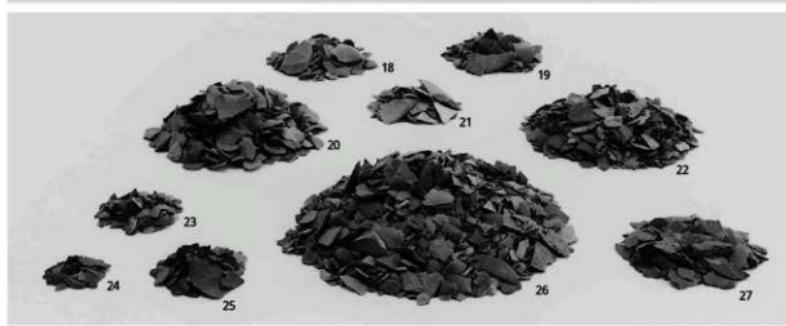
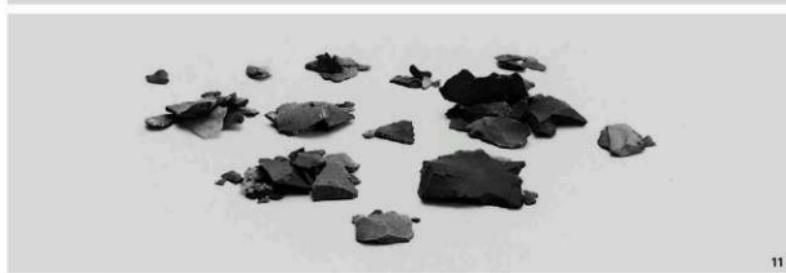
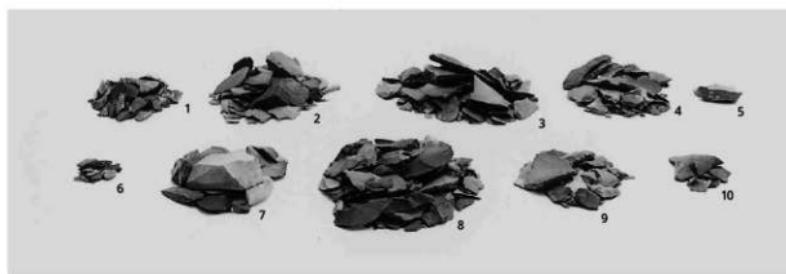
坂ノ上遺跡石器（7）



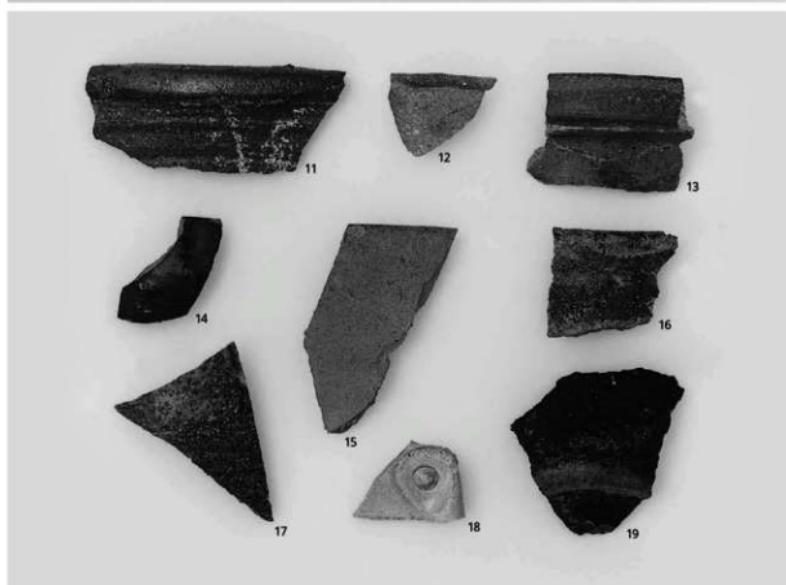
坂ノ上遺跡石器(8)



坂ノ上遺跡石器(9)



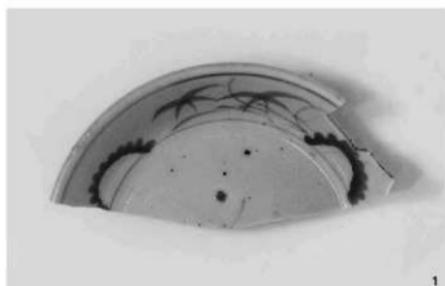
坂ノ上遺跡石器 (10)



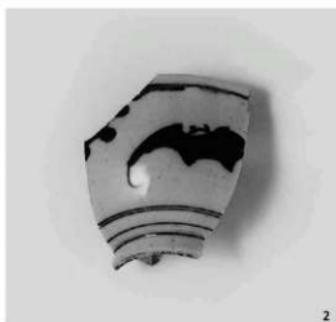
長者屋敷遺跡陶器（1）



長者屋敷遺跡陶器（2）



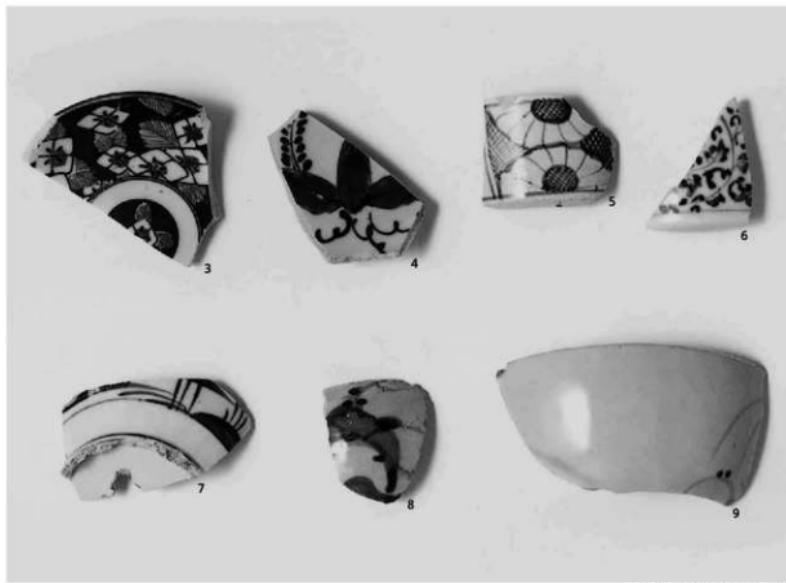
1



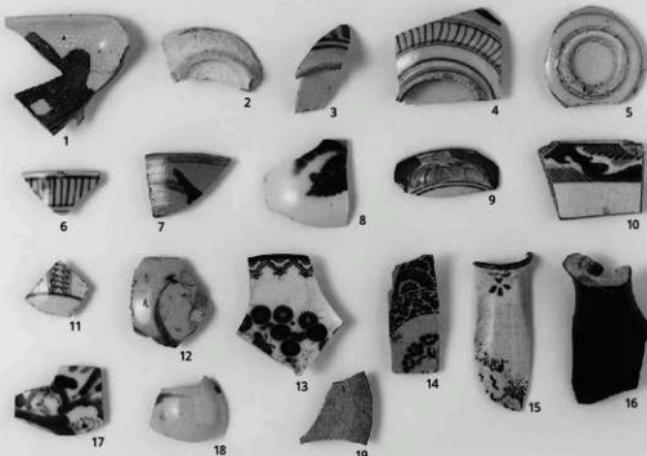
2



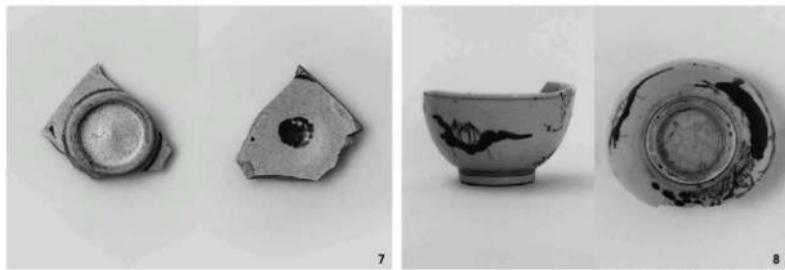
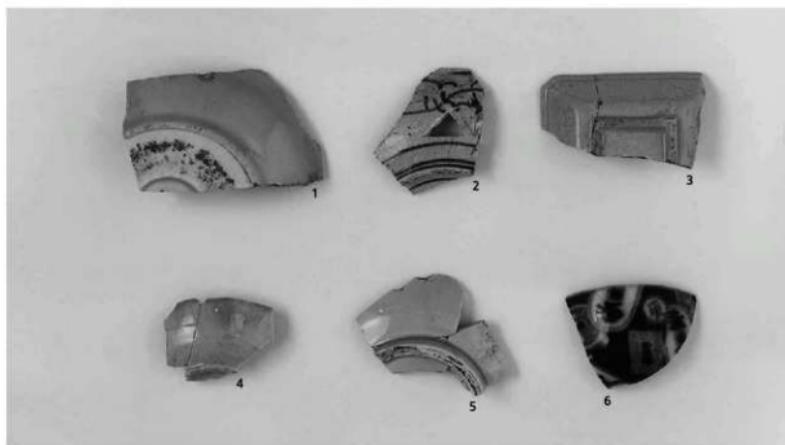
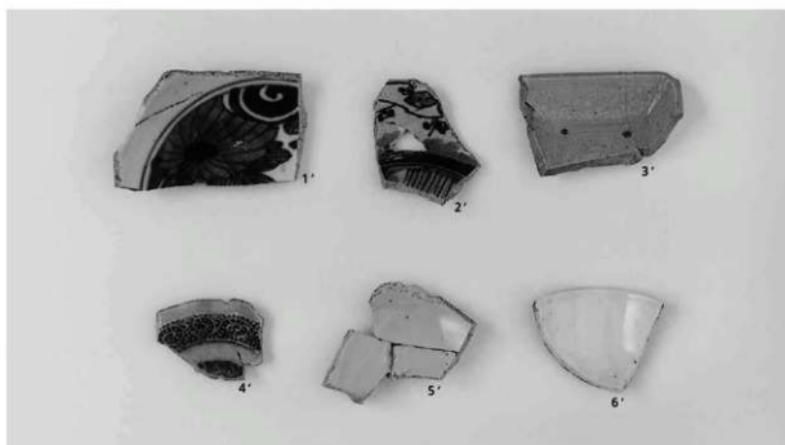
1'



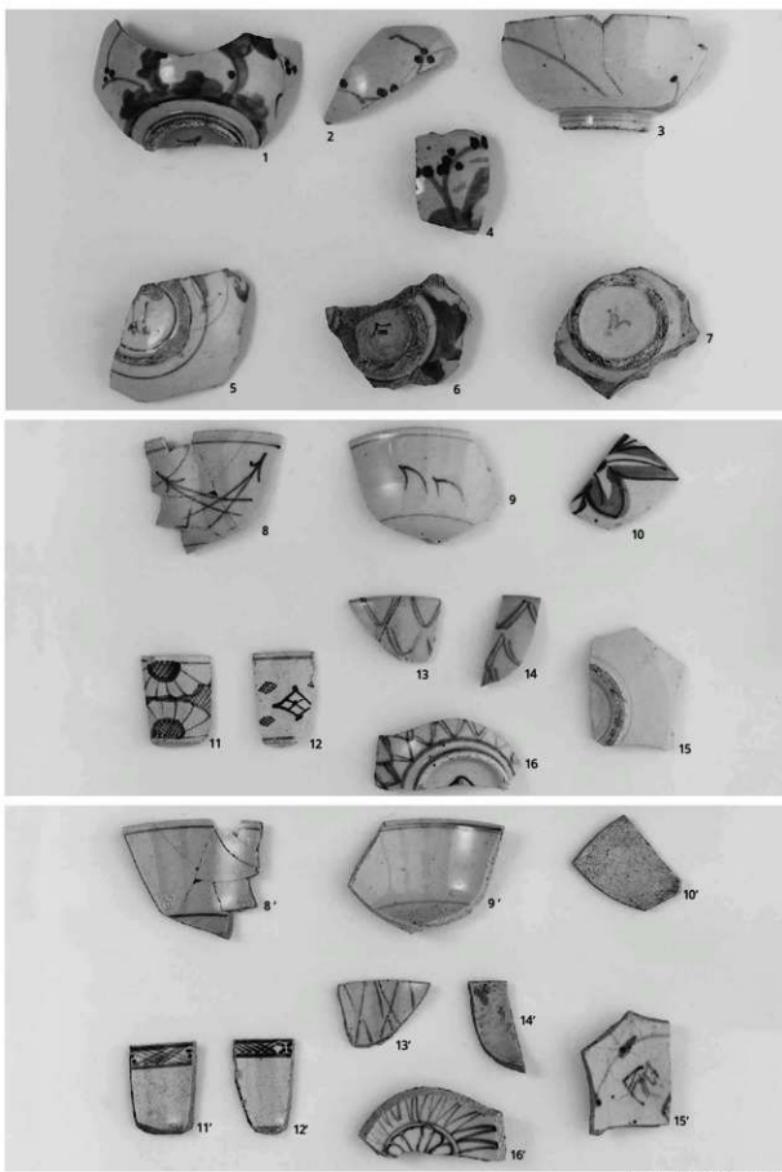
坂ノ上遺跡陶磁器(1)



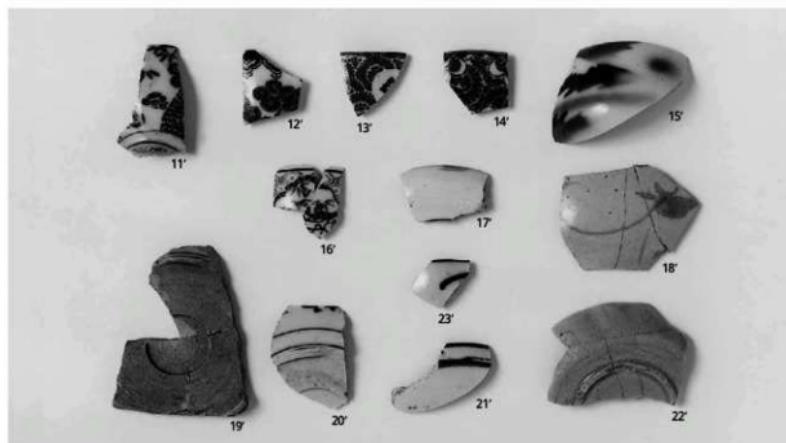
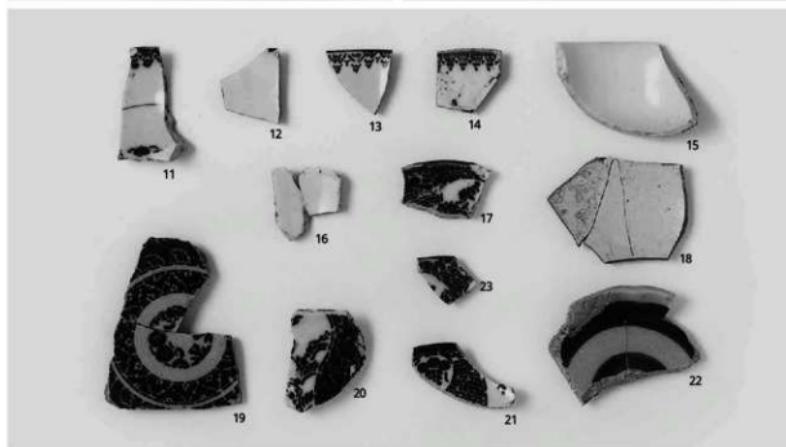
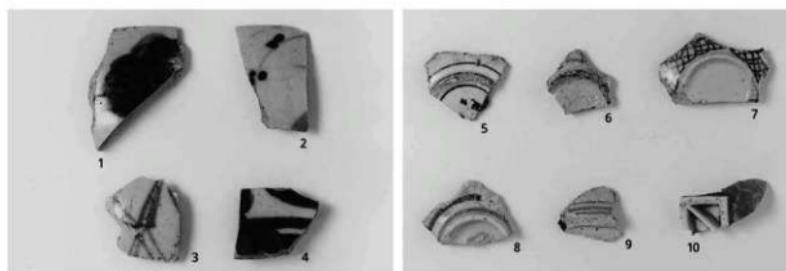
坂ノ上遺跡陶器(2)



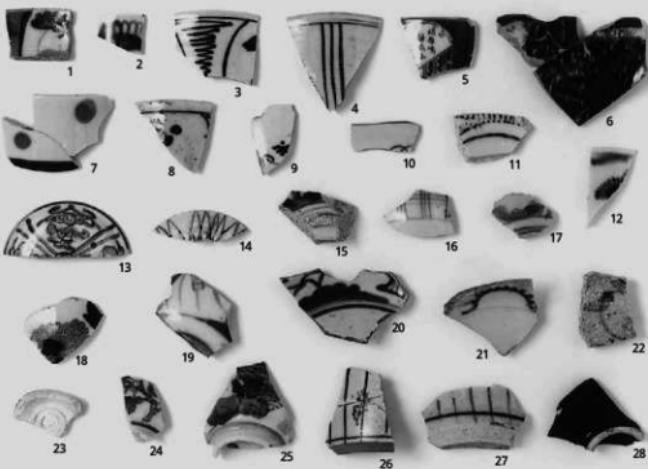
坂ノ上遺跡陶磁器（3）



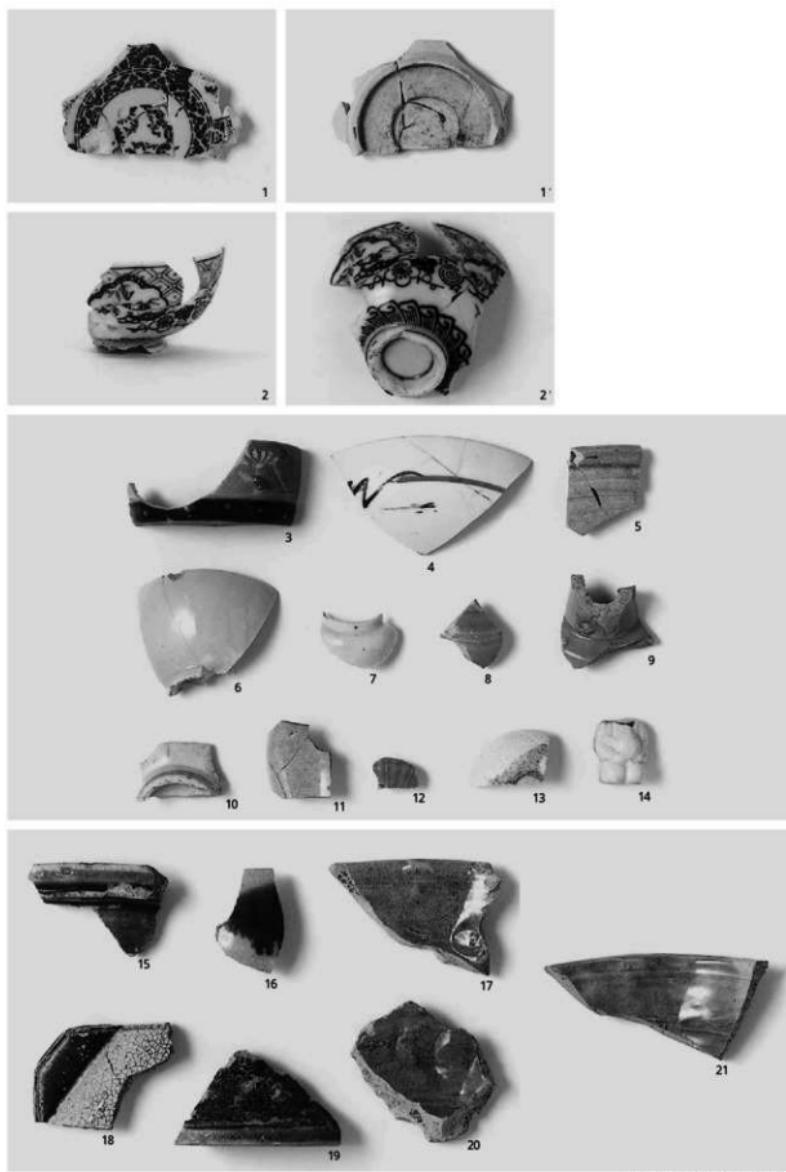
坂ノ上遺跡陶磁器(4)



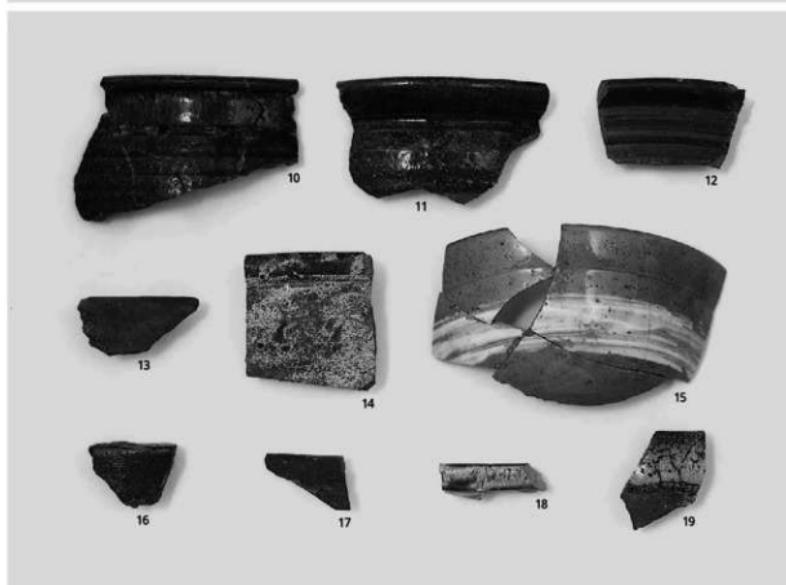
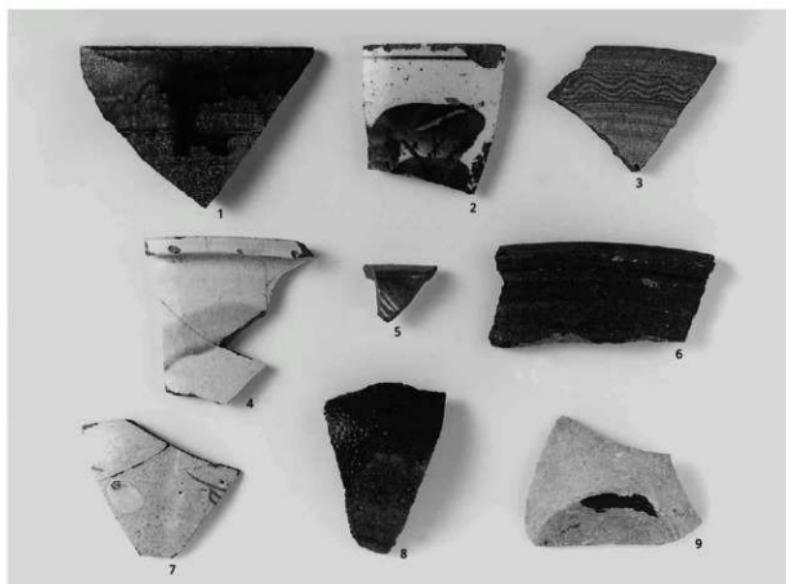
坂ノ上遺跡陶器（5）



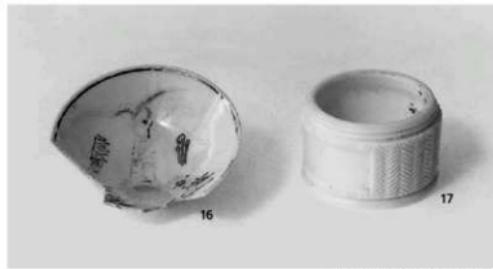
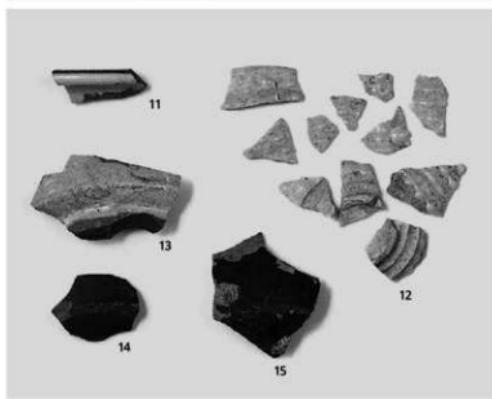
坂ノ上遺跡陶磁器（6）



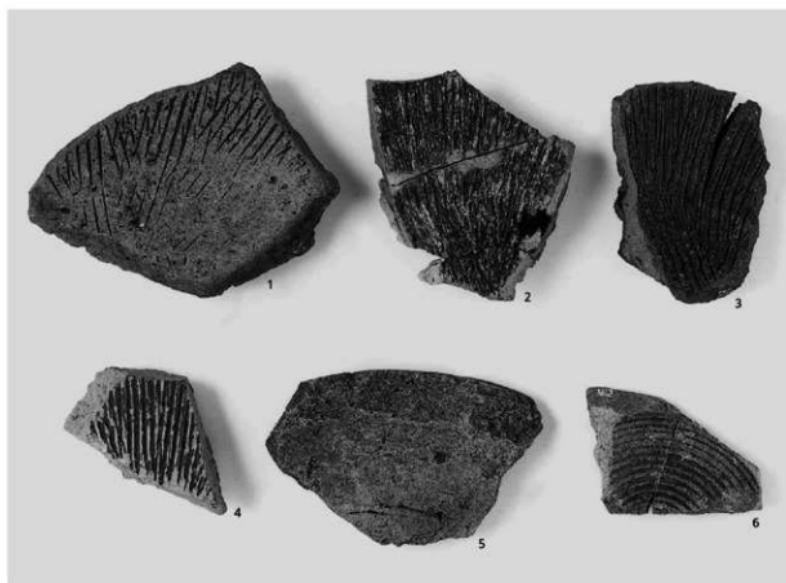
坂ノ上遺跡陶磁器 (7)



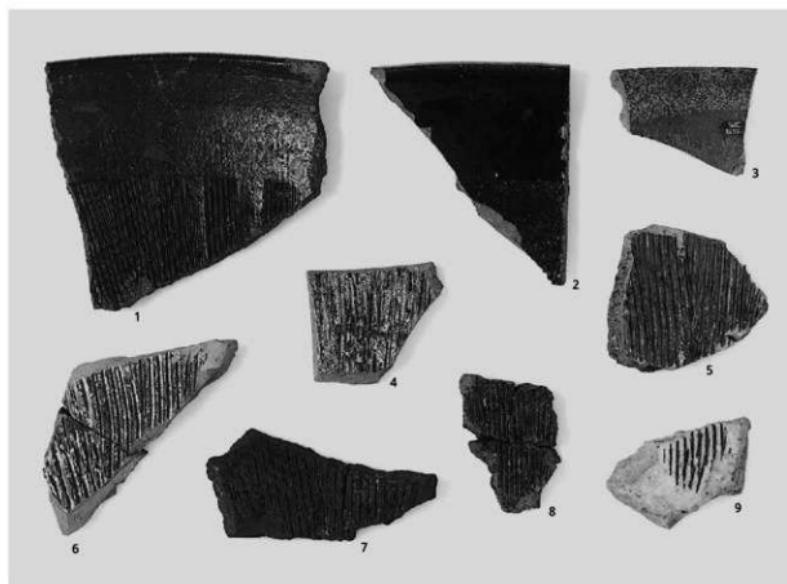
坂ノ上遺跡陶器 (8)



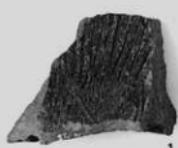
坂ノ上遺跡陶器(9)



坂ノ上遺跡陶磁器 (10)



坂ノ上遺跡陶器 (11)



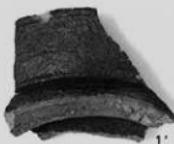
1



2



3



1'



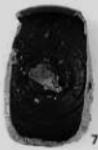
2'



3'



7



7'



8



9



10



15



16



11



12

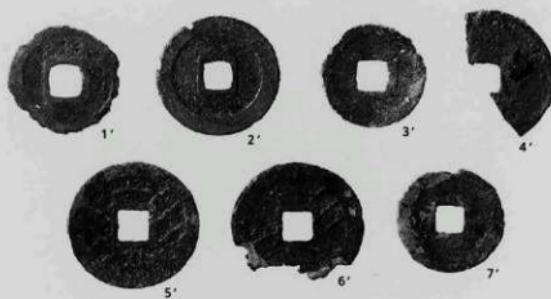
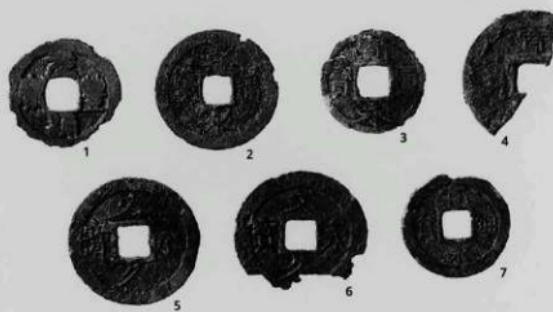


13



14

坂ノ上遺跡陶磁器と古銭等



坂ノ上遺跡古銭と鉄製品等

報告書抄録

ふりがな 書名 副書名 巻次 シリーズ名 シリーズ番号 編著者名 編集機関 所在地 発行年月日	こまつばらかまと・ちょうじややしきいせき・さかのうえいせきはくつちょうさほうこくしょ 小松原窯跡・長者屋敷遺跡・坂ノ上遺跡発掘調査報告書						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町村 小松原窯跡 山形県 山形市 大字松原 字小松原	コード 市町村 6201	北緯 71	東経 38度 11分 08秒	調査期間 19990419 17分 41秒	調査面積 10,000 (m ²)	調査原因 山形新都市開発整備事業
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
生産跡	平安時代	窯跡 灰原 土坑	3 須恵器 土師器 瓦	9世紀前半の窯跡から墨内2例目となる鎧瓦を出土した。 (総出土遺物数:182箱)			
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町村 長者屋敷遺跡 山形県 山形市 大字松原 字石原坂 1733-10	コード 市町村 6201	北緯 77	東経 38度 11分 09秒	調査期間 20010507 17分 49秒	調査面積 11,000 (m ²)	調査原因 山形新都市開発整備事業
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
集落跡	縄文時代	竪穴住居 袋状土坑	縄文土器 石器	縄文時代後期の小規模な集落跡で、袋状の土坑群は遺跡の最も高いところで集中して見つかった。 (総出土遺物数:21箱)			
生産跡	平安時代		須恵器				
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地 市町村 坂ノ上遺跡 山形県 山形市 大字黒沢 字大明神 1690-8他	コード 市町村 6201	北緯 平成11年度 登録	東経 38度 11分 09秒	調査期間 20010507 140度 17分 59秒	調査面積 6,370 (m ²)	調査原因 山形新都市開発整備事業
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
集落跡	縄文時代	竪穴住居 土坑	縄文土器 石器・石屑	縄文時代前期中葉の大形竪穴住居跡が単独で見つかった。竪穴住居からは数千点以上の石屑を出土。			
道路跡	江戸時代	街道跡 溝跡	陶器・磁器 桶	江戸時代の羽州街道を形成する敷石群と道路の溝に径1mほどの木桶2つを発見した。(37箱)			

山形県埋蔵文化財センター調査報告書第147集

**小松原窯跡
長者屋敷遺跡 発掘調査報告書
坂ノ上遺跡**

2006年3月20日発行

発行 財団法人 山形県埋蔵文化財センター
〒999-3161 山形県上山市弁天二丁目15番1号
電話 023-672-5301
印刷 中央印刷株式会社
〒990-0051 山形県山形市鋼町一丁目1番5号
電話 023-631-5533